

第一第 年二十第



# 山 岳

第 二 十 二 年 □ 第 壹 號

## 新 年 ノ 辭

大正七年ノ新春ヲ迎へ、茲ニ會員及ビ同趣味諸君ノ健康ヲ祝シ、併テ年來ノ交誼ヲ謝ス。

本會ハ山岳及ビ山岳ニ關スル森羅萬象ヲ研究シ、學術上ニ、文學藝術ノ上ニ、趣味ノ上ニ、保健ノ上ニ、人生ノ向上發達ニ資セントス、本誌「山岳」ハ其ノ研究録ニシテ會員及ビ同好者ノ爲メニ公開シツ、アリ。

本會ハ總テノ方面ニ於テ山岳界ノ爲メ努力ト奮闘ヲ惜ムモノニ非ズ、幸ニシテ會員及ビ同趣味者ノ援助ト鞭撻ヲ得テ、其向上發展ヲ期シツ、アリ。



# 目次

(大正七年一月發行)

○表紙……………中村清太郎氏案

## 挿圖

○雪溪仰望……………(小黒部大窓)……………中村清太郎氏筆……………一六頁
○峽谷に臨む山……………(黒部谷より百貫山を仰ぐ)……………同上……………三二
○峽谷の底……………(黒部川鐘釣上流の一部)……………同上……………四〇
○高谷野地の東隅より其一部と霧に蔽れたる火打火山を望む……………田中薫氏撮影……………五六
○ほていらん……………(秩父十文字峠産)……………高野鷹藏氏撮影……………一二〇
○あかもの…………………………武田久吉氏圖……………一二八

## 本欄

黒部川峽谷の話…………………………中村清太郎……………一頁
火打山と焼山…………………………大田島永明……………四二
霞澤岳に登る…………………………中村直男……………五八
白馬岳より越中小川温泉に出るの記…………………………鈴木益三……………六八
山の生ひ立ち…………………………理學士辻村太郎……………九四
高山植物の研究…………………………理學博士武田久吉……………九七

## 雜 錄

○登山者の徳義(木暮)○飛驒山脈之跛曲(T、T)○八ヶ峯の斷裂に就て(木暮)○サークの二三の性質(T、T)○あかもの(武田)  
○ほていらん(武田)○甲州七面山の「御神木」と「萬歳草」○劍ヶ岳伊折方面の登路案内(冠)○根石岳の登路(笹魚生)○針ノ木峠の  
林道(木暮)○黒部谷の射撃演習(木暮)○雪の南アルプス觀望臺としての伊豆修善寺(佐伯)○大隅高隈山登山談(辻莊)○科學と  
詩(山本徳三郎)○山岳的氣分(山本徳三郎)○立山詠草(澁柿葉鷹)○嘉門治を懷ふ(辻村)○大町登山案内者組合の設立(た、た)○  
机上談山(駝鳥生、あづさ)

### 各地の山岳會彙報(六)

○慶應義塾山岳會○七高山岳會○夕陽丘高女登山部彙報(大正五年度)

### 圖書紹介

○大正五年登見旅客一覽(武田)○芳野山(岳雄)

### 山岳彙報(二)

○鎗ヶ岳下の大旅館○本年の上高地並に其附近○劍岳登山者に希望○津島一城氏の「信濃の山」に就いて○富士の烟に關する詩○  
大黒嶺山第二新道に就て○嘉門治老爺の病○神山寅吉の計

## 雜 報

東久瀧宮殿下白馬岳御登山○燕岳登山者斃る○單身前穂高岳の嶮を攀ぶ○白馬岳雜記○御嶽山雜記○東西婦人記者の穂高登り○  
雷島の崇り○岳の雪

## 會 報

第十一回大會豫報○山岳畫展覽會に就て作家及び所藏家に○會員登山報○第十八回晚餐會記事○第一回在濱會員有志晚餐會○秋  
田縣小坂町に於ける山岳講演會○學習院輔仁會山岳幻燈會○外人會員交歡○上條嘉門治の死○會員名簿○大正六年寄贈及交換圖  
書○本號關版解説○投稿規定○會告

# 黒部川峽谷の話

中村清太郎

(一)谷を念ふ―(二)谷に向ふ―(三)谷に入る―(四)鐘釣温泉―其一―(五)大蓮華登山―祖母谷―硫黄澤―(六)五龍岳に登る―附大黒鑛山―(七)小黒部の上流―(八)仙人の湯―(九)鐘釣温泉―其二―夏より秋にかけて  
△大正四年七月より十月に亘り谷間に晝作しつゝ暮せる日の漫録

## 一、谷を念ふ

南の方赤石山系を貫流して太平洋に走る大井川と並んで、北の方飛驒山脈を縦削して日本海に瀉下する黒部川は、日本最大の姉妹峽谷を作してゐる。

彼等は共に三千米突を出入する日本最高の山岳の間を貫通する勾配の急な、深い、人跡稀な、峽流をなすところ、その形勢は甚だ相似てゐる、そして甚だちがつてゐる。彼は古生層水成岩地を分けて、力を蟠屈さしてゐる、是は重に古い火成岩地を穿つて、一擧に力を迸散さしてゐる。彼はやゝ深さが水平にも傾いてゐる、是は直ちに深さが垂直に働いてゐる。彼は影が影に重なり、其の奥に物を藏してゐる、是は感覺が直ちに深奥に徹して、衝突し屈折する………。

嘗て飛驒山脈の諸高峯へ登つた時、折々この谷を窺つた。或時は後立山々脈の高峯の頂に立つて、日本北アルプス精髓を爲す立山の列峯の、まのあたりに瞭然と展開するのを見た、そしてその裾の柵

を亂した如く錯落した見えない底が、頭から浴びせ懸つた雪の流水が匍ひ下りてゆく見えない先きが、黒部川だと教はつた。或處ではその窈冥の纒かに開いた間隙に、何か見えた、眞青な底牙えて藍に近い凝つたものだつた、七寶燒の金屬の型に濃い釉藥を流し込んだやうなものだつた。黒部川だから水にちがひ無いと思つた。

或時にはやつと水に近づいた。針木峠を西に越えて、鋼鏡の大塊のやうな龍王の峯頭を、亭々たる榛の梢に仰いで、一本の針金に垂げたモッコに乗つて水の上を渡つた、その水は全く透明で、急激に流れつゝも、底の水が噴水のやうに上表に迄衝き上つて溢れ、溢れて底の方へ突き入つて、水と水とが固く摩擦し合ひ、しかもそれが恐ろしい全體の勢と化つて飛んで行つた、その水の華は直ぐ足の下で開いた、開いては消えた。併しそこは稍開けた積で、前後は忽ち山脚の絶崖に依つて全く人の目から遮られてゐた。

時に上流の一部を縦観した、二つの山脈がガツクリと口を開けた遙か底に、ヒッの入つたやうな青黒い條痕を物色し得た、薬師ヶ岳と赤牛岳との間、土人の奥廊下と呼ぶあたりであつたらう。

一度しみじみ其の水に近づいて見たいものだと思つた。而して一年、大井川の峽谷を窮めた後、愈々強く自分を引寄せたものは、實にこの黒部の峽谷であつた。

## 二、谷に向ふ

時は來た。富直線といふ汽車程日本に好ましい貴いロマンチックなエキゾチックな汽車があるだらうか。高い山は深い海に逆落しに突入してゐる、日本海も晴れた七月の日は流石に疊を展べたやうに静かで、霞を帯びて漂渺としてゐるが、山と海の線の交綏する勢は甚だ荒らかなものである。糸魚川、境川、小川などが車窓を閉塞するやうに壁立する前山の圍を破つて海に落ちる。そのわづかに開いた

扇状地の頭を一髪に渡つて汽車は走る。忽ち谷の上空に高く而かも近く、顎を伸ばしてゐる雪の峯を瞥見する。赤味を帯びた裸岩と、寧ろ藍に近い草木の深緑とが雪を際立たして光らせる。而かも多くの場合、鈍い色光の亂雲は山峽を埋めて、その奥にまだ何物があるか計り知れないことを暗示してゐるだらう。

併し一方の車窓から海に下る間に、一群一群の漁村が互に抱き合つて、低くうづくまつてゐるのを見逃してはならない。一方の眼に天外の雪を望み、一方の眼に漁家の石屋根を撫で、翼を張つた鳶の舞ふやうに泊へ着く。

泊の町から南を指して車を走らせると、忽ち大小のピラミッドの二大縦列が行手の空を切り裂いてゐるのを、誰でも見ないわけには行かない。左のは後立山々脈の北部、大蓮華の山脈、右のは立山々脈の北端、瀧倉（駒ヶ岳）の山脈である。何れも天邊からかけて雪を浴びてゐるが、瀧倉（駒ヶ岳）の山脈は皺が古びて深く縦刻し、雪がそれに従つて細長く流下してゐるが、この古い花崗岩骨ごちがつて、新火山岩に見舞はれてゐる大蓮華の方は、高い處雪倉あたりと思はれる邊、廣く展べたやうな雪田が見えて、山の膚も滑らかにキメが細かい。瀧倉（駒ヶ岳）は雪の白と草の緑りが冴え、雪倉の方は赤紫の裸岩が背を圓くして吼いてゐる。

この兩山脈の間こそ黒部の谷であらう、街道の方向は甚だわが意に適ふ。併し川は中々見えない、第三紀の丘陵らしい端山の裾に村家が斷續して見える許りだ。一面の黒部川沖積地の稲田は、瑞々しい日をあまねく浴びつゝ此の山脈の「吹き下し」に涼しく戦いでゐる。但し道は固より爪先上りだから車夫の背には汗がにじみ出る。

縦の木の多い舟見の町を通つて、一度愛本の村に入るに及んで、初めて右手に黒部川を見る。一面茫漠たる花崗岩砂の爛白の河原は、深い中高の弧を畫いて末廣がりに兩翼を擴げる。その中央を濃い

藍紫の水道が、後ろから衝きやるやうに逸つて、遙か海の方の光りの中へ消え去る。身體中が力でゴブゴブになるやうな氣がして、却て聲をひそめて何か叫ぶやうな氣持になる……………。

直ぐ近くの愛本橋が、夫の峽流の解放される出口になるのだ。此處で兩山脈の最後の山脚は、峽流を一度緊縮して後一舉に放散する。橋の袂の高い崖上に休茶屋があつて、眼下に黒部川は九分の透明に一分の名狀し難いくもりを翳したやうな最後の深淵をなしてゐる。此處に昔から大蛇が棲んでゐて、音澤の山村からそこへ一人の娘が嫁に行つてゐるなどいふことを、茶屋のかみさんが話して聞かす。其の人は毎年盆には、必ず村の菩提寺へ墓參に来る、姿を見たものは無いが來たしるしには本堂の疊がきつと其時は濡れてゐる——と。

### 三、谷に入る

道は此處から黒部の谷にはいる、車はもう通はない。内山の貧しげな山村が雜木と岩石の間に埋没してゐる。筋向ふの右岸には音澤の村、既にこゝがこの谷最後の山村である、これより上流には早や部落を形造る餘地も見出せないのだ。山人の仕事が見る限りの山坡に施されてある、少しの水田、豆、粟、蕎麥などの畑、石灰を掘る山……………。忽ち瀑の懸つた澤などを渡る、花崗岩の外そんな處には硬緻な太古紀の片岩類が、破碎されてゴロゴロしてゐる。

身は既にして黒部川峽谷に吸ひ込まれた。峽谷といつても必ずしも日の目の射さない薄暗いものではない、この邊はそれに上流に比べれば、餘程開けてゐる。日は谷心を直射して炎々と輝やく、而かも水は一道の蒼味を抹彩して慘として暗い感がある。漏斗に水を逆に通すやうに、寒さがソーッと下腹の方から滲出して、赫日に照らされ満身に汗を浮べつゝ鳥肌になる。

谷身は餘り屈曲がない、友谷は梯子を掛けたやうに落合ふ。山壁には豎に巨大な熊手で引掻いたや

うな創痕を印して、樹木が怒つた爬蟲類の鱗のやうに生ひ付いてゐる、その中には黒部杉（ネヅ）なども見える。尾沼谷は殊にいゝ、双曲線の連続から成つたやうな山の側壁を兩岸として、この友谷は本流に轟然と躍り込んでゐる——。上流はどうだ、胸を反らして無理な仰角度に望めば、紫ばんだ雲はみつしりと其處へ垂れ、その奥から堅硬な玻璃質の雪の泳水が一條二條尾を振つてゐる。うつかりした旅客も、黒部谷だぞ！ と耳の端で嘸鳴られる聲に氣をとり直すにちがひない。

嘉々堂谷、三名引谷、皆同じやうな友谷だ、大友谷黒薙川の落合に邊では、本流の兩崖が幾枚折かの大展風のやうに屈折して、河身がその饜から饜へ背と擦りつけつゝ奔下する所、やゝ特異の觀を持つてゐる。所によると透明な多量の水塊は、狭い谷底に押し合ひ、盛り上り、滑らかな膏氣のあるやうな肌をして、恐ろしい沈黙の裡に過ぎ去る。

黒部谷には温泉が多い。黒薙川には黒薙、二見があり本流には鐘釣がある、その外無人の温泉は何程あるだらう。恐らく夏この谷の道で、幾人かの浴客に遭はないことは稀だ。思ひもかけない、抉つたやうな岩壁の細道で女や子供なども交つた、それ等の人々の群に出會ふことがある、何れも甲斐甲斐しいさまだ。或者は靈驗ある山奥の出湯に病を治して貰はうとねがひつゝ急ぐのもあり、或者は楽しい入湯を終つて家路を指すのもある。一樣に足を痛めないやう、川へ陥らないやうと、只管脚元へ氣を配つてゐる、いちらしい人々！ 君は時に行過ぎてから思はず彼等を振り返つて見る、すると彼等も亦きつと君を振り返つて行くだらう。併し永くは見えない、谷の道は崖から崖へ屈曲してゐるから。時には温泉へ荷を運ぶ川下の村人にも遭ふ、これはいつも高聲で話ながら行くに違ひない、そして彼等の考へは足元よりも、何處か少し別の處にあるさまだ、餘裕のあるさまでやつて行く。併しこの谷筋の道は、馴れた者でも無暗に安心の出來る道ではない、廣く谷の上下では各處で命を失つた獵師、漁夫、杣、荷運び、山林の役人登山者なども數多く、話や記念碑に遺つてゐるが、道からヂカに谷水

に呑まれたものも些少ではないさうだ。現にこの後郵便脚夫が雨上りの道で、落ちて来た岩塊に打たれて来なくなつたし、大黒鑛山道では人夫がやはり墜石の爲めに頭を碎かれて死んだ。

東鐘釣山西鐘釣山など兩岸の山壁の中に名けられたのは、花崗岩の大獨立塊が丁度釣鐘を伏せたやうに聳つてゐるのに過ぎないが、此の岩特有の「圓味ある尖り方」の典型的なものだ。

似合谷を仰ぐに至つて、谷底から山上を仰がうといふ慾望は稍満たされる。これ迄は谷の兩側壁が餘り近く額の上に峙つから、少し遠い處でも一〇〇〇米突位の高さよりは見えな、それが此處に至つて二〇〇〇米突近い峯頭、三名引山の一角が谷の上天に曝露されることになる。雪は盛んに瑤瑤を下げたやうに懸つて、峯頂の或部分は既に劔の大窓式の裂罅を作してゐる、まだそこには樺の大木などが落生してゐるのが見えるけれども。

見ればあたりの小谷にも川原にも、累々と雪が残つてゐる、それは春の雪崩で峯から押落されたもので、上に名残の柴泥を一面に被つてゐる、唯その裂け口からは剝いた若い果物の澁ゴキを吹いたやうな膚が仄見えて、或ものはそこを水に穿たれて、洞門から怪しい湯氣を吐いてゐる、それでわづかに雪と氣がつくのだ。これは少しづつ溶けながらも、永い夏の日さへ三四時間と射してゐない谷底で、且柴草に保護されてゐるから、中々溶け去ることは無い、十月になつてもまだ人々は不思議な彼等の姿を見ることが出来る。

#### 四、鐘 釣 温 泉

もう鐘釣温泉は程近い。柴木のゆらゆらする長い釣橋で荒くれた多量の白い泡沫はかりが、混沌と躍り狂ふやうな水の上を渡つて、雑木の林越しに温泉の建物を望んだ時にはホッとす。心の俄かに緩やかになるのを感じる。まして病のある人などの氣持はごんなだらう。六里の谷道は決して彼等に

とつて樂ではないのだ。

温泉宿は、川を直上に距る廿間位の山腹にあつて、何よりも先づ前山が鼻先きに壁立して、胸を壓されるやうなのに氣を奪はれる。而かも直下の谷水は碌々眼には入つて來ない。何等か山奥の温泉に就て豫望を持つて來る旅客は、かなりよく黒部川を想像し得たと思ふ人にもせよ、多少の破幻を感じない人は無いかも知れない。併しそれは一時だ、落付いた心に四邊を見廻はす時、忽ち想像も及ばなかつた「善い物」の、如何に自分を取り巻いてゐるかに氣が付くだらう。

丁度此處は大蓮華の側山百貫山と、三名引毛勝の山裾とのスレスレに肩を並べた、その狭い廂、あはひに當るのだ。樺桂樹五葉黒部杉楓檜など針葉濶葉の大樹が、眼前の山壁のどんな所迄も生ひ縋つて、上へ上へと累積し、峯の極まる所は浅い軒廂の猶こなたに在つて、柱を捉へて首を伸ばすと、始めて漸やく、天心卷雲のなびく邊りに頂を突き入れてゐるのを見ることが出来る。一方水聲は足の底、岩壁の荒くれた毛脛の直下——と思はるゝ邊から起る。廣く物をおひ被せるやうな音、短く螺旋狀に物をつき通す音、高低強弱種々の階音が縋ひ交つて、兩側の山壁を搏ち、巨大な容量の響音となつて、満谷の空氣を大搖りに揺りつゝ、高く狭い天空を指して逸出して行く。屋後も固より樹木と岩石の仄壁だ、而して又上流には針葉樹の暗い、下流には濶葉樹の厚い山々が、何れも高く押合つてゐるから、天空は全く杳かに高く、押せばめるやうに仕切られてゐるのだ。明るい雲はその峯の窓枠から顯はれては消える、處ろ處ろは暗い色のが纏はり懸つて、樹々の間を越行して降りて來るかと思ふと、又尾を翫へして昇つて行く。

宿は山に沿ふて長く、幾棟かの長屋建や離座敷から成つてゐる。毎年五月から湯を開くさうだが、七月といふともう浴客も多くなる時分で、どの部屋も混み合つてゐる。客は自炊する人が大部分だから、鍋などを提げた男や女が、その邊から出たり入つたりしてゐる。温泉は直下の川べりに湧くので、

石を積んで幾曲りかの段々阪を半町許りも下らなければならぬ。楓の緑りと谷水の碧りとが薄暗い阪道を上り下りする人の顔には、える。

浴場といつても何の設備もしてあるわけではない。唯見る巨大な瀧縞のある流紋岩壁の、抉れて半環状に洞門を開いた下に、透明な温泉は豊かに湧出して、潭をなして湛えてゐる、全く天然の湧泉らしい有様になつてゐるのは心持がよい。岩壁と小山程もある根無し岩との間にされ切つた大流木が押し填まつた奥の方の暗いはさまから、熱い温泉は間断なく漣を立て、ゴクゴクと流出して来る。その渦まいて深く湛えた中に身を沈めると、忽然五體が開放されて、四周の自然と渾然一つになつて流動する感がある。湯は適温といふよりは寧ろ熱いくらゐた。直ぐ外には小さな防波堤を隔て、黒部の谷水が絶壁のあはひから絶壁のあはひへと、冷たい寒天のやうな膚をして、岩を厚く蔽ひ包み或は岩にむごく衝き當つて、硝子をぶつ缺いたやうに飛散してゐる。前山の頭は湯壺を蔽ふ緑樹の梢を重なり合つて、殆んど天を隠さうとする。

これ等自然の抱擁の下に、人々は滑らかな湯の上に首を浮べるのもあり、すべつこい膚の岩の上へ横たはるのもあり、米を磨ぐ人もあり、下の方では何か洗ふ人もある。時には高聲に歌をうたふのもある、その聲は高調の谷水の音に誘はれて心細く何處かへ運ばれてしまふ。湯の質は炭酸泉で、岩に乗せてある柄杓で湧き出たばかりのを飲むと、味が中々いゝ。此の湯壺も、これまで大概な年には大水の爲めに洗ひ去られて幾度か積になり、二三年來殊に洪水が続いたので、所ならぬ所に家屋大の岩や流木などを流して来て、常に面目を變へてゐるのだといふ。併しあたりがごんなになつても穹窿形の大岩壁は嘗て動かす、湯はその裾の何處からか必ず出て来る、嘗て湧き止むことが無いといふ、(見ると岩壁の一部に消え消えに『慶應三卯八月口山奉行辻安兵衛山廻伊藤刑部』など、書いてある)そこへ幾人かや幾日をかけて、粗末な石だゝみの通路を作り、丹念に湯壺の所をかひ出したのが、この

人々の群る浴湯なのだ。

宿は老人夫婦に若い男女三四人だ。客には病のある者殊に胃腸病の人が多いやうだが、健康な人も少なくはない、それはこの谷の上に聳つ高山へ登らうとする人、そこから下りて来る人達だ。時には上流の鑛山へ通ふ目付きの嶮しい人、山林を巡視する髯の長い役人なども来る。黒部も源頭は猶十里の奥になるから、此處は恰ど中流のところだ。此處から上流は愈々人跡稀な峽流になつて、僅かの林道と、小黒部大黒の二つの鑛山へ通ふ細徑の他は路らしい路の無い、殆んど谷に沿つては常人の通行すること不可能な幽絶境になるのだ。

此處から真近く登れる高山には、東信州境に大蓮華諸峯があり、西に毛勝、立山、劔岳の山々がある。何れもこの深い谷底から、一舉に二千五六百米突を奔騰した、直ちに「激しさ」を具象したやうな、外の山脈に無い高山である。

## 五、大蓮華登山

自分も八月の始め、此處から大蓮華に登つた。案内には川下の音澤の老獵師で、この黒部谷の生きた繪圖のやうな助七を頼み、もう一人荷を擔ぐ男を連れて三人で行つた。天氣は随分續いた跡だが、やはり雨氣もない朗かな日だ。上流さして左岸の林道を行くと、胸が擴がるやうな、力の餘つて身體の中に薺めくやうな、山登り——といふ一つの大きな仕事——の始めの感はいつも瑞々しいものだ。荷を嵩高に背負つた山人が、一足一足重々しく踏んで行く頼もしい足跡を、奔逸しやうとする力を抑へるやうにして隨いて行く。頭を四方にめぐらしてあらゆるものを見る、鳴ぐ、聽く……………。

露にうるほつた緑樹——山毛櫛が多い——の夜の間吐いた精氣の、生々しくちらばつてゐるのが、サツと身體に入つて来て、頭の心にキリツと滲透する。獨活谷、蔭の谷、小舎の谷と支谷を渡る毎に、

窓を明けたやうに顯はれる空間を仰いで、碌に見えない上流の山影を求め、冷たい音を立て、落ちる雪しろ水を掬ぶと、食道を磨くやうな鋭さだ。ヨヘラの山角で不意にまばゆい光りに眞向から射られてアツと立留まる。案内は——休場だ、一服やりませうぞ——といふ。上流に思ひもかけず、雪の山の一角が顯はれたのだ、ノツンリして赤褐の岩塊に草木が緑青の錆を吹いて、回み回みに氷雪がガツキリと喰ひ込んでゐる、割に近く見えるが小黒部の上流剣のついきだといふ。

日は八時を過ぎて漸く、對岸大蓮華の側山の肩先き迄昇つたらしい。その百貫山の名剣山の壁を組み合つて衝立つた頂から、忽ち幾多のサーチライトを放照するやうに、此方の山上を射るものがある。谷間の淡靄は光りに飽和して段だらりの縞を織つて山を染め分ける。空清水の直線的な深い山峽には、残雪が始めて目覺めて青白い上眼を見はる。黒部の谷水は時々緑樹の間に、冷え切つた氷雪の塊のやうに見えたり、井戸側をめぐるやうな道の脚もと遙かに、冴えた幻燈の繪やうに顯はれたりする。道端に多いくろもじを折つて、わざと嚙んで行けば、餘り強い刺戟に酔ふ程だ。

西方毛勝岳から派出された絶大な楯のやうなチュヂャク山——頭は針葉樹に尖つてギザギザだ——、剣の側山の高い仙人の山脈、この兩山の間から中黒部谷が奔下して来る。此處で黒部谷は横さまに偃かされるやうに押狭められて、猿飛びの峽澗を成してゐる。それは兩岸の花崗岩壁が近い處では三四間、迄額を寄せて、水はその絶大な暗渠の中を流れるやうに又流れないやうに行くのだ。それを木の間遙かに俯し望んで、冷やりと襟を合せて過ぎる。併しこの上流は又いゝ、水も力も揮ひ岩も死力を盡してゐる。水はもんごり打つて川底に衝き入り、逆に跳ね上つて岩を巴に抉る、堅硬至極な片状の花崗岩壁も、卵豆腐をすくひ取つたやうになつたり、型で打ち抜いたやうな釜状の穴を穿たれたりしてゐる。一體この谷の側崖は直線或は寧ろ至大な圓弧の一部を見るが如き一種の線が、中高になつたり中間になつたりして川底に奔下するのだが、その水上四五間乃至六七間の處で一頓挫してゐる所が多

い。——茲に絶壁の安固さがある、その恐るべき全重量は晏然として夫の沓石の上に座してゐる——、岩質の相違による所もあるだらうが又一はこの谷水の容積の激變する爲めではなからうか。夏の大水は毎年でないとしても、春の雪代水は盛ださうだ、流木岩石氷塊……そんなものしごろに混り合つた、流動體とも固形體とも知れないやうな混沌としたものが、勢に乗つて落下するのだから、竟に岩壁を斯くも擦破するのでは無からうか。偶岩壁の割れて小峽をなしてゐる所は、同じ位の高さ迄岩砂で填められてゐる所がある、必ずしもその峽の上流から落ちたものでなくて、こんな増水の折に勢の中心からハミ出して押込められたものだといふことは、少し注意して見るとうなづかれる處だ。

道が本流を離れて祖母谷に入ると、さすが流水の落差が強く階段的になつて、峯へ近づけばひがする。川を横絶する残雪にも出會す、土人の雪橋といふものだ。やはり上には柴土がフツクリ被さつてゐる。之が一度融けて、ガツクリと二つに割れると、往々通行がむづかしくなる。その時は腰迄入つて川を二三度徒渉しなければならなくなる。破れた雪塊は河原に亂立して圓錐形に尖り氣泡の多い氷塊と化つてゐる、その間を渡ると柴泥がどけて足を浮かし、氷塊と氷塊薄暗いあはひから底冷たい青黒い氣が立ち昇つてすさまじい。

振返つて見ると吃驚する、大分開けた谷の空は、いつの間にかまるで雪の毛勝岳の占むる所となつてゐる。輝く雪だ、草木の緑りも輝く、岩の血色も輝く、近山は眞黒に針葉樹に尖つて、遙か下を谷水が紫を帯びて碎ける。完全具足したかなり理想的な、山の景色を見せて呉れる、案内者も讚嘆の聲を強ひられる、そして登山者は専ら山を嘆じ彼はむしる腰をかゞめて「旦那」の様子を珍らしさうに眺める。

祖母谷温泉は先年の山水に一部分を破られたまゝ棄てられて、はや灌木や夏草が四方から無氣味な手を出しかゝつてゐる、熱泉は徒らに河原に放流して、或所は噴泉となつて唸音を立て、白烟を濛々

と立昇らせる。山腹の沙草はその吐氣に逆撫でにされて、蛇のうねるやうに光りつゝ翻る。林道が絶えて身は祖母谷峽谷中のものとなる、茲に至つて高山登攀者の緊縮した集注的な累階的な意識は強く要求される。僅かに生ひ絶つたり沙草の根を足代にして、仄崖の中腹を辿る。深く強く冷たい水を渡る。垂直な崖壁を下げて貫つた細い木の枝を手より傳ひ上る。あらゆる末梢神経が網の目のやうに呼應して、殆んど神來的に重力と、物と物との引力の微妙なバランスを操る。

雪に一年の大半を惨く壓伏されてゐる楓やその他の雑木は、皆梢を谷底に向けて匍つてゐるから、頭を衝かれながらも、その枝幹に絶つて、それが無ければ到底身を運べないやうな處を辛ふじて行くには傳りになる。根曲竹は一番わるい、乗れば迂る、間に足を踏み込むと柵となつて踏み出すに殆んど困しむ、押し分ければ力の緩むのを待つて一舉に頭を弾く。その林を抜けた時には冷たい汗が竹の吹く白い粉と一緒になつて、いつ出来たとも知れない微かな傷にしてみてもチクチクと痛痒い。

落谷の河原へ出て大きな落や香の高い獨活の梢へつかまつて、今迄雑木の枝越しに恐ろしい瀧や急瀨の片鱗を窺つて來た祖母谷の河原へ下りる。鬱陶しい鋭くよりよりは、恐ろしくとも快活な水の方が氣が晴れる。大石は間短かに累積して早や上流の景色になる。硫黄澤の合流する所に至つて、川は高大な岩樋の中を、全く勢づけられた白沫の衝突となつて、中に何を含むかを辨別し得ない。うつかかり足を入れることが出来ないから、あたりの山壁から僅かに木をおろして柴橋を架して渡る、現に不用意に渡した一本の材木はアツといふ間に白沫に呑まれてしまつた。

いつか谷の下手には、劍ヶ岳から立山の山脈が幻像の如く顯はれてゐる、まだ彼我高さの相違が甚だしいため、山脈は力を張つてのけ反るやうに見える。黒部谷の空氣はうるみを持つて半透明に湧き上るから、雪を鎧つた山脈は、磨ぎ澄まされた鋭い刃物に、息を吹きかけたほどにくもつてゐる。

その日はこの上流に野宿した。やゝ開けた積だ。上手には雪田の一端が見えて、その上に臨む山は、

短かい草に樺や榛の圍くかたまつたのが交る六七合目位の高さだ、——丁度登山者に妙な誘引力を働かす高さの景色だ。

河原に押出した花崗岩沙のフツクリしたところが寢床になる、四邊に散亂した大小の流木——樹木の舍利骨は絶好の薪になる、後ろに叢生した大虎杖はそのまゝで小屋の屋根になる、生ひ下つた楓の枝は贅澤な箸になる、間近の谷合から助七が探つて來た雪わりの獨活に至つては、殆んど人間豪奢の極だ。まるでエツセンスの固まりだ、強い仙薬のやうな香りが四邊に散亂する。煮え立つた許りの青白い芳脆な太い根莖をふくむと、劇しい活々しい生々しい刺戟が全身へ傳はつて煽られるやうだ。

谷を逐つて朝の雪田の上を進めば、冷やかな霜氣のある陽炎が身を引包んで、高層の霧は垂れたり騰つたりして、時には大粒の水滴を散らして來る。そして愈々寂寥孤獨の境界に身を入れたことを確かめる。ヂツと沈むやうな氣を持して白い波の上を行くと、思ひもかけず行くべき谷の中心を離れて、側の方へ外れやうとするのに氣が付いたりする。

後ろから聲をひそめて呼ぶけはひがするので振り返ると、二人は熊々と指さす。上つて來た谷の一方の傾斜の青草の中に、黒いものが一點見つかつた、併し自分で熊と思へる迄には少し手間が掛つた。鐵砲の名人だといふ助七は今度えものを持つて來なかつたので頻りに口惜しがる、——あすこをかう匂んで行つてあの邊からドンとやれば……など、二人は手まねを交へて夢中に氣を奪られてゐる。黒い動物は一生懸命草を喰つてゐるらしく、少し隠れたかと思ふと、又首を上げて左右に振つて身を低くめる、全く何のかゝはる所も無い自由なさまだ。腹が足りると下の方の黒木の中へ入つて寢ては、又腹が減ると「草付き」へ出て來るのだといふ。この邊一帶は獸の多い處ださうだ、——祖母谷と猫又谷との間尾根、不歸岳の三角點附近だ、彼等が『猫の躍り場』と稱する溜水のある少し許りのたひらなども見える、一面青草——うまさうな——の心持よく茂つた斜面だ。自分も彼等に打たせて見た

い氣もした。鐵砲があれば出やしない、今打つても夏の熊は毛も肉もわるいから、冬迄生かして置いた方がいゝ、などと、言ひ乍らやつと熊から離れる。

車百合が咲き、行者にんにくが咲くに至つては雪は極まり谷もきはまつて、草を手よりに峯へかゝる、偃松が既にして枝を伸べるから、その手を借りて急傾斜の沁る草根を踏みしめる。終に蒼黒い偃松の海へ乗り込んで、破碎された岩沙の緩やかに波打つ峯頭へ身を投げ出す。そこは大蓮華山が西方の一脚、清水の尾根、二千五百何十米突の或一點だ。

此處はもう天空餘程廣く、黒部の大谷を取り巻いて立つ大山脈の峯頭が、互に發射する白冷の照光の、稜のやうに飛び交ふ眞唯中に在る。東には眞近く頭上に、大蓮華本山から鉢ヶ岳、雪倉、赤勇、朝日の連嶺が、形こそ緩やかだが、其の新火山岩片を鏤めた怪しい斑紋のある、腫脹したやうな肌から、混濁した魔的な紫光を放つ。西には毛勝、劔、立山の山脈が、よく見れば赤錆青錆を吹いたやうに荒けた膚を、半ば氷結した雪に包んでガキガキに尖り、一齊に晶明な光と影とを輝やかしてゐる。南の彼方には黒部源頭の次第高に奥まつたところに、黒岳の雪が爆裂したやうに鋭光を飛散させてゐる。これから朝日の峯傳ひに本山指して進むと、東信州から黒部谷へ吹き込む劫風の射圈内に入つて、耳元がブンブン唸つて身體が縛られたやうにギゴチなくなる。風は堅緻な玢岩の奎角に破れて鋭く尖つてゐるから、忽ち身體がしびれるやうに痛くなる。朝日岳と本山との間の雪の頂稜を驅けるやうに渡つて、本山の麓——烈風の死角（デッド・コーナー）に逃げ込んで、始めてゆるやかに息を吐く………四邊は既に天上の花園だ、殊にウルツブ草や當藥龍膽の盛んに岩間を埋めてゐるのを見ると、北方の山だ——白馬岳だといふ感が争へず湧く。

頂上の石室を覗くと、いつもながら五六の客と、客と同數程の胴亂（植物採集用）などが見える、やはり白馬らしい。絶頂の破れた一等三角臺に立つと、夕べの天空高層の霧が、絶えず峯頂を掠めて、

東から西へ急流するばかりだ。崖端へゐざり出て信州の谷をのぞき込んで、やはり白い濃い霧だか雲だか渦まいて塗湧してゐるばかりだ。峯を下りて山稜の低みへ来れば峯頂の霧の流れを脱するから、杓子大澤の大雪溪おぼろに直下するのを望み、姫川の流域が山も水も一様に餘光に浸つて淡い銀色を放つてゐるのが時々見える。

我々は飲料水の乏しい、それでゐて何となく濕り氣が多くて、人臭い、わびしい頂上の石室を避けて、杓子岳裏の一點に偃松小屋を掛けた。こゝに四日計り滯留した。そこは一個緩やかな斜面で、偃松の團落を小楯にし四邊は一面の美はしい花咲く小草の廣場だ。南京小櫻や白山一華や白山千鳥や岩銀杏などの密布して咲きつゞくところを、一足一足ためらひながら拾つて、二三十歩下りると、朝日岳の山稜の雪から滴る、凝結しさうに冷徹な流水が轉がつてゐる。高く空を限る雪田を踏まへて、朝日岳の大岩瘤が巨きな兜の八幡座のややうに、ズンと我々の頭を壓して据つてゐる。

水の落ちて行く方には、黒部の大深谷を隔て、毛勝から劍、立山の列障壁が見える。天晴れて谷の空氣乾徹する時には、その雪は茵を帯びた眩光を放つて、岩のあくどい赭色も淡く又濃い草木の緑りも、皆冴えた紫藍の濃密な影を含み、轉るが如き嚴線を以て空を限り近山を截り、峯頂といはず胸壁といはず、或は切つ殺いだやうな折線に、或は彈力ある一種拋物線様の膨らみを持つた曲線に、蒿にかゝつて尖つてゐる。

或は冷晶な谷の濕氣がむらむらと昇る時には、山は一步退いて淡藍色の漿液を浴びたやうにくもつて、冷やかに透徹した鍊鋼のやうな照光を射出す。

雲が峯頭や山腹にからみ付くと見ると、忽ち一つの亂雲の紛塊に化つてしまふ。その蝕まれたやうな隙罅から一際鮮やかな雪溪が隠顯して、擅まゝに搦みつく雲を截るから、山は殆んど常の形骸を捨て、無邊際に奔逸し伸縮して物凄ましい動搖を現出する。

雲收まつて深く山頭に垂れることもある。巨大な暗い重い横幕が、殆んど同高度に大山脈を半截して、じつと動かない。山は水に浸つた苔のやうに厚ぼつたく隠退して、雪峽は過量の水氣を放流するやうに、雲の中から垂れて谷間に搖落する。

大蓮華の峯頂は滅多に晴れない。いゝ天氣でも朝から薄い霧が、髪を撫でるやうに水草の靡くやうにかゝる。併し間近の雪田は、夏の高山の碧空と峻烈に界する、朝日岳は満岩に血を潮して、何といふ重さだらう。傾斜の花の群は、強い日光に直射され、岩の光り雪の光り雲の光りに反照され、峯の「吹き下し」に戦いで銀河のやうにキラキラと搖らめいてゐる。

大雪田は満面の波形に微妙な明暗を刻んで、又それを幾つかの浅い縦谷を以て統一し、處ろ處ろは淺葱色に凍結して、硬く而かも流れるやうに、峯から谷一のたつてゐるが、夕方になると全面から蓬と冷たい霧を吐く、流れは絶えずその下から搾れて滴り、殊に雨がかゝると、表面の波形を亂れ流れて、一日の中に見違へる程耐まらなく惜しい程その容積を減する。

風雨になると恐ろしい。滲み出すやうな、そして薄膜を無數に累ね合せたやうな雲が、風に逐はれて後から後から、空に堆積し山に乘し掛つた果は、雨になる。手早く薪を手近に寄せ集めて、小舎にひそむ。疎な半ば凍結したみぞれやうの大粒が音を立て、落ちるのを始めとして、忽ちの中に四方唯眞白になつてしまふ。落下する雨滴は風に鞭たれて勿論勢の強いところへ、受け留める地盤は、岩石は固より植物さへ、何から何迄堅硬強靱なものばかりだから、之を一氣に弾き返す。水滴は微塵に破碎して烟霧となつて舞ふのだ。一種冴えた響のある光りのある聲がそこから起つて、ピンピンと波動から波動を打ち合はす。

風は先づ大蓮華の峯脈の頂を打つて、遙かに底ひゞきのある、籠るやうな湧き上るやうな聲を立てる。間もなく朝日岳と覺しい方の岩壁に當ると見えて、擦るやうな裂けるやうな碎けるやうな、荒け



(筆氏郎太清村中)

(窓大部黒小)望仰溪雪



たつ、目立つた叫聲を放つと、一舉に物を洗ひ流すやうな平手で物をはたくやうな急音が耳元を掠めて——谷底の方へ消えて行く……………。

時々風雨のひまに、うすぼんやりと雪田や峯の形が、水銀様の薄光りに見えることがある、天気になるのかと喜ぶ間もなく、又前のやうな騒を繰り返すのが常だ。一度其の風雨の中へ出やうものなら、今更のやうに驚ろく。山稜は殊にひどい。とても立つて歩くことはむづかしい。無理に風の隙を押し分けるやうにしてヒョロ／＼行つても呼吸が續かない、吸よりも吐くことが出来ない。俯す——ヤハリ苦しい。風下へ少し下つて僅かに呼吸を整へることが出来る、併し忽ち全身がピツシヨリ濡れる、寒さは一刻に倍加する……………そんな事をしてゐれば凍死だ。自分もこんなひどい風に出會つたのは之が初めてだつた。

少し雨が疎らになるかと思つても、風は中々止まない。時々頂上の方から、人聲の断片を送つてくるところもある、いつも悲鳴のやうで何だかまがまがしく心細い氣がする。大分天氣の續いた後だからでもあらう、この後は終にいゝ日が見られなかつた。夜も時には空中大小の星ばかりになつてしまつたかと思ふやうな、高山の晴夜らしい天も一角を顯はしたが、絶えず動搖を來する雲霧に掻き廻されてしまふ。あの山上の生活に伴ふ聯想の、最も密なる景象——晴れた高山頂の曉——眞黒な峯角が堅く堅く聳え立ち、水のにじみ出さうな濃密な紺青の空が四方に擴がり、その中に天狼の鋭い痛い光り許りが刺さり込み、底の方の地平線がわづかに冴えてホノ明るみをさす……………といふやうな、あの腸の結晶するかと思ふやうな高山の夜明けの景色などは、この時はとても見るわけには行かなかつた。それに此の事は餘程残雪の多い事であつたらう、杓子大澤などは雪溪が峯頭迄白い冷たい手を一杯に擴げて、大いなる白蛇の尾は雲中に飛揚してものすさまじかつたが、その爲めに葱ねぶかびらは固より葱ねぶかだいらも大半はその下に葬られ、白馬あさつきに「くもまべにひかげ」の戯れる景色も、唯思ひ出を

促すより他に、竟に現實されるべきものとも見えなかつた。

歸路には硫黄澤を下つた。中ノ谷を一步下ると一步暖かい。見上げると濡れて黒光りする巨岩の危峯から、岩燕が吹き出すやうに出るかと思ふと、閃々と空に亂れて又吸はれる如く舞ひ戻る。泌みるやうな日が射して来て、濕つた身の廻りが蒸氣を吐くので悪寒を覺える。茲に谷を遮ぎる一物がある、頭から皮肉をすり剝いた赤裸の山だ、何だか病的な血生臭いやうな化物だ、その裾の荒れて瀑をなしてゐる爲めに中ノ谷は下ることが出来ないさうだ。それで助七達が白髮山と呼んでゐる、玢岩の怪しくされて白光る鍔ヶ岳の裏を越えて、硫黄澤の源へ下るに、偃松と青草と紫の土と——そこに清らかな潜水の基布した、尊とい侵し難い氣のする、殊更ら神域とも感せられる處を幾度か通る。草鞋の痕も許し難い胃潰のやうな氣がする、草も一本一本數へられて在るものゝやうな氣がする。

硫黄澤は細いが崩れ崩れて、ひどい荒れ谷だ。その間に少し宛烟を揚げて硫黄を吐いてゐるから、水は固より白黄濁してゐる。元は浴することの出来るやうな處も二三箇所あつたさうだが、前年の水でまるで跡方も無いと助七がいふ。中ノ谷を合せてからは堂々たる大谷と成つて、祖母谷本谷へ出る迄僅かの距離ではあるが、その高い崖腹の通行困難なこと祖母谷以上である。

山人達は流石に實にかゝる處を通るに至妙を得てゐるのが驚ろかれる。誰でも足の親指一本が頼りだ。親指に分布した末梢神経が、その立場の安全なるか否か——全身の重量を——この高い絶崖と遙かに下の急瀬澤潭との中空に於て——托するに足るか否かを辨別し、次で進んでその全重量を支へ、次に移るべき動作を助ける……。茲に至つて親指の腹は赤裸になるを以てよしとする、足袋の底などで隔てられてゐるのは、不安で心持がわるい、又實際危険だ。彼等の指は斯ういふ運動に最適するやうに發達してゐる。自分も歸つてから親指が急に發達したやうな氣がした——指の横幅が廣くなり、屈伸の角度が多くなつて、物に吸ひ着くやうな便利を與へる……。

思へば老助七などは、かゝる谷間に生を享けて若い時から危険ななりはひばかり營んで来たセイもあるか、一概に「山人」といふ時想像することの出来ないやうな一種の神經質に出来てゐる。コマカミの處に大きな創痕のあるのが、廿二三の頃袖に入つて、伐つた巨材に引かれて諸共に谷に落ちた時、死から僅かに免れた記念ださうだ。近頃迄その中に石片か何か入つてゐたさうで、その爲め口角が充分開かないのが痛々しい。這の風物の中に生息するものよ！瘠せて尖れる痛ましき山鼠の輕捷！

## 六、五龍岳に登る

祖母谷温泉の廢屋に一泊してから、大黒鑛山を経て五龍岳へ登つた。南越澤には新たに山腹へ細道が出来て、迂回ではあるが樂な登りだ。そして澤を隔て、こんもりした山毛櫨の大樹が深々と生ひ埋めた餓鬼山の尾根は、この道の最も豊かに清らかな見物だ。

尾根へ上ると獵師等のいふ「餓鬼の田圃」だ。この邊に珍らしい沮洳地で、人の手を加へた畦のやうな界を作つて、水が溜まつてゐる中に、ゐの類がまるで稻のやうに茂つてゐる、四邊には毛顛苔なども見える。草地には羊齒が嫩緑の波を湛へ、夏アカネが翅をキラメかして徐かに飛んでゐる。日はこの窪地に満ちて緩やかに陽炎を燃やしてゐる、周圍を取り巻く樺などの大木の背から、雪のある奥不歸の連山が、古い土器色（かたむら）に膨らんだり尖つたりして覗いてゐるが、これ將たこの穩やかなポツカリ暖まつた春の光りを亂すものでは無い。

けれども鑛山へ行く道すがら、餓鬼谷から黒部の本谷を隔て、望む景色は、身ぶるひの出るやうなものだ。劔、立山の山脈は、峯頂を目八分に仰ぐから、中腹以下が恐しくブツ缺いたやうに角度強く擴張して、粒狀に凝つた谷の空氣と雪の光りと交みに反視して、一面箔を摺たやうに輝やいてゐる。谷の奥は空氣が押つめられたやうに濃くなつて、その中に赤牛、黒岳が颯爽と立つてゐる。コマカミの

邊へ氷嚢を當てられたやうな氣持がする……………。

鑛山から五龍岳へは一里位しか無い。しかしそれだけ急だ。五龍岳といつても、すぐ前山の見えない肩の上に在るのだから。シキへ通ふ路から分れて頂上迄道が、たがある。草と雜木の急な山坡を登ると、白檜の林をくゞつて曝露した峯脈へとりつく。破碎した岩片の累積した山稜が、階段になつて絶巔迄一氣につゞく。東北餓鬼谷源頭へ向つての斷崖は、峻直にして堅韌な、危畷として而かも安定の感がある。磊岩は全く目が荒けて、わさびおろしのやうな膚だから、觸れるとバリバリいふ、濕ひのない荒涼とした灰色の無慘な感がある。併し高さが低いのと南へ寄つた丈けに、白馬で未だ蓄の固かつた當藥が此處では花を開いてゐた。

茲から見た鹿島檜は恐ろしく高く、恐ろしく尨大だ、そして滿面皺襞だらけだ。それに連なる山稜は縦に見るから、足の下から一擧に舞ひ上つて、稻妻形に山の膚へ搦み付いて、とても登ることなどは出来さうもないやうに見える。寧ろそこへ人間を想像しても餘りに總ての比例がちがひ過ぎて、暗い皺襞のごことも知れない一點に吸ひ込まれてしまひさうに氣が遠くなる。

三角櫓は一本足を天に向けて、基石の上には登山者の名刺などが、幾枚か板片で押へておもしに岩片が載せてあつた。時折見える信州の野——安曇の青野は、この日頃、角ばつた暗に馴れたやうな眼に、全く別な氣疎い程平和の世界に見える。何處かで雷鳴がすると思ふ間に、銀の覆輪した高大な積雲の天柱が、濃い桔梗色の直上の天空を四方から押せばめて——豪雨になつた。

鑛山に一泊するのも面白い。試掘中とかで鑛山とはいへ、靜かに物寂びしい。事務所の建物は雪に傾きながらも、二階建のガツシリした作りだ。そこにはきつと、よく斯ういふ處に居さうな人物が控へてゐる——一應尊大で實は氣の毒な程謙抑な、機械的に訓練された、又訓練されやうとする、小さな英雄崇拜の人物が。誰でも餘りいゝ氣持はしないかも知れない、併し見下すやうな眼に映る時、い

かにも氣の毒な浮ばれないやうな氣がする。而して彼等の持つてゐる小さい「効用」を性しみながらも考へて思ひ直して慰める……併し可愛らしい人達だ、そして社會を遠く離れてゐる彼等を見ると、殊に寂しさうな氣がする！——社會から切棄てられることは彼等にとつては直ちに恥づべき死である。そしてこの廣大微妙なる四周の自然も彼等にとつて畢意何であらう……。

處で山の中に似合はない御馳走は君の前に供へられるだらう。後ではキット蓄音器などを出して慰めて呉れるだらう、そして種々通な援引を以て、世間といふ故郷の背景を以て、己の一身を守るが如く、しかも得意さうにも苦の無いさまだ。而してその濟ました顔面は、終始果敢ない「見え」のヴェールを以て保護されてゐる。それを見聞きしながら苦勞性の人は、先刻——こんな寂しい山の中で嘸御退屈でせう——どうつかりマトモに慰問の意を述べたことを（或は彼等の自尊心を傷けやしなかつたかど）いくらか悔いるやうな氣がしたかも知れない。

## 七、小黒部の上流

小黒部の上流へ出掛けたのは、八月十日を過ぎた頃だ。雪が一日一日に少なくなる——と思ふと氣が氣でない。小黒部谷を渡つてから、林道を岐れて「小黒部鑛山道カネヤマ」といふのへ入ると、石楠花が蟠り巨きな五葉にさるのをがせが揺らめいて、細い山の背は木の根と落葉とで出来てゐるやうで、この邊に珍らしいふくよかに深い感を足の裏からも傳へて来る。「馬のコヌカミ」といふ處ださうだ。南平は小黒部の河原に近く、山毛櫨、櫨、七葉樹等の大木が、高く梢を連ねてゐて薄暗い。林を出ると一軒の小屋がある、のみが多いから近よらないやうにと警告される、鑛山へ働きに行く人達の常宿ださうだ。林道とこの道の分岐點に、古い草鞋が堆積してゐたのもこの人達のものだ。

實際この道を通る時、何處かで、彼等に遇はないことは無い位、上るもの下るもの始終だ。川下の

音澤、内山は固より、舟見から山崎、或はもつと遠い處からも、隊をなして働きにやつて来る。そして盆だとか村の祭禮だとかいふ時には下りて、それが濟むと又登るといふ風だ。男は重だが女も少しは居る。男でも未だ子供のやうな、色白のからだのキャシヤなのなども交つてゐる、こんなのは殊に痛々しい氣をさせる。皆靴やら行李やら色々な荷を嵩高に負つて、初めての者も多いと見えて、まだヤマは遠いかね——など、恐る々々聞いてゐるものもある。心無しに數百年の巨樹の露を浴び、常住に消えることのない高根の雪を踏んで——そして唯一筋にあの鑛山指して働きに行く。

北の谷と中の谷とが、本流（興左右衛門谷）と落合ふところから、道は水に即いて、足に一しほの傾斜を感じる。（毛勝へ登るには此處から分れて、時早く雪の多い頃は中の谷から、それで無ければ草のキレイな屋根のある北の谷から登るのがいゝといふ話だ）。大抜け、小抜けなど、新らしい崩壊が兩側からこの谷を吹き荒らして、心の白けるやうな粗雑な殺伐な景色を作つてゐる。處々時代を経た切り崖が苔臭い水に臨んでゐるやうな、渾然とした景色の處もあるが、之は寧ろ狭小な部分だ。變動の激しい北方の荒い氣候の中に、恐ろしく急な頭勝ちの最早や大分組織の緩んだやうな峯が、この峻直な谷に臨んで立つてゐるのだから、どうもむづかしい處だ。細くとも去年から道が出来たから、前のやうに谷底を綱に絶る必要は無くなつたのださうだ。

谷の半ばから雪は始まつて、峯まで連なつてゐる。支谷は皆雪だ、白兀、赤兀皆細い堅樋のやうな峽間に、雪が餘りの傾斜に處々すつて、コツバを積んだやうに懸つてゐる——但しこの景色は皆全く頭の上に在つて、峽口が狭く通る足元は危いから、ウツカリ過ぎれば一步にして早や影も失くなつてしまふ。

雪溪が大窓と劔澤界の方へと二筋に岐れる處に小屋場がある、そこに十日許り滞留した。『大窓』とはうまい名をつけたものだ、この何處を見ても山の蓋ひかぶさつて来るやうな、嚴重な目隠しを圍ら

したやうな迷路の奥に、唯この谷の上丈けが、ガクリとU字形に彫り抜かれて、貴い空の光りを導いてゐる。その窓の下から本谷かけて足もと迄、唯一條の雪の急流——むしろ瀑布だ、それが高空の光りを反射するから、谷は深いのみならず又甚だ高い感がする。

大雪溪の兩側は惨忍に皮肉を掻き取られ、抉り取られ、むしり取られたやうな、血だらけになつたやうな山の骨核の累層だ、その真唯中を割つて落ちる氷雪は全く流動するやうに見える。盛り上つて中高に脚らんだかと思ふと、搾れるやうにドツとなだれ落ち、一溜りして渦まくかと思ふ間もなく又一舉に溢れて落下する。その間には支谷が左右から合流して、流れと流れがイガミ合ひ縋ひ交り、全體が固く而かも婉曲すること蛇體のやうに、自由な微妙な實に自然なうねり方をしてゐる。その冷徹にして嚴刻なる氷雪の大音楽！ 厚さ數丈長さ半里に餘る氷雪の凝晶體は、その表面に刻印する錯綜して紛亂せざる靈的線條を機縁として、忽然無邊際空に響鳴する一大樂音に化成する。

しかし日が一度直射する時には、岩の肌は暗く慘ましく照り出し、雪は一齊に輝やいて、面を向くべくもない。

一方の雪溪を登ると中途に鑛山がある——輝水鉆を出す小黒部鑛山。ひどい建物だ、小さな板屋や藁小屋が二三軒だ。上には大窓から劔の方へ續く岩山が大入道の頭をのし掛けて居る。全くガリガリな絶大の岩窟だ、大刀で切つ殺いだやうな處、鋭鑿で抉つたやうなところ、力が支離して裂壊しやうとするのを、堅缺のたがでピツシリと締め付けたやうな風だ。

この山とこの雪とのあはひに、よく見ると、鑛山といふ建物がショボリと立つて居り、更によく見ると、蟻のやうな人がそこを出たり入つたりうごめいてゐるのだ。時にはこの無氣味な山の何處かで、火薬の音がする。イヤな音だ、少しでも山を壊すと思へばいゝ氣持はしない。併し如何にも頼りない聲だ、大きなものに壓倒されて、自滅しさうな聲だ、それで大して氣になる程のことは無い。騒々し

いといへば騒々しいが、コソコソとしたものだ。

騒々しいといつたら、この邊の山水は山水自身實に騒々しいといつてよからう。岩は時ならないのに獨りで崩れ落ちる、雪塊も何時とも知れず割れ落ちて山を轟かす。しかし耳に聞える聲ばかりでは無い、自體山そのものがその生成による性質が、古い迸發岩に新火山岩が割り込んで接觸炸裂した爲めであらう、何となしに一體が錯落紛糾して、力の均勢が安固でなく、八分に破れて僅かに二分に繋がつて居る様な、重力の落ち方が多岐で支點が宙に迷つて居るやうな、一種動搖擾亂を暗示する騒々しい感じがするのだ。鑛山などは——こんな處にキツト鑛脈があり鑛山がある——そのあはひへもぐり込んで、何か猿の人真似に調子を合はしてゐるに過ぎない、——決して偶然ではない。

此の火薬の音と共に、夜そこにつけた燈火が、晴れた晩大蓮華に居た時、黒部の大谷を隔て、劍の麓に見えたことがあつた。自然の忠實にして寛大なる驚ろく可きだ。その音はしり切れ蜻蛉で、その燈火は思つたより大きかつたものゝ、甚だ生氣に乏しい赤色に見えたが。

小舎は兩雪溪會合する所に臨んだ山坡に立てられて、薪は豊かに、水も近間に清冽な岩清水が落ちるし、風は背山に遮ぎられて當らず、地盤がアツ（岩塊の堆積せるところ）だから雨水は侵さず、味のいゝ露は雪解の後に生ひ伸びて、野宿には極都合のいゝ處だ。而かも前は本谷の雪溪を見下ろし、上手に大窓を仰ぐ。

朝起きるといつも先づ大窓を仰ぐ。「窓が暗い」と天氣は屹度駄目だ。そんな時は必ず、暗い粘り氣のある雲が糸を曳いて窓の上部から段々と兩側の仄山へ搦み付きながら大雪溪の上をおりて來る、後にはきつと雨になる。

晴れた大窓の朝！ 窓の空は碧藍が濃厚にして而かも甚だ明るい。大雪溪は上部先づ瑞々しい偏光に照り出す。兩崖はボキボキ折れるやうな縦横の直線の皴が斜に照らされて愈々固く、嚴しく、逆立

つて、岩沙の堤防も樺の簇生する崖岬も、等しく抉り出され剝ぎ出されたやうに明劃だ。痛いくらゐに精刻だ。

雪は山にギユツと填まつてゐる、殻につまつた海蝦の肉のやうに。その互に界する線は、互ひに角突き合ひ、犇めき合ひつゝ奔下してゐる。雪は刻々に光に浸つて、岩を刺し空を射るやうに輝き出す。光りの瀾漫した白雲は窓の背から昇つては、天心に消える。そこには卷雲の鱗が徐かに東の方へ移りつゝある。光りは固より明らかだ、而かして影も亦瞭らかだ。一點の曖昧模稜も跡を止めない。天地との界するところに初めて顯はるゝ景色だ。

併しこの間毎日毎日悪い天氣ばかり續いて、いゝ日は三日許りしかなかつた。時々この大窓の雪の上に子子子よりも未だ小さな黒點が見えることがある、一寸動くやうには見えないが、鑛山の人達が早月川へ乗り越して、伊折の村へ往つたり來たりするのださうだ。鑛石を背負ひ出す、食料を運び上げる、いはゞ鑛山の大動脈だ、その爲めに雪の上に足形を伐り、手よりに鋼線が張つてあるといふ。併し斯うして少し離れて見ればそんなものは全く眼に入らない、有るも無いも同じことだ。又現に雨の後登つて見たら、足形は洗ひ去られて、殘雪固有の龜甲形の波に紛れて分からなくなり、鋼線などは主のない蜘蛛の巢の風に吹かれて散るやうに、千切れ千切れになつてフヨフヨと引かゝつてゐるのを見た。

## 八、仙人の湯

一度「仙人の湯」へ遊んだことを語らうか。これも黒部谷に多い無人の温泉——日となく夜となく冥暗の地下から、湧いては流れ湧いては流れるに任してある、貴い不思議な温泉の一つである。而してその中でも一七〇〇米突といふ高處に在つて、地圖で見ても一寸形勢の想像がつかない。しかし古

くから附近の山間には聞えた名湯ださうだ。立山々下や黒部谷の獵夫などの話しでは、元は遠近から浴客が山を越え谷を傳つて訪ねて來たものださうで、或時などは片貝谷の鳥尻といふところの某々等が、ブナ倉谷からこの小黒部へ越える立派な山道を開いて、牛なども通ひ、温泉には宿屋が立つて石壘の浴槽が出来て居たものだといふ。尤も之は間もなく放棄されて全く荒廢してしまつたさうだ。さうありさうな事だ。そして今は又その昔のさまに返つてゐる——その仙人の湯！

その名を聞いたばかりで心を惹かれるものがある。地圖を見て愈々引き付けられるやうな氣がする。大蓮華から眺めるに及んで直ぐにも行き度い氣がした。その時助七に教へられて見ると、黒部大峡谷を隔て、望む劔岳の直下仙人澤の源頭雪に蓋はれるあたりに、少しく赭岩の露出するところ、微かな白いものが認められた。あれがその温泉の畑だといふ、何だか遽かに信じられないやうな氣がした。見るうちその白いものは少しく薄らぐかと思ふと又濃くなる、そして、搖曳する更に又一團が湧出する。全くそれに違ひなかつた。

大蓮華に遊ぶ登山客は、殆んどその眺望の中心ともいふ可き立山の大山脈を望む時、その冷岩熱岩を蔽ふて一團とする盛んな氷雪の冷光に驚嘆する側ら、目を移してその側待山の一つ、劔の北から黒部の谷底へ向つて派出された仙人山の胸間、二條三條の雪溪が仙人澤へ消えやうとする南岸に眼を注がれるならば、それが氣温の高い日又は一日でも日中ならば赤味を帯びた岩壁の邊にやゝ微かに、もし又冴えた寒冷の日若くは早朝或は夕暮ならば小さいながら明らかに、白烟の渦まき昇るのを認めらるゝであらう。そしてこの寒冷な氷塊の腔裏に、今猶斯くの如き熱氣が在つて迸るのを、あたり見て、今更の如く悠遠なる微妙なる神秘なる……造化の規模に痛感することが出来るであらう。

小雨の降つては歇み、歇んでは降る日だつた、靜かにうるんだ山氣の身に泌みる日だつた。杖一本持つて、大窓の小舎から、雪溪の固い波の上を一足一足拾つて登つて行くと、薄い霧の中からせにと

りが頻りに鳴く、駒鳥も一聲二聲叫ぶ。皆清らかに光つた聲だ。そして妙に寂しい聲だ。雪の果ての峯を乗り越えると、眼下に「池の平」はある。

一面の雪田から搾れた水であらう、大小七八ツの優しい形に湛えられて、若やかな草間にそつと置かれてある。そのおもては霧をうつつして、月のやうな光りに静かに静かに照つてゐる。驚ろいたのはその岸邊に地均しくた所があつて、助七の話しては此處へ鑛山の「飯場」が立つのだといふ。どう考へても似合はない、何だか建ちさうもない氣がするが、思ひ切つたことをやるものだ。この水を遣ふのだらうな、こゝらもキタナクしてしまふのだらうな——と念を押すやうに呟くと、助七は勿論といつたやうな顔をした。水はそばへ寄つて見れば餘りキレイでもない、岸には藻が茂つて、さんせう魚が泳いでゐる、之にも飯場の建つのが氣の毒でならなかつた。

濡れた岩塊が青草の中に、どつぶりと紫をにじましてゐるのが美しい。その間に道を探して仙人山の肩へ登る。この間魚津の人とか入りに入りに來たさうだし、鑛山の人も行くことがあるかして、かなりい道がついてゐる。足の底の方から遙かに山を顛はすやうな響が傳はつて來るので、南方一面に汾湧する白霧の裡に、劍澤の流れてゐるのが知れる。近くには小窓の雪溪の一部が、今にも落ちやしないかと思ふやうに、又頭上には黒部別山の鈍頭がボンヤリと、その霧の隙に隠したけれども、眼界を己れ一個に吸収すべき劍岳に至つては、フツリと眼前の世界から絶縁して、あるか無いかもわからない。

仙人山の肩は流石に高いから偃松がある、偃松も七竈も樺もしどゞに露を宿してゐる。廣い草野には兎の道が縦横についてゐる。見る限りのチングルマはやゝ盛りが過ぎた、中に帯のやうに咲き始めのが續いてゐるのは、此の頃迄雪のあつたことを真正直に語つてゐる。

岩や灌木の根を厚く蔽ふ苔や羊齒の根へ、浸み込んで溢れ、溢れては又浸み込む水を掬んで、暗

い仙人谷の源頭を雪川へ下りる。白い固い雪の流れに乗つて、白い柔い霧の深みへ下りて行く。その深みには何か不可思議なものゝ潜んでゐる豫覺がある。

雪の上には所々熊の糞がある、或處には岳雀が一羽落ちて死んでゐた。取り上げて見ると、固く眼をこぢて足を縮め、羽はバラバラに荒れてゐる。二三日前の風雨の時であらう。嚴酷なる自然の力の格闘をしのばせる。又そつと雪の波の底へ藏めた——冷たい、しかし最も落つた墓場だ。

左右から大小の雪溪が會合すると間もなく霧が薄れて、下に烟を吐く山腹が顯はれた、湯へ來たのだ。花崗岩の錆色に莓爛して塊になつたり砂泥になつたりした處を、匍ひ上つて烟の側へ來る。茅葺の小舎が一軒立つてゐる。この間來た人々の遺物であらう、竈をしかけた跡などもある。四邊は一面に花崗岩の爛れた荒地で、唯薄のみがところどころ蓬々と髪を亂したやうに茂つてゐる。その處々から小流れになつて落ちて來る湯を受けて、形ばかりの湯壺が二つ少し離れて出來てゐる。何れも小さくて淺いから、一方に助七がはいり一方に自分が入ることにする。

雨のひまを見て小舎に衣服をぬぎ捨てゝ行く。湯槽は岩塊と沙砂で築いてあつて、澱んだ硫黄の華が黄白く塗つたやうに着いてゐる。湯が少ないから、一方の大きな花崗岩塊の一端に頭をもたせて、丁度槽一杯に身を伸ばすと具合よく貴い湯に包まれる。温度は少しぬるい方だからそのまゝヂツと仰むけに身を横たへてゐると、毛穴の一つ一つから徐かに快く湯の泌みてる感がする。一度むらむらと湧き亂れたよどみは又落つてソツと身の上を蔽つてゐる。

そのまゝ眼を舉げて外界を見る、近くの岩のはざまから噴き上げる白烟の中に、近い山の端に茂る樺が影繪のやうに出たり消えたりする。谷の一方は仙人山の古びた幾條の縦谷を穿つた大斜面に、樺や榛の大木が簇生するところ、雲が長い裾を引いてその間を舞ひ歩いてゐる。仙人谷の末は半開きの扇なりになつて、黒部の本谷を隔てゝ大蓮華嶺、祖父谷の源頭か、暗い雲の垂幕に半ば蔽はれて、

昔紫に深々と横たはつてゐる。雪もものうく、臉を合はしてゐるらしい。

湯の流れは絶えず浴槽へ注いで、徐かに緩やかに滑らかに全身の肌を撫で、又岩間へ溢れてゆく。絶えず、實に絶えず、——どんな不知の深みから、どんな不測の道を通つてこゝへは湧いて來るのだらう——この廣大無限のものゝ片鱗！ 總て、全く總てが聲をひそめて極めて靜かだ——しかも肅々として物の進行するけは、ひがある！ 徐かに鼓動する自分の身體も、無論その中へ渾融せられつつ。

行儀よく五體が湯槽の中へ藏められたところは、そゝろに古代埃及の木乃伊を想ひ起させる。長い湯からあがつて身體を拭へば、全身の皮膚はキラキラと銀光を放つ。思はず手をとめてマシマシと見とれる。分解されて澱んだ白雲母の細片は、荒唐にして典麗なる原始的の裝飾を施して呉れる。太古草昧の感が四邊に磅礴する。

ゆるゆる歩いて霧の中を暮れ方又小黒部の小舎一歸つた。道のりは一里位しか無いやうだ。温泉は猶この外に小黒部の下流にも一つある、之も元は浴舎が立つて人が來たものだが、やはり一年出水の爲めに荒されて、湧出口も變つたさうだ。又餓鬼谷の下流——餓鬼の田圃の直下にもあつて、此處は視出量も多く盛んなものだといふ。その外小さいのを數へれば、どの位あるか分らないだらう。温泉の多いセイばかりでもあるまいが、黒部谷には一體蛇が多い。殊に蝮が中々居る。蝮はアヅに棲むものださうだ、よく道端の石の上など日のポツカリと渦まいてゐるやうなところにどぐろを巻いてゐる。赤いのだと黒いのだあるが、何れも龜甲を崩したやうなむらむら斑紋があつて、物々しい様子だ。そして人を見ても中々逃げない、首を擡げてヂツと睨むやうにしてゐる。それだから我々には一寸氣が付かないことが多いが、助七などはそこへ行くと實に爛眼である。忽ち棒切で一發に頭を碎いて、それから腰の鉈で尾を斷ち切る——こゝに毒があるといつて必ずさうする。ピクピクしてゐる奴

を口の處から二つに裂く、すると生氣の強い青みのある劇しい液がビシビシいつて飛び散る。とてもまごにも見られない位だ。そして腸の中からゐ(膽囊)を搜し出す、紫黒い豆のやうな塊だ。あとは血水の垂れるのを杖にかけてポンと抛つてしまふ。

何か呑んでゐる奴は「ゐが無い」から、猶更無限雜作に瞬間に處分されてしまふ。蝮の居るのを知らずに通ると、蝮は眼の無い奴だと言つて笑ふさうだ——蝮は見たら殺さなければならぬものだ、と助七などは言つてゐる。ヤハリどうも——尤もだと思つた。誤つて踏みつけて噛まれる者も随分あるさうだ。

ゐは藥になるといつて大切にする、殊に眼藥としていゝさうだ。肉もよく食ふ、中々うまいさうだ。蝮は一體餘り高い處には居ないやうだが、自分が見たのでは南越の頂上一七〇〇米突位の所にも居た。地盤がアゾで草の茂つてゐる所を通る時は、一寸先登に立つのは躊躇される。殊に山から歸りがけに、足袋の底の破れてゐる時などは、いかにも心持がわるい。

### 九、鐘釣温泉—夏より秋にかけて

夏の山間で落着けるところは、やはり温泉だ。この大地の至深から地表に溢れ出る、熱い不可思議な流動體を介して、人間がまるごと自然に密着する。彼の使命は、自然の博大至甚なる愛の涙もろい一面を、そのまゝ眼前に流露させるところに存する。彼は斯くして長い暗黒の旅を経て、こゝにもその惠深い姿を顯はしてゐるのだ。温泉は人にはいらなければならないし、人は温泉にはいらなければならない。

祖母谷温泉が無人になつてから、この鐘釣が黒部谷では人のまゐる温泉の「奥の院」になつてゐる。その資格は充分ある。浴客は流石峻しい道中に僻易して、少し谷の奥過ぎると思ふし、聖純なる自然

の姿に慕ひ寄る登山の客は、少し下流過ぎるなどと思ふ。併し先づ調和のとれたところだ。それだけ深山の氣と俗界の臭とが、妙に交り合つてゐる、位置は谷の中流——黒部大峽谷の中心に近いところに在るが、海拔高距は僅かに四百餘米突だ——如何に谷の深いかゝわかる——山は迫つて夏も雪を藏してゐるが、一路は先づ難なく半日程にして村屋へ通ずる。

山の迫つてゐること——一寸想像の外だ——が如何にも山の深いことを思はせる。中腹で三町とはあるまい。參謀本部測量員の測つたのでは、温泉から前山の頂迄凡そ八百米突、傾斜四十六度三十分といふことだつたが。夏は随分暑い、蚊もゐる、人を刺す双翅類の惡蟲も四五種はゐる。併し朝晩は流石に涼しい、そしてその朝夕が甚が長い。

朝日は七時頃、峽谷の側山の凹處々々から斜に射し込んで来て、モクモクと木の茂つて山の傾斜を浮き出させるが、前山の頂を越えて宿の庇を湧くのは九時頃だ。まして谷底に達するのは既に十時を過ぎた時分だ。午後二時といへば、日はもう後山に隠れる、光りは前山の腹から胸と段々に移つて行く。忽ち最後の日が熟した果物のやうな色に峯頭に榮える時分には、方々に燈火がついて、谷底は夜だ。

それだけ氣象は彈力の強いものだ。晴れた日など——影が濃い丈け光りは際やかに激しい、一度光りに觸れるや、今迄薄い藍色のヴェールを被つてゐた流水は一舉に引火して、一時全く光りの激動と化してしまふ。しかし夏の谷間は曇り勝ちだ、一塊の雲が明り窓のやうな谷の上空を掩へば、狭い谷底は忽ち日の目を見られないことになる。谷間の空氣は光りから蔭、冷から熱と激しく脈動する。殊に南風が多量の電氣を含んだ雲を驅つて、谷を閉塞する時などは、身體がベトベトに膨れ上るやうになつて、頭の心がズキズキ痛んで息苦しい。併しその跡はキツト北風が逆に谷の下手から吹き上げて来て、一切の混迷したものを拭ひ去り、谷間はツキ抜けたやうに清爽の冷氣に洗はれる。人は着物を

一枚重ねて秋の近づいたことを感ずる。

時ならないに急に谷水が濁つて押出して來ることがある。水聲のうちに耳のセイカ、遠雷かと思ふやうなものゝ聞えることもある。上流は雨だなど思ふ。氣味の悪い冷氣が水と共に吹いて過ぎる。さうかと思へば豪雨が急に注いで來て、處々の空谷まで、急流や瀑布を現出するのに、谷水はやはりいつもと變らず澄んでゐる時もある、この天象の變化につれて、人の心も明暗昇沈の間を盪漾する。人は絶えず細長い上空を仰いで、何と云ひ合つてゐる。挨拶ばかりでは無い。

浴客の多いのはヤハリ夏だ。多い時は三百人位はゐる。薪を運ぶ人、火を燃す人、飯を炊くもの、汗を煮るもの、阪道を浴湯へ通ふ人も手ブラのは少ない、手桶を提げる、鐵瓶をさげる、鍋をさげる、洗物を持つ。皆休息のあり餘るやうな時間に、簡単な生活を出來る丈け豊富にしやうとして、樂しうに頻りに他愛ないまゝごに耽つてゐる………。

朝は宿は山中でありながら、水に不自由だから、谷水に嗽ぐ。水は思つた程冷たくはない、雪には遠し川の中に温泉が湧くにもよるだらう。朝日は華やかに上流の山坡に映つて、徐かに金色の楔を打ち込んで來るが、水は纔かに上空の光りを泛べて、まだ夜のまゝに残つた紫色の谷間を劈いで走つてゐる。温泉は朝が一番清らかに瑞々しい、そして生々しく角立つて、刺戟が強い。それに湧き出た許りの熱いのを、口づけに飲むと、カラになつた腹につき通つて、内外から精氣が身體中にしみ透る。いかにもからだに利くやうな氣がするが、それ丈け疲れるから、うっかり長湯をすると、一日何かするのがものうくなる。朝は浴客も一體に静かだ。

晝近く、谷間の空氣が處々から日光に射透されて、洞窟のやうに引隠れて浴場の邊も、影が引かれるやうに去ると、湯は一時に底迄照らし出される、少し深いところは一種の冴えた青味を帯びて見える、輝く波は底のキラメク眞砂にゆらゆらと五彩の影を走らす。そして自分の身體を見て、誰でも今



(筆氏 郎太 清 村 中)

(く仰を山貫百りよ谷部黒)山む臨に谷峽



更らのやうに、その美しいのに驚ろくにちがひない。そこに何の妨げるものもなく、直ちに鮮かな血の流れがみとめられる。そして日に向つた側からは身體も手拭も何もかも皆虹のやうな彩光を放つ。一切が明白にして、而かも一種靈幽の氣に満ちてゐる。光と熱に酔つて目がくらむやうになるから、とても長く入つては居られない。

晝間はそれに、蟲が多い、大きな牛蠅が来る、小さな虻のやうなものも二種ばかり来る。うつかりしてゐると忽ちやられる。驚ろく程痛い、キリツと急激にくる。しかし喰ひ付くと中々離れないから、容易く叩き殺される。仰のけに湯の中へ落ちて、そのまま流れてゆく。よく見ると眼など黄緑色の燦として輝やいた美しいものだ。たゞし刺された跡は別に脹れたりするやうなことは無い。

晝間はどうかすると人が居ず、浴場は唯光りに満ちて森閑としてゐることがある。そんな時、よく天蛾の一種(ほうじやくの類)が入りに來ることがある。翅の強い彼はツーツと舞ひ下りて來て、胸から腹の方へかけて、幾度か湯へ打ちつけるやうにして、又何處ともなく飛び去る。何をするのかよくわからないが、飲む丈けならば尾の方迄浸けるわけはなさうなものだ。そして一體、湯壺は湧き出した許りの熱い方と、それを湛へた適温の方と、あらまし二つに分れてゐるのだが、彼が「は入る」のはいつもその適温の方に限る、決して熱い方へ入るのを見たことが無い。

蛾とふたり真晝の温泉に逢ひにけり。

夕は早く來る。そして浴客の一羣るのはこの頃だ。多い時は温壺は、身體と身體とすれ合ふやうになる。あたりの岩といふ岩には衣服がぬいであり、中にはゴザを敷いて、湯につかれた身體を横たへてゐるものもある。若者などで、川の中へ孤立してゐる小屋のやうな大岩の頂へ上つて、逆立ちなどをやるものもある。熱せられた赤裸々の肉體から放つ人の氣が、湯の瘴氣と共に、この冷峭寂寥の大峽谷の一部を、異様に濃厚に鎖してゐる。

運動する肉體の美はしさ、肉體の美しさ柔らかさは、この嚴酷な風物を背景にして、愈々鮮やかに躍動する。そしてその肉體の藏する心！ 運命の喜劇悲劇はこの濃密なる人の氣の綾の中に、その一角を曝露する。それを手繰れば、どんなものが現はれるか分らない。そして目を外せば、それは湯の烟と共に、何處とも知れぬ大空のうちに放散してしまふのであらう。

夜は、晴れた時は細い空に銀河が横たはる。寧ろ空全體が銀河のやうなものだ。黒い山の端を射抜いて光るのもある。織女は頭の上にあり、谷の末には北極星が見える。月の夜は又いゝ、山はだんだらの大瀧縞に染め出される。そして側壁が照らされる時は、一種辛いやうな光りを反射する。河原の石もしらしらと照る。宿の前の細長い通路が廣々と見え、一本立ちの大樫が簾目の影を落してゐる。その銀光の中に立つと、湯上りの頬にそつと冷たい手を當てられる……………。

併し夜も空は雲の鎖す時が多い。水の音は夜に入つて倍加するやうだ。あらゆる亂雑な音響を緬ひ固めた、のぶとい聲だ。その間にまざれもせず優しい細い聲がするのは湧き出す湯のだ。偶々上上の岩壁から清水か露か、湯の上へ落ちて、ひそやかな音を立てる。小さな角燈が一つ岩の上へ灯つて、湯の烟が羅のやうに見え、鈍い湯のうねりや岩壁のところどころが、微かにまろやかに見える許りだ。偶々見える人の影も、陰が深くて、顯はれるところは、何か大きなものゝ一部のやうに見える。湯壺を蔽ふ、アーチ形の岩壁も、無暗に背伸びをして、暗の何處迄衝き入つてゐるのか、わからない氣がする。ひる間とはまるで違つて、妖しげにも不思議な景色だ。どうしても神仙譚様の世界に住するやうな氣がする。

殊に闇の夜など晚く一人入つてゐると、水音は時に脅かすやうな高調子を出す、大地のシンの方から響けるやうな。踵から頭へ来る。一度襲はれた心には、音は愈々高くなるやうな氣がする。湧き出る湯のやさ音迄、何かを強ひてひそめてゐるやうに思はれる。何か身體からぬけ出て、闇の中を彷徨

するものがある。忽ち谷水が増え、湯も溢れて、今にもこの岩壁を蔽ひ被せ、暗の谷間に漲つて、何もかも一切没せられ押流されてしまふのではあるまいかといふやうな、攫はれたやうな氣になる。

浴客は大概この近在の人達だから、八月半ば、村々の盆休みには却て人は少なくなるが、その前後は一番温泉の賑ふ時だ。村中の若い男女が總出で來たと思ふやうな團體もある。若い女達の中には赤兒を背負つて來るのも随分ある。鑛山へ往復する人々も落ち合つて、長屋の隅々、臺所、豆腐を作る背戸の山腹の小舎、納屋の屋根裏、藥師堂の神前迄も人で充滿する。そんな時は夜などよく藥師堂の前の庭先きで「盆踊り」が幾組も始まる、いかにも鄙びた調子だ、小原節といふのが多い。雨でも降ると部屋の中でもやる。蔭で聞けば手拍子が水音を偲いて響く、出て見ると、深い闇の底に薄白い手拭が旋轉する。若い男どもは相撲をこるものもある。時には紋の付いた着物をきた祭文語りが來て、廣い部屋に人を集める……………。

ほがらかな日が續く。谷間の空氣が段々乾燥して透徹して來る。空と山の境界が、おのづとカツキリして、山の針葉樹は愈尖り、影は紫を帯びて、彫り付けられる。濶葉樹の葉はいつとなく淡く黄味を潮して來る蜻蛉が群をなして谷の中空を飛廻る。のした翅が鋭い光りを顛動させる。蟲の聲が益々激しくなる。スイツチヨなどは不意に部屋の中の耳元で鳴き出す。鳥は一體この谷間は少ない方らしいが、ガツチ(かけす)や百舌鳥の聲が耳立つ。物の乾き收縮する時に放つ一種香はしい、軽くして鋭い、物のかほりに満ちて來る、——萬物の伸展する春から夏へかけての、あの重苦しい水氣のありキれるやうな匂ひとは全く反對な——甚だしい例をひけば便所の臭氣迄がさうだ。

斯くて色も光りも音も香も、皆身に泌みるやうになつて來る。秋の來たことを感じ始める。それにその頃は天候が甚だ變じ易い。殊に見える空が狭いから、變化は猶更ら急激だ。少し雲行きが早いなと思ふと、一瞬の隙に、空の色は一變する、そして雨は山に沿つて注いで來る。雨の中に雲が湧く、

湧くともなしに湧く、そして互に手と手をつないで、山へ吸ひ付くやうにして匍ひ廻り始める。それで山は思ひもがけない處から、幾段にも仕切られて、平常は一氣に壁立したやうな前山も、甚だ重疊した奥深いものになる。そしてその組立ては瞬間毎に變轉する、まるで魔法どしか思はれない。湯に入る人は菅笠をかぶる。笠に當りの強いのは、蔽ひかゝつた楓の搖り落す雫だ。

少し強い降りが續くなと思ふ時分には、峡谷の側壁に並列した、大小の空谷は、皆それぞれの瀑布をかける。いつも上からはよく見えない川が、木の間に黃陶した水を盛り上げてゐる、上流も降つたと見える。雨に洗はれて怪しく光りながら衝立つてゐる源頭の間々を思ふ。物々しい感がそこらを立ちこめる。おのづから氣の昂るのを覺える。

浴場へ下りて見ると川はひどい惡相を呈してゐる。まるで巨大な一條の泥流だ。アクの強い滋味の激しい、有機物無機物の嫌なく、混濁し亂合した泥状の物質が、眼にも留まらない様な恐るべき速度で、谷一ぱいに引擦るやうに疾驅してゐる。底の岩石は小さいのは捲き込み、擦りつぶし、大きいのは衝き當つて乗り越えるから、流れの表面は褶曲山脈のやうな凹凸だらけだ。しかも重量が勝つてゐるから碎けて散らず、勢が強くなればなる程、既に固體に近くなつて、轟響許りか地心に徹るかと思ふばかり震ひうめく。

飛過ぎる速度の印象は辛ふじて、この固體に近い泥流の面の、眩くばかりの刹那刹那の變轉に認められる丈けた。その有るかと思へば無く、無いかと思へば有る、變轉不可測の無數の面は一齊に、之も濁つた低い空の光りを互ひに暗く苦く照り返してゐる。いつか引込まれるやうに見入つてゐた時分に、ハツと氣が着いた時は、顔は皺だらけになり、鼓動は激しく不規則になつて、心が重心を失つたやうなのに驚ろかされる。

こんな時は、湯は忽ち水嵩が増すにつれて入れなくなる。初め濁流の餘波は防波堤を越えてはいつ

て来る。温泉の流下を逆に妨げて、幅廣い波を押し寄せて来る。それで湯壺は急激に深さを増す。濁つた低温の湯は、腹から胸、胸から頭と打ち上げる。四面に満ちる轟音の中に、殊更ら際立つて、岩石と岩石の衝撃する音が始まる。冷たい波が眼の高さからうねつて来て、立つた膝頭がフツつき出すから、物好きな浴客も居たゝまらなくなる。

併しこんな悪變は長くは續かない。次第に泥流の色が褪せて、日の暮れる頃は、半ば透明な綠藍を帯びた水沫が、處々活火山の烟のやうに起つて、勢の過ぎ行くのばかりが感せられる。そんな跡は湯壺は岩沙で淺く埋められてゐるのを見出す。灰色の粘り氣のある程細緻な沙がフツクツと激んでゐる、それを浚ふと下から段々粗い岩塊が出て来る……………。

水と共に中々強い風が吹く。南風と北風とが、眞向に谷の中を吹き下し吹き上げる、平生はヂツと緩やかに凝集したやうな谷間の空氣は、急に勁く筋張つて、谷を押し擴げるやうに急流する。水に臨んで枝を翳した大木などは、逆に崖腹に押付けられて、辛く岩へ喰ひ込んだ根を、たよりに、血の氣の失せたやうな蒼白の裏葉をヒラ〜させて叫んでゐる。無理に引きちぎられた青葉が、落ちるのでもなく揚がるのでもなく、眼には見えない風の筋肉——勢のすぢ道——の間を、それを暗示しつゝ閃めくやうに不規則に繞つて、行衛定めず舞ひ去り舞ひ來るものもある。

折々急雷のやうな響が起る。角目立つたイライラしい聲が急に起り、急に斷絶する。澤や崖腹から、岩がおのじと動き出して、河原へ落下するのである。夜などは音が最高調から急斷すると同時に、蒼味と赤味を鮮かに含んだ鋭い火花が、バツと飛散するのが見える。

斯くして繰返される、あらゆる動搖の、一度は一度より、動より静へ、熱より冷への、争ひ難い、微妙なる推移の感を持ち來すのである。而してこれ等自然の動搖につれて浴客も又動搖する。一時の騒がしさはいつの間にか無くなつて、大分静かになつた浴場を樂しんでゐる富山あたりの富祐な家族

連れの湯治客の幾組かを残すに過ぎない。トヂ糸の新らしい、ふくよかなドテラの色が眼に付く。長い間山に入つてゐた、山林巡視の役人連中なども歸つて行くと思へて、隣室で採つて来たマムシを火鉢で焼きながら、酒盛りなどを始めるものもある。高聲で笑ひ興じてゐるかと思ふと、妙に沈んだ話聲になる。

—— 僕などはもう古くて駄目だ、若い人がドン／＼出て来るからナア。

—— そんなことはありません。

—— さういへば君などは未だ若いが随分廻り遠い學問をしたものですナ、惜しいものだ。

—— …… どうも好きだつたものですから……………

……………

……………

息苦しいやうな部屋から外へ出ると、眞黒な山は星空を押し狭めて、限りも知れず闇から闇へ、重しくも横たはつてゐる。巨大な溪聲はドウドウと小歌みもなく、永劫の響を傳へてゐる。そして四邊一面に、すゝしい蟲の聲がそれに磨きをかけるやうに、優しい伴奏を勤めてゐる。天地は實に何の迷もなく拘はりもなく、肅々と常住の進行を進行してゐるけいはいがある。

狭く仕切られた天の色も、日々に熱氣を失なつて、冷やかに冴えた藍色を帯びて来る。それを映してあらゆる物の影が一樣に冴えて寒く顫える。いつとなく山の瘴氣がどれた感がある。木の間に何となくスイて見えて、歸つて行く浴客の後ろ姿などが、今迄よりも遠く迄眺められる。桂の緑りが鮮やかに黄に變つて、空よりも明るくなる。そしてハラハラと落葉する。細道は岩が隠れて、桂はもとより、紅葉をも俟たずに散り始めた、大きな楓の葉や朴、橡、檜などの潤葉で蔽はれる。露を帯びた落葉の吐く、甘酸い一種非人界的な香が木の間に漂ふ。落葉は湯壺にも散り込む、上つた肌へ吸ひ付い

て離れないのもある。時に人氣の無い湯へ獨り漬かつてゐると、不意にボカンと湯に飛び込むものがある。ドングリだ、徐かに眞青な珠は浮き上つてくる。袴がとれた許りの痕が生白い。

狭い谷間は愈々激しく緊迫して、何もかも鮮やかさを増す。向山で不意にキア——！と赤兒の鳴聲に似てそれにしては激しく鋭ぎ過ぎる様な怪しい叫びを聞く。それから樹の枝などをベキ／＼折る音もする。猿だといふ。浴客の世話が暇になるので、時々若い者や豆腐を作るカミサンなどが背負梯子に籠をつけては山へ出掛ける。歸つて來ると、紫ばんだ山葡萄の房が累々と出ることもある。いろいろな初めて見るやうな菌が出ることもある。ネヅミタケ、コームケ、カワタケ、オヒヨウ、ブナモタセ、スバメタケ……………。

ブナモタセやハンノキモタセなどいふのは、いづれも椎茸に類した美しい、如何にも菌らしい形をした菌で味もいゝ、鼠タケは全く箒の肢を何本も束にしたやうな柔かくて弾力のある、少し無氣味な菌だ。雀タケも珍らしい、木耳キタクラ見たいだが扇に短かい柄をつけたやうなもので裏にはやはりひだがある、可愛らしい仔雀の羽を擴げた形に見えるのでその名を得たのであらう。オヒヨウに至つては、少しく物騒である、小さな願人坊主の頭のやうで、イヤに細い頭だ、薄黄ろいヒナヒナした皮の、腦天にポツポツと蒼い點がある。汁などへ入れて食べるが、輕くてブクブク浮いてゐる、齒應へも何もなく、味もソツケもない、泡沫の固まり見たやうなものだ。しかも少し成長し過ぎた奴は中から妙な粉が出て咽へ通らない……………。自然薯もどれる。岩のハザマに喰ひ込んでゐるのだから、一日かゝつて二三本と掘れないさうだ。見ると全くガリガリの膚目で、不規則な電光形に曲りくねつてゐる、併し擦り下すと、粘り氣が強く甘味が豊かで、とても平地に出來たのなどは比べものにならない。

變つた客が温泉を見舞ひ出す。刺子伴天を着て、肩に長大なヤスを擔いで來る。長さ二間半からある竹竿の先きに、鍍製の大きな巖丈な叉手が箒つてある、斜めに突き出た四本指の先きには、各々鋭

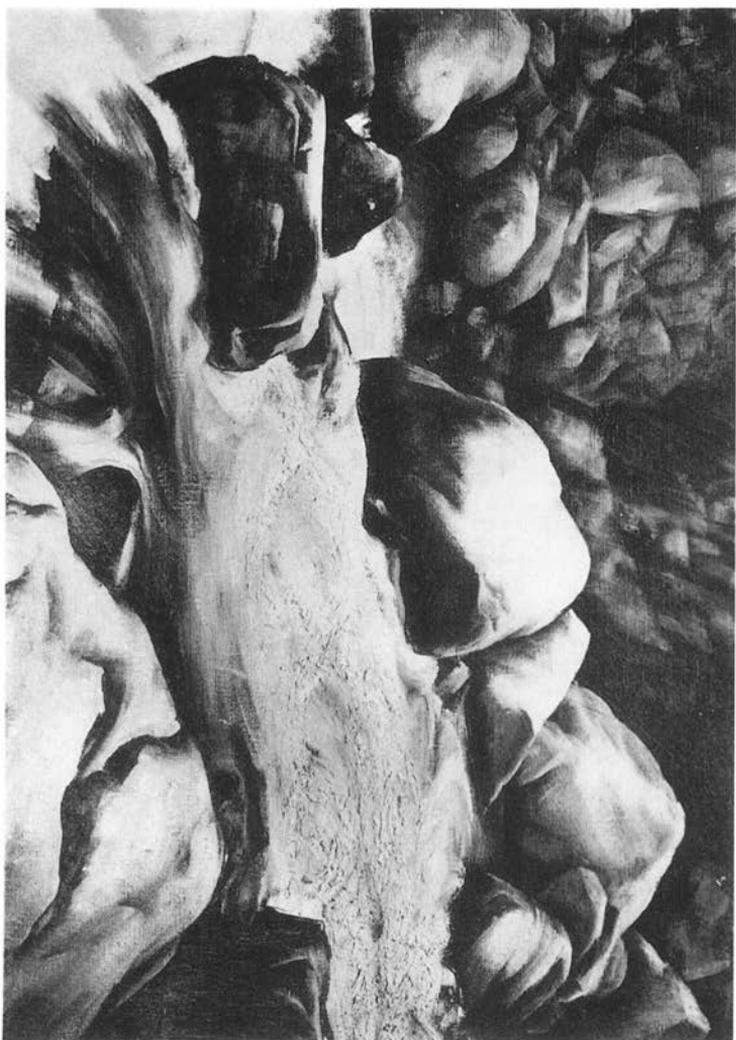
「返り」が付いてゐる。重さは一貫二三百はあるといふ。之が鱒突きの漁夫だ。秋風と共に、鱒がもう日本海からこの急流へ溯り始めたのだ。もう夏のうち、浴客が岩の上に一日坐り込んで、一匹二匹釣つて来た五六寸ではない。二三尺から大きいのは四尺に餘る。

釣橋の上などから教へられて眺めてると、この魚の上つてくるのが見える。白く碎ける急湍から蒼く渦巻く深潭へ、深潭から又急湍へ、大蛇の背のやうな黑影が、眼を掠めるやうにスツと過ぎて行く。夫の漁夫は大きな岩蔭などにひそんで、魚の影を斜に窺つて矢頃を計る。二間餘のヤスを、兩手で水平に頭の上一杯に差上げて走ると見るや、射るやうにヤスは投げられ、自分も勢に引かれて半ば水中に躍り込む。物々しい緊張の一瞬！

かくて上首尾の時は、輝く大鱗が河原へ引上げられる。水の抵抗を極度に避けた、幅の薄く細長い全身から、紫藍色の透明な鱗がヌラヌラ光つて、一重下から、鮮明な血紅色が斑をなして、あきらかに眼に滲む。惨々に破れた創口から血の匂ひと苔の香が妙に生々しく交り合つて、シンと身に泌みる。磨り上げた寶石も及ばないやうな卵の溢れて止まないのもある。

固よりこれ等の魚は、貴い産卵の役目を果しに、この急流に逆らつて遙々と上つて來るのだ。流れの少し勢を緩めた岸邊に、處々子供がカイボリでもした跡のやうな水の浅い處があるのが、この魚の産卵した場所ださうだ、雌はかういふ處を撰んで、先づ自分の尾で比較的細かい岩片を中流の方へと掃き出す、そこで浅い一つの溝が出来る、その底へ顯はれ出た新しい岩片の上へ卵を産みつけるのだといふ。それは古い岩片は皆薄く苔を被つてゐるので、卵がうまく附着しないからで、それと片寄せた古い岩片は堤防のやうになつて、水流を幾分か緩めて卵の流失を防ぐらしいといふことだ。

全く雌の中には尾がまるで骨が出る計りに擦り切れて、涙ぐまるゝまで痛々しいのがある。雄は又嘴が杓子のやうに或は筥のやうに擴大發達してゐるのが眼につく、これは何の爲めかわからないが、



(筆氏 耶太清村 中)

(部一の流上釣鐘川部黒) 底の谷峽



皆をいろに身振ひの出るのを止め得ない見物だ。這の激しい急谷と這の壯んな魚屬！想像に耐へたる夫の環境と夫の本能との關係！肅然たる生命の躍動！これ等の獲物は一部分は温泉で金に代へられる。生きてる奴を刺身にしたのなどは、淡紅の肉がゴリゴリして冴えた甘味が舌に徹する。

銃を肩にした獵夫も入り込んで来る。犬の鳴き聲が頻りに起る。獸も段々山の高みから、裾の方へと下りて來たと見える。その筈だ、山の柔草はどうに霜枯れて、食べられなくなつてしまつたらう、上流に覗く端山の頂さへ既に幾度か霜に見舞はれたと見えて、大分色づいて來たのだから。

洞然たる秋晴の朝、不歸谷の方角に軽い銃音が三發ばかり響くのを聞いた。暫らくして大勢掛りで運んで來たのを見ると熊だ、熊にしては少し無雜作過ぎると思つた。併し峻峻な山坡の難場から背負出すので、解體して來たから見る影もない有様だ。頼んで肉を分けて貰つた。その眞紅の鬼芥子の花が亂開したやうな大塊を、葱と一諸に煮ながら食ふと、その味は飽く迄豪宕だが、思ひもかけず豊脆のに驚ろく。山の地酒がその味に調和して、重々しい太々しい酔ひ心地だ、谷の轟音が無邊の夜雲を衝き抜いて、星斗の顯はれる快さがある。

猿の肉も折々膳に上る、これは味が軽くて、寧ろ鶏の肉に近い。その外木鼠やむさびなども獲れる。むじなは居るが中々獲れないさうだ。

十月に入つて日は眼に立つて短かくなる。心細くも遽だしい。上流の山坡の霜葉は日に日に爛れて、しみじみと片光線に照らし出されるのが肌寒い。宿の人々も湯を閉ぢて富山へ歸る日が近づく。それで、始終先に立つて山鼠のやうに眼まぐるしく働いてゐる宿のお婆さんは、一層に忙がはしげで、何かの取片付や後仕舞ひの手廻しに夢中になる。母屋丈け残して後は皆崩して疊んで、積み重ねて置くのだといふ。それに來年の用意に雪の下に圍つて置く味噌を炊くといふので、若者も夜中迄も寢ずに豆を煮たりつぶしたり働かせられる。

斯くして來年の春迄雪の下に埋もれる、この峽谷の絶底の一つ屋には、豆腐作りの中老夫婦が乳呑子と三人留守居をするのだといふ、——繩や草鞋に細工などをしつつ、その長い長い冬を、『冬』——それは此處では一年の大半である、そして『夜』はその一日の大半であるといふ……。

自分がこの惠深い谷間の湯を辭したのは、十月も半ばを過ぎて、湯を閉ぢる早や二三日といふ日だつた。身體の自由にならない、白髯の長い宿のお爺さんに別れを告げて、働き好きで氣輕なお婆さんや女中に、昨日の雨で出來たといふ道の崩壊まで見送られて、藍色の濃い山陰を一曲り一曲りと抜け出た。そして取次に顯はれる谷々の奥を久しぶりで見上げた時には、之が夏の初め谷に分け入つた時に見た、あの同じ谷間であらうとはとても信じ難い光景なのに驚ろかされた。

峯はさながら、一種華美にして沈鬱な、鮮麗にして而かも陰慘な、錦繡の衣を纏つて、低く實に低く結伽し跌座してゐる。そこに何等の動搖がない、靜閑の極だ。明刻の餘遠近を分たず、殆んど空間を絶してゐるかのやうだ。見てゐると何ともいへない或る幽妙な氣持に引き入れられる。有の至境にして又無に近い相がある。現世を超えて、不圖あの世を垣間見たやうな靈感に襲はれる……。

幾度  
踵を回らして上流を望んだらう。(大正四年稿、同六年加筆)

## 火 打 山 と 焼 山

大 島 永 明  
田 中 薰

同 行 目 黒 四 耶 君

大分登山の焦點が高度を減じ、其の範圍も擴大されて参りました、そこいらの低い山までが世の論議に上る様になり、日本アルプ

スに攀るばかりが登山ではないといふことが一般の輿論となつて参りましたのは、實に結構な事と存じます。

處が茲に比較的標高が高いにも拘らず餘り顧みられない山々があります。妙高火山帯に屬する諸山が恐らくそれでありませう。私は野尻湖等に參る度には非登つて見たいとの希望を抱いて居りながら實行するに至らないで居りました。處が丁度大島君は已に火打山登山の目的を以つて樞屋敷から焼山に登ること二回、而も、其の都度天候不良に妨げられて引き返された様な次第であつたので、今度行を共にすることとなつたのであります。(田中)

## 一、はしがき

妙高山の日本石の上に佇つて、近くは夫の外輪山を脚下に蹂躪し、日本海の烈風を双頬に受けて、七月下旬尙ほ残雪白き一鎖の山々の二千三四百米突を抜いて指願の中に逼るのを視る時、驚きと喜びとに胸の躍るのを禁じ得ない。

最も近いピラミッド型の秀峯は火打山(二四六三米)でその左に連る一降起は之を胴抜け(笹ヶ峯方面の呼稱)と稱し、深い鞍部を隔て、上高地から仰ぐ焼岳其儘の一塊が焼山(二四〇〇米)、稍尾根が南に廻つて夥しい残雪を其の尨大な胸に閃めかすのが裏金山(五萬方の一圖に二二三〇米とせる峯)、金山、天狗原山(二一九七米)の三峯である。

いつたい妙高山と云ふ様な人々に膾炙した山の頂に極めて近接して、此に劣らぬ高い峯々の一團が今尙ほ、處女の森を擁して、登山者を拒絶してゐるのは、一は交通の不便、二は標高の比較的低いところからでもあらうが、登山流行の今日、寧ろ不思議に思はれる次第である。

此の山々に就いては、曩に、山崎直方博士の妙高火山彙地質調査報文が震災豫防調査會から出で、本誌にも第六年三號の雜録欄に於て、高野幹事が「雨飾山、焼山、赤倉山に關する資料」として種々の消息を集められてあるが、未だ紀行文の様なものには本誌には出た事が無いと思ふ。

偶々今夏(大正六年)七月同好三人、二泊の小旅行にて此の峯々を縦走して見たところ、偃松もあ

る、高山植物も豊富で、残雪も多い、決して平凡でない、さう樂な山でも決してない。突兀たる巖崖あり、根曲竹の急斜面あり、崩壊あり、美しき沼澤地もあつて、東西僅か十里餘の間に、あらゆる山岳の變化を集めた感がある。芙蓉湖の畔、赤倉の温泉等に遊ぶついでとならば至極適當な登山地域であると思はれるので、見聞の儘を後遊の方々の御参考までに記す次第である。

此の記事と共に陸地測量部五萬分一圖を参照せられ度い。

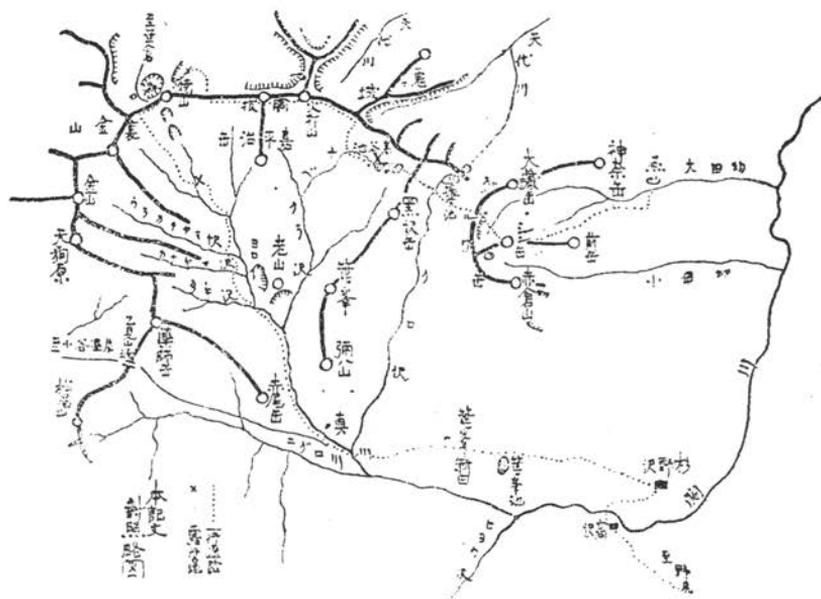
### 一、芙蓉湖の畔より

暑苦しい東都の黄塵を後に、水清き野尻湖の汀に來たのは七月十九日の未明であつた。靜かに眠る湖を俯瞰して起つ妙高、黒姫、飯綱の三山は、其の丈も三人姉妹の如く、朝靄の羅を纏つて端坐する。今し妙高の頂が曙光の一线に明け初めると、數分を置いて妹の二山が逐次顔を洗ふ。日も漸く高くなると、黒姫の裾懸けて、ポカリ〜と浮き立つ雲の、臆て集つて横雲となり、雲は横雲を誘つて上昇し、正午近くなると、山は全容を其の中に没し去つてしまふ。夕風立つて、岩菅山の峯に崩るゝ入道雲の色も褪せると、思ひ出した様に黒姫の肩に差し上つた月が明るなつて、山の肌が紫紺に暮れる。斯くて、北陸の海から盛んに此の關川の谷へ這入つて來る夥しい水蒸氣は、日に三度の變化を與へて、三つの山は三度其の裝を變へるのである。私共は凡そ一週間を湖畔立ヶ崎の小松屋で暮した。

### 三、杉野澤

今日は廿五日、快明、九時半頃小松屋を發つて杉野澤に向ふ。野尻の村はづれから下山桑を通る道は二里足らず、一時間と少しで達する。杉野澤は百七十戸ばかりの山村で、その前を流れる關川は信越の國境を成し、信州側に、相對して高澤の部落がある。豫ねて野尻村の助役池田萬作氏の厚意に依

◎火打山と焼山 大島、田中



つて得た案内人は此處に居るので行きがけに寄つて、夕刻會ふ様に約束した。杉野澤は田端屋(丸山といふ方が通りがよい)がよい。赤倉程の眺望も無いが、背後には妙高の青黛の肌を仰ぎ、前には關川の溪聲を聞いて、一寸捨て難い風情がある。

#### 四、苗ノ瀧 (苗名瀧)

中餐をすませ、越後梶屋敷から來た一高の大島生と落ち合つて、三人は、重次郎に勝といふ未だ幼い兄妹の後について小一里ばかりある有名な苗瀧を見に行つた。關川の本流を一本の瀧に落す水量は豊で、高さは十五丈に餘り、華嚴より見榮があると言つた人もある位だ。小さいガイドの崖を登るの、巧なのに驚く。歸途は右岸に移つて、信濃水電の發電所等を見、谷は夕靄に包まれて、赤倉山にクリム色の雲のネットリと這ふ頃、山葡萄、木苺等摘んで宿に戻つた。暗くなつてから約束の案内人が来る。當年六十九歳の老爺小林茂兵衛と云ふ。地圖を擴げて種々山の様子を尋ねた處、餘り要領を得ず、火打山の存在さへ知らなかつた。

尤も焼山と黒澤附近は詳しいらしいが、それも獵師でない彼は、冬季の好晴に、ほんの物好に登つた位で、夏の案内としては、心許ないこと夥しい。眞川はシンカハであること。合流點は矢張り落合であること。中央火口丘を心岳。外輪山を廓岳くろがけといふ事など聞いて、流石は二重火山の多い地方と肯れた。以前越後側から焼山を通つて戸隠に詣でる立派な道を作つた事があつた。其時大島生の祖父伊左衛門老人は願人の一人として、屢々參詣された事を話すと、爺さんは、丁度當時十六七の頃で、伊左衛門氏が常に自分の家に來られたのを覚えてゐると、其の孫なる大島生に會つたのを不思議に思ひ、「お懐しい！」といつて、頻りに喜んだ。明朝の出發は六時と定めて、小林を歸し、宿には米一斗、油味噌（人夫用）五百目、其の他の必要品の用意を命じて、十時頃燦然たる星を仰いで眠に就いた。

### 五、人夫のことも

明くれば廿六日。快晴。朝食をしてゐる内人夫も揃ふ。人夫は一日七十錢、食糧客持ちとして、案内を込めて左の四人を雇つた。（日給が廉いので後、慰勞の意味で若干を別に給した）。

案内、小林茂兵衛、六十九歳、高澤。人夫、岡田兵七、二十八歳、杉野澤。人夫、長井傳衛門、四十一歳、杉野澤。人夫、池田辰五郎、六十二歳、野尻。

小林茂兵衛は愉快な人物ではあるが、案内人として既に老朽の憾なきを得ない。岡田兵七は以前東京力士をして、洋行までしたといふ男で、肋膜を病んで廢業したとは云へど、尙ほ二十貫からの體格で、性質も快活、勇敢な上に、地圖等も判るから、年齢から云つても今後の案内人として有望であらう。他の二人は皆人夫として忠實な者であつた。只此の土地には近年、水電、硫黄取、薪炭業、木通蔓採集、林道工事等の金になる仕事か幾何でもあるので、容易に人夫を得ることが出來ない、豫め頼んで置く必要が充分あらう。而も人夫は一體に大町の程強くなく、一人の負擔五貫目を超過すること



◎火打山と焼山

大島、田中

は無理であらう。

## 六、笹ヶ峯牧場

山の神の横手から村を出離れると草原續きの稍急な斜面で、所々緑陰に休みながら行く。牛小屋、後鉢木等いふ休み場を過ぎて、野道は稍平坦になり、藪畑とて、以前麻畑たりし處を過ぎると間もなく笹ヶ峯の池を左の脚下に瞰る。インダラ、サハラ、シロピソ等の喬木が所所に繁つて、涼しい風が梢を渡る、空には美しいコバルトが流れて、黒姫の心岳（小黒姫）のボコリと獨り立つてゐるのや、高妻、乙妻の高い峯に残雪のチラホラ閃めく等春の山路の旅の様である。杉野澤から高妻山に登るには、正面に見える深い氷澤（氷澤）を溯り、遂に澤に離れて、字白澤の尾根といふリツヂを頂上へ直接登るのだといふ。

潤葉樹の涼しい木の下道を行くと、牧場の垣根があつて、若葉隠れに見えつ隠れつする夥しい残雪に胸を躍らせながら、九時五十分炭焼小舎に着いた、小舎の主は岡田長助（三十一歳）と云つて、東京に七年も居たといふ至極物の判つた人であつた。附近の山容を知る事に於ては土地に比ぶ者なく、小林も彼から、充分山の様子を聽いて行かうといふ魂膽で立ち寄つたのであつた。話に依ると火打山の尾根と、矢代川の源をなす鬼ヶ城（山崎博士報告の附圖参照）の尾根との分岐點が、濃霧にでも襲はれると、判るまいと頗る不安らしい面持であつた。

事實一行の誰もが初めてなのだから心細い。そこで手帳に地圖まで書いて詳しく教へて貰つた。笹葉で葺いた小舎の中で、流茶の饗應を受けたりして、種々世話になつたのは感謝に堪へない。彼は豫告さへあれば案内しても良いと云つてゐた。十時五十分發。小舎の前からは鬱蒼たる水槽の林を越して、焼山、金山、天狗原の連峯が、透徹した今朝の空氣を通して雙眸の中に迫る。赤銅の塊の様な焼山の岩間には、純白の殘雪が日光の直射を受けて、キラ／＼と金屬光を放つてゐる。左に續く尾根は稍低くなつて、更に裏金山の尖峯を起し、尾根の廣い金山との間に深く刻まれた裏金山澤には、可成り長い雪溪が懸つてゐる。森を抜けて行くど軟い緑の芝生で、所々二抱へもある水槽の亭々として、濃い影を落すところ、已に笹ヶ峯牧場である。遠くは金山の雪を望んで、黒や斑の牛や馬の人を怖れずに群り遊ぶも長閑である。十一時只一軒の事務所に着く。牧場は妙高村の村長松橋氏の所有で、現在は百幾頭の牛馬を飼育してゐるが來年邊りから廢牧する由である。杉野澤から約三里。開墾當初は可成り人家もあつたさうだが、今は基礎ばかりになつてしまつてゐる。此處に宿泊させて貰へば登山は至極樂である。事務所を辭して再び喬木林に這入ると間もなく黒澤の落合で、乙見峠を超して小谷温泉(杉野澤より大里)に至る小谷街道に岐れ、之れからは眞川の本流を溯るので、折々鮎釣の通ふ位、道としいふ可きものもない。十二時半に間近いので河原で溪聲を愛でながら中食にする。小林爺さんは、話好きで、腰を卸すと直ぐ話を始める、力士は洋行土産の巴里や、桑港の話に私達を煙に巻く。流を掩つて繁る榛の木、柳、水槽の葉は、涼しい風に囁いて、枝洩る日影はチラ／＼と膝の上に動く。

## 七、眞川の溪谷

一時五分出發。人夫達は今夜の私達の食糧にと鮎釣を始めて、緩々と川を右に左と涉つていく。小林爺さんが一番上手で、忽ち潑瀾たる魚を釣り上げた。たんぼの毛の様な柳の實が風の間に／＼

ワ／＼と翔ぶ。一時五十分鍋倉澤の落合。金山の雪が愈々近くなつて來た。三時瀧澤の落合で、之れから眞川に離れて、中間の尾根を登るのである。眞川の本流は、此處を「釣詰め」と稱して、大岩河中に狼籍。釣人も登らず、之より上には魚も住まずとされてゐる。水中の小石の裏にヒノビウスの一種の稀に附着してゐるのを見る。停滞一時間。數尾の鯉を提げて、四時小逕を辿る。急斜面ではあるが、暫くで頂上に達し、左に林道を分ち（人夫は糸魚川方面に出るものだといへど不明）道は廣く平坦になつて、山腹を縫つてゆく。ギョウジャニンニク、タニギキヤウ、シラネアオイ、エンレイサウ、クルマバツクバネ等を見る。右手に老山の鎧岩を眺めながら四時三十分金山澤を涉つて、稍前進すると、最近杉野澤の工夫の發見したといふ鑽石の出る區域である。小林爺さんが指す道の傍を掘ると、成る程重い砂鐵の様なものが塊になつて取れる。何でも東京から偉い人（私達のこと）が態々來るといふので、工夫達は大恐慌で、今日も道を晦して四五人見張りに登つて來たといふは笑止である。薙を二つ程通つて、樹木が絶えて急に明い處に出たと思ふと、眞北に大きな焼山が谷一杯になつて峙つてゐる。残雪は北に行く程美しい様であるが、此處から見た焼山の残雪などは實に純白である。明日の登路は正面の一番低い大残雪の下から左に登つて、頂上から南に下つて突出してゐる一巨岩の肩に出で、頂上に達するのであるといふ。撮影スケッチ等に時を移し、五時出發、眞川の河原に下ると、道は全く消えて、イタドリ、フキ等が六七尺も延び、中々に通過困難である、六時頃溪間に初めて小残雪を見る。五萬分ノ一圖にある眞川の左股（假稱）を涉つて、焼山の南側二つ上下に並んで崖の記號ある下に流れるものと思はれる地圖にない澤を左の脚下に瞰つゝ進むと、幽かな道は纏て之を左に渉る。此の邊りを焼山の御殿場——一般に登山口を指す——と呼んで、露營に便利である。杉野澤から此處まで約六里の道、鑑釣で餘り停滞したので最早や七時に近い。早速天幕を張り、手の切れ相な雪解け水で汗を拭つて、獲物の鑑に舌鼓を打つ、岳樺やイタドリの繁茂した風當の尠い谷の奥で、夕

聞は音も無く迫り、焼山の頂から流れ落ちる霧は冷たい大きな息をついてゐる。

◎火打山と焼山 大島、田中

五〇

## 八、焼山

餘り寒いので眼を醒すと、足が天幕の外に出てゐる、空には星が降る様。郭公の啼く音を聞きながら朝食を済せて、人夫より一足先に登る、六時五十分。道は又明瞭で迷ふ様な箇所もなく、シロバナノヘビイチゴ、サンカエツ等の美しい白花を踏みながら右に左に曲り蜿つて登つてゆく程に、裏金山の残雪は左手に逼り、その肩からは鎗ヶ岳の鋒先が一寸顔を出す。八時二三の残雪を亘つて岐道に出た。積み石のある小さな澤を道に岐れて真上に登ると、(若し道に従つて行けば、山を廻つて、笹倉温泉から焼山に登つて来る道に合するのであらう。)ガンカウラン、ツガザクラ、イワヒゲ、デムカデ等の地表を繞る岩山で、大雪田に出る。昨日焼山の肩の巨岩塊に近く見た雪であらう。高山に來たなどいふ氣がする。登るにつれて、碧空は濃く、翔ぶ雲は近く、眺望は展けて、白馬、鹿島、鎗の連峯が、濃い紺碧の肌に、無数の雪溪を懸けた姿は何に喩へん術もない。只々我が身の微小なるに驚くばかりである。

焼山の急なスロープを右手に仰いで、雪を登り詰めると、例の巨岩の處で、日本海の雲の海を一望し、右手にミヤマソハンノキ、ミヤマナ、カマド等の叢林を分けると、急傾斜のノケズラ——ザラ——である。日本アルプスの大觀を顧み勝に九時之を登り詰めて、同二十分最高點に達した。日本海から吹き送る霧の塊が、矢繼早やに走つて來て、廣い雄麗な眺望を早やくも切斷する。それでも南の空は晴れて、近くは戸隠、高妻、乙妻の翠巒。低く、真川の溪谷は銀蛇の如く、黄色く牧場の芝の原が其の傍を彩つて瞰える。目を放てば南東の空に淺間の岳は煙に名乗り、八ヶ岳の赤岳は高く雲表に浮ぶ。頂上は北東から南西に長く、北西に火口を抱いてゐる。そして其の底には雪が圓く蓄つてゐた。北

の端は急に薙ぎ落ちた赭い荒くれた絶壁で、降れさうな氣色もなく、火打山と尾根續きの方も、急勾配を灌木が一面に掩つてゐる、一番高い岩角に竹つと、濛々と湧き返る霧の絶え間／＼に、間岳から仰ぐ北岳の様な火打山の急斜面や、胴抜けの緑の尾根や、妙高山の心岳の鐵の肌が見えつ隠れつする。高谷の池と覺しき邊りに見える二つの雪が光つたかと思ふと、忽ち真白い綿の海と化して、今度は赤倉山の赤い崖が目映る、何うにかして、焼山から火打山に續く尾根を見極め様としたけれども、中々霧は霽れさうもない。西の空に希望の色が表れたので、再び頂上に引き返して、白馬の霽れるのを待つ間、ふと氣が付いて拾つた小石には、同行十三人、明治十年六月、と記してある。不思議に懐しいものと思つて、裏を返して見ると、越後の村の名前が二三添へてあつた。随分古いものだ。嗟その時の一行の人々は、已に世に無い人が多からう等妙に沈んだ氣分になる。

我に返ると天地は依然として混沌。遂に意を決して山を眞東に下る。ムシトリスミレ、ツガザクラ等の彩る急斜面は未だしも、降るに連れて、榛ノ木、ナ、カマドが威を逞うして、方向を定める事も出来ない。幹を越え、枝を潜つて、大分降つたと思はれる頃小殘雪に出た。地圖と磁石を出して見ると、どうやら北に下り過ぎてゐる様である。地圖に長い崖の記號ある處邊りらしい。十一時半なので第一回の中食を攝る。殘雪の畔にはナンキンコザクラが紫紅色の花を擡げてゐる。案内は更に左へ下るべきだと主張するけれども、そんな方へ行くと、地圖では眞北になつてしまふ。種々議論してゐる中、天與の恵か、東の空が明るなつたかと思はれる間に、見上げる様だ高い火打のリツヂが、ずつと右手の方に峙つた。小林爺さんが、あれへ登るんですかへと肝を潰す。そこで大體見當がついたので、十二時四十分山腹を東へ東へと横に渡り始めた。霧は又視界を斷つ、頂上から流れ出た熔岩流の幾筋が、皆一樣の處で止つて、其處に急なヒシを作つてゐる。——總てかういふ斷崖をヒシと呼ぶ。彼の鬼ヶ城等も笹ヶ峯では雷ビシと云ふ——その下をからみながら、雜木を押し分けて、漸く明い處に出た。焼

◎火打山と焼山 大島、田中

五二

山と火打山を一つに繋ぐ、平な草原の尾根で、東は直ちに、胴抜けに登つてゐる。時に一時十五分。雲の纏綿漸く收つて、午後の淡日が草原を黄色に見せる。

## 九、火 打 山

一時四十分出發愈々急峻な尾根を登る。測量當時の切開きの跡が幽かにそれと肯れる位。例に依つて、石楠、ハンノキを押し分けて、息をはづませながら、その峯に登ると、更に高いのが霧に頭を沒してゐる。左は削つた様な峭壁で、尾根は馬の背の如く細いが、草や灌木が蔽はれてゐるので、足元が怖い様な箇所はない、再び霧に襲はれながら、その胴抜けの最高點を極めて、五時鍋倉澤の上の残雪にありついた。人夫を待ち合せて第二回の中食を攝る。氣まぐれな霧は又拭つた様に霽れて、赤い西日が火打山の半面を横さまに照す。

火打山の頂上附近は全部偃松に掩はれてゐるので、登攀容易でない。何度か松の間に突撃したが、徒に苦しむばかり、已むなく北に廻つて、反對に登つた。此方は草原の斜面で何の事も無い。五時五十分二等三角點の上に佇つた。二四六三米、一番高いんだと思へば小供らしい無邪氣な快感を禁じ得ない。見渡せば越後の平地も、日本海も一樣に漠々たる雲の海の下に沈んで、今し雲界に没し去らうとする大きな太陽が、虚空に向つて、金糸銀糸を放射してゐるのが實に壯觀である。觀ると、焼山や、金山は逆光線で色褪せたが、妙高の心岳は夕日に榮えて、廓岳の之を包圍する線もくつきりと、黒澤岳の黒い平な峯を越えて、脚下には高谷池が龍眼肉の實の様に、乳白色に光つてゐる。スケッチを濟せて、六時下山。幸、霧も霽れて、鬼ヶ城の尾根に迷ふ事も無く、偃松を避けて、ウサギギク、ミヤマキンバウゲ、ハクサンチドリ等咲く笹ヶ峯側を、稍進み、鍋倉澤の右股（假稱）目懸けて、雜木を分けて下る。高谷の池の残雪から流れ出る水は、小流を作つて、西の尾根を破つて、潺々と溜りつゝ、

鍋倉澤の隙をなしてゐる。(只地圖にある池の西の尾根の如何にも高く、水等の流れ出さうもない様になつてゐるのが不思議である。)ナンキンコザクラがイワイテフに交つて一面にもえてゐる間を、流に足を濡しながら登ると廣々とした高谷の野地——濕原——で、右手の丘には可成り大きな残雪が懸り、遠くは池の水面が夕闇に灰白く、ナンキンコザクラの紅が、赤インキを流した様に原一面に滲んで、時に歸る夕霧がその上をさまよつてゐる。既に七時半、雪の水に近く露營の用意をする。水は日中温められる故か非常に暖く。米を磨ぐ人夫も今夜は樂だ。風も當てず、水も自由で、實に良い露營地である。

## 一〇、高谷の野地

山に入つてから未だ二日目だのに随分長く山で暮した様な氣がする。四時起床。霧がをりたと見え、草々はシットリと露を含んで首垂れてゐる。昨夕のトワイライトに高く仰いだ立派な火打山を今朝こそ撮らうと楽しみにして天幕の外に出ると、今日は朝から霧が盛んに活動してゐる。若し露れてゐたら確かに一つの絶景であると思ふ。そこで詮方なく、朝食の出来る間を花摘みにと、紅の虹する方に歩を移す。ジク〜と草鞋に水浸るも快よく、小さな略圓形の池は一跨ぎ位の小溝で聯結されて無數に散在し、綿を附けた様なサグスゲの白い花がシット水に姿を映してゐる。水の面に漣するかと見れば、小さな蜻蛉の幼蟲が浮び上つて、一粒泡を吐いて又沈んでゆく。岸は毛氈藓で疊んだ様に赭く、一番東の大きい池から残雪に懸けては、實に夥しいナンキンコザクラの群落で、株も他に見るものよりずっと大きく、一本の花梗に五ツ六ツ位大輪の花附けたのも稀でない。そして其の色は非常に濃く、殆んど紫に近いのがある。此那に此の花の豊富な處も珍しいであらう。其他の植物では一寸目についた處、ヒメウメバチサウ、ミヅゴケ、シラネニンジン、イワイテフ位である。しかし私は此の

野地が非常に氣に入つた。未だ穢されてゐない此の處女の池の風景を誰にも知らさずに置いて、獨り毎年此處に來て、地の主になつてゐたい様な氣がする。池の水は今朝も暗く、午前五時で、氣温十四度、水温十六度を示してゐた。今日は地圖の上の里程も近いので大いに侮つて八時出發、野地の東の斜面を登ると、又小野地があつて、下ると第三の野地に出る。此の間ナンキンコザクラの白花のものを見る。此の野地には、實に夥しい瓢箪形の小池が互に接續して、波模様を描いてゐるのが上から見ると實に面白いそして、岸はミヅゴケで蔽はれ底は淺く平で枯死せる植物で褐色を呈してゐることは前の池と變りはない、此の池の中で、全身淡黑色のサンシヨウヲを採集した。ハコネノサンシヨウヲと異なる。途中で大事にして來た標本を落してしまつたので知る術も無いのを遺憾とする。池を離れて、一番低くさうな尾根を又灌木を押し分けてゆく。根曲竹かそろ／＼始つて、中々に困難。ミヤマカタバミ、ゴゼンタチバナ、ツマトリサウ、ミツバワウレン等を見ながら梅等の盆栽にせまほしき古木の林立してゐる處に出ると、通つて來た山々の展望が實に佳い。雪の多い金山や、燒山、昨日迷つた雪の邊りも手に取る様。火打の霧の除れるのを待つて、撮影、スケッチ等し、暫く眺望に耽つてゐた。

### 一一、黒澤の野地

之から黒澤岳の北に延びた尾根に登ると、眼下は黒澤の廣々した野地である。雜木や笹と闘つて、稍暫く迂り降ると、十時十分野地に下り立つた。南北に明い空を仰ぎ、背後は黒澤山に限られ、前には妙高の廓岳が高い。池はずつと北に偏つて、郡界に近く無數に點綴し、大池と稱する一番大きいのは涸いてゐた。黒くて赤い斑點のある、蜻蛉がうるさい程澤山居る。そして池中には三種程の蜻蛉の幼蟲と、兩棲類の幼蟲とが遊び廻つてゐるのを見た。ナンキンコザクラが一面に池畔を彩つてゐる。此の大池に隣りて、一小池があるが、此の水が何うも矢代川に注いでゐるらしい。大池の水は勿論黒

澤に注ぐから、この池の群を總稱した場合の「振分の池」なる名稱を正當ならしめてゐるのであらう。  
(後遊の方によつて確められん事を)此の野地には残雪なく、池水は停滯腐敗して飲用に供し難い。

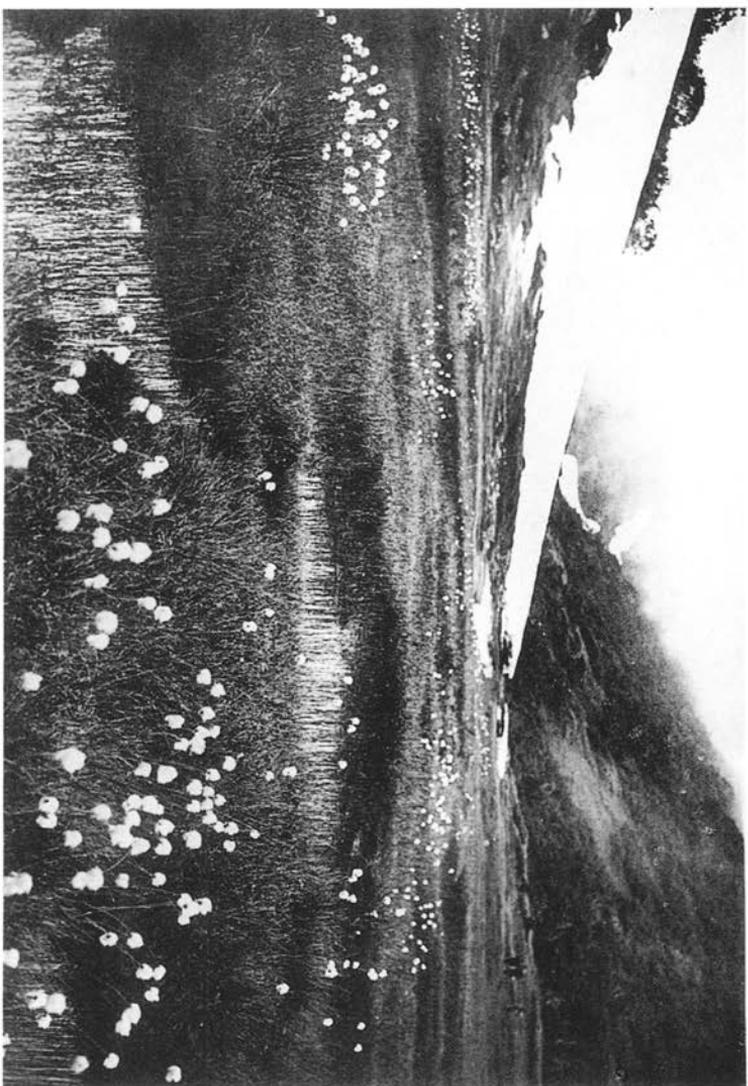
## 一一、廓 岳

十一時半、廓岳の登り易さうな澤に残雪のあるを目標として登り始めた。笹は人の丈を没して、人夫等は荷を取られて、轉りながら尾いて來る。岳樺等の繁つて空澤を登ると、雪解け水の流になつて、纏て、野地から仰いだ残雪に出た。雪の解けたばかりの荒れた土から、昨日今日芽をふいたシラネアオイが早や、紫の大きな花をつけてゐる。残雪から暫く笹を分けると廓岳の尾根で、太田切と小田切との分水界に近いところであつた。時に十二時五十分。此の邊を笹ヶ峯方面では見タ原とて、上杉謙信が川中島の合戦に敗れて逃げ來り、遙かに追跡し來る敵兵を顧みた處だと云つてゐる。深い火口瀬を隔て、妙高心岳の巉巖は高く聳え、我が乗る廓岳の兩翼は之を抱くが如く、北は大藏岳、神奈岳に及び、南は赤倉岳に終つてゐる。足元には、小さな残雪が所々にあつて、シラネアオイが咲く。此れから地圖に水溜の記號ある尾根へ下れば無難であるが、それへ行くには廓岳の最高點へ登らねばならず、大分距離もあるので、直下に白い雪の見えるを幸、一時頃、急傾斜を直接に下り始めた。兎に角火口壁を下る事とてその勾配の急な事は非常で、それに、根曲竹が密生してゐるので、轉倒墜落の患はない代り、中々時間を要する。稍下ると例のヒシに思ひがけなくも出た。木の枝に支へられて、怖怖下を窺ふと、六七間程の峭壁で、同じ位の高さに左右に廣がつてゐて。到底下る可くもない。さりとて、此の笹を尾根まで引き返す譯にも行かず、右に左に押し分けて下れ相な個所を物色した。若し霧でもかゝり、雨にでもなつたら、さぞ此の邊で困難する事だつたらう。眼の下に雪が見えてゐてさへ容易でない。先へ偵察に降つていつた一人が、二間ばかりの低くさうな處が見付かつたとて、降り

て來いと下の方でいふ。行つて見ると成る程下れぬこともなさ相である。そこで、力士が負繩を解いて、木から吊げる。力士が先づ試して見ると大丈夫なので、皆後から怖々下りてホット一息した。リツクサツクを誤つて墜し、取杵を二枚程毀してしまつた。人夫達も此んな所は初めてだといつて、後では笑つた。熊は多くかういふヒシの下に據る相で、彼等が遊んだ跡等がいくらかもある。附近の岩にムシトリスミレの紫花が笑つてゐる。ペニバナイチゴの叢林をひた下りに下ると、三時、最低部の殘雪に着いた。下つた跡を見上げると全く酷いヒシである。地圖に崖の記號を附けて置かないとは不都合だ等と皆不平を云ふ、辨當の殘を平げ、四時心岳を登る。

## 一二、妙 高 山

初めの中は笹があつて、こりやたまらぬと思つたが、間も無く岳樺の森林になつて、急は急でも、先刻の下りの様なことは更がない。人夫達も餘裕が出来たと見えて、石楠の株を土産にと掘り採る。左へ左へとからんでゆくと、懸て、心岳の北方の一角に出た、高いと思つた廊岳は已に低く、其の上から火打山が高く聳えてゐる。五時五分、日本石の上に行つて、夕晴れの山々に眼を放つた。日本海の上は一面に雲の海で、隠岐島は煙の如く、米山は幽かに頭を擡げてゐる。夕日は赤く、火打山の肩に沈んで、心岳の投影が小さな富士型をなして雲の上に濃く現れた。山の裾に纏る雲も騒がず、デット沈黙の中に日は暮れていつた。最後の一枚のプレートで記念撮影をし、六時二十分下山。赤倉まで二里だといふし、已に人里に出た様な心地して、暢氣に下つてゆく程に、山は次第に暗くなつて、日は長くとも暮れかゝれば釣瓶落しの山の夕、裾野の霧は漸く上昇して、地獄谷を下る頃は已に雨となつてゐた。山中人頼死して、蠻氣肌に迫る。三人汗みごろになつて、燕温泉に下つたのは八時過ぎであつた。其の夜後に殘した人夫が着かないので大いに心配したが、翌朝赤倉に下つて見ると、昨夜十時



(影撮氏 藤中田)

む望を山火打火るたれ戯に霧と部一其りよ隅東の地野谷高



頃約束の赤倉に着いたのだといふ事だつた。

#### 一四、山名に就いて

此の行は幸、好晴であつた爲め、案内の不完全と、未知の山であつたにも拘らず、豫定通りに終つたのは愉快である。

陸地測量部の五萬分ノ一圖の山名は皆實地と符號してゐた。只山崎博士の報告の附圖にある大藏岳の位置であるが、多分之は、黒澤池の東、崖の記號ある峯であらう、其の他附圖に載せた山名の大部分は私達の知る處と異つてゐるが、西頸城方面の名稱を調べた上でなければ云々する資格はないと思つて此處に擱筆する。

〔附記〕 岡田長助の言に據ると、此邊の山々に登るには五月前後、未だ鹿子斑の雪を踏む頃が天候も一番佳い。それから信州北安曇郡小谷温泉を起點として始めれば、雨飾山からでも、金山、天狗原山からでも、一度に縦走する事が出来るであらう。同温泉では登山の用意も出来る由。白馬山の登山は四家から七里と云ふ。次に登路に就いて今度聞き知つた範圍では、今度執つた真川の溪谷の他、西頸城郡笹倉温泉から直接焼山に登る立派な道がある。且旅行前同温泉の主人樋口五郎氏に問合せた處、彼自身五年前の春、雪の上を妙高山まで行つた事があり、又案内も出来るよ返事をよこした。人夫賃七十錢より一圓迄の由、次に矢代川を溯つて鬼ヶ城に出る道は數年前中頸城の水源地探検の團體が登つてゐる位だが多少の困難はあつても、通れぬことはあるまい。但し笹ヶ峯方面の案内者は全く様子を知らない。縦走中天候其の他の事故で急に下山の必要ある場合には、黒澤を下れば三時間程で笹ヶ峯牧場に出るといふ。鍋倉澤は瀧があつて困難の由。(大正六年九月廿七日完、田中原稿大島訂正)

霞澤岳に登る

中村直男

同行者

辻

勇氏。

正吉。(上高地案内者)

かま。(正吉の犬)

朝霧の絶間に駒鳥が鳴いて居た。何と云ふいゝ朝だつたらう。曉早く、ふと夢が破れた時、軒を通る時雨の妙な音を聞いたが、それはやはり夢の中に河瀬の亂れるのを聞いたのに違ひない。河柳や、はしばみや、かつらの梢を渡る曙の靄のさゝやきであつたかも知れない。

白樺の梢も、かるかやの根方も、露にしつとり濕つて居た。宿の前に新らしい草鞋を踏みしめた時に、すつと仰ぐと巢をたつた許りの岩燕のねぼけた聲が微かに聞える空に、朝日を頭の先き一寸浴びたあの嶮岨な霞澤の姿が見えたが、その強い影像が深く焼付いて、田代池への林の道へ入つてからも、柔かい下草に氣を取られて行く私の眼の前に、執固にちらついて居た。

ひとは何故此の山にあまり登らぬのであらうか。あのウエストーン氏は上高地に来る度に屹度登つたと宿の者が云つたが、それは何故だらう。然しひとは何うでもいゝ。自分は自分の満足を求めて居るのだ。失望しやうと満悦しやうと、それは成る様にしかならないのだ。私の足はこまかい花崗岩の砂礫の白い林の中を、力強く歩いて行つた。

林の香りは何とも云へぬ芳い氣持ちを私等に與へた。それは丁度何とか云ふ白い細い花の咲く蘭の

香りの様だ。霧を抜け、此の香りを嗅ぎ、駒鳥の聲を聞いては、實際何んかたくな、心にも美しい憧憬が涌くであらう。自然のやさしい心が、何んなに私等を感動させる事だらう。上高地の林よ！

吾々の案内者の後先きになつて、狐色のかま（獵犬）が元氣好く走つて居た。此の犬は最後迄吾々の好い同伴者となつて呉れたのだ。そのかまを口笛で指圖しながら正吉は田代池の北側の密林を分けて吾々を指す山麓へと導いて行つた。先刻からもうその山の姿は、頭の上に被ひかゝる様々な梢の縁に妨げられて、望む事は出来なかつたのだが、道が少しく上りになり下草に熊笹がちらほら交るのを見た時に、吾々の前には恐ろしく偉きな眞黒な姿が、のしかゝつて來て居る様な氣がした。霞澤のザレを集めた水の少い河原を渡ると、愈々山麓へと取付いたのだ。

もう其邊りは、かなりの傾斜を持つた密林で杖を没する熊笹が足を入れる隙もなく生ひ茂り、暗い林の中に黒い浪を打つて居た。朽葉に埋れたブヨ／＼の根方に、是も朽ちてブク／＼になつた大木が横つて、吾々の困難な登攀を更に苦しめた。うっかりすると吾々の足は不意打ちを喰つて、身體ごと深く熊笹の繁みに打ち倒され、手や頬にビリ／＼するかすり傷を負ふのだつた。

此の熊笹の中で非常に苦しめられた吾々は、三十分許りして漸く明るい空の見える處に出た。其處は霞澤岳から六百山に續く、恰も悪魔の巢の様な物凄い懸崖からなだれ落ちたザレの南側であつた。此のザレは先刻渡り越した岩石の河原へ續くのであるから、或は此のザレを辿つて登つて來た方が樂であつたかも知れぬと思つた。然し正吉は熊笹の道の方が近いと云つて居た。

扱て之からは此のザレを登るのだ。

□

桂や山櫟の密林の疎らになつた崖から、壞れを渡つてザレに移らうとしたその時、ザーツと土の崩れる音がした。驚いてさそくの用心をし乍ら見上げると、吾々の頭の上の北側の崖をかまが崩れる土

をかき乍ら必死と登り切らうとして居るのだつた。ザラ／＼と際限なく崩れ落ちる土が小さな動物の足を攫ふので、一生懸命登らうと足掻いて居乍らかまの身體は却つて押し落される様に見えた。がもう駄目だと思つたかかまはいきなり横匍ひにその崖を渡つてザレの中程の大きな岩上に飛び上つて終つた。吾々は安心した様に息をついた。

まだ崩れ落ちて来る砂礫を避けて、細いザレの右側の岩石を登り出し乍ら、私は正吉に云つた。

「かまを先きにやるのは危険だね」

多分言葉が聞き取れなかつたのだらう、正吉は答へもせず、荷物を負つた背を見せたまゝ私の頭の上を注意深く登つて行つた。見上げると、六百山塊の一つの峯が壊れたすさまじい膚を見せて頭の上に被さつて来て居た。

その斷崖と霞の派脈の一つに挟まれた、此の細い峻しい岩石の瀧が今登らうとして居る頂上まで斬り立てた様に聳えて居た。見上げて居ると、吾にもなく恐怖が心の中に廣がつて来るのを覺えた。此様な心持は、嘗てあの騒々たる穂高の嶺を渡つた時にも、乗鞍の尾根で雷に遇つた時にも、感じなかつたものであつた。私は實際顛える足を踏みしめ乍ら、岩に懸つた瀧の冷たい水を掬んで、胸に高まる鼓動を鎮め様としたのだつた。

正吉の確めた足の跡を辿つて、一歩々々胸を突く傾斜を登つて行つた。ザレに出てから約一時間許りして、始終吾々の咽喉を濕して呉れた瀧の流れが途絶えて、ザレを一杯埋めた雪の上に吾々は立つた。大分舊い雪と見えて一尺程掘つても土の色にうすくまみれて居た。冷たい風が頭の上から、足の下に流れて行つた。此處からはもう水はあるまいと思つて、水筒や小瓶に一杯詰め込んだ。

ザレの峻嶒と危険とが漸々増して來た。不思議に緊張した心持ちが吾々に非常な注意と努力を與へ

た。大きな岩の下に来る度に、吾々は手を引きあつたり、寫真器や杖を投り上げて置いてから攀ち登つたりした。

「雨上りだから岩の根がもろくて危険い」と正吉は云つた。而して一歩々々足場を確めて歩いて行つた。とある大きな岩の下に出た時に、今迄見えなかつたかまがその岩の上に尾を振り乍ら、異常な努力でのそく登つて来る吾々をなつかしさうに迎へて居るのを見た。正吉は口笛を吹きながら犬をいはる様な様子をした。その岩の上で吾々は第二の休息を取つた。

右から左から、丁度馬の眼かくしの様に大きな崖が突出して、吾々の登つて居るザレはその狭い奥であつた。眺望は僅かにV字形に開いた一方に過ぎないが、上高地の平地から穂高の焼に續く嶺の上に、覗く様に笠嶽の頭が見えて居た。吾々の努力が少し宛報いられて来るのが嬉しくて堪らなかつた。

「前刻、右側の崖の上で變な鳴聲がしたね。確かに何か獸に違ひない」不圖、勇氏が云ひ出した。正吉は熊かも知れないと云つたが、私にはさうとも思はれなかつた。暫くそんな話が續いた。休んで居ると汗が冷たく膚に浸みるのが感じられた。

雪の處からは、もう大分來たらしく、下を覗いてもそれらしいものは見えなかつた。岩石の瀧は右に左に少し宛曲り乍ら足の下に見えなくなつて居たのだ。

やがて吾々は、同じ様な足取りで同じザレを登り出した。太陽が背に光を浴せかけるので、スウェーターの下は汗がにじむ。風が吹いて抜けると、それが冷たいものとなつて行つた。

霞から六百に續く、正吉が「ツルギ」と呼んだ嶺の、半分かき取られた様な斷崖の真下でザレが二つに分れて居た。吾々は其の右の方に横匍ひにビク／＼し乍ら移り乍ら、左の方を覗き込んで見たが、それは吾々の進もうとする道より一層嶮岨で危険らしく見えた。赭い岩、黄色い大石、壞れた崖、物凄い姿のあらゆるものが、打ち合つたり噛み合つたり逆まになつたり飛び上つたりして居る様に見えた。

「此處いらが、くらし、や熊の巢だ。此處に逃げ込まれると何うにも仕様がない」と正吉が頂上で私等に指して云つたのは、此のザレの奥だつた。

分れから道は一層峻しくなつた。右側の灌木の根にすがつたり左側の不安な壁の下を匍つたりした。第二の休息點から三十分餘で、とある岩の上に立つた吾々は、非常に美しい眺望を得た。何の氣なしに振り向いた私は、思はず大きな聲を擧げてしまつた。眼の前にあの端麗な笠ヶ岳の姿が靜かな午前の空に抜ける様に浮び出て居たのだ。

申し合した様に寫眞器を取り出して、ヒントグラスを縦にしたり横にしたりした。それから又再び惚れ々々と美しい姿に暫く見入つて終つた。

此處から十五分も歩いた頃だと思つた。吾々は一つの大きな岩の下に出た。又此の岩を攀ち登るのかと思つて私は暫く腰を休めて居た。正吉の姿は何處から登つたか、もうその上にあつた。岩と左側の崖に根を生やした岩との間に私の身を入れる事の出来る程の隙があつて其の上に旨い工合に重さうな石が突出して居た。

「さて登らうかな！」と私は云つて足場を確めて見た。

「もうちきだ。今度は偃松にかちり付くんだ」と正吉は高い處で勇氣を付ける様に云つた。勇氏が私の腰の處に立つて居て、杖を休め乍ら笠ヶ岳をまだ振り返つて熱心に見て居た。私が杖を岩の上に投り上げて、兩手で岩に下る様にして登らうとしたら、勇氏は「押して上げやう」と云つて、寫眞器のブラ／＼する腰に手を掛けて呉れた。

此の時だつた。私は何とも云ひ様のない狼狽と恐怖に一時に身體中の血が凍つて終つた様に感じた。天地がすばらしい聲でワーツと叫んだ様に感じた。私自身もあらゆる狼狽の極度で、自制を失つ

た聲を上げたに違ひない。さうして「どうくやつて終つた」と云ふ様な不思議な感じが私の心の中をすばやく通り過ぎて行つた。

私は、私の左の手をかけた岩が、私が身體を釣り上げ様としたその時にグラ／＼と根が抜けて頭の上にのしか／＼つたのを覚えて居た。

それから、私の左の腕が何う云ふはづみか旨い工合に搖いだ岩のごめとなつて、然し非常に痛く潰されたのを覚えて居た。勇氏が咄嗟の智慧で、櫻の杖を落ち様とする岩の鼻に押し止めたのも、「こりや、どうしたのだ。どうしたらいいのだ」と狼狽した正吉の聲や様子も、それから最後にその岩が勇氏と正吉の必死の努力で私の身體を潰さずに、轉げ落されたことも、私はばんやり乍ら覚えて居た。

然しそれから暫くの間は、確かに張りつめた心を全く失つてしまつた。たゞ身體の何處と云ふことなしにビシ／＼と痛むのを一生懸命にもだえた様に覚えて居る。

私が漸く氣を取り直した時には、私はその岩の上に運び上げられて正吉の膝に凭りかゝつて居た。頬に温かいものが觸るのを氣にして見たら、それはかまが私の頬に傳はる血を嘗めて居るのだつた。私は犬を追ひ乍ら身體を起さうとしたら、左の腕が急に痛み出したので思はず聲をあげて終つた。すると今度は口の中が針を一杯含んだ様な痛みを傳へた。唾を吐いたら血許り出た。

「まあよかつたなあ！潰されないでよかつたなあ！」と正吉は氣が抜けた様に私を瞞めて云つた。勇氏は只黙つて私の姿を痛々しさうに見て居たが、手にして居た小瓶を私に飲めと云つて渡して呉れた。私は口を開くと口が裂ける様に思はれる程の痛みを感じたので、瓶を持つたまゝ暫く上や下を靜かに見廻した。

「何と云ふ狼狽方であつたらう。」と私は妙な反感が私自身仕た事に對して恥しさを覺えさせて來た。

然しあの僅か半分許りの間に總てが行はれた出來事は、確かに最も眞面目なさうして最も悲しいものであつたのだ。私自身さう云ふを憚らない。私は確かに悲痛な聲を張り上げて身體と共に落ち様とする岩を死もの狂ひの力で支へたに違ひない。私は意識なしに本能的に、自然が一寸した悪戯にむきになつて抵抗したのに違ひない。あの岩を抱へたまゝ、素直に落ちれば落ちたのだつた。それなのに何故私は痛む腕、血の流れる額に最後の力を入れて抵抗したのだらうか。私は何故あんなに、その結果を恐怖したのだらうか。

然し總ては小さな自然の出來事として終つてしまつた。一寸とした、多分喜劇的分子を含んだエピソードだ。

□

吾々一行は私の不注意から思はぬ驚愕を屹して、聊か氣抜けの形となつて、餘計な時間を費して終つた。

頂上へはもうぢきであつた。此處からは、ザレは程なく盡きて深い偃松の中を眞直ぐに匍ひ登るだけで、霞澤の三角點の北陵の一角に登り付けるのだ。二人は私を残して置いて登つて來ると云つたが、私は残念で堪らないので、私も行かうと云ひ出したのに驚いた。僅かに碎かれるのを免れた寫眞器のヒントグラスを鏡代用にして、裂けた左眼の下や、頬の傷に手當てをして、それから身の廻りのもの總てを——取匣を碎かれたので不用になつた寫眞器も——案内者に託して、登り出した。足がガクガクした。岩の一つ々々が非常に私の氣を引いた。

偃松に入つてからも左の手が自由でないので私は困つたが、それでも何うにか登つて行けた。深い突張つた偃松の根方でクン／＼と鳴き乍らか、まが獨りで苦しんで居た。抱いて出してやつても、又すぐ枝から落ちて自然の鹿砦さかもきに苦しんで居た。岩燕が張り裂ける様な聲をして後の空で啼き廻つて居た。

背陵の頂に出た時は丁度十二時であつた。吾々は最も疲れた聲でやつと登り得たことを嬉んだ。其處は霞澤の六百山に續く背陵の高地であつた。三人位坐れる平地があつて、名の知らぬ花のない草が生えて居た。南側の斜面には石楠が薄桃色の花を一杯つけて咲いて居た。

私等は暫く黙したまゝ、只眼許りを働かして居た。餘程してから——「あゝ美しい」と云ふ意識を纏めることが出来たのは、餘程してからであつた。穂高が見える。残らず見える。

燒嶽が見える。其間にはあの美しい笠ヶ岳が見える。乗鞍は山陵に隠されて見えないが木曾の御嶽が見える。白山が高く空に浮いてブルジャンブリーにぬられて居る。

「ウエストンが笠ヶ岳に登らうと思つたのは、此處から見た時に思ひ立つたのだね」と勇氏が云つた。それはどうだか私には分らないことだが、然し何故あまり此の山をひとが登らぬと云ふ理由も、何故ウ氏が度々登つたのだらうかと云ふ疑ひも、ほぼ分つた様に思はれた。

二六四六米突の三角點迄は山陵を傳つて行けばちきである。偃松と花崗岩の露出した背を危険なしに渡つて行ける。此處は其三角點とは百米突とは違はぬ高地であつた。北方は背に延びて六百山の凌凌たる怪異な山塊となり、それから徳本峠へ低くなつて行つた。傾斜は東側の方が徐かで、山膚の壞れや、ザレの姿は少しも見えなかつた。すぐ真下の澤は大野川に續いて、そのあたりからの唯一の交通路ださうだ。然し普通の人にはとても歩けぬと正言は云つた。

然しそんなことより何より、私は此處から見た穂高と笠ヶ岳の美しさを云ひさへすればいゝのだ。さうして、その美しさも、私の口や筆を借りずに只美しいと云つたゞけで、餘計な形容詞を必要としない美しさだ。どんな言葉でも、私等の印象に残つたその美しさは云ひ現はされ得べきものではない

つた。

◎龍澤岳に登る 中村

六六

手に一杯の石楠と、僅かに発見した、こきんばいの一株とを土産にして、吾々は残り惜し氣に、頂上の眺望に別れた。

下りは一層注意深くなくて、上りよりは却つて時間を要する程だつた。上りの危険にこりてザレを出來るだけ避けて何れかの側の林の中を無茶苦茶に滑べり下りた。それでも危険は全くないだけ安心が出来たが、大事な石楠の花を、もぎ落すのには惜しくて堪らなかつた。

私の抱へた岩をも一度見たが、尖つた片面に黒くなつた血が付いて居るのが私には何故か悲しく思はれた。丁度私の身體程の根なし岩であつた。

雪解の水が壊れた崖の端から、にじみ出て居るのを発見した時、吾々は腹がダブ／＼する程飲んだ。僅かの滴りを小さなカップに受けて口に入れる時の甘味さ！私は今も忘れない。

ザレの道に瀧が懸り、兩側の傾斜が密林に被はれた處あたりまで來ると、足の運びも餘程樂になつて初めて安心した氣持ちが湧いて來た。さうして今更の様に自分の身の上を顧みた。顔の皮がビリビりと突張る様に痛い。左腕と腰と左膝とがメキ／＼疼く、妙に寒氣が膚を浸つて來た。

もう夕方であつた。今度は熊笹に入らずに何處までも此のザレに付いて下りたので、道は單調乍ら足の運びは案外樂であつた。傾斜がだん／＼徐かになり兩側の樹木の光線を遮つて頭の上に被つて來た。かまは相變らず吾々の先頭に立つて行つた。

ザレの岩にからまり纏りして來た水は、何か細かい砂礫の河原の中に吸はれたかの様に、消えてしまつて居た。

ツンツーン、と美しい「雨降り鳥」の聲がした。美しい林の中に吾々は歸つて來たのだ。もう梓川の瀬の音も聞えて居た。夕霧が細い林の木々の間を纏り乍ら、緑の色を映して流れて行つた。

私は何だか心が急かされてならなかつた。石楠の花がしほれさうであつたからでもあつたが、まだ急がねばならぬ用事があるかの様に思はれた。

最後の休息を梓川に架した二本橋の邊りで取つて、顔を洗つたり、渴いた咽喉を濕したりした。さうしてその芝草の冷たい緑の上に暫く身體を投出してしまつた。

「ほんとによかつたなあ！ 負傷や痕で濟んでなあ！」と正吉が誠に濟まなかつたと云ふ様な様子をして云つた。吾々はまた暫くあの瞬間の追想に興がたつた。然し皆の顔は何れも疲れて淋しかつた。吾の身體を包む様にして、河瀬から立つ霏が柔かくはしほみの梢にからまつて行つたのを私は黙つて見送つて居た。

林を抜け出た温泉場近くの廣場で、刑事が付いて來て居ると云ふあの淋しい顔の獨逸人にあつた。その男は黒い小さな蝶を手にしたまゝ、手拭やタオルで顔や手を包んだ私を見送つて居た。

宿の前に再度立つた私は、夕日を浴びて美しく輝いて居る霞澤岳の姿を、もう此の前見た時の様な心持ちで眺める事は出来なかつた。

私は嬉しい躍り上る様な氣分を感じたのであつた。

此の登山記は大正六年七月十五日の收穫である、手帳と記憶とを辿つて書いた極めて杜撰なものであることを恥かしく思つて居る。(了)

## 白馬岳より越中小川温泉に出るの記

鈴 木 益 三

### 一、清水山稜の縦走

白馬岳を中心とした日本北アルプスの北端は地形學上から謂ふと、勿論高連山地で何れも二千米突を超えてゐる、又生成の上から見ると明かに原成山岳に屬し風雨等の削剝作用で元來出來たものではない、原成山岳にも色々成因に依つて區別はあるが大體から云ふと白馬連山は部分的例外はあるにせよ堆積山岳ではなくつて褶曲山岳であらうと思ふ、山の系統では飛驒山系に續くもので後立山山脈から引續いて日本海迄大蓮華山脈と呼ばれてゐる、又黒部川を境して立山山脈に對應して同山系北端の重鎮たるものである、此の山脈は又幾個かの尾根を東西に派して居る、此尾根を山背とも山稜とも云ふ、原語の Ridge である。

白馬山は大體三つの尾根に分れて低下するのであるが其の内最も長いのは小蓮華から乗鞍更に岩菅、箆と下つて越後に入るもので方向は終始東北に進むである、次は、殆んど正北に向ふ謂はゞ本脈とも云ふべき鉢、雪倉、赤男から朝日岳に續く越中越後の國境山稜である、朝日岳からぞんと下つて長袖山更に下つて犬ヶ岳白鳥山、それで日本海へ入つて仕舞ふ、木暮氏一行の今年の試みは實に此山稜の縦走であつた、残りの一つは白馬から約正西に向ふ山稜で距離としては最も短かいが溪谷として他に類を多く見ざる祖母谷から黒部川の一帯と北の方柳又谷から黒薙川の清流との間に包まれた理想

的の樂園地で白馬朝日岳から出發して清水を中堅とした自分の所謂清水山稜である、此の三稜は清水岳から二つに分れて猫又山から突阪山に走るものと黒部不歸岳から東鐘釣山に及ぶものとなる、後者は不歸岳から南走して百貫山から名劔山に進み祖母谷温泉の斷裂から奥鐘山に至る直径二里半に亘る支流を出してゐる、不歸と百貫山が祖母谷と不歸谷とを分け不歸岳と猫又山の間に碧梧桐氏の通過せられた猫又谷がある、それから清水岳猫又山と雪倉岳、朝日岳との間に抱擁した峻崖の連續は即ち柳又谷の大豁谷であつて溪間は四時殆ど雪を以て埋められてゐるのである。

七月廿八日午前四時露營の夢は破れた、夜半から西風が稍強く吹いて張りの弱かつた天幕はバタバタと音を立てた、其上夜半頃から加はつた寒氣が一入身に泌みて更でだに落着かぬ初日の露宿は屢々妨げられ勝ちであつた、露營地の周圍はあつさりと霜を結んで霧が盛に朝日岳の方から飛んで來る、石室や小舎に泊つた連中が頂上で御來迎を待つ聲が時々耳に響く、此分では御來迎は逆も拜めまいと諦めてゐる、小川温泉へ出るにはどうしても柳又谷に下つて横山峠を越え北又谷に出なければならぬが先づ今日は柳又谷迄下つて谷の邊で露營する豫定を立てた、所で谷へ下るのに雪倉岳から赤男山の中腹を搦んで一六五〇高地の南に落ちる澤を下つて地圖の林道に出づるか又は清水猫又と縦走して、オーレントメン谷に下つて柳又谷に出るか何れが順路であらうかと考へて見たが地圖の上では一寸明確な判斷が付き兼ねたので徳司を連れて飯の出來る迄朝日岳の頂上から山の形狀谷の模様を偵察するべく霧を衝いて出掛けた。

温度は華氏の四十度位であるが外套を着て手袋を符めても少し寒さを感じる程であつた、殊に足の親趾の所が少し穴が明いてゐるので冷い事夥しい、驅ける様にして朝日岳のタルミに下つて行く、此邊は一帶に高山植物の群生地でクロユリ、ハクサンイチゲ、チヨウノスケサウ、ナナカマド、ツガザクラ、ウスユキサウ、イワカハミ、コケモ、ミヤマカウゾリナ、タネツケバナ、ミヤマキンバウゲ、

クロマメノキ其他數知れぬ多種多様の草木や小灌木が偃松に適當な區劃を付けられて美事に點綴してゐる、霧がだん／＼に薄らいで朝日岳の兀々した頂點が見える白馬の本岳と朝日岳の間は急峻なカール式豁谷を形成してゐるが夜營した葱平の頭から朝日岳にかけては緩傾斜のタルミになつてゐる南に祖母谷の夜澤に續いてゐる、其の谷には残雪が可成り多いけれども朝日岳のタルミの大残雪も亦負けず劣らず驚倒する程である、此の残雪は朝日岳に向つて上行してゐるのであつて、之れを渡り切るとザク／＼した將棋を積んだ様な岩石の破片の流出しになる、踏む度にゴト／＼と動く音がして肝を冷した、目を離す事が出来ない二十分許りで頂上から南に當る尾根の肩に取付いた、幸ひ霧がよく晴れて劍、立山一帶遠く白山の雄姿が指呼し得らるゝ程に立派に展望される、今日の行程たる、清水岳から猫又山方面も遺憾なく俯瞰する事が出来た、確かに猫又迄の縦走は大丈夫だ、それから猫又の尾根を北に柳又谷に下る事も出来さうだし小川温泉の上流に當る越道峠も遙かにそれと見當がついた、唯疑問なのは雪倉から越中の朝日岳方面に廻つて柳又谷に下る事の能否と難易とである、之れは今立つてゐる肩からでは分らないので凸凹した岩石の尾根を手で歩き乍ら（足より手の方が役に立つ）頂上に嚙り付く、北側は削つた様な崖で鉢ヶ岳の六兵衛谷あたりの下迄雪溪がついてゐる様であるが其の先はごうもタキになつて居るらしい、朝日岳と清水との間の北面の谷には清水側に林道のやうな小徑が付いてゐる様に見えるが少し下つた所で急崖になつてゐる邊がごうも危険の様に見える結局行けさうには見えないのである、偕て問題の雪倉の横這ひであるが傾斜は大して急に見えないけれども、一面青く見える所を見ると偃松などの外に相當に高い灌木類か又は檜位はありさうで一見可なりのヤブでありさうだ、赤男山の澤下りは丁度柳又谷に下らうとするあたりに窟の様な小山があつて其の向ふはタキで駄目らしいが此方の澤はごうやら下れさうに窺はれる、然し何れにせよ谷の縁が斷崖を形成して居る様に思はれるから距離に於ては此の方面が近い様であるが難易の點から裁決したら矢張り

猫又道を採る方が急がば廻れの諺にもある通り君子の取るべき道の様思ふ、尤も雪倉方面を掛けるごしたら白馬の頂上から鉢ヶ岳長ノ池を下に見て雪倉の頂上に出で赤男どの合迄下つて其處から澤へ下る事になるのだらう。

之れで目的を達したから永居は禁物、朝飯前の腹は減切り餓を覺えたので急轉直下残雪目掛けて一直線に下つて天幕に歸つた、飯はもう蒸らしてあつて味噌汁が香しく煮沸つてゐた、楊子を啣へて雪の下の流れに顔を洗ひに行くと、木暮さんも顔を洗ひに来て落合つた、挨拶をすると「どうです、定まりましたか」と云ふ。

そこで朝日岳展望の結果を報告すると猫又からオーレンドメ谷を下つて確かに小川へ出られるからそれが一番良いでせうと答へられた、餘り水が冷いので齒に滲みて迎も口中を嗽ぐ事が出来ない、舌の上に少し置いて、少し暖めてから口を動かす、顔も其通り手早に撫で、そこへして洗面を終つた、所へ昨日の大學生二人が小舎から葱平の残雪の上を一直線に下りて來たが途中で足を滑らして横向に下迄凡そ五間許り滑り落ちた石の腹で脇腹を打つたらしかつたが幸ひ怪我もせず、頓て起きて來た、危険な事をしたものだ、昨日知合になつて居たので時刻の挨拶をして互に無事を祈りつゝ上と下に別れた、その人達は四ツ家に下るのであつた。

食事を済して荷拵らへを整へ懐かしい露營地を出發したのは八時であつた、日は既に丁度東方視線上で水平とも覺しき所迄上つて居る、今日の晴天と暑さとは早くも豫知された、寒暖計を見ると華氏、四十八度であつた、木暮氏一行は、自分達より少し先に立出されて丁度杓子の尾根にかゝつて居た、朝日岳の南側中腹を搦んで行く、途中一行の兩君はイハイテフ、タカネヒカゲノカヅラ、ツガザクラ、ミネツワウ、ムカゴトラノヲ、ヒメスギラン、ハクサンコザクラ、ハクサンイチゲ、ミヤマモミナグサ、イハツメクサ、ミヤマシホガマ、シコタンハコベ、リンネサウ、チングルマ、クモマナヅナ、ミ

◎白馬岳より越中小川温泉に出るの記 鈴木

七二

ヤマキンバイ、クモマグサ、イハウチハ、タウヤクリンダウ、チシマギキヤウ、クルマユリ、クロユリ等を盛に採取した、殊にハクサンイチゲは到る處に群生し、其他多いのは赤花のツガザクラ、アヲノツカザクラ、ナングルマ、イハイテフ、ナンキンコザクラ等である、御岳あたりで珍品視されてゐるクロユリが多いのにも驚く、唯だムシトリスミレ、コマクサ等は此邊に一寸見當らなかつた、残雪を超え岩片の堆積の上をゴト／＼させ乍ら行く所は今朝徳司と來た時と全く同じであるが、只だ朝日岳上りの時より心持下側を匍つて行くのである、朝日岳の肩から西に清水シヨウに續く尾根に下る、即ち朝日岳の西側の尾根である、此下り一面に頂上から落ちた岩石の破片が積累つたもので目が離せない、此處で初めて赤花コマクサを發見した、尾根は殆ど正しく東西の方向に清水に向つて居る、背稜を傳つて進んで行くと處々に偃松が邪魔をしてゐる、然し道は先づ平らで樂なものである、やがて北側が削れて急になつてるので南側の偃松に頼つて少し上つて残雪を北側に有つた小丘を越すと更になだらかな平地になつて、南側祖母谷を瞰下した眼は谷を越えて劍、立山一帶の峻嶺を仰ぐ事になる、暫時休憩すると、善次が得意になつて高野氏の祖母谷下りの物語をし始めた、手を差延べて一々現物を指示し乍らの説明であるから中々面白い、當時の困難さは善次の咄辯からも大體想像が付く程却々深い谷だ、高野氏が西谷上で露營した所と云ふのは自分達の今居る所から二時間を費したならば優に行けることばれるのに道を迷ふた揚句其處迄が白馬頂上からの一日行程になつたとは一寸想像も付かない事であるが、そんな事を考へると今し自分達の計畫した行路も亦非常に無謀な冒険の様に思はれて甘く行つて來れよばよいがと私かに心配でもあつた。

此邊にはコマクサが盛に生へて愛らしい薄桃色の花を付けてゐる、殊に白花のコマクサを發見したのには人夫も珍らしがつてゐた、此處から清水の三角點迄は約一里位である、今九時過ぎであるから十一時頃には其邊迄行かれさうに思はれる、晝飯は先づ清水と定めて又々重い背嚢をドッカと負つ

て出掛た、是から三角點のある所迄頂上のある山が二つある、間近にあるのはあまり高くはないが其の次のは中々大きく見える、霧でもかゝつて來ると一層擴大して來るので丸で清水の最高點としか思へない、參謀本部の地圖には米突が載せてないけれども確かに二六〇〇米突以上はある、して見ると三角點のある所が二五八九米突だからそれより十二三米突高い事になつてゐるので、三角點の北三丁許りの所に清水全山の最高點二六〇五米突とあるのと標高に於て全く匹敵してゐる、霧でもある時行手に此大峯が遮る時清水の最高點と間違はぬ様に一寸御注意して置く、自分は假に此の峯を東清水岳と稱へ三角點のある一帯の峯を西清水岳と呼びたいと思ふ、で東清水岳と西清水岳の地形的の相違を一口に云ふと東のものは峯の東と北に急傾斜があつて西側は所謂清水平につゞいて平坦であるが西清水は東と南に清水平を控へて居る丈けに此邊の尾根に珍しい程廣い空地がある、所が峯の西側は偃松の老木が生茂つて而かも可成りの急斜面である、西北側は尾根から殆んど絶壁をなしてゐる、岩石に就いて云ふと丸で比較にならぬ程東清水の方が磊々たる破岩に富んでゐる、然るに西清水には邪魔になる様な石コロは先づ無いと云つて差支ない。

休憩地から暫く進むと最初の小丘に出る、北側には雪が残つてゐる、之れを跨ぐと尾根が非常に小さくなつて尖つて來る、南側は一面の偃松で而かも急である、又北側は稍々緩傾斜で殘雪が崖迄連つてゐる、尾根と雪の間に高山植物の可憐な花がちら／＼見える、そこで北側に下りて雪を踏んで二三町下ると雪が絶えて更に急勾配になるので草に絶つて刀の刃の様な尾根に出て偃松を踏み越え乗り越えて三四町下ると一寸偃松の切目があつて之れから東清水への上りとなる、清水谷から柳又谷の方への峠と云ふ場所である、清水乗越と呼ぶ、蓋し適切な命名であらう、南側祖母谷方面は相變らず偃松の密生と岩石の凸兀とで通過困難である、然しズット下へ廻れば比較的樂に行けさうに見える、今迄來た所でも大抵さうの様である、然るに北側の方面は露出した岩で偃松などは生じ得ないが幸な事

◎白馬岳より越中小川温泉に出るの記 鈴木

七四

には尾根の間近な所から下の方迄大残雪があつて然かも巾が一間乃至三尺位あるのであるから爪先上りの傾斜には雪上を進むのが最も都合が好い、雪を上り切つて仕舞ふと黒ボカの土になつて雪の解た許りのブカ／＼した上りとなる、頂きに少し許り残つてゐる雪が太陽の復射熱でどし／＼解けるので中央は自から凹んでそこにチヨロ／＼水が流れてゐる、其のほとりにイワグルマが澤山芽を出してゐる、水の絶えた所即ち雪、雪の絶えた所即ち頂であるが水道に附いて眞直登つた所は絶壁状をしてゐて猪でも進む事が出来ない、そこで左向けをしてミヤハンノキ、ナ、カマド等の灌木に縋つて一足で東清水の絶頂を跨ぐと晝が近いたか俄かに空腹を覺えた、南側は岩が多いので一寸恐さうであるが岩の下は緩傾斜で祖母谷中ノ谷が目の眞下に開けてゐる、之れから尾根は西に擴大して所謂清水平となるので三四尺位の灌木帯が偃松と纏れ合つて其の間に人の通つた明かな徑がある、一寸高山公園と云ひたい様な所だ、徑は左右二筋に岐れてゐるが左に沿うて行くと人夫が最少し先きに水のある所があるからそこで午食を遣ふ事にしませうと云ふ、時計を見ると十一時だ、暫く行くと徑が又二つに岐れて眞直行くところだ、下に下つて祖母谷の西ノ谷に向ひさうだ、善次が以前來た時確かに水のある所を發見して晝飯を焚いた事があるが今は一寸どの邊だつたか見當が付かないと云ひ出した、兎に角眞直行くのは駄目と見たから右に北に向つて少し丈けの高い灌木林の中を進むと、又徑が二つあつて右のは最初二筋あつた徑の右のものど續いてゐる様に思はれるので左に取つて清水平の尾根に出る、善次は荷を置くなり水のある場所を搜索しに東側の偃松の中や岩の下などを奔走してゐたがやがて駄目ですと云つて失望の目を睜つて戻つて來た、前年來た時は雪がよく解けて水がつひ下の平地に溜つてゐたが今年はどう云ふものか雪も少く濕どりしてはゐるが水は全く溜る程ないとの事、詮方なく茲に荷を崩して晝食を行ふ事とした、十一時半であつた、然し水が無いので已むを得ず雪を解かして飯を炊く事とする、善次が鍋を提げて萬年不解の白雪を山と積んで戻つて來ると一方徳司と榮重とは偃松

の枯枝を之れも劣らず山と積んで火を點じた、山へ來ると凡てが山々である、話も山の事で持切る、珍しい事、面白い事、感慨無量な山の印象、傳説的な山の神話、話したい事は全く山々ある、只だ山と積んでも一向にオーソリチーの無いのは不思議なるかな金銀貨幣である、百萬の金貨より一粒の米が物を云ふ、山は成金の勢力圏外に高く奉られてある、山は此點から見ても平民的なものである、貴賤貧富の區別なき日夜の山岳生活は確かに純然たる平等主義に一致すると思ふ。

「地獄の沙汰も金次第」と云ふが山丈は金次第でどうする事も出来ない、山に於ける自分達は正に人即自然と云ふ直接關係にあるものと云へるであらう。

焚火にかけられた、鍋の雪は存外解けるのに手間取られた、それは高山の稀薄な空氣に火力が自然弱い上に風が少し強いので火が横這ひしてよく利かない、のみならず所謂氷の潜熱で解けた普通の水とは凡そ二倍も熱を要する譯であるからだ、人夫は少し苛立つて大きな枝をどしどし燻べたので流石の雪も大分暖まつて來た、はよいが解けるに従つて雪の中から何時となく混入した汚物がアブクになつて上に浮て來て、それと焚火の燃さしに附着してゐる白灰が風で舞出すものだから蓋のない鍋には遠慮なく飛込むので水は出來たが氣味の悪い事夥しい、然し贅澤は云つて居られないのでそれで汁を拵へて朝握つた「結び」をバク付く、バサ〜として少しも粘着性がない、閉口して例の水で茶を入れ、やうやくにして流込んだ處へ福神漬や佃煮や、梅干や昆布の煮たのなどを詰め込んで先づ晝飯は濟んだ事になつた。

茲が丁度祖母谷の西ノ谷の頭になつてゐるで横尾根を下れば、それへ出られる、一應地圖を按じて西北の方向に西清水即ち三角點のある峯へ向ふ、清水平の名に違はず坦々たる廣場を形成してゐる、地質が大分赭い色をしてゐる、こゝで初めてムシトリスミレを發見した、丁度今小蠅がどまつてそれを吸ひ付け所たである、可愛らしい草だ、が恐ろしい手段を授かつてゐるものだとも思つた、一行は

眺望心のまゝに利く好天氣の恵に浴して劍、立山、薬師から槍方面を望むと同様に朝日岳を盟主とした越後越中境の連山を心行く許り眺め入り乍ら山を中心とした四方山話に花が咲いて身も心も打忘れ只管悦に入つたのであつた。

爪先上りにだら／＼上ると程なく南北に續いた残雪に出會つた、其残雪の下部から、今日の炎暑に遺憾なく熱せられて解出した水が、水晶の様な清らかさと冷たさを有つて惜氣もなく流れ出して南の谷に注いでゐるのである、ガツと蹠んで掬ひ上げたコップには山の冷氣に雲濁りがして水とは思へぬ神秘の靈水に渴した喉を濕したのであつた、此清い千古の水あつてこそ山の名も清水と謠はれたのであらう、さるにても、神ならぬ身の先見なく此の清水をよそにしてあの雪解の汚水に午食を食つた事の果敢なさよ。

此處こそ此山稜に並ない屈強の露營地である、附近には高山植物が相當に密生してゐる、こんな處にこそ却て珍種があるのかもしれないと思ふ、行手が心掛りになるのでソコ／＼に通過して残雪を上り詰めると爪先上りの草原に出る、オニユリ、イワクルマ、イチゲの類が足の踏み所もない程に繁茂してゐる。

程なく西清水の頂上に達した、三角點は少し南にあるが頂上より十六米突許り低い事になつてゐる、然し見た所では精々五六米突の差としきや思へない位である、頂上から眞北に越中の朝日岳が圓頂を見せて陣取つてゐるのが見える、雄大なものだ、殊にゼイマイ谷の急勾配の残雪が輝いてゐるのが如何にも高山味を覺えさせる、翻つて過ぎ越し方を見遣れば東清水の後ろに白馬朝日岳それから右に鐘ヶ岳左に鉢ヶ岳雪倉岳などがヅラリと並んで見える、眞西に見えるのは突坂山で西北に一段低く二つ峯を有つてゐるのが目指す猫又山である、三角點のある頂の下に大きな森が見える、西清水の南の方の尾根は誠に緩かな勾配を有つてゐてダラ／＼下りに低く見える不歸岳に行ける、不歸との距離

は僅々一里位のものだのに標高に於て約五百五十米突の差があるのだから丸で富士の五合目から太郎坊へ下る體たらくだと思へばよい、只だ石や、藪が所々に邪魔をするからそれ丈けは難物だ。

清水の頂上を下り始めたのは午後二時半であつた、猫又の三角點迄は直徑半里の距離であるが相當に難場があるから標高に於て四百米突の差がある位は大して樂を表徴する事にならぬ、下りなるが故に却て困ると云ふ様な所も出て来る。

下ると忽ち偃松の藪になる、殊に此邊になると高度が減じて来るせいか何れも非常によく發育してゐるので三四寸位の太さのある奴が七重八重に組合つて高さも三尺位は確かにある、尾根の北側は削れて恐ろしい崖になつてゐるので、嫌でも南側の此の偃松のヤブを通過しなければならぬ、(偃松の枝が崖に突出してゐるのでどうしても背稜を通過するのが危険である) 止むを得ず偃松の枝をふんまへへ、兩手で枝先を捕へながら下つて行く、勾配も随分急である、丸で裸馬に乗つてゐる様な氣がした、偃松も未だよいが丁度花盛りと來てゐるので枝を踏み締める度に花粉が大々的に飛散してそれが目と云はず鼻と云はず體中に行き亘るので動もすれば嚏が出さうになる、之れも又苦しい經驗の一つであつた、約十町も降ると一寸凹んだタルミに出た、此のタルミを南側に沿うて下れば猫又谷に出られさうである、其方角に今立つて居た清水の三角點の方から續いて來られさうな人の道らしい細徑がついてゐる、仰いで清水の三角點の方を見ると偃松のヤブ無しに樂の此のタルミに下りて來られる様に思はれた、風が遮ぎられてか蒸し暑い所なので背囊を卸しても汗がだら／＼出て來る、殊に偃松のヤブで氣を使つたせいか馬鹿に體がホテル、就中偃松下りて手を焼いたのはアルペンストックだ、此杖も場所と使用法に依つては、一人前以上の働きのするがヤブの通過と岩石の昇降には大の障碍物となる、時としては自分の杖で怪我をする事さへ出來するかもしれない、自分は今度初めてストックを使用して見たのであるが無器用な人、山慣れない人、足の弱い人にはそれ程御勧め出來ないのみならず

大抵な山ならば却て持つて行かぬ事をお勧めしたい、然し急傾斜の山腹を搦んだり、岩石の少ない断崖を上下する時又は道のない崖に足掛りを作つて行く時、又は雪溪の坂路を上る時などには斧の部分に土中に引掛けたり、鍬で足止りを掘つたり、又は杖先の槍を地面に差したりして、勞を節約し危険を防護し、又は歩行を早めるのに與つて力がある、器用にさへ使用すれば到底金剛杖などの企て及ばない役立ちをするものだ、分り切つた事かも知れぬが、初めて使用した感想を述べて置く。

北側は柳又谷に面して尾根から崩れて急傾斜をなしてゐる、南側は三四尺位の灌木のヤブが続いてゐる、然し今迄と違つて危いながらも尾根が傳へる、岩の多い尾根を上り切ると尖つた頂に出る、之れから岩を踏んで下ると北側の斜面が少し緩になつて雪が大分残つてゐる、下りにはキヌガササウの二尺以上に成育して居るのが群生して來た、あまり大きいので氣味が悪い程だ、何れにしても大分標高の下つた事を示す、オホイタドリ、アザミ、スカンポなども到る所にある、灌木林の中に偃松などが一二本見えるが何れも偃松の特性を失つて偃つては居ないで突立つてゐる、尾根が少し西に曲つて上りになる所で十坪許りの平地に出る、此平地には雪が残つて居て日中は太陽の熱で少し宛解けてゐるらしいが何にしる猪口の様になつてゐるので水は雪の下に溜つてゐるのか一寸分らない、小憩して出發する道らしい小徑が左の方について居るのでそれを上つて行くよヤブになつて行けないと云つて徳司が騒いでゐる、ので殿軍の自分は戻つて右即ち北側の崖を上つて篠竹混りのヤブに入ると人の通つた様な跡があるのでドシ／＼押分けて行くよ程なくヤブが切れて前方の開けた所へ出た、雪が北側の緩斜面に巾狭く長く残つて居る、此處が猫又の東の峯で之れから道が少し南に下つて行く様になるとダラ／＼の平地に出る、雪解けの清水が流れて好個の露營地だ、一行の誰やらは茲で今日は泊らうぢやあないかと云ひ出した、然し先の分らぬ旅だから一步も前進して置いた方が結局安全と云ふ事になつて尙行軍する事として小憩する、善次が西清水の下りで偃松の間にライテウの居たのを見た話

した、ライテウは鷹にやられるので晴れた日には決して飛出さぬさうである、霧の深い日を選んで峯に現はれるので此夏の様に晴天續きでは殆ど見られないのだ、ライテウの唯一の住處は偃松のヤブで又彼の唯一の食料は其の實ださうである、之れは自分の調べた譯ではない善次の話を請賣した迄の事である。

東猫又の此平地から眞西に極緩傾斜な尾根を一里半下れば突坂山に達することが出来る、それから更に西に一文字に尾根を下れば黒薙川のはざり黒薙温泉に出られる、其川下、黒部川とのドウ迄來れば立派な道がある、此の徑は人も時々は通過するらしい形跡がある、其の尾根の南側は猫又の嶮谷である。

平地を西北に進むと益々下りとなつて愈々オーレンドメン谷の頭に來た、雪が回みにあつて其末端は解けて流になつてゐる更に凹に沿うて下ると雪溪に落合ふ、それなり谷を下る譯にも行かないので(五六町下は絶壁の様だから)谷の頭に這上つて灌木の林の中を西に北に搦むと又狭い平地に出て雪解けの流れがあつて又好個の露營地を提供して居る、日も大分西に傾いたので急ぎ足で巾廣い尾根を猫又山(自分は西猫又と呼びたい)の三角櫓に着いたのは四時四十分であつた、一齊に荷を卸して休憩南に黒部川を隔て、劍と立山、北に柳又谷を隔て、越中朝日岳から目指す横山峠、越道峠思ふまゝに指呼し得るのだ、標高は二二一七米突で東猫又より八〇米突低く西清水の最高點から見ると更に三〇〇米突低い事になる。

愈々暮が近いたので休憩はそこ〜にして、記念の撮影をして方向を北に取つて右にオーレンドメン谷に沿うて尾根を下る事にした、日は尙高いが時刻は五時に近いので到底今日は谷迄下る事は不可能であるから下り路に適當な露營地がありさへしたらそこに天幕を張る事に定めてヒタ走りに雪溜りの山の腹を滑つて行く、善次は良い露營地を發見した者には褒美を出して貰ふ事にしたいもんだ等と

◎白馬岳より越中小川温泉に出るの記 鈴木

八〇

冗談を云つたが御常人中々熱心に道を求めて下へ々々行く所好漢愛すべきものがある、道を捜し歩く事にかけては人夫中善次が第一の妙者だ、彼は雑木林の中をも厭はず尾根から尾根に沿うて下つて行く一方に自分等と徳司は東に寄つた所の可成り長い小雪溪を滑つて行く事にした、高田君非常の元氣でスキー式に杖を頼りに雪上を下つた、時々一問位は急滑りをやるので自分等は冷々する事がある三十分許り下ると谷が狭まつてタキになつた雪が絶えて其絶間からチョロ／＼水が流れてゐる。

『道はどうだい、』と徳司が怒鳴る。

『大丈夫、あるぞッ』と善次が答へるが姿は見ない『何處だい』と榮重が叫ぶ。

『此ッ方だーい』と云ふ善次の聲は大分西の方面である。

『待てよッ』と徳司が答へる、谷からハンノキに捉まり乍ら尾根に出ると竹藪があつて少し下に行けば草のある空地がある、勾配は緩であるが夜營には急過ぎる、然し日が益々暮れて來たので不充分乍ら此處に二日目の露泊をする事に定めた、何と云つても腹は減るし、平地はなし、水な少ないと來て居るのだから心細い露宿であるが善次の報告に依れば柳又谷は尙餘程深いし、少し下の三坪程の平地は雪の解けた許りで濕氣て居る上に蠅が非常に多いさうであるから尾根の一角に天幕を張つてヤレヤレ御苦勞の背囊を卸し襯衣一枚になつて漸く人間前になつて、谷迄は十二三間の距離があるので途中の竹藪を山刀で切開いて道を付けて置く、今日は比較的旅程も埒り歧路にも立入らず疲勞も大して感せず先づ々々大成功だと云ふので澱粉しるこを作つて祝ふ、美味忘れられざるものあり、暮れぬ内にと急いで谷に下りて顔を洗はうとすると切れさうな冷たさで逆も手拭さへ絞れない位だ、辛ふじて手拭を濕して試みに顔を蔽へば山氣雪に泌みてか四肢慄ふが様である、戻つて天幕に入ると小田原提灯の燈火仄かに草の褥を照して物哀れである、越中の朝日岳が悠々と前面に控へて居る西に越道峠の峯がよく見える、十日の月は頭上に高く輝いてゐる、明日の晴天を祈つて寢に就く、前夜に白馬の夜風に寒

氣身に泌みて安眠を得られなかつた一行は今夜こそと云ひ合つて草枕はしたものの、傾斜地の事であるから寝返りを打つ度に自然とズリ下つて頭も腹も足も相合してどれが誰の所有物だか一寸分らなくなつて仕舞ふ、互に引き合つて漸く是れが自分の頭だソレが徳の背中だ、アレが善の足だと云ふ様に見當がつく次第なので到底望んだ安眠が出来なかつた、唯だ比較的良好よく眠つた様に見えたのは入口の榮重と一番低い所は座を占めた高島君とであつた。

## 二、柳又谷の渡渉

明くれば七月二十九日、今海拔一五〇〇米突の高地に起床した所である、白馬頂上程ではないが中寒冷である、四時に天幕を畳むで一同焚火をしてあたる、大分暖まつたので人夫は炊事に取掛つた、徳司は米を手鍋に容れて竹籤の向ふの谷へ下りて行つた、自分は齒磨を楊枝で使ひながら手拭を肩に引掛けてやをら竹籤を越さうとするご下から徳司が駆け上つて来て「駄目です、駄目です」と云ふ、見ると手鍋に依然として舊の通りの米を入れたまゝ掲げて居る、果せるかな谷のチョロ／＼水が夜の冷気で凝結して押せど叩けど水の滴さへ無いと云ふ、成程行つて見ると御話の通りでどうする事も出来ない、止むを得ず戻つては見たが口の中が齒磨で一杯になつて居るのだから實に閉口した、矢鱈に唾を吐いて見たが齒の裏に附着して居る細末が粉が特に強い芳香を放つて如何にも困る、漸くにして高島君の水筒に残つてゐる水を一杯貰て何遍となくゴボ／＼をやつて少しは凌げる様になつた、所が飯が焚けないと來たには一層困つた、此邊の雪は到底飲料にはならぬと人夫が云ふので（頂上の雪でさへ随分水にすると氣味が悪かつた経験があるから）寔に尤の事と思つて先づ急いで柳又谷の岸迄下ると云ふ事にした、幸ひ前夜の残飯が飯盒に二杯あつたので之れを皆して分配して食ふ事にし水筒の残水を沸かしてお茶を入れた、思へば貧弱な朝餉もあつたものだ、其の代り道すがら氷砂糖と鯉節、

鰯などを盛んに嚙つた、一寸考へるこんな出来事は嘘か作り事の様であるが一言一句間違のない事實なのだから驚く、これも高山で無ければ獲られない経験である、前夜からの事實を綜合して見ると此處を露营地としての選定は全然失敗に終つた事は争へない。

愈々露营地を跡に出發したのは彼是六時であつた、柳又谷から霧がモク／＼上つて朝日岳方面一帯を埋めて居る、然し横山峠も、越道峠も正面に展開して眺められる、徑らしい所を下ると前方一面の篠笹藪となる、其正面を潜り抜けると真正面は急な大澤になつてゐるので徑の跡のある左の尾根を竹に支へられ乍ら搦んで下ると忽ちに小徑のある残雪の空地へ出る、之れを真直に下ると一寸した平地があつて雪解の水が溜つて居る、此處ならば露営には上々である、先の分らぬ旅はこんな所で大した損と馬鹿を見るものだ。

雪の上に熊の足跡がある、何でも近い處に穴でもありさうだと善次が脅かす、今下つて來た徑に跟いて進むと藪になつて程なく急下のタキにはなるし方角も少し西に偏するので右に小高い丘に出て西北方に進路を取つて飽迄尾根傳ひと云ふ方針で篠竹のヤブを危い足取で練つて行く、ストックが邪魔になつて却々樂ではない、暫くするとヤブが少し薄くなつて下に大きな潤葉樹が見える、所が其處へ出る迄が大變だ、尾根の北側は篠と檜であるが南側は樅の密林である、植物分布上から見て所謂針葉喬木帯迄下つた譯である、標高は約一三〇〇米突位であらう、一行は篠徑から出て南側の樅林に沿つて尾根の直下を暫く横に這ふてから再び篠と檜の尾根に出て急轉直下すると麤て例の目標とする樹の下に着く、此處で小憩、谷への下り路を案じた、結局此尾根をづん／＼下つて横山峠の方向に進めば間違なしと云ふ事に定めて人夫を勵まし乍ら篠潜りを續けた、三四町下ると尾根の西側に少し凹んだ道らしい徑に出た、之れに沿うて行くと尾根が二つに分れる、ごつちにしやうかと頗る迷つた、地圖を見ると柳又迄下れば向岸に林道がついて居るので先づ安心だから何でも早くに柳又の岸に出る算段が

最も適當だと考へた、それで西に向ふて居る尾根より北に谷に直下して居る尾根の方が少くも地圖の上では對角線と長方形の短い方の一邊と云ふ様な比例なので北の尾根を指して下る事にした、善次を先鋒にして篠と雜木の中を進むと、徳司が檜の少し大ききうの上に上つて見通しを付けた、其の報告に據ると「少し先に眞北に下る空澤がある、それを行くと谷の崩れ出しのある所に出さうだ唯だ谷に近くなつてタキでもありさうに急になつてゐるので谷の流れが見えない」と云ふのだ、一つ思切つてその空澤を遮二無二下つて此長たらしいヤブ潜りの困難を一氣に突破して見るのも此際決して暴虎馮河の擧ではあるまいと思つて人夫に命じて空澤を直下する事とした。

初めはさまで急でもなくイタトリなどが密生して大分得意になつて石段を下りる様なつもりで一步は一步と捗る道を痛快がつて行つたが約半道も下つたと思ふ頃から急勾配は益々急の度を加へ、石は益々其大を加へてどう／＼えらいタキになつた。

西側のヤブに取付いて木の根、木の枝、草莖を手頼りにして邪魔な杖を適當の場所迄投げ出して置いて所謂タキ除ケノカラミを行るのである、草の莖が切れたり足掛りの石が崩れ落ちたりして一間位は滑り落ちる事は時々ある、こんな風な大小のタキが二つ三つあつて今度は西側に小谿（谷と云ふより澤と云ふ方が適當かもしれない）があつてそれと此大澤とのドウに來る、此のドウの上は四五間の大タキで又タキ除ケノカラミが中々困難である、之れは澤と澤との間の尾根が非常な急であるのとヤブのヒドイせいである、止むを得ず尾根を西の澤に搦むで漸くドウに出る、未だ水がない、だん／＼岩が大きくなると共に澤が少し東へ曲り勝ちになる、即ち柳又谷の上流の方向に曲つて居るので行程の上から云ふと損をした事になる、岩が大きくなるに従つてタキも大規模になるが木が大きくなるのでカラミは比較的樂である、暫くすると水の音が聞え出した、やがて澤にも濕氣が出て五六間下ると氷の様な泉の吹いて居る所があつたので久しい間渴きに渴いた口中を濕すべく飛付く様にしてコップ

の水を盛に飲んだ、誰やらが立て續けに十杯の水を流し込んだには驚いた、人夫を先にやつて十五分餘り此靈泉のほとりに腰を卸してから又急澤を下つて行くど先發した榮重と徳司とはもう柳又谷の岸に着して善次が岩角に獨り佇んでゐる、云ふ迄もなく自分等を待つてゐたのであつた、何故ならば其下に岩傳ひで下らねばならないタキがあつたからだ、此れから下は水はあつても大した難澁な崖もなくジャブ／＼澤の水渡りをやつて居れば程なく柳又谷の岸に下りられるのだ。

愈々待焦がれた柳又の瑠璃の様な急澤のほとりに立つて手も切れさうな雪解けの水に熱い頬を浸したの十一時であつた。

澤と谷との交叉點には三四坪もあらうと云ふ様な雪の塊が土塊の様に黒泥れになつて堆積してゐる、善次と榮重が大速力下飯の仕度をして居る、一同したゝかに腹が減つたので何よりも待たれるのは先づ飯である、其も其の筈、朝飯は例の水結で碌に食はなかつたからだ、煩事の間は何より氣懸りになる向岸の林道の有無を知りたいので徳司に命じて腰迄もぐる柳又の急流を徒涉させて絶壁の様にかぶさつてゐる崖を木の枝にぶら下りながら約二十米突も上つて見て貰つたがどうも小徑が発見されない、二十分許の後空しく戻つて來た、勿論報告は悲觀的である。

朝飯晝飯兼帯のふつくりした上出來の飯（標高が低くなつたのど谷合であるため氣壓が増したのであらう漸く半煮飯を免れた）をたらふく食込んでから人夫の要求で連日の疲勞を、一睡の枕に休むべく午日のかん／＼照り付ける谷のほとりに蔭を敷いて一同横になつた、前途を憂ひつゝ落付かない自分の頭も何時しかウト／＼として果ては熟睡して仕舞つた、徳司に「先生々々」と呼び起されて目を覺ますと一時半である、人夫達は切りと自分を「先生」と呼ぶ、「先生と云はれる程の馬鹿でなし」だが山入りの身は馬鹿でありたい、人夫と一緒に馬鹿生活を續けたい、馬鹿になり切る事が出来る時自然の秘境を體得する事が出来るであらう。

之れから横山峠下迄柳又谷を、モロに下るのであるが雪解けの水が豫想外に嵩んで居るので平均一米突の深さはある、都人の九分九分厘迄夏旱續きの時は山の谷水もテヨロ〜に細まつて谷川の徒渉は易々たるものゝ様に思ふが事實は之れと正反對であつて照りが續けば續く程峯谷々々を蔽ふて居る殘雪が軋々ど解け出して岸壁狭しと谿に押込んで來るのであるから結局照つても降つても夏の雪山に養はるゝ大小の谷川は一年中での水の豊かさを示す時である。而して霜結び雪降る間秋の末から都人が花に狂ふ彌生の春迄只谷一面は蒲團に包まれて水一滴も渴に焦るゝ旅人が口には入らぬのである。

左岸に立並んだ岩石にシガミ付いて時々膝位迄碧潭に洗はれては冷つと感しながら四五間進むと三十間許りは河原となる、此の對岸が此圖にも明かに示されて居る大崩れである、谷の幅が稍々廣くなつたので此近邊では先づ安全な徒渉地である、この道右岸に渡らなければならぬのであるから成るべく流水の淺かな淺瀬を選むで徒渉せねばならないのだ、先づ水深を計ると二尺六七寸ある、徳司と自分が一番身長が高いかそれでも腰位迄はかぶり相である、あとの兩君は人並以上小柄なのでウツカリすると臍迄浸り相である、兎に角淺かど云ふても到底一般人の想像する様なものとは違つて底力の強い足を掬つて引き倒す傾向を有つた流水なのであるから餘程腹に力を入れて踏張らないとふら〜として危険である、因て一同上着をぬいで背囊も何も彼の首の周りに縛り付けてから善次が先登になつて細引の先を握り次ぎに自分次に榮重、それから高田君、高島君と云ふ順で徒渉し出した最後に徳司が岸の岩に嚴然と控へて細引の他の端を握つて力柱になつてゐる、流の真中では全身の力を出して踏み締めた足も危ふく掬はれ相に見えたが高島君の水に這入つた時分には善次は立派に陸の人となつて壘壘無双の柱になつてゐたので何の故障もなく一同易々〜と三間に餘る柳又の清流を左岸から右岸に移つた、さて移つてから例の大崩れの下を岩石を飛びながら下つて行くに崩出しの將に終る所で斷崖となつた、之れから約直径十町許りの沿岸は右岸に急崖が多いので殆んど川原を行く距離より峻崖を搦む

道のりの方が長い程である、山へ来てから凡そ何が一番辛いと云つても此の崖渡り程氣を痛めた仕事は恐らくあるまい、殆ど垂直の岩壁の中央や其の頭を僅かに細い灌木か草の枝や根に大切な生命を任せて横から横へと蟹這をするのである、或時は岩壁の途中で握るに草一本木一本なく掛けるに一指の場所をも與へて呉れない一枚岩に出合つて氣骨の折れる二三十米突の尾根の下側迄登りつめた事さへあつた、參謀本部の五萬分ノ一地圖には此部分にも林道の點線が入れてある、之れをしも小徑と云ひ得るか、或は此柳又の右岸何方かに所謂小徑なるものがあるにも拘らず自分等一行のみよく之を捜し得ずして徒らに、長き死の嶮崖を上下するの愚を敢てしたのであらうか、敢て參謀本部陸地測量部の賢士に糾さんと欲する所である。

崖崩れの所から川原に下りて二三町平らな所を下ると谷が南に一寸曲つて正面が小丘になる、四時半になるので此小丘の向ふで露營する事にして小憩の後人道らしい登り口を丘に上ると程なく徑は消えて篠竹、黒モヂ、ホウノキ、トチ、ナラ等の密生した而かも冬堆雪に虐げられて皆横這ひに成育して居るヤブの中を彼方此方と漂ひながら、それでもどうく水の豊富な澤に出た、澤のほとりのナラにの刀削が入れてあるのを見ると何でも人が通過したに違ひない横山峠の上り口は此の水澤に相違ないと思つたが誤りで自分は一行に此澤上りを命じた、時間は六時になる、日は西に落ち暮色山谷に迫つて遙か南の突阪山も紫の雲に霞んで來た、然し上れど上れど露營に適する廣場がない遂に意を決して谷から凡そ五六十米突上つた澤のほとりに一坪ばかりの場所を見付けて天幕を張る事にした、けれども下が少し平と云ふ丈けで雜草が頭を没する迄に繁茂して居るので先づ之れを薙切つて岩石でこぼこしてゐる地面をならす必要があるのので一同疲れた四肢を極度に奮勵して天幕張りの作業を完成した、徳司は此間に炊事一切を引受け之れもベストを盡して働いてゐる、榮重と善次はどうも路が違つてゐる様に思はれたので荷を卸すや否や澤を上り切つた所迄行つて横山峠と越道峠の見當を付けて

果して之れが横山峠の澤であるかどうかを判断させに行つたのである、荷を卸した兩人は猿さるの様に澤をかけた上つて行つたが四十分許り經つとやがて戻つて來た。曰く、

「澤は上へ行くに従つて東へ東へそれて此右平の大きな尾根に上つて行く様になるので私等は左の山を矢鱈に上つて肩に出て木に登り西北を見ると此の山の直ぐ西に低い峠があつて大分松が生へてゐる、その向ふに例の越道峠らしいものが見えますから横山峠は此の隣りの低い所に違ひありません、此の澤は無論違ひます」

此の報告には自分も全く面目を失した、地圖を首引きにして按じて見たが成程人夫の報告通り此の澤は間違つて居た、明日は必ず人里に出て見せる、又さうでないと言ふと糧食も缺乏して仕舞ふし休暇も切れて仕舞ふ、さうしたら大變だ、斯んな先きの事迄考へ出すと何となく心細くなつた。

白馬から採取して來た高山植物に霧を十分吹いてから少し青臭い味のある澤の水で顔を洗つてやがて寢に就いた、十三夜の月が中空に懸つて思出多き中に、澤水の落つる淙々の音は次第に更ける谷間の兩岸に幽かな響を興へて居た。

### 三、北又谷から小川へ

四時起床六時出發、七月三十日も昨日に劣らぬ好天氣である、高田君は切りに今日は谷間に雲が下りて居なかつたから雨になるかもしれないと云つてゐた、人夫が勢揃ひで之を打消すと「今日は降らない迄も二三日中には屹度降るに違ひない」と非常に自信のある斷定を下した、兎に角今日こそは小川温泉へ出て見せる、さうすれば槍でも鐵砲でも降つて來いである、昨夜は標高の低いため（海拔九〇〇米突）か氣温が大分上つてゐた様だ、寒さをしてんで感じなかつた、其代り薙倒したオホイタドリの葉に無數の尺取蟲がたかつて居たのを知らずに金爛の褥と心得て熟睡したので體中尺取蟲が二度も三

度も寸法を取つたのを氣が付く筈がない、服も天幕も背い此の蟲で氣味の悪い程であつた。

自分等始め人夫一同も今日は非常に大元氣では非でも今夜は小川の湯迄漕ぎ付けると高言しながら澤の水をチャブ付かせては下つて行く、昨夕櫓に刀の切目が有つた所迄來ると澤の右岸に亘つて高く茂つた草を分け乍ら谷の川原に出た、川原は三十間許りで岩壁になる、水は淵となつて岩を繞つてゐる、例の岩搦みで散々肝を煮やしたが朝丈けに疲れが少い、やがて廣い川原に下りた、此の川原は中々大きくもあり長くも續いてゐる、向の岸も廣い川原である、谷は之れから南へ曲つて半里も先きでカシ羅の深澤に合し西に横山の尾根を巻いて更に北行、北又谷を併せ茲に黒蘆川となつて遂に黒部川に投するのである。

自分等は前日空澤を下る時二つに分れた尾根を林道と谷に近い事が唯一の頼み許りに北尾根に付いて下つた譯なのだがよく考へて見ると(あてにした林道がない今日の考とすれば)あの時西尾根を下つて更に分れる二つの尾根の内今度は西を捨て、西北の尾根へ掛つて來れば丁度今向ふに見る澤へ出るので茲の徒渉が多少困難ではあるが自分等が昨日の午後通過した時の様な豪い目には會はずに濟んだらうと思はれる、今後此方面の通過を試みられる方々の爲めに特に御注意して置く次第である。

谷の曲り工合で違ふ方なき横山澤を谷から別れて北に登り始めた頃は土用の日光が赫灼として背中を灸つてゐた、澤の水溜りにオタマチャクシが澤山泳いて居る、川鹿の子ではないかと誰やらが云ふ、人夫は「何アニ墓の子でせう」と云ふ川鹿と墓では同じ蛙族でも印象が大變違ふ、茲では是非川鹿の子として置きたい、可成急な上りであるが、どこか人の通つた様な氣配がして頼もしい、三十分許りで峠の頂に達した、黒モヂ、櫓等が密生してゐる、之こそ違ふ方なき横山峠、一同初めて愁眉を開く、談笑に移る三十分、ニコニコ、峠の命名あり、前方越道峠は目睫の間にある、望遠鏡を取つて行く方を眺めると明かに人道が山腹に付いてゐて峠の上には立派な藁葺の小舎が見える。

横山峠の頂上は實際一尺の平地もない程文字通りの分水嶺になつてゐるから一行六名は丁度一列横隊に刀の刃の様な山稜に腰を掛けて並んだのである、一寸六地藏と云ふ格である、のんびりと休もうにも場所がないのでやがて下り始めた、峠の直下は中々急勾配であるが程なく水が流れ出して草も深く、あたりが何となくジメ／＼してゐる、動もすると滑り相になる、青色の粘土が鐵錆色の粘土や白粘土と混合して澤を形成してゐるのを見ると陶磁器の原料には好さ相だと素人眼が評價を與へた、下るに従つて石と水が多くなつて來た、杉谷に合する所から全く石許りの谷流となる、名前の通り杉谷の附近には杉が澤山生へてゐて何となく人懐かしい氣がする、何處やらで鶯が啼いてゐる、七八町下ると廣い木立に出た、樺の木が亭々と聳えてゐる、荷を卸して顔を洗ひ口を嗽ぎ汗ばんだ背や腹を拭いて少しは我身に返つた様に快々敷なつた、

鶯の聲に聞き惚れて居ると榮重が

「ヤア出て來た出て來た」と云ふ、何者が出て來かと思つて上流の方を見ると大きな墓である、「悠悠たる無恰好」を遺憾なく發揮してゐる、如何にも *Progressive* な動物だと思ふ、もう墓が出て來る様では高山でも何でもないので、もう程なく里に出るに相違ない、之から水が愈々増して谷下りは徒涉一天張りである、其中に川敷が花崗岩床になる、少しタキになつた所は岩許りを手懸りにして下るのだから中々危険である、二三町で北又谷に出ようと思はれる所で花崗岩の一枚床に出た、流水作用で面白く岩は彫られて曲線を畫いてゐる、四五間進むと直下二十尺餘の瀧をなして而かも兩側は切立つた一枚岩の一部分なので頼るにも草一本も生へてゐない、川岸も、瀧壺も兩岸も全部が一つゝきの花崗岩で形成されてあるとは實に想像もつかない程大きなものである、これから數間戻つて北側の崖に飛び付いたが此の崖こそ文字通りの垂直であつて全く木の根と枝に一身を支へて辛くも登攀するのであるから殆ど出入の息さへ忘れてゐる位である、四五間で少し緩傾斜になり尾根を西北に下つて行くど窪へ

出る、檜の老木が朽ち倒れて通路を碍げてゐた、此倒れた上に立つと谷が見えて下の藪を狩つてゐる樵夫態の男を見た、——生きてゐる人間を見た——何と云ふ喜びであつたらう、白馬以來相手變らず主變らず、明暮奇怪な六つの顔ばかり見て居た一同の放つた喜の聲は正に慄えてゐたかもしれない。

善次が小川へ出る道を開くともう之れから立派な人道がついてゐるから迷ふ様な事はない相だ、道程は小川迄三里だと云ふ、所が聞いた一同より聞かれた人夫の驚きは又大層なものであつたらしい、各々異様な姿をして異様な携帶品を運ぶのを見てはごこの馬の骨が何しに愚にもつかぬ谷合から出て来たものだらうと思つたのだ、山の窪を谷へ下り切ると川原に三四十人の人夫達——中に洋服を着た技師らしい男が二人見えた——が晝の休憩をしてゐた、川の中に測量用のポールが二三本立つてゐた、自分等の事を鑛山搜索隊と見たものらしい、其三四十人の連中を率ゐて居るのは北又谷一帯の砂防工事のため夏中出張してゐる富山縣の土木課か山林區署の官吏だ、崖地崩壊土砂扞止のため崩れ出しの處に石垣を築くのである、かくして秋の大水の際黒部の川下に押し出す土砂を未然に抑へて越中平野の安全を圖る企であるのだ、今出た流れは北又谷の一支流であつて板の棧を渡つて流れの右岸に出る直ちに北又本流との間の尾根を乗切つて其の本流のほとりに出て更に一ト山越すと廣い川原に出る、時計を見ると、丁度十一時であつた、之れからは立派な道があるのでもう親船に乗つても同然である、北又谷は思つたより水量が少ない、それでゐる川幅が柳又谷の二倍はあるから徒渉は樂なものである、地圖に水深と1.0—してあるが自分等の通過した時は精々二尺、膝を没する位なものであつた、水量の少ないのはよく水上の山々に雪のない事を證明してゐる、山は次第に淺くなつたのである、約三四町遡ると左岸に廣い川原があつて楊だか榛の木だが大きな影を作つて休憩には持つて來いの所だ、露營には勿體ない位絶好の場所だ、茲で晝食を遣ふ事にした、もう携帶の食料品は一切食切る事にして、各自の背囊から凡そありとあらゆる口に這入るもの全部をひきすり出す、就中懐中しるこ

は最も歓迎された、大鍋一杯嚙らへたが見てゐる内に平げられた、殊に榮重の健胆を以てして尙且し  
るこの後の飯を止めたるに至つては耽食の程度を遺憾なく語つてゐると思ふ、徳司と善次は榮重より  
飯壺に一杯少なかつたため飯を一杯御茶かけで流し込んだ、自分等の仲間では高島君最も健胆を發揮、  
しるこ二杯に飯三杯、味噌（味噌汁用の煉つたもの）山程をペロ／＼嘗めて仕舞つた、甘い／＼と舌  
鼓を打つ事三度、高田君も舌鼓の音に刺戟されたか一杯味噌飯を食ふ、其他罐詰類全部開罐、矢鱈に  
詰め込む、どうやら片が付いた頃には日盛りの太陽が北又川原の眞上から岩石を直射して處々に芽生  
した草の床から陽炎が立ち騰つてゐた、一町許り下に深い一寸入込んだ淵があつて泳ぐには持つて來  
いだが先の急がれる旅だから、一時頃には出發した、川原傳ひに坦々たる道を行くと右岸に渡る立派  
な釣橋が架つてゐた、十五六間は確かにある、川を渡ると藁小屋が四五軒建つてゐる、例の砂防工事  
の團體の營舎である、之れから道は上りになつて、谷を脚下に瞰下しながら崖の中腹につけられた小  
徑を北進するのだ、所々澤の下に泥まみれの殘雪の塊を見出した、半里許りで道は北又谷を捨て、越  
道澤に沿うて上る、此邊の北又谷は水量が愈々少なくなつて東北に向つて山深く這つてゐる、越道澤  
とのドウから半里遡ると、其處には魚止瀧と云ふタルがある、結局越後境の犬ヶ嶽（二五九三米突）の  
南麓に水源を發し吹澤谷、黒岩谷を併せ、更に長梅山（二〇七一、五米突）の漏斗谷及イブリ山（一八一  
六米突）のイブリ谷と合して此の魚止に流れて來るのである、水源迄延長凡そ三里半許りであらう。  
越道澤の西側を五六町登ると道は澤を渡つて東側に移る、これから澤は西に尾根を繞つてゐるので  
自然道は尾根を乗越える様になる、峠迄は僅々數町であるが此の上りが中々蒸熱い、峠に立つと越道  
越えの涼しい微風が坐ろに來つて何とも譬へ様のない心好さを全身に與へた、四圍山又山で眺望は全  
くない、峠を下ると前の澤のほとりになる、水が如何にも美しく、清鮮掬すべきものがある、一行を  
先へ遣つて緩つくり顔を洗つたら腸迄洗濯した様な氣分になつた。

行手の見極めが付いた一行は益々士氣奮つて約三十分の後にはだら／＼上りの樂な路を三日越し憧憬の的になつてゐた越道峠の頂に出た、頂には先刻横山峠から見た茅葺の小屋が南面して建つてゐる、入口には大阪大林區署富山小林區署臨時派出所とあつて尙「無用の者入るべからず」の常套語が札に書かれてあつた、仕事に出掛けて居るので小屋の中に人影は見えない、水は頂上の少し下、西の山から流れてゐる小さな澤にある、附近に塵埃が捨てゝあつたりして一寸飲む氣にならなかつた、頂上へ来て小川の谷を俯瞰しても只だ谷と云ふ事、低くなつたと思ふ事以外には何等の感想も起つて來ない、峠としては全く價値のないものだ、せめて日本海でも展望出來るといゝのだが。

頂上は休憩なしで通過して行く、三十間許り下つた所に清水が湧いてゐる、あまり上等ではないがよく澄んでゐるので人夫が晝の残飯を平げると云ふので其間暫時休憩、自分等三人は人夫に先發してジツクザツクの路を川の右岸に沿うてヒタ下りに下つた、西日を遮るものがないので草息切れのする事夥しい、半里許り下ると澤があつて危い釣橋が架つてゐる、長さは五間位のものだ、更に十五町も下ると尾安谷を渡る、茲に水出のため大崩れとなつたので谷に石垣を作つて崩れを止めてゐる、谷の水は石垣を漚となつて、谷を渡る旅人に涼氣を與へる、今尙ほ工事中の様である、谷の上は岩石を切割つて道が出來てゐる、編笠と菅笠を戴いた三人連れの樵夫風の男に遭ふ、「只今御戻りですか」と慇懃に挨拶した、自分等を小林區署の御役人と見たものらしい、先生にもなつたり御役人にもなつたり浮世の旅は中々面白い、更に半里も下ると舊小川温泉場の元湯のあつた場所が見えて温泉を引いてゐる赤塗りの立派な鐵管が小川を跨いでゐるのが見える、遠くから見ると丸で鐵橋が架してある様だ、小川を左岸に渡ると程なく南から來る一寸大きな谷があつて十二三間の釣橋が架してある、之れから山の腹について行けば十町足らずで現在の小川温泉場に出る、旅館が一軒に雜品を商ふ家が二三軒、曖昧な料理屋が一軒丈りあるばかりだ、人夫は二十分許りすると着いた小川を左に渡つた所から

谷を徒渉して川原傳ひに來たのだ、此方が二町は近からうと思ふ、疲れた腰を温泉場の入口に卸したのは四時少し過ぎだった、此の温泉は全部間貸し自炊制度で宿では賄をしないさうだ、殊に無雜作に建てられた、建物の中に約二百人を收容してゐるので六疊に七人平均は確かに寢起をしてゐるとの話、それ丈けでも泊りは降參と思つてゐると、向から自炊と満員とを理由として豫め御斷を云はれたので、宿も却々御察がよいとは誰やらの話。

泊はよいにしても腹の減つたのは何とかしなければならぬから、強いて頼んで夕飯だけは拵へて貰つて、一同六人成功の祝盃を擧げた。

此れで自分等の旅程は全く終結を告げたのである、此處から泊町迄小川に沿うた立派な街道三里の夜道を掉尾の勇を奮つて強行し、九時何分かに出る上野行の列車に乗込んだのである。

(附記) 白馬から小川へ出る道は前人未踏の地でない事は明で、現に木暮氏の談によるも人夫故丸山廣太郎が某氏の伴をして抜けた事があるさうだし猫又の頂上横山峠附近の様子から推測して、一年に數回は獵師か樵夫位は此徑を通過した事がありさうである、殊に日本山嶽志二六〇頁白馬嶽の記事中に「富山圖輻ニ據レバ下新川郡山崎村大字山崎ナル小川温泉ヨリ横山嶺・楊侯(柳又谷?)、清水畝ヲ經テ此山ニ登リ得可キニ似タリ」とあり又同五八五頁大連華山の所にも「越中國下新川郡山崎村大字山崎ヨリ七里十八町ニシテ其山頂ニ達ス」とあるのを見ると、前人が既に自分等の行程と略同一の通路を辿つて小川から白馬へ逆に登つた事の想像が付く、只だ現在四ツ家の人夫中には一人として此方面に足を入れた者が無い、従つて最近數年間には少くも此處を通過した登山家も旅人もない譯である。

尙ほ最後に此旅行に就いて懇篤到らざるなき助言を惜まれなかつた先輩高野氏、三枝氏並に木暮氏に滿腔の謝意を表するものである。(終)

## 山の生ひ立ち

辻 村 太 郎

「我等は云へり、地體の外部の縮小より生ずる張力の結果は切線の皺曲動と垂直なる陥没を生ずる、切線の運動に依て彼の長大なる皺曲脈は生ぜり、其は世界的一端より他端まで貫けり、依て世界の最高山岳なるガウリサンカールやムスタグ山系中の無名の高峯K<sub>2</sub>や中央亞細亞高山の凡ての巨人は築かれたり、フィンステルアーホルンの北側に於て侏羅紀石灰岩と片麻岩とを練り混ぜ、ユンクフラウの絶巔まで片麻岩をば侏羅の上に持ち運びつ。」

(ジウス氏著「アントリッツテアエルテ」(地相篇)卷一)

「アルプスは此の種類の風景の著名なる一例として引用するを得べし、此等山岳の地質的形象は凡て過去に於ける劇其なる動搖を暗示せり、されど各方面に於て甚大なる削剝の證據は我等の眼中に入る、扭られ、揉まれて固き石灰岩層は恰も轉輾反側するが如く山麓より山頂に連れり。而して其等の岩層は至る所其の斷ち切られたる末端を空中に現し其の末端より推して巨大なる物質が消耗せられたるを知ること容易なり、山系の隆起の後直に地が呈せし形狀は問はずとも、なほ至る所龐大なる削剝を證するを得、アルバイン表面が初めて現れてより以來常に働ける陸上の營力は谷を掘り、或は最初の凹所に於てし或は斜面に於てす、加之皺曲は平削せられ湖盆は掘鑿せられ山腹は刻まれて崖となり<sup>ナイグ</sup>圈谷となり峯は割られて<sup>キヒト</sup>切所と<sup>ネイユ</sup>針峯とに化し、今や原表面の何物をも留むることなし。斯くしてアルプスは驚くべき地の衝動と次いで起れる長時削減との不可思議なる記念として存せり。」

(ゲーキー氏著「地質學教科書」第二卷一九〇三年版)

「最近十年若くは廿年間に吾人は多くの山脈が前輪廻に生せる準平原の隆起して多少彫刻せられたるものなるを知れり、既述せる場合以外にド、マルトン又はトランスシルヴァニツシエ、アルペンよりダーネス、シュヴィジク及グルントはディナリツシエゲビルグに於て此の種の形状を見たり、……諸威及ウラルの高原は數多の研究により隆起せる準平原と認められ、ウィリスは支那に彫刻せられたる準平原を見アンドリッスは北濠洲に見たり、ポルンハハルト、ウーリツヒ及イエーゲルは東亞非利加よりバツサージ及ハッセルトは南西及西亞非利加より之を報告せり、カイデルは廣域に涉れるものをアルジエンチン、アンデスの前山にありと記す、其は天山に見たるものものに比して更に明瞭なるものなりしと云ふ。ディラー及他の人々は米國北西部の或る山脈が二回輪廻の形なるを述べドーンソンは深刻せられたる大準平原を西加奈太の山の中に、ジルベルトはアラスカの或る山間に同様なるものゝ存するを知れり。

是等の觀察は山岳の地質學的歴史に對して特別な意義を有す。如何となれば此等山岳の現在に於ける高峻なる位置は其の錯亂せる内部構造を生せる地殼運動の結果に非ずして近代に於ける比較的簡單なる隆起に歸すべきを語ればなり。」  
(デーヴィス氏著「地形の演釋」一九二二年版)

或る時は雲に隠れたりまた顯れたりしても地平線の上に聳へた其の形は常に同じであつた、年毎に雪を戴きまた雪が解けて其の殘雪の秋にも變りがなかつた、我等の父は我等が今見ると同じ山を見て育ち、其の父の祖父も亦寸分違はぬ山をみた、故に山岳は無限過去に於ても亦永劫の未來に於ても同じ姿を保つであらうと思ふのは勿論極めて原始的な考であつて、今は誰一人信するものも無いであらうが、其の山の生ひ立ちと行く末は果して何なものであらうか、此處に譯出した地質學若くは地理學者の著述の一節にも著しき思想の相違が窺はれる。

ジュスウ氏の大著地相篇第一卷の結論は雄大な文章である、世界の大山脈を作つてゐる地殼の皺は

大洋の長濤のやうに取り扱はれて山脈は此等の大波動の表現であるかのやうに記される、削剝作用に向つては多大の注意が拂はれて居ないやうに見える、けれども事實に於て現代の大山岳の怪奇なる容貌は其の構造を作つた皺曲の直接の結果では無いらしい。それは建築が其の用材の組織によらないのと同様である。然しながらジュウス氏の偉大なことは其の爲に少しも減じない。我等は地殻の構造自身に興味にも満足することが出来るからである。

アルプスの彫刻はゲーキー氏の流麗な筆で簡潔に述べられる、此を讀むと皺曲と削剝とが兩々相俟つて初めて婉麗なアルプスの峯が作られるやうに感ずる、前者は彫刻せらるべき大理石を置く、雪、氷、流水の態は自然の意匠のまゝに美しい彫像を作り上げる。山岳の構造論が大成された時よりは遅れて其の地形論も略ぼ完成の域に近からうとしてゐる、新しい地形學の進路を開拓したデーヴィス氏の著書から譯出した三番目の文は其の消息を傳ふるものである。最早や多くの大山脈をして雲表に秀でしめたのは地殻の長濤では無くて更に穩かではあるが大きな潮汐の波のやうなものであつた、ペンク氏が解釋したやうにアルプスの連山も元とは準平原に近き丘陵地であつたとするならば、緑の空の下に雪と氷の中から突きでてゐるユンクフラウとフィンステラールホルンの忿怒は外観だけである、その九回せる岩石の臍は其の形相と無關係である。此を説明するには氷河輪廻の觀念があれば足りる。片麻岩のやうな古岩石が練り物のやうに捏ねられ、疊まれ荒浪のやうに押し上げられたるが爲にモンテローザは天外に秀でたのでは無い。恐らく前輪廻に於て堅きが故に僅かに残り、アルプの全面と共に徐々に隆起し、然る後に氷雪の彫琢を受けたるが故にミラノの殿堂からみた夕空にクッキリと聳えるのである。

千九百三年の七月四日カーネギー探検隊に加はつて居たデーヴィス氏が、天山の一連脈ブラル、パス、タウの山頂が弦のやうに真直なのをみたのが、中央亞細亞の大山脈に關する舊説を覆すに至つた

端緒であつた。カラコルム山系と云へば世界最大の山岳氷河を藏して劍のやうな危峯、堡のやうな岩壁に滿ちた荒怪な山とばかり思つて居たのに、同じく上記探検隊中にあつたハンティントン氏が後年の著した「亞細亞の脈搏」中にカラコルム平なる一章が設けられてあるのをみては何人も意外の思をなすに違ない。「氷の住家」なる大ヒマラヤさへ同じ法則に支配されるらしい。

して見ると大抵の山岳は其の成立より考へる時は塑像のやうなものではなくて正に彫像に比すべきものである。而して鑿を振ふべき大理石塊は多くの場合新に切り出されたものに非ずして破壊せるトールソであつた。(了)

## 高山植物の研究

武 田 久 吉

本篇は大正六年四月東京に催された、日本山岳會第十回大會の席上にて講演したものの、大要に、其時時間の都合上省略した事柄を補足したものであるが、生態に關する部分は、河野齡藏君の講演と重複する恐れがある故、可及的簡略に従ふ事とした。

高山植物の研究といふ表題を見ただけで、已に時勢遅れ、流行遅れといふ感を起さるゝ人があるかも知れない。實際今から十年程も前には、高山植物の呼聲が甚高く、高山植物に關する書物が續々出版される、山草會や、高山植物採集的の講習會が催される等を初めとして、指環、帶止の意匠から、櫛や衣服の模様にあへ、高山植物が應用される程の勢で、知る者も知らぬ者も高山植物の語を口にす

る位であつたが、近年に至つては、高山植物は全く忘られたかの様に、世間一般からも騒れず、又植物學者の側からも、一時は盛に出た、新らし高山植物發見の報告も餘りに耳にしなくなつた。然し之と同時に、「山岳」第一卷第二卷の頃には、登山記事中に高山植物の名稱丈でも掲げ得る人が極めて少數であつたに反して、此頃の紀行には、植物の名を羅列しない迄も、可なりに詳しく擧げて居る人が多い。因是觀之此頃高山植物の呼聲が高くないのは、之に關する知識が普及した爲に、世間一般には珍らしくない感を起さしめて、従て以前の様に喋々されないのであるのかも知れない、又栽培家の間には高山雲表から拉し來つた者は、兎角下界では永く生活を續け難い等の理由から、中には培養を斷念したり、又は多少手を控える傾があるのかも知れない。然し今回の大會に陳列された百幾十鉢の美事なものを見ると、高山植物の栽培熟は昔にも劣らず、却て功を積み神域に達せんとして居る點の見えるのは、誠に吾人をして意を強うさせるのである。又學者の側から高山植物に關して以前の如く多くを耳にしないのは、研究も已に十二分に出來上つて、高山植物に關して蛇足を添ふるにも餘地がない爲めでもあるからの様に見えるが、之に就ては以下に辯ずる必要があると思はれる。

高山植物の研究といふ本論に入るに先だつて、此處に一言して置く必要のあると思はれるのは、高山植物とは何ぞやといふことである。高山植物と云ふ語は英語の Alpine Plants を譯したものであるが、これはアルプス山に限つて生ずる植物といふことではない。抑 *alp* といふ字はラテン語の *alps* から出たもので、これはケルト語の *alpe* 又は *alpe* (高き所、高山) から來たものだといふ説と、ギリシヤ語の *ἀλπος* (白き) に關係ある、ラテン語の *alpinus* (白き) から出たもので、雪を蒙つて白き所即ち高山の意に起るとの解釋もあるが、それは何れでもよいとして、*alp* といふ語は元來は高地にある牧場を指すに用ひられたもので、これから起つた *alpine* も同様に夏月クラリオンを首にむすんだ牛が徘徊して居る山上の牧場を指す字なのである。

それが後來多少異つた意味に用ひられる様になつて、高山の喬木を生ずる所よりも上部を指す様になつたので、此處に生ずる植物を Alpine plants 即ち高山植物といひ、高山上で高山植物を生ずる部分高山植物帯又は略して高山帯といふのである。此高山帯の下部にはミヤマハンノキ、タケカンバ等の灌木が多いので、之を灌木帯として區別し、其以上に上つて、主として草木や矮小な木本より成る所を草本帯と名づけ、更に上つて顕花植物は漸く減じて、只岩上に生ずる地衣類のみを見る所を地衣帯と區別することが出来る。然し此の區別は從來學者によつて銘々異なるので、或人は此處に云ふ草本帯以上の植物を眞正の高山植物と呼ぶ傾があるかと思ふと、中には、ブナ帯の上の針葉喬木帯をも込めてそれ以上を高山帯と見做すのが最自然であると主張する人もある。

高山帯の直下が亞高山帯と呼ばれるが、これは高山帯の定義次第で變化があるのは論をまたない、前記の如く灌木帯以上を高山帯とすれば、其の直下の喬木帯——針葉喬木帯及潤葉喬木帯——が亞高山帯に屬するのである。そしてそれ以下は便宜上、山麓帯又は平原帯と稱するのである。予は山地植物帯を分つて、一、山麓帯、二、亞高山帯、三、高山帯として、二を細別して潤葉喬木帯及針葉喬木帯とし、三を細別して、灌木帯、草本帯、地衣帯をしたい、そして夫以上は雪線以内に入る譯である。

此の如く區別した處で、是等の帯の境界線は地圖上のコントूर्ラインの様にキツパリと、又海面上からの高きに平行するものではないので、互に錯綜して居るから、場合によつては甚明瞭を缺く事がある。而も同一の山に於ても、南面と北面とは各帯の海面上からの高さが一致しない、概して言へば、南面では針葉喬木が北面に於けるよりも低い所で絶える傾がある。

さて然らば、高山帯内に生ずる植物は盡く高山植物であるかと言ふに、其大部分のものには此語を適用し得るが、或場合には、亞高山帯や時には山麓帯に普通生ずる者が、高山帯中に入つて、他の眞正の高山植物と妍を競つて居るものがある、例へばウメバチサウ、マツムシサウ、ニガナ等の如きも

ので、殊にニガナは東京附近の平地より、一萬尺の峯頭迄種々の高度に生じ、異つた氣候に適應して行く處は、注目に値するものである、そして高山の絶巔に於ては、莖は著しく短矮となり、葉も狭小となるに反して、花は顯著になつて、一見別種の觀がある、タカネニガナと呼ばれるものはこれである。

これは主として平地産のものが、高山頂にも生ずる例であるが、時には真正の高山植物が、亞高山帯に亘つて生ずる事もあるので、或植物は、之を高山植物と呼ぶ可きか、亞高山植物と呼ぶ可きか決定し兼ねる場合がある。

温帯の高山では、前記の各帯を兎に角區別し得るが、寒帯に行くに、其區劃は著しく不明瞭となつてしまふ、これは、温帯では高山帯でなければ見られぬ種類が、寒帯や亞寒帯では、所謂山麓帯にも生ずるからである。元來高山帯には極地植物が他の者に交はつて生へて居る、であるから極地に近くに従つて、是等の植物は海岸にも生ずる様になつて、爲に高山帯が何處に始るやら分らぬ様になる。

斯様な事があるが爲めに、昔は高山帯は極地に相當するものと考へて、高山に登るのは北極に向つて旅すると同様であるまで言はれたのである。然しながら事實はさうでない、高山帯と極地とは氣象的にも亦植物的にも大分異つて居る。例へば、極地に於ては高山上に於けるが如く、太陽の光線が強甚でない、又風力も劇烈でないが之に反して氣壓は高く、霧の量は遙に多い。次に植物の上からいふと、高山と極地と共通の種類は少くはないが、しかし其分量は決して同一でない。例へばムカゴユキノシタは極地では普通であるが、高山上殊に歐洲アルプスでは稀品の一である。又極地のみ産して、而も高山には全く見られない種類が多くある。これと同時に歐亞の高山地にのみ産して、極地には決して生じない種類も甚多いので、従つて極地に馴れた目で高山帯に咲き香ふ花を見れば、全く異境に行つた感がある。邦産の高山植物中ミヤマアケボノサウは、歐亞の高山及北米の西部に廣

く分布する種類であるが、而も未だ極地には発見されない、ミヤマウスユキサウの原種なる所謂エーデル、ワイスはアルプスに限られたもので、決して極地に生ずることがない。又ハクサンイチゲ、キバナノコマノツメ、ミツバワウレン、ミヤマカタバミは主として高山に生じて、極地には比較的少量に生ずる種類である。

然らば高山に極地植物を産し、極地に高山植物の或者を見るは何に因るかといふに、高山植物の最能く研究される居る歐洲アルプスに就いて言ふと、第三紀の終りに起つた氷河時代に、極地植物が南方に移つたと共に、それ以前から充分に發達して居たアルプス山上の高山植物も甚しく低い土地に降り、極地植物と雜居の體であつたのが、氷河の退去と共に極地植物は北方に歸り、高山植物は再び山上に戻つた時、其兩方の或者は互に新しい方向に侵出して、終に或極地植物はアルプスにも止つて此處に繁殖し、又或アルプス植物は極地に赴いて、此處に殖民したのだといふ説明を與へて居る。であるから此説では、アルプス植物區系といふものは、氷河時代以前に已に存在したもので、決して單に氷河が置土産にした極地植物ではないといふので、實際首肯す可き説であると思ふ。然らば日本の高山植物はどうかといふと、これは本講演の主題たる、高山植物の研究中に述べる考である。

扱本論に立入つて高山植物の研究とは如何にす可きものであるかといふに、敢て他の植物の研究と異なる譯もないので、先づ第一に行ふ可きは處生の種類を悉く集めて、其の名稱を明にし、相互の天籟を究める、即ち分類學的の仕事をするのである。これには材料即ち標本を採集する必要上、随分永い時日を要するものである。登山の困難、不便等の點が、十年前に比して少なからず減じた今日では、左程でもないが、信賴するに足る可き地圖もなし、碌な案内者もなく、第一何の山は何地より登り得るものなるかさへ明でなかつた頃には、高山植物の研究家は言語に盡し難い困難を嘗めたものである。斯の如くにして分類學上の仕事は第一に行ふ可き性質のもので、植物研究上根本的に重要なもので

あるが、直接分類學にたづさはらない人々は、分類學者を目して植木屋の一種と心得たり、或は分類上の仕事は昔本草家がやつた様な單に漢名に和名を配したり、採藥と號して諸州の山野を跋渉したりした位な簡單なものごと見くびつたり、中には其仕事は最容易なものご誤解するのみならず、甚しきに至つては不必要に近いごさへ思つて居る人達が、二十世紀の今日、而も其處此處に大分あることを思ふと、慨嘆せざるを得ないのである。

分類上の仕事が充分出來上つて日本産の高山植物の全部の種類と其名稱が明になつたとて、之を以て高山植物の研究は完結を告げた譯ではない。これが出來上れば初めて完全に高山植物の分布を調査し得るのである。高山植物の分布は一、地理的と二、生態的との二方面から見ることが出来るので、而も其の何れも(甲)植物の種類を主とせるものと、(乙)山岳を主とせるものとの二様に行ふことが出来る。

地理的分布とは(甲)某々種が某地、某山に生ずるか(乙)又は某山には何々種が生ずるかを究めるので、生態的分布は(甲)某々種の植物が如何なる物理的・化學的状態の下に生ずるか、又は(乙)某山の如何なる物理的・化學的状態の下には何々種の植物が生ずるかを明にするのである。

一二例を舉げて見ると、地理的分布の甲の部では、ミヤマウスユキサウは白峯、西駒ヶ岳、飯豊山、鳥海山、月山、及駒形山に産し、其の近縁種なるレブンウスユキサウは禮文島に産し、此れの変種なるハヤチネウスユキサウは早地峯の外に生じないごか、又は白馬ヶ岳で發見された、シロウマチドリは白馬ヶ岳、朝日ヶ岳の外内地では荒川ヶ岳及常念ヶ岳に産し、北は蝦夷のヌタクカムウシユベ及ユーパロ山より、更に千島のシコタン島及エトルブ島に迄分布して居るとごか、モット分布の廣いものではコケモモが歐、亞、米三洲の高山より、北極地方を周つて生ずると言つた様なものである。

又生態的分布の甲の部ではシコタンサウは好んで岩角の上に着くとごか、ハクサンコザクラは傾斜が緩くて濕氣の多い地に生ずるとごか、尙進んではウシノケグサやアカカラマツは石灰質の地を好み、イ

ブキジャカウサウ、オノヘリンダウ、テガタチドリは殊に石灰質の地に多いとか、之に反してコマス、キ、タテヤマキンバイ、ガンカウランの如きは石英質の地に生じて、石灰を好まぬと云つた様に高山植物と地質との關係を研究する様なものである。

乙の部の山岳を主題として研究する方では、某山の海拔何米突の地には、何種の植物を産するとか、又は某山の何質の岩上或は濕地には何種の植物があるとかいふ事を究めるので、此場合地理的と生態的とを併せて調査しても一向差聞かない譯である。

忝然らば日本の高山植物の分布は如何かと言ふに、今迄に之に關し研究した人が少なく、既刊論文としては小泉博士が大正三年發行の植物學雜誌上に木曾御岳の植物分布を論じられた外には殆んど皆無と云ふ姿である。

従來高山植物を採集する人は少くないが、大抵は白馬ヶ岳とか、槍ヶ岳とかいふ高山に登り、處産の植物を片端から採集して來て、某々山採集植物目錄といふ様なものを公にするのが關の山で、何の位な高度の地に何ういふ者が生ずるとか、如何なる岩質の地に何が産するなどいふことは少しも注意して居ない傾がある。

高山植物と一概に言つても、岩上を好んで生ずるものもあれば、濕潤の地を擇む種類もある、前者でも乾燥せる岩上に生ずるものと、水濕のある岩上に着くものとは種類が異つて居る。又歐洲では高山植物のみに限らず、植物の處生地的狀況、地質等を綿密に検査して、多くの論文や書籍が出版されて居るが、日本では未だ此の如き研究を行ふ人は曉天の星と言つて可なりである。日本の高山植物が歐洲のものと同様に、特種の岩質を擇むかどうか、物理的の情況さへ適當であれば他は意としないか等のことを研究するは將來に於て必ず行ふ可きことで、甚興味のある問題である。歐洲で主として石灰質の岩上に生ずるチャウノスケサウは、日本では花崗岩の山にも、新しい火山岩の山にも、亦古生

層の山にも生ずるのは人の知る處である、斯様な點を極綿密に調査したなら、必ず面白い結果を得られるに違ひないと思はれるのである。

又日本の高山植物の種類の研究が済んだならば、夫等のものゝ何が特産種で、何が日本以外の何地に分布して居るかを考究するのは、面倒ではあるが面白い仕事である。

今日本本島の高山の、主として草本帯に生ずる植物を通覧するに、約一百五六十種もある中、彼是七十近くの特有種がある、日本以外に産するもの内ヒマラーヤの要素が一つ、歐亞の高山に限つて生ずるものが三つ、アルプスと極地とに亘つて生ずるものが大分あるが、極地に限つて生じて、歐洲アルプスに知られて居ない種類が少くない、それと同時に、極地迄とは行かずとも、カムチャッカ、オホーツク、アムール、滿洲を根據として居る亞寒帯又は寒帯の分子が大分ある。又日本特産中種寒帯種に縁が近くて、歐洲アルプス産のものとの縁の近くない種類が少くない。此の極地分子の多い日本高山植物の研究は面白い事で、これが氷河存否問題に何等かの光明を與へることがないであらうか。

次に特産品を通覧するに、内地高山と蝦夷の高山とに共通の種類が全體の三分の一程もあり、又其内更に樺太迄及んで居るものが、少數と、樺太になくて千島に分布する種類が大分目に着くのは興味ある現象と言はねばならない。特産品のみならず、カムチャッカ、ベーリング等に産して、千島、蝦夷、本州に分布して居ながら、樺太に未発見の種類が大分あるのは注目して價するので、勿論現在生じて居る種類のみから打算するのは早計であるかも知れないが、兎に角、内地と千島との關係は、内地と樺太との關係よりも密であることがわかる。是等の島嶼を分割する海峡の舊さにも考及ばざるを得ない。即ち、從來動物學者が重要視して居た津輕海峡は、宗谷海峡よりも深くても幅も廣いが、年代に於ては新しく、又北千島が割合に早くから出來て居て、或種類の分布に與つて力があつたと言へる譯である。それと同時に樺太に千島や内地にある極地植物がない點は大に考究すべき問題で、同島が

大陸と離れたのは何時頃であらうかと云ふことは將來深く研究すべき事だと思はれる。

斯様な問題を解決するには、先づ充分の材料を集め、綿密に其種類を検査してから後着手しなければ、折角立てた説が數年ならずして破るゝ悲運に會し、只に研究者自身のみならず、學問上の迷惑は少なくないのである。

高山植物の種類を知り、其の分布を究めれば、それで高山植物の研究が終極であるかといふに、それから益々研究の範圍を擴張すべき處である。これにも方面は多いが例へば、

高山植物の形態を精査すると甚だ興味のある事實を認めることが出来る。殊に形態と所生地との關係などを見るのは随分と面白いものである、濕地産のものゝ特徴と乾地産のものゝ特徴とは一致することが少い、即ち換言すれば植物と水との關係が如何に密接であるかは、植物體の構造を見れば瞭かに之を知ることが出来る。生物は水がなければ死ぬより外に致方がないから、死を冀はない生物は何れも随時水を得られる位置や構造や装置を持つて居なければ絶滅を免れない。故に乾燥地又は岩上に生ずる植物は、葉の面積が小さいとか、水分を貯へる組織とか、又は水分の蒸發飛散することを防ぐ装置とかを有して居なければ、乾燥に遭ふや忽にして枯死するを免れない。それと同時に水濕の多い地に生ずるものは、水分をよく蒸發させて、溺死から免れる装置構造を有することが必要な條件である。然るに高山上では概して乾燥する土地でも、一端大雨があれば今度は濕りすぎて困るから、岩上に生ずるものでもイザと云ふ時には水分を蒸發させ得る様な装置が要るのである。されば高山植物の葉は概して葉の上面にも氣孔を有し、又其の數は平地産のものに比して同一面積に多くの數を有する。斯様な性質は面積の小さい葉が、平地よりも炭酸瓦斯が幾分か少い高山にあつて而も炭酸同化作用を十分に行ふにも亦利益があることになる。ガンカウンの葉では上面の表皮細胞の膜が肥厚して、強い日光の直射に逢つても、水分が容易に蒸散しない利益がある、のみならず葉の縁は下方に卷いて、

一種の筒を形成し、下面は此の筒の内壁をなし、其處に水分蒸發の主要通路兼瓦斯交換の唯一器官なる氣孔が存在するから、水分の少い時には蒸散を減じ得られるし、萬一葉面が水に潤はされた時でも、氣孔は直接に雨水で閉塞されないから、斯かる場合には必要な水分蒸發や瓦斯交換を無事に遂行することが出来る。又ミネズハウやツガザクラでは、葉は圓壘形をなす程葉縁は卷いては居ないが、葉の下面は幾何も露出して居ないし、又氣孔は毛茸などで蔽はれて居るから、雨水等で閉塞されて遂に窒息する様なことがない。

是等は僅に一二の例にすぎないが、斯様な生活と密接な關係ある形態上解剖上の特徴を検するのは、高山植物研究者に甚だ有益な結果を齎すもので、一度手を染めれば容易に止めることの出来ない興味の深い仕事である。

尙高山植物の生態的方面では、植物と外圍といふ點に關しては、溫度との關係、日光との關係、風力との關係等について、夫々面白い事實があるから、進んで是等のことを究めるのは、高山植物研究者のなす可きことであるのは論を俟たない。

其の他では何故にハヒマツは高山の尾根の上では匍匐するとか、山窪や低地では丈が高くなるとか云ふ原因も極めなければならぬし、高山植物の根の長大なのは、果して強風によつて植物體が吹飛ばされない爲めに備へたものであらうかといふ疑問を解決しなければならぬし、又種子にはどういふ油を含有して居るとか、花瓣の色彩は如何にして濃艶であるとか、花粉の媒介は何によつてなされるかとか、多數多様な問題が澤山ある、此の如きことの解決を計るのが高山植物研究の眼目であつて、單に名稱を詮議するとか、培養に成功したとかを以て足れりとはしないのである。

又由來高山植物といふと肉眼に觸れ易い顯花植物や羊齒類等の大形の隱花植物に限られた様であるが、實際モット下等なそして小形の隱花植物中にも高山に限つて生ずるものや、又高山へかけて生ず

るものが澤山ある。地衣帯の主要植物は地衣類即ち下等隠花植物であることを思へば、隠花植物の種類や量が侮る可からざるものであることに思ひ至るであらう。

是等のものは皆陸上に生ずるものであるが、高山上の水界即ち池沼中にも亦特殊の水<sup>〇</sup>生<sup>〇</sup>植<sup>〇</sup>物<sup>〇</sup>のあることを忘れてはならない。顕花植物でも常に水中に沈在するタヌキモ等があるが、隠花植物ではミヅニラの如き高等なものを初めとして、藻類や其の他の下等な、顕微鏡的の面白いものが多量に産する、又其の中には動物とも植物ともつかぬ、つまり動植兩界の追分あたりにうろついて居る、奇怪至極な生物も居る。是等のものゝ研究は本邦では今までに餘り盛に行はれず、殊に高山上のものは採集した人さへ指を屈するに足る程で、日本では極々新しい學問であると共に、生物界で最も原始的のものに近いだけそれだけ研究の面白味も亦必要もあるもの故、前途漠々として居ると共に範圍も廣く、大きな舞臺が眞面目な學者の爲めに殘されて居るのである。

隠花植物はこれのみに限らない、空氣中及地中にはバクテリアの種類もあるし、菌類の如き一大群をなす植物もある、其の中では他の植物に寄生する種類も少くなくて、特に高山植物に寄生して低地のものには目もくれない種類もあるから、其の方面も充分に研究すべきものと思ふのである。

以上述べた如く、高山植物の研究は範圍は甚廣いか、それに反して本邦では只僅に緒に就いた許りで、今後の研究に俟つべきものが甚多いのであるし、又其の研究たるや必しも専門家といつて、植物學を専攻する人達に限るといふ譯ではなく、只綿密精緻を旨として、慎重な態度をとりさへすれば、どれもこれもとは言へないが大抵は普通教育さへあれば出来る仕事なのであるから、之を自然の愛好者に御薦めすると共に、斯の如く高山植物の研究がいくらか進んで居ない日本に於て、登山者が苟にも其の研究材料である高山植物を無意義に濫採絶滅して後來取りかへしのつかない様にしてしまふの

は、日本の學術の發達を阻害するのであるから、決して大日本帝國の忠良なる臣民とは申し難い譯である故、斯様な不心得な人達に遭遇された場合には、よくこれを諭して、一には學問の爲め、二には帝國の爲め、三には山靈の爲めに、一木一草も心なく折り取り踏みにならない様に勸告されんことを御願ひして擱筆することとする。(了)



# 雜 錄

山

## 登山者の徳義

○近來漸く流行し來りたる登山熱は、獨り都會のみに止まらず、弘く各地に亘りて傳播し、最近殆んど其高潮に達せんとするの勢あり、従つて登山者の如きも其範圍頗る廣く、曩には一部の學生若しくは少數人士の間にのみ限られたるの觀ありしも、今や各階級を通じて登山は恰も年中行事の一たるに至らんとす。これ登山を徳憑し、登山氣風の勃興に力を致したる先輩及同人の等しく快とし、慶賀して、措かざる所也。吾人は益々其健全なる發達を冀ふと同時に、流行に伴ふ必然的弊習が早くも登山者の心裡に蠱の如く侵入して、其害毒を逞うせんとするを見、悵然として大息し、登山趣味普及の前途に對して不安の情を禁する能はず。

茲に一々其例證を擧げて人々の顧慮を促すの邊なきも、要は登攀の對象たる山に對し、又趣味を同じうせる人に對し、登山者は須らく其徳義を遵守されんことを希望するに外ならず。

○思ふに我日本アルプスは、其高度に於て其峻峻に於て、將た其登攀の困難なる程度に於て、遙にヒマラヤ若しくはアンデス等に劣り、之を比較するだに反て滑稽なるを覺ゆるのみならず、歐洲アルプスにすら及ばざること遠きの感あるは、否む可からざる事實なりとす。然れども其壯大豪宕の風物尙ほ能く渺たる人間の精神を向上せしめ、奮鬪的意志を熾ならしむるに足るものあり。彼の徒らに大言壯語を弄して、我が山水を罵るに箱庭的なる稱呼を以てする者の如き、微妙なる自然を感受する能力を缺ける不具者ならんのみ、元より意

に介するに足らざれども、偶々多數を伴ひ群衆の力に藉りて、敢て山の威嚴を冒瀆せんとする噪暴なる登山者の行爲に對し、悲哉我日本アルプスは全く無防禦の狀態に在りといふ可く、加ふるに山自身も之を膺懲し責罰するに充分なる大威力に於て缺如せる所あり、爲に自己の尊嚴を保持し能はざるは千秋の恨事といふ可し。斯の如くにして或は恐る、九千尺の峯頭も平地と擇ぶ所なく、汚れたること掃溜に似、狼籍たること縁日の跡の如く、纔に異なる所は展望の大なるにあるも、それすら森嚴の氣に乏しく、後遊の人をして先づ其頂上の穢れたるに驚き、天地の大觀に俯仰するも、終に素朴にして偉大なる莊嚴美の感念を起さしむるに足らず、登山の興味索然たるに至ることなきか。自然は或意味に於て一の國寶也、就中山岳は其意味に於ける最も貴重なる國寶たるべく、一木一石の微といふども、其損失は天災たる人爲たるを問はず、時に人力を以てしては容易に之を恢復することを得ざるものあらん。吾人の願ふ所は、登山者は初より山を神聖視し、多數を伴ひて猥り

に其威嚴を冒瀆せざらんことを努め、敬虔なる信者の心を以て其前に慙伏すること、彼の人跡なき高山の絶巔に唯一人攀ち登りて、寥廓たる天地を支配する一嶺崇岳に對し、其威壓の下に肅然襟を正して、久しく駐まるに堪へざらんとするが如き當時の心情を忘れざれば足る。斯くて初めて山は孱顔麗はしく君を迎へんなり。若夫君が山より享受するを得る深刻にして而も快き印象に至りては、即ちその當然の報酬といふ可きのみ。

○吾人は常に謂らく、山に登るは山を愛するが爲なり、世間同好の士曾て面識なしと雖も、未見の友といふを得可く、宜しく互に相敬し相重んじ、登山に際して他の同人に迷惑を感せしむるが如き行爲ある可からずと。吾人は吾人の敬愛する登山者の間に、此の如き行爲を敢てする人なきを信じて疑ふ所なかりき。然るに登山者の増加と共に漸く個人主義の傾向が獨り登山者のみならず、案内又は人夫を業とする者の間に生じ來りたるを見て其弊害の大ならざるに先立つて、之を撲滅するの極めて肝要なることを痛切に感じたり。これ需用

供給の關係より、需用多く供給少なければ、勢ひ此の如きに至るを免かれざるは一般社會の狀態にして、また怪しむを須むざるも、誠實なる可き登山者の間に在りては、斷じて斯る陋劣の行爲を許容す可からず。大町の如き北城村の如き或は中房の如き、幸に主宰者ありて、蝟集せる登山者の需めに應じ、一定の賃金を以て案内者人夫の供給を適宜に配分するが故に、登山者及人夫共に自己の欲する我儘を敢てし難きに似たり。然れども何等の拘束なき地方に在りては、豫め人と約し、更に有利なる申込を以て誘ふ者あれば、前約を無視して一應の挨拶もなく、平然之に應ずるが如き不徳を敢てし、更に忌憚する所なきなり。而して前記大町其他を除ける地方に在りて、良案内者若しくは良人夫を發見して之を世に紹介せるは、初めて之を伴ひたる人なるを以て、斯る良案内人夫は明年も亦之を雇用する希望、進んでは既に約束あるやも知る可からず。故に後の登山者にして之を雇はんことを欲する者は、徳義として先づ前年の雇主に照會し、其不都合なきや否やを確め、賃金其

他の心得に就て意見を聞き、然る後に直接當人に對して交渉を開始す可く、此際賃金其他すべて前例を破るが如き行爲を慎む可し。既に先約あるに斷りなくして之に應ずるが如きは、共に如何なる事情あるも許す可からざる惡徳也。吾人は不幸にして本年之に類する例を目のあたりに視たり。登山者は先約あるを知らずして、唯だ人夫の言にのみ聽きて雇ひたるか、或は情を知りつゝ更に賃金を増して誘ひたるか、其委曲を知らざるも、人夫は吾人の伴ひたる人夫の面前に於て、其賃金の多きを誇りたりといへり。登山者の氏名は山岳會員名簿（大正五年度）に見當らざるを以て、茲に言はず、人夫も亦後來を戒めて其名を秘するも、吾人は我山岳會員の決して此の如き不徳義を行ふ人に非ざるを信じ、努めて此弊風を艾除するに力を致されんことを希望して已まざる也。（木暮）

## 飛驒山脈と皺曲

飛驒山脈の高山は大抵花崗岩流紋岩小紋岩等の火成岩で構造されては居るが其の山麓若くは所々に斷片をなして殘存せる古生層の走向が山脈の方向に略ば一致して居る所から故加藤理學士は地質學雜誌第二百四十八號(大正三年)に飛驒山脈は褶曲山脈であつて斷層山脈ではないと論せられた。加藤氏の飛驒山脈の地質に關する知識は當時の權威であつたし、其の卓見は我等が今なほ讃辭を惜み得ないのであるが、近世の山嶽地形論にして若し誤らないならば皺曲山脈なるものは構造上の名であつて地形上の名ではない。同時に斷層山脈(又は地壘山脈) Block mountains なるものは地形上の名であつて構造上の名では無い。してみると所謂皺曲山脈であつて同時に斷層山脈であることが有り得ないであらうか。例へば天山の如きものは其の組織は皺曲であるが其の地形は明瞭に地壘山脈である。北米シェラネヴァダと或は歴史を等しくしはしまいかと思はれる飛驒山脈は亦一つ

の地壘山脈ではなからうか。同時に其の最初の構造は赤石山系と等しく皺曲をなしたであらう。然しながら飛驒山系を繞る斷層は地形上非常に良く證據だてられてゐるとは云へない、けれども大體に於ては確なものであらう。北端親不知の邊に於ても、亦西北富山灣の陥没に臨んでも斷層を考へることが左迄不合理ではない。或は飛驒山系の北部は一つのホルストであるかも知れない。前の輪廻に於て準平原化せられたや否やに就ては勿論容易に答へることが出来ないが、黒部川、高瀬川、梓川等の縦谷は前輪廻に於ける河の調整を思はせる。

小藤博士の爛眼には飛驒高原は準平原の跡であると認められて居る筈である、此の方向に於ても吾人は探究して行かなければならない。赤石山系には晶質剝岩と片磨岩との境なる裂線谷(fault line valley) 及三峯川等の谿谷が殊に前輪廻を思はせる。或る時代に於て此の行儀のよい水成岩山脈は圖に掲げたやうなアバラキアのジグザグを眞似て堅いラディオテリア板岩等の縞模様を明瞭に織り

出したかもしれない。此の山系の東北邊なる斷層崖は明に地形上の證據を残して居るらしく思はれる。故に赤石山系も亦立派な褶曲山脈であつて且つ地壘山脈であると云はれるであらう。(T・T)

### 八ヶ峯の斷裂に就て

八ヶ峯といふのは、鹿島槍ヶ岳と五龍岳との間にある山稜の一大斷裂に名付けられた稱呼であつて、峯とは呼ばれてゐるが實は隆起した地點ではない。此斷裂の特色は山稜が歪なU字形にくびれて、越中人夫の所謂「窓」を形造り、其儘一直線に急峻なる越中側の山腹を抉つて、五百米突も下の東谷(南五龍澤)の雪溪まで續いてゐることである。上部に於ては底は稍や平であるが、左右の岩壁は、鹿島槍側に堅立し、五龍側に二段に廻れ込んでゐる。それが上段は浅く下段は深いので、横からながめた形を想像すると、さながら腹を膨らしてつくばつてゐる蛙が壁と睨み合つてゐる觀がある。高さは五龍側の方が少し高く、二丈ほどはあ

らしい、幅は二間乃至二間半位のものであらうと想はれた。然し降るに連れて底は雨水や氷雪の爲に侵蝕され、傾斜が甚しく急峻になるから、左右の岩壁は益々高さを増して來る、随つて降れば降るほど通過し得る望は少なくなる譯で、實際上から望見した所では、東谷の雪溪まで下りて迂廻しなければ、到底通過不可能であらうとさへ思はれる。そしてまだ悪いことは、折角其邊まで下りて迂廻しても、再び山稜まで登る際に、またしても瀧などに阻まれはせぬかといふ不安に襲はれることである。これは鹿島槍又は五龍孰れの方面から來た人でも、等しくその感を懐くに充分なる程、附近の山谷の模様が威嚇的であるからだ。されどこれは大町の百瀬君が大正二年に鹿島槍側から此方面を探檢されて、通行の可能なることを慥められた。信州側はといへば、これは敢て此山脈に限らず、日本アルプスを通じての特色である如く、此處でも二百米突近くも削立した峭壁で、鹿島槍側に在りては其縁に沿うて登降することは絶対に不可能であるが、五龍側は横を搦めば窓の底に達し得る

一縷の望がないでもない、唯だ之を決行するに際して、大膽細心にして岩石の登攀に熟練した者でなければ、生還期し難きものがあるであらう。若し底に達することが出来れば鹿島槍側は、少し下手の岩壁に横に刻まれた一條の襷を傳つて山稜に登ることは甚しく困難でも危険でもない。反對に鹿島槍側からは此襷を登るのが生死を賭しての大冒険に屬する。一言にして盡せば此斷裂は、上を強行するか下を迂廻するか、如是閑氏の所謂「勞力の少ない危険」に就くか、又は「勞力の多い安全」を擇ぶかの二途より外に通過の方法はない。但し後者の場合でも、直接岩壁の縁に沿うて何處までも下ることは不可能であるから、南北の兩方面とも窓から二つ位手前の澤を下るやうにしなればならぬ。現に百瀬君が此迂廻路を發見してから、大町の案内者は皆之に遵つてゐる。此路によれば尙ほ一の便利がある、それは此斷裂から三十間ばかり北に寄つて、更に之を縮小したやうな裂け目があるが、夫をも合せて避け得られる。尤も

大町以外の案内者を連れて、五龍方面から遂行する初めての縦走では、此斷裂は目の前に夫が現れる迄は、とても遠方から看取することは出来ないので、間違なく所要の澤に下ることは、言ふ可くして行はれないことであらう。此迂廻は少くとも六時間前後を要するさうである。

私は今年（大正六年）長次郎と他に二人の入夫を伴つて南日、森の二君と共に五龍方面から此山稜を縦走した。そして小斷裂の方は二丈許り下の所を岩を横に搦んで通過したが、それを探し出すまでに三十分、重い荷を運ぶのに二十五分、合せて約一時間を費した。此處を通過してから少し登りになる、其登りが莫迦に急だ。登り終つて五六間行くと突然大斷裂が現はれる。例に依つて長次郎に探検を命じた、荷を卸して暫く形勢を察してゐた長次郎は、忽ち東側の急壁をサラ／＼と無造作に下りて底に立つた儘、兩側を見上げて「えらい窓だ」と笑つてゐる、どうだいなと聞くで行ける行けると答へる。其處から二三間下の横の襷を傳つて南側に登り、一町ばかり先の尾根の一角に立つ

てあたりを見廻してゐる。もう一人の山田といふ人夫は岩壁に沿うて下りて行つたが、何處からか向ふ側に移つて、やがて長次郎と長い間話し合つた末、二人一緒に長次郎の下りた岩壁を登つて歸つて來た。長次郎は始は無論其處を通る積りであつたらしいが、二人で談合の結果下を廻ることに極めたのであらう、私等が上を通るのかと聞いたら、彼處は迂ると止まらないから下を廻る方が安心だといふた。これは荷が重い爲に厄介である。山田に説得されて考へ直したに相違ない。(長次郎の外は二人とも山には初めての人夫であつた)。けれども私等も強いて通して呉れとは言ひ切れなかつた。それで山田の通つた所を廻ることにして、百米突も下つたらう、すると好い工合に岩壁が崩れて其内側に樺の立木が生え續いてゐる所に來た、それを傳つて下ると谷底に向つて傾いた一枚岩の上に出る、幅は五六尺に過ぎないが、平滑なる表面には手掛りも足掛りもなく、向ふ側はまた岩壁であるから一思ひに飛び越す譯にも行かぬ。尤も高さは四五尺に過ぎないし、且つ谷底も急で

はあるが大きな岩が積み重つてゐるので、誤つて足を踏み外したにしても、東谷まで落ちて行く氣遣はない。荷を背負つた長次郎に扶けられながら漸く底に下りついて吻と一息する。此處から二三間下手で南側から空瀧が落ち合つてゐる、高さは三丈に近い、之を登るより外に方法はないから、荷は綱を用ひて曳き揚げることにする、花崗岩らしい壁面は頗る堅硬であり、且つ手足の掛りもあるのは幸であつた。夫から左に一の窪を傳つて、岳樺の疎らに生えてゐる恐ろしい急傾斜を二十間も登ると偃松が現はれ、傾斜も少しく緩くなつて、やつと安心の胸を撫で下ろすことが出來た。午後十二時五分に窓の北側を下り始めて、南側のそれも窓から四五十間上手に寄つた山稜に登りつたのは一時四十五分であつたから、一時間と三十五分を要したことになる。此通路は先年中村君が同じく五龍方面から、初めて此山稜を縦走した時に通過した場所と恐らく同一の地點であらうと思ふ。

鹿島槍方面からは、此急斜面を下つて谷底に達

することが確に危険に感ぜらるゝであらうし、また彼の一枚岩に取り付くのが多少面倒であらうと思はれる。しかし荷が軽ければ案外樂に通過し得られるかも知れぬ。私等は針木峠まで縦走する糧食其他を大黒鑛山で用意した爲に、荷が重かつたので人夫は可なり骨が折れたらしい。但し時間に於ては下を迂廻するよりも三時間以上を節約し得ることは確かであらう。因に此斷裂の位置は、鹿島槍の北峯より約四百米突を下りたる邊、陸測五萬の大町圖幅に據れば二千四百八十米突の等高線が、其北方に一隆起を表示せる同高の等高線と相對して成せる鞍部に當つてゐるやうに思つた。(木暮)

サークの二三の性質

北米 Mission Range のサーク (Cirque) は皆東向きのものであるが面白いことには其の形は左右對稱ではなくて、必ず向つて右即南側の壁は奥く喰ひ込んで居る。直ぐ想像できる通り此れは日蔭

の下の壁に最も多くの氷雪が貯へられるから最大な *sapping* が働くからである、立山、薬師嶽、黒嶽などのカールに同様の現象が認められないであらうか。自分は認められると考へるが此の邊を跋涉された方々の教を乞ひたい。

同じく Colorado Front Range の地形を論じた學者はドーム型をした峯が一方から氷河に喰はれて行く場合を書いてゐるが讀書は直ちに黒部五郎岳のカールに半截された形を聯想されたであらう。合流せるサークは稍黒嶽のカールを思ひ起させる。北の山脈に於てもサークの群は北側に非ざれば東側にある。後の場合は吾人が本邦で考へたやうに吹雪を起す西風の御蔭であると云ふ。二つのカールが背中合せに發育したならば其の間の障壁は *Arête* になるし、三つ若くは以上のものが一つの峯に集中したならば其の峯は *Horn, aiguille* になつて尖ることは既知の事實であるが日本の高山ではどうであらうか。槍ヶ嶽、劍ヶ嶽、穂高嶽のどれかが斯う云ふ鋭鋒に相當するかも知れぬが此の點に關しては余は無知識である。(T・T)

## あかもの

本誌第十一年第三號に、シラタマノキに就て述べたから、今回は、同屬の一種で、同じく日本本嶋及蝦夷の山地に生ずるアカモノに就て少し記述して見やう。

シラタマノキもアカモノも、共に果實の色から出た名であることは、更めて述べるまでもないことだが、シラタマノキはアカモノに對して、時にシロモノと呼ばれることがあり、アカモノにはイハハゼといふ異稱もあるが（伊藤圭介先生著日本植物圖說草部初編一頁、明治七年刊行）此の兩名はあまり行はれない。尙前記日本植物圖說によるどイハハゼなる名は、越前石徹白シロシロの方言としてある。

さてアカモノはシラタマノキとは同一の屬に隸するのであるが、其の形態や特徴は大分に異つて居る、即ちシラタマノキでは莖は白色の微毛を被り、葉は橢圓形で鈍頭であり、花は總狀の花序に攢りて其の各は茶壺形で白色の果實は下垂すに反

し、アカモノでは莖には赭赤色の長い線毛が生じ、葉は卵形で尖り、花は個々葉腋に生じて總狀花序をなさず、其の形は鍾狀であり、紅色の果實は天に朝すると言つた工合である、尙其の外種子はシラタマノキに於ては、前に圖說した様に翼を具へて居るのに、アカモノでは略三稜形で無翼である。

今左にアカモノの記相文を日本植物圖說から引寫して見ると、「白山、御岳、勢州八風、和州吉野、山等高山石間ニ生ズ常綠品ノ半灌木ナリ莖高サ五六寸ヨリ尺許ニシテ褐色ノ毛茸アリ叢生シ葉形卵圓ニシテ光澤アリ長サ五七分許互生シ味苦澁ナリ芒種ノ頃梢上ニ三回ノ鐘樣小花ヲ下垂ス形稜木ノ花ノ如クニシテ穂ヲナサズ白花ニシテ唇紅暈アリ反卷ス萼五出紅褐ナリ十雄一雌藥柱頭紅暈ヲ帶ブ實圓クシテ六縱道アリ後紅熟ス其味甘シ」とある。これで概形の觀念は得られるが、更に一二ヶ所詳細に述べると、葉は附圖版の第七圖に示してある通り卵形又は橢圓狀卵形で、縁には細かい鋸齒が一樣に刻まれて居る、そして其の各は鋭く尖つては居ないが、先端に莖上にあると同様な腺毛が一本

生じ、それが後には先が折れて、宛も針の如くに見える、然るにシラタマノキでは此の毛がない故、鋸齒は著しく鋭くは見えない。

花は第一圖に見る通り、一寸内外の花梗の頂に獨在し蕾の内から點頭して居る。花梗上には例に依つて赭赤色の腺毛が生じ、且つ數個の鱗状の小苞がある。萼は深く五裂し、各裂片は等長で鍼形を呈し、外面は腺毛を以て蔽はれて居る。花冠は筒状鐘形で、先端は淺く五裂し、裂片は反卷して居る、色は白色で唇は紅色を帯びて居る。雄蕊雌蕊共に花冠筒に隠れて見えない。

花が謝するや、鉤曲して居た花梗の先端は直立して、一個の單一なる柱頭を戴くところの若い果實は天に朝するのである（第二圖）これが先づ七月の半ばから末へかけてある。

間もなく萼は其の底部に於て肥大生長をはじめ。そして八月の初旬には漸く肥厚すると共に紅色を帯び來り、同時に果實を包む様になる（第三圖）萼の裂片も多少は生長するが、底部に較べては僅であつて、殊に其の先端は硬く變化する様に

なる。

八月の下旬から九月にかけて、果實が成熟すると共に萼は益々肥大して、全く果實を包み了るが、此の頃には花柱さへも僅に萼の裂片の間に隠見する程になつてしまふ（第四圖）。そして外部では紅赤の色が益々加はり、内部では細胞液の中に糖分が増して、此の頃の登山者の口舌に可なりといふ状態に達するのである。

日本植物圖説の記載には、果實に六縦道ありとあるが、それは何かの誤りで、實際は五縦道ある譯である。これは萼の五裂して居るところに當るのであるから、萼が六裂して居ない限り六縦道出來る理由がない。又同書の記載に、花はアセビの如くであるのも正確とは言へない、何故なればアカモノの花は圖に見るが如く筒状鐘形である、それに反してシラタマノキの花冠こそアセビに似て壺状である。（第三號のシラタマノキの記事には「其形は一吋アケビの花に類し」はアセビの誤植。又附圖の4—9の種子は實物の二十五倍に廓大してあるので、三十倍ではないの故これも訂正して御

誌をして置く。

さて成熟した果實（廣意の）を精密に検査して見ると、其れが紅色を呈するのは、只一番外方にある表皮だけで、多肉な内部は白色の細胞から出來て居ること、シラタマノキの果實と同様である。然らば此の表皮をなす細胞はどんなかといふに、細胞膜を上から見ると、第五圖の如く縦に線狀に隆起して居るといふ特徴はあれど、色は無色であつて、少しも紅色でない。事實表皮が紅色を呈する理由は、表皮細胞内に含有される細胞液が紅色であるが故で、他には何も有色のものはないのである。

眞正の果實はシラタマノキのそれと同様で、熟すれば五裂して中から微細な種子を現すのである。種子は第六圖に見る様に、鈍い三稜があり、色は紅赤色を呈する、そしてシラタマノキの種子と違つて翼がないことは已に述べた通りである。アカモノの産地は亞高山帯を主とするが、近江國の或地方では、山麓帯にさへ生ずる事がある。一體近江や山城ではイハナシ、シャウジャウバカマ、

スノキ、ハナゴケ等の亞高山帯以上にある可き植物が、一寸した丘陵に生ずることが往々あつて、植物地理學上甚だ面白い現象を呈して居るが、近畿には眞面目な植物學者が居ないのかして、植物分布の詳しい模様は一寸もわかつて居ないのは、世界の一等國の仲間入りをして見る筈の大日本帝國の恥辱ではあるまいか。

アカモノの果實は、シラタマノキの果實と同じく、誠によい味であるから食用とすることが出来る、そして其の風味は、日本産のシャタナゲ科植物（廣義の）中の白眉とも言ふ可く、コケモ、だのスノキ等の果實と違つて酸味はないし、種子を去ることも容易であるから、是等の植物の繁殖を計つて、其の果實を以てジャムでも製したならば、甚面白い事と思ふが、一番奮發して試みる篤志家はなかなうか。但し此の場合單に自然にあるものを濫獲しないで、充分植物を保護し其の繁殖を計る可きことを第一に念頭に置いて貰はなくてはならない。（武田）

ほていらん

名を聞いた人は多いが、實物を見た人は、植物學者の中でも尠いといふ稀品である。我が邦の深山中、殊に甲、武、信三國に界する處即ち秩父の奥や八ヶ岳の中腹などで、モミ、コマツガ、ヒメコマツ等の針葉樹の枝極參差として、晝尙暗い黒木立の中に、殘雪が消えるや否や、葶を抽いて其の頂に一花を著ける。葉は一株一個、前年の秋に出で、花後に枯凋してしまふ、其の形は卵形で尖り、表は深緑、裏は紅を帯び、面には皺縮して居る。花は大形で、ラン科の形式を具へ、五個の花蓋片と一個の大きな牌瓣（又唇瓣）がある。花蓋片は鍼狀で各約等長、色は美しい紅色を呈して居る。牌瓣は巨大で下に懸垂し、卵狀の囊である、外部は蠟の如く平滑で、これに暗褐色の斑紋がある。花の中央には大形の藥柱が斜に立ち、其頂に花粉塊と柱頭を有すること常の如しである、そして色は花蓋と同様美しい紅色を呈して居る。子房の下には一枚の苞葉があつて、これ亦紅色である。

本植物は愛草家の垂涎措く能はざるところのものであるが、其の培養は至難で、よく成功する人は鮮いといふ。牧野富太郎氏嘗て本品を大日本植物誌に圖説して詳密を極めて居るが、其の説文中に左の數行がある、今之を抄出して示せば、「優美非凡の一蘭品にニシテ深山雲深ク人無キノ幽境年々獨り花を開ラキテ花又落ツ探テ之ヲ人間ニ致セバ則チ花ト共ニ觀賞ニ値スベシ唯其花孱弱久シク保タズ花色直ニ褪シ容色日ナラズシテ衰フ是レ殊ニ憾ムベシト爲ス而シテ其葉ハ差ヤ强健、日ヲ閱ルモ久シク天青地紫ノ美觀ヲ失ハズ之ヲ花ニ比スレバ以テ多時玩ブベシ然レドモ其培養至難ニシテ一タビ之ヲ深山裏ヨリ移シテ人家ニ養フモ久キヲ保タズシテ勢力頓ニ衰フアルヲ免レズ老練ナル郭臺駝師モ亦遂ニ之ヲ如何トモスト能ハズ」と。

本植物は一屬一種のもので、ヒメホテイランといふ種の變種として認められて居る。ヒメホテイランは嘗て岸上鎌吉氏が樺太マウカの地に採取し、後三宅勉氏同島オチボカの地に得たる標品によつて命名したもので、此の方は歐、亞、米北



(産嶮字文十父秩)

ん ら い て ほ



部の針葉樹林中に生じて居る。自分は嘗て之をロッキー山中に見たが、其の美は到底我がホテイランには及ばない。

本誌に掲げたものは、大正六年六月初旬、本會員にして秩父通を以て鳴る石川光春君が、十文字峠で採集して生ながら恵まれたものを、高野幹事が殆んど實物大に寫眞されたものである。(武田)

### 甲州七面山の「御神木」

#### 「萬歳草」

本會幹事の中村清太郎君が去る冬の間三月程も七面山上の寺に籠つて油繪の大作に従事されたが、其の土産として予に一封の紙包を贈られた。

紙包の表には、

御神木 七面山  
萬歳草 奥院

と朱肉で印刷してある。中にはマツチの軸木程の木片一個と、大形の蘚が一個入つて居る、そして此の木は七面山上に生ずるイチ井即ちアララギ

の材であらうといふことであつた。

「御神木」なる木片は長さ四十七ミ、メ、約二ミ、メ、角の大ききで、木材を只荒く割つた丈のものである、色は赤味を帯びて、一見アララギの材の様に見える。是が軟材即ち松柏科植物の材であることは、小口を一見して直に観取することが出来るが、それと同時に年輪が對角線の方向に走つて居て所謂四方柱の切り方であることに氣がつく。處で其の年輪は約三ミ、メ、に六つ在る故、平均各約半ミ、メ、の厚さである、そして秋材は春材の約三分の一乃至四分の一位に相當して居る。又材は少しも樹脂臭を帯びて居らぬから、色澤といひ先づ之を肉眼的にアララギと鑑定するのは甚然る可きことと思はれる。

扱此の當否を知らんが爲に顯微鏡的検査を行はうと、縦横に薄片を製して窺つたが、縦断面を見ると假導管トクゲイドの内面には明瞭な螺旋狀をなす細線狀肥厚層があつて、アララギの特徴によく一致して居る。然しながら尙念の爲に截面を反覆検査した處が、秋材の切線面には重縁孔紋ギョウキョウが存在しないの

と、螺旋肥厚層が秋材の初めに形成されたものは明に認め得らるゝ等の點が、アララギよりも寧ろカヤに一致して居る、又螺旋肥厚線も時には三重の事もあるし、又孔紋の孔口が大抵は斜向して居るからこれはアララギではなくて、カヤと推定した方が正鵠に近いことと思惟さるゝのである。不幸にして今比較材料を持たないから、斷言するにはやゝ躊躇するが、十中八九迄は誤りはなからうと思ふ。七面山にカヤが産するかどうかは知らぬが、あり得る地だと思ふ。斯の如く御神木として販ぐものは常にカヤを用ゐるか、時にはアララギをも用ゐるか、或は通常アララギを用ゐ、時にはカヤを間違つて使ふものか、一個や二個の僅少な材料から速斷することは不可能だが、兎に角予が檢したものは上記の通りのものであることは事實である。

次に萬歲草とは何かといふに、これはカウヤノマンネングサに近似の一品で、コバノカウヤノマンネングサ一名ホウライゴケといふもので、カウヤノマンネングサよりも枝が細くて數も多く、雅

致のある品で、深山には稀なものではない。

斯様な穿鑿は何等の益がないと言はるゝ方があるかも知れないが、自分の様な物好きな人間には何となく面白味がある、殊に斯様な名山の神符等に其の山の特産品とか又は特に多産する植物等を用ゐるのは、植物利用と言ては語弊もあらうが、何となく興味があるので、つまらぬ詮議もして見たくなる。信州戸隠山の神符には表山に多いクロンヨゴ一名アカツゲの葉が一枚入れてある（博物之友第七年第三十七號六一頁）のに反して、日光二荒山の神符には何も書いてない木のへゲが心になつてそれに紙が巻つけてあるのは、何やら有難味が少くなる。勿論神符等といふものは、中味は何でも宜しいのであらうし、又不可開なのであらうが、アダム イーヅ以來人間は何でも知り度いといふ慾（即ち美しく言へば知識慾）があるのだから致方がない。今茲に擱筆するに當つて、同好諸君が類似の材料を供給して下さらむことを御願する。其山の神符は何木何草であるといふ報告なり、又斯様なことをして山靈の罰も恐ろしいと思はれ

る方は實物を送られてもよい、さうすれば崇りは予一人で引受けて穿鑿や報告の勞を敢て致します。(武田)

### 劍ヶ岳伊折方面の登路案内

伊折の方から劍へ登るのには、鑛山道の大窓に登り劍澤へ出ても行けるし、バンバ島から立山川(早月川源流)を溯つて室堂乗越へ上り、別山乗越を劍澤へ出て登れるが、何れも立山方面の登路へ出て(山稜縦走は別として)そして登山することになるので、伊折から端的に劍ヶ岳へ登るのには、立山川の谷からは全然絶望で、池の谷も殆ど不可能だと思ふ。唯私が今夏(大正六年)登山路に選んだ早月の尾根、(私は伊折で名を尋ねるのを忘れたので假に上の如く名付けて置く。然し多分無名の尾根だらうと思ふ。——それは陸測五萬分ノ一立山圖を見ると、劍ヶ岳の絶巔から西北方へ略ぼ直角の走向を以て早月川源流の立山川と白萩川の合流點の方へ派出された長大な尾根だ、——

の外にはないと思ふ。以下私の登山の概略を陳べて後の登山者の道しるべとする。

越中國滑川驛から伊折までは約六里、立山鐵道の上市町からは約四里で、上野驛を午後八時半の夜行で發てば、翌日緩くり伊折で泊ることが出来る。伊折からバンバ島(白萩川と立山川との合流點で立山道と鑛山道との岐れ目、こゝまでには鑛山の事務所もあり、水力電氣の建設場もある。)迄は三里弱で、それからブナクラ小屋(白萩川とブナクラ谷地圖の赤谷の落口)、迄は半里強で達せられる。このブナクラ小屋から登路に着くので、伊折の酒井と云ふ宿屋で聞いたときは、この尾根の末端の松尾平(當字)と云ふ處に大窓の方から來て居る索道が架けられて、夫れ迄は道が付いてゐるし、大きな小屋があるからその平から登つて行けば大尾根へ出られると云ふことだつたが、長大な尾根を數を分けて行くのが思ひやられるので、小屋の東南に懸かゝつてゐるキワラ谷と云ふのを登ることにした。ブナクラ小屋の者に聞いたときに、白萩川を渡つてキワラ谷を溯るのには水が深

くて行けないと云ふので、小屋の前から粗造の橋を渡つて山側を登り、索道の下へ出てそれに付いて左方に行くに絶壁の上に出る、それから溪側を上へへツツてキワラ谷へ降りた。濃霧の爲に先が案じられるので早かつたけれども溪側に夜營をして、翌日雪溪を登ると中程に三四丈の瀧があつた。この瀧はブナクラ小屋からよく見える、左の方をへツツて行くのだが、手懸りが少ないのと岩が丸いので一寸登り悪い。その上が立派な雪溪になつて、それを突き當ると、岩山の間から奔川が飛び出てゐる。その方は行けないので右の小溪を登ると、傾斜が追々急になつて尾根までは非常に遠い、然し落石さへ氣を付ければ危険は更にはない。行くに従つて一面の草原になると上部がだん／＼廣まつて来る。キワラ谷の夜營地から尾根までは四時間程費やしたと思ふ、尾根へ登ると直ぐ下がもう立山川の方になつて、梅や黒檜の大森林が蒼然たる巨岩の絶崖の上に鬱葱として、頗る豪壯な趣がある、こゝから立山の方を見た景色は實に好いだらうと思つたが、生憎展望皆無なので失望した。

尾根の森林に切開けが有つたので初めて一九二〇米突の三角點を伊折から尾根傳ひに上げたことが推測された。

それから森林に付かずに直後の藪を潜つて行く、小隆起の上が可なりの平になつて、その藪の中に三角石標を發見した。切開はこの附近で無くなつてしまふ。この先尾根上を行くと森林と藪で苦しめられるので、左側を降り氣味に行くと、雪と山草に飾られた草原へ出た。この尾根は全部立山川の方に向つて絶壁を成して、池の谷方面に向つては比較的なだらかな斜面を形ち造つて、その方には藪の間に雪に取り卷かれた草原が斷續して、ミヤマナ、カマド、ミヤマハンノキ等に交つて、櫻が其處此處に満開して、牡丹色の花の美しい躑躅などが夥しく藪の下を埋め、白根葵や大櫻草、ミヤマ大根草が殊に目を惹く。伊折から第二日は森林帯の盡きる邊で露營して、翌日は二時間程歩いて漸く偃松の中へ出て、先づ好い案配と思つた處が切開の全くない丈餘の偃松林に曳かゝつて、三時間近くは此旅行中での惡戰苦闘を續けた。

一 偃松が低くなつて約二時間ばかり行くと、この尾根の突端の一大隆起の上へ出た。流石長大な尾根もこの隆起を限りとして、その先はもうポロポロに崩壊して、削鑿された牙の様な岩峯が幾つも簇立して、劍の大岩壁の方へ向つて連絡して居る。是れからが劍式の岩登りにかゝるので、私が嘗て富山平原から望んだ時に、劍の頂上直下に長大な尾根が續いて居るのを見た。然しその尾根が劍の絶巔に接續する邊に横に雪が喰ひ込んでゐるので、其邊は多分登り悪いことゝ思つてゐた。其後木暮君の御話によると尾根はなだらかだが矢張劍直下の處が疑問だと云ふことだつた。兎に角劍ヶ岳の絶巔はこの尾根の突端から二千尺も高く挺聳して、其の頭は別山の方から見た三稜形でなく、圓い偉大なる岩の集塊が二つ寄りかゝつて、随分磊々たる山相を呈して居る。四面峨々たる岩傳ひで連も夜營に良好な處がないので、私等は池の谷の方へ向つてゐる比較的好きさうな處を選んで、雪上に天幕を張つて夜營をした。この日には劍へ登れたのだけれども、濃霧に閉されて行く先が分

明しないのと、相手が劍と云ふ尤物なので若しも途中で日が暮れようものなら、岩へ抱き付いて一夜を明かす様な目に遇はされると困ると思つて中止してしまつた。

翌日は磊岩を登つて夜營地より丁度一時間を費し、午前六時に美晴の中を頂點に立つたが、其れ迄の岩登りが非常に愉快であつた。勿論一步を誤れば池の谷の鬼となる様な處は幾ヶ所かあつたけれども、一擧手、一投足が調子よく動いて、一步一步頂點に近付いて行く充實した氣分は今でも忘れることが出来ない。

私は槍ヶ岳まで行く積りでゐたので、天幕、副食物、防寒衣等相當に用意して行つたので、荷物は殆ど七貫目位になつた。劍脊面の岩登りと、六十度もあると云ふ長次郎谷の上部の雪坂を降るのに、重荷が氣にかゝつて若しも一度に持つて行けなければ、一人分を三四回にでも宜いから分解して運ばうと思つて居たが、幸に天氣も好し人夫も元氣で悠々と長次郎谷を降ることが出来た。

私の連れて行つた人夫の中の佐伯軍造と云ふの

は今年三十七歳で、平藏程の剽悍はないが感覺は却つて鋭敏で今後この方面の登山者の爲には随分役に立つ者と思ふ。私等は連日の濃霧で剣へ登る日迄は殆ど日の目も見ず、殊に皆生路なので方向を間違ひない様に可なり氣を付けて歩いたのに、随分早く夜營をしたから半日以上を無駄にしたことと思ふ。然し少し位早く登つても、日中に剣へ登ると多くは霧の爲に展望がきかないから、矢張剣直下に夜營をして、翌朝未明絶頂を極めた方が得策だと思ふ。

終りに私はこの尾根道を今後剣ヶ岳へ登るのに最も重要にして、愉快な登山路として同好者の間に推奨する。何故なれば立山方面を登降するよりも眺望もよく變化もあり殊に尾根自身の美觀を味ふことが出来るから、そして劍澤方面の大雪溪を踏破したならば壮大と優美を併せ得て眞に首尾兩端を盡したものだと思ふから。(冠)

### 根石岳の登路

「山岳」第十一年第三號一四八頁に、根石岳に登るには夏澤峠の頂上より郡界について北に尾根を辿らば可ならんかと稍疑を存して記したりしが、其の後「山岳」第八年第三號を手にするに及んで、別所梅之助氏が夏澤峠の頂上より登山されたる記事を見れば、右は可能なること疑ふの餘地なからん。

「八ヶ岳の北」なる拙文中には、此の部分夏澤峠以南の如く縦走し得らるゝや否やを書き漏したるが、これは多數の工夫を役して刈拂をなし切明けを作るにあらざれば、現在のまゝにては不可能なること、のみならずあまり面白味はなからんと思はるゝことを附記して、縦走計畫者の參考に資す。(笹魚生)

### 針木峠の林道

針木峠は人も知る如く、明治九年に新道が開鑿

され、數年の後にそれが再び破壊されてしまつてからは、籠川の河原や雪溪を辿ることなしに峠を通過することは殆んど不可能であつた。若し之を避けて迂廻しやうとすれば、更に多くの困難と危険とに遭遇しなければならぬ。それが爲に針木越は悪絶險絶を以て世に鳴り渡つた。富直線の未だ開通せざる以前に、信州方面から立山へ登るには、大抵此峠を上下し、黒部川を徒渉して、刈安峠及ザラ峠を踰え、立山温泉に出て其處から登山したものである。そして一度此道を通つた者で、皆其險阻なのに驚かない者はなかつた。明治廿八年の八月初旬に自分が大膽にも唯一人此峠を踰えて立山へ登つた時は、平ノ小屋へ着く迄に二日半を費した程で、當時赤城榛名妙義や男體淺間若しくは富士御岳などの外は、山らしい山に登つたこともなく、又登山の危険などいふことは一向に無頓着であつたが、此時許りは一人旅に慣れてゐた自分も、初めて山といふ者の恐ろしさを感じて、心細さに堪へられなかつたと同時に、又初めて山といふ者が少し解せて來たやうに思つた。其後信州

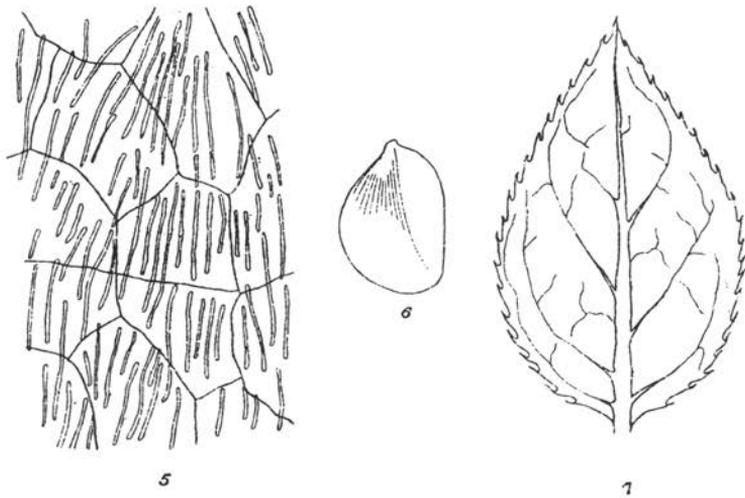
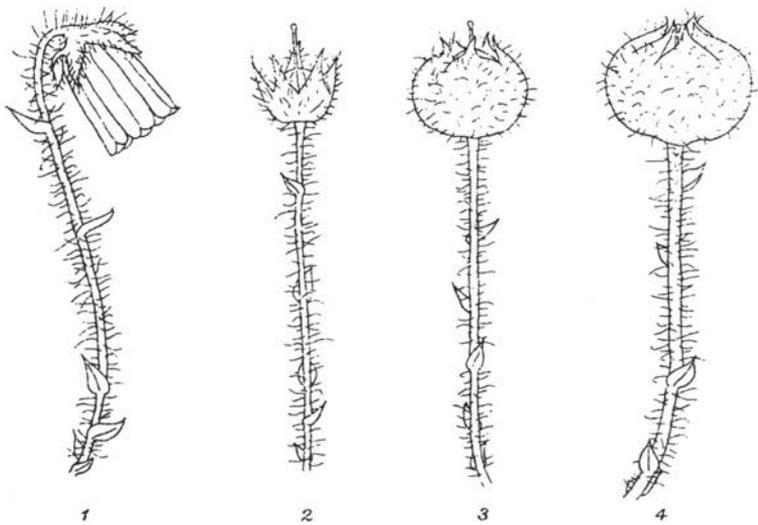
方面から立山へ登る人が年と共に増加し、黒部川には籠渡しなども設けられ、道も大に分り易く、且つよくなつたとは聞いてゐたが、それでも針木越は登山の入門として、あらゆる課程を備へた好個の教科書であるといふことには、誰も異議はなかつたやうである。自分も初めての経験に徴して、當然しかある可きを信じて疑はなかつた。それが今年（大正六年）二十幾年振りて復た此峠を降つて、少なからず道の樂になつたことに驚かされた。先づ大澤の對岸に立派な小屋が建てられたことは別としても、大出の人家を離れてから籠川の河原を遡ることは勿論、一回の徒渉でも行ふことなく、川の左岸に沿ふて赤石澤の對岸附近雪溪の盡くる（或は始まる）少し上まで林道が造られたことは、既に險阻の大部分を凌夷してしまつた感がある。雪溪にかゝつてからは、傾斜の急な左右の山裾が迫り合つて、横を搦むことは殆んど不可能に近いが、雪は割合になだらかである爲に、初めての人もカンジキなしで危険の虞なしに登降される。スバリ澤の合流點から上は、雪溪が俄に急峻とな

る代りに、或は左側或は右側の山裾を辿れば、強いて雪溪を上る必要はない、これは昔も今も同様である。それすら今は踏まれた道跡が判然と残つてゐる。針木峠の行路難は實に磊砢たる巨岩の錯峙した籠川の河床を辿りて、雪を噴く奔湍と、雷のやうな音を立てる急瀬とを幾度となく徒渉することであつた。夫が今年からは何の心配もなく心長閑に林の中を通行し得るやうになつたのは、時間と勢力とを省く點に於ては、大なる利便を得たことであるともいへる。この林道は畠山の小屋附近までは、既に前年造られてあつたもので、それから上の部分が今年新に開かれたものである。近しい中に更に峠の頂上まで續けるとかいふ噂を聞いた。尤も地勢の關係上、雪溪から上は道を造つたにしても、頻々として雪崩に襲はれるから、年々大修繕を加へなければ、道形を維持することは困難であらうが、事實として現れぬとも限らぬ。そうなつた曉には黒部川に釣橋の架けられるのも遠いことではあるまい。孰れにしても針木峠は既に

十年前の針木峠ではない、あの峠に向つて一步を踏み出した登山者に對して、その荒膽をひしぐやうな刻々の不安と期待とに背かなかつた自然の儘の針木峠、其姿は最早永久に見られる期はないであらうか。自分は過去にのみ憧れんとする自分の固陋なる執着心を、今も尙ほ思ひ切つて山の何處かへ破れ草鞋の如くかなぐり棄てることの出來ない意氣地なさを憤ろしく思ふ。(木暮)

### 黒部谷の射撃演習

一昨年(大正四年)から風聞のあつた黒部谷の飛行機射撃演習は、昨年は終に舉行されなかつた爲に、全く虚説であるやうに傳へられたが、愈々事實となつて、今年七月——日から八月——日まで約二十日間、鐘釣温泉に近き百貫山附近で行はれた。四十六度何分約四十七度の仰角を以て、脚元から一氣に八百米突の高さに直立せる場所は、山國の名ある我が甲信飛越の地方にも餘り多くは見當らないであらう。殊に交通の比較的便利であ



## あかもの

1. 花×2                      2. 花冠謝落して萼天に朝するもの×2  
 3. 若き果實×2              4. 成熱せる果實×2  
 5. 4に於ける多肉なる萼の表皮の一部×300      6. 種子×25  
 7. 裏面より見たる葉×2



る上から考へたならば、黒部の峽谷を除いては他に適當な場所があらうとも思はれぬ。彼の鐘釣温泉を中心として二千米突前後の峻峯が、一道の河床を挟んで轟々天を摩する黒部峽谷の下流こそは、此種の演習地としては絶好の地點と稱す可きもので、當局者の着眼點が此處に向けられたのは、洵に止むを得ない次第である。唯だ生憎にも演習期間が登山の旺季と一致した、それが爲に警戒地區と目された範圍中に在りて、比較的多くの登山者を惹き寄せる小黒部谷と祖母谷とが、特に危険區域として通行不可能となつたことは遺憾であるが、勿論永久に鎖された譯ではなく、演習期間だけのことであるから、登山者に取りて一時の支障を來すことはあらんも、先づ以て幸としなければならぬ。本年は其豫告を知らずに出懸けて、途中方向を變更した人も二三はあつた様子である。自分達が奥不歸岳から大黒嶺山に下つた日は、可なり砲聲を耳にした。

此演習が果して豫期した通りの成績を挙げ得たか否かは、元より自分の知る所ではない、又知ら

うとも欲しないが、若し相當の効果を收めて、今後に於ても引續き同じ頃と同じ場所で行なわれるとしたならば、登山者は兼ねて其點に留意し、不用意の危難に遭遇することなきやう心懸けらるゝことが肝要であらう。(木暮)

### 雪の南アルプス觀望臺とし ての伊豆修善寺

雪の南アルプスの觀望臺も先輩諸氏の御紹介に依つて大分世に現はれて來た、先には小島鳥水氏の日本アルプス第一巻に載せられた六郷大森間の白峯三山、近くは山岳八年二號以來木暮理太郎氏並に中村清太郎氏の御力で名も懐しい秩父の奥山や南の諸王座迄が黄塵の都東京並に其の郊外から仰ぐことが出来る様に成つた是れ京濱間に住はれる山岳宗徒に取つては誠に手近かな好個の觀望臺である。夏もほんの短い一時を山壞にしつかと抱かれて此處ぞと思ふ存分に山氣を吸ふて尙嫌らぬ山岳宗徒への靈雨である。

扱て自分の御紹介しやうと思ふ伊豆修善寺は態  
態行く程の所では無く尙ほ上に述べた諸氏の御紹  
介の様に平近でも無く又見えまいと思つた處が見

がれた爲め少なからず驚たと云ふ點に於てこの貴  
重なる紙面を拜借して筆を執る事にした。

えたと云ふのでも無い、且つ山岳七年三號中村清  
太郎氏の日本南アルプス登山雜談中にも次の「山  
川君は修善寺附近の高地から望まれた由である」  
とある程であるから此處に喋々と述べるのは寧ろ  
蛇足かとも思ふが、自分は態々行つて見ると云ふ  
程の強い意味では無く單に修善寺へ遊ばれた同人  
が湯手拭腰に散歩がてらと云ふ位の軽い意味の觀  
望臺として述べる所以のものは同地も近年浴客の  
數富みに増加し右の觀望臺へ登られる方も随分多  
くはあれど武藏の立川、國分寺附近で秩父の奥山  
が雪に輝く壯大な眺を單に信州境の山だ位で見捨  
るのと同様に村の小學校の先生迄が我國大山系の  
一として忘る可からざる、この赤石山系の立派な  
生きた標本を眼前に仰ぎながら、惜しい哉信州の  
山だと云ふ位で打捨て終ふと聞て居るので其儘に  
捨てるのも惜しく斯く申す自分すら年來の豫想に  
反して南アルプス殊に赤石山脈が殊の外雄大に仰

修善寺は温泉場として名高い丈で、村として山  
間の極く狹隘な場所であるから今述べやうとする  
觀望臺のみならず、附近何處の高地からも仰がれ  
る寧ろ沼津の海を眼下に見下す菊屋公園の裏山、  
尙ほ一層の眺望を望まれるのなら達摩舊火山にで  
も登らば其の方が可いかとも思ふ尙ほ餘程前に友  
人内田君と共に大仁停車場下手の高地を通つた時  
にも眺めた位だから附近此種の觀望地は一にして  
止まらぬと思ふ。自分の登つた高地は温泉場から  
七八丁下の俗稱城山公園と云ふ所で、勿論小さ  
な丘ではあるが上は展望に都合の良い様に坊主に  
成つて居るから箱根富士の眺望並に南、天城の連  
山も一望の内に收められる、其れに周圍の丘より  
一際高い爲め獨り南アルプスのみならず觀望には  
至極都合が良い、西側即ち南の見える方は其頃には  
低い枯草山と成つて居るから些たる邪魔にもな  
らぬ、且つ近いから朝の散歩には持つて來いの場  
所である。

自分の眺めた時は春も四月に入つた許り桂川の流に烟る温泉の香にも飽いて散歩に出掛けると遙か天城の裾は今櫻の眞盛り、折々麓の方から、ノンビリした鶏の聲がする、湯ヶ島通ひの馬車が春風に揺られて霞の奥へ消えて行く、稍々ともすれば意地悪い霞が浮び出て来る様な日であつた、霞から鈍染し出た様な富士から目を西に轉すると、ピタリ會つたのは懐しい片時も忘れられぬ南の大屏風であつた、農鳥を右端に荒川、惡澤の諸峯より大無間小無間に亘る蜿蜒として續く大障壁、青空を利刀で削つた大屋根の様な聖、鋭い切れ相な荒川、聖い硝子の様に輝いて悠々として中天に聳ゆる南の峯々、自分は何物か強い力で惹付けられた様に、薄れ行く迄名残惜し氣に心行く許りに眺めた。

時が時であつた爲めか（觀望の好季たる二月には未だ見ぬが）如何にも距離が遠いのだと春霞どの爲め白峯山脈中農鳥附近と生木割？其他二三を除いては尾根の具合が糲糊として少しも分らぬ（赤石山脈の大部は之れを明かに望むことが出来た、

全山雪を頂いて居つたから）又大仁停車場前に聳立する城山舊火山（地質學雜誌大正六年七月號参照）の爲め農鳥から間の岳に至る尾根を残して間の岳、北岳は此の山の後に隠れて見えない此等の點に就いては中村氏の愛鷹と越前岳との中間尾根から望まれた展望圖の方が比較にならぬ程明瞭に表はれて居る故に白峯山脈の尾根迄明瞭に見やうとするには不適當の地である。

右の如き缺點ある他面長所としては、一言に盡せば赤石山脈の展望臺としては實に立派の場所と思ふのである、即ち白峯山脈並に其前山迄が望まれば勿論これに過ぎた事は無いが若し赤石山脈を眺めるとしたら一面の缺點は他面の長所となつて却つて前山は霞で消され一枚の幕の様に見えるから赤石の諸王座が浮彫の様にハッキリとしてくる、尙ほ遠望の結果前山が餘程低くなる爲め赤石山脈の諸王座は實に壯大に胸より上を現はす事となり、愛鷹越前岳間の展望圖を拜見したがそれ以上大きく見えはすまいかと思はれた程立派であつた、且つ殆んど眞正面より此の大山脈が仰がれ

て餘程南に寄つた大無間小無間迄が大きく見える（大小無間は僅か残雪あるのみであつた）未だ愛鷹からの展望は経験しないが修善寺の方が以上尾根不明瞭の缺點はあるがヒマラヤの寫真帖でも見る様な氣持ちなら、却つて此處の方が良くはあるまいか思はれる。

以上述べた事を約言すれば、修善寺の觀望臺は入浴方々の氣樂な展望臺で種々の缺點はあるが赤石山脈が比較的大きく又比較的正面に見えるが故に殆んど同山脈の諸王座を一望の内に收め得られる場所と云ふことになるのである。

尙ほ一月及び二月、早朝は大抵見えるこの事であるから、同地へ遊ばれた諸君は是非展望せられんことを希望する、七八月は全然無効である。蛇足ではあるが次に同地より眺め得られた南の諸王座中、特に目に立つたもの次を右端から順次列記して御參考に供する。位置尾根等に就ては中村氏愛鷹と越前岳との中間尾根よりの展望圖を参照せられ度い。

一、農鳥、白河内、黒河内、生木割？笹？

一、荒川、惡澤、魚無河内、西河内、小赤石、赤石、聖、上河内、新田河内、ガツチ河内、イザル、光、小無間、大無間。

尙ほ最後に此等山名中大部分の御教示に預つた木暮理太郎氏へ御禮申上げて筆を擱く。（佐伯）

### 大隅高隈山登山談

私等の學校になつてゐる舊鹿兒島城趾の崩れ残つた石垣に倚つて東の方を見遣ると、櫻島の南側の斜面の半ばから起つて、櫻島などは全く違つた性の山が、三つ四つの尖つた峯と、四つ五つの圓頂顛とを擡げて長くならんでゐるのが見える。

天氣のよい、少し風立つた日には、きつぱりと草地と森林との界が限られて見え、ことに秋晴（と云つてもこの鹿兒島では十二月中頃のことであるが）の日などは、山が恐ろしく近く見えて來て、茂つてゐる木々の葉叢まで見え透くやうに思はれる。これが大隅の高隈山である。決して高い山ではない。しかし選り好んでこんな西南の端に逃げ

こんで、その上決して二千米突から上の山に登つてはならないと醫師から禁せられてゐる私は、この山にでも懐しまねばならないのである。その尖つた峯々は、かつて中學にゐた時分に望み見た槍岳の尖りと、單に尖つてゐると云ふ性質を共通してゐることによつてのみ、私の登山欲を十分にそり立てるのである。いつかきつと登つて呉れると覺悟してゐた。

春は逸早く南に來る。後方の城山の常緑の林をよくくゞ氣をつけて見ると、ほんのりと若葉色がにじみ出て來る。そして友だちがもうボートに好いと云つて、七人組になつて海岸の艇庫に出て行き、長いオールを漕げない私達のやうな連中は、小さな貸ボートに帆を張つて、思ふさま走らせ、櫻島の麓の村に、枇杷を食ひに行き、磯に兩串餅ツヤシ餅を食ひに行くやうな氣候になつたと思ふと試験がはじまる。ノートや、字引と首つ引になる。同時に春休みの費し方が人々の間に話しかはされる。或人は南薩の烟草の紫の花の間に開閉岳や、野間岳に憧憬るべく、或は吹上濱の砂丘に、或は霧島

に、安樂温泉に、遠くは阿蘇、温泉の岳に行かうとする人もある。家の戀しい連中は試験のすんだその晩の汽車で歸るんだといかにも嬉しさうに云ひ觸らす。私は前から、Yさんや、Kさんど話しておいたことでもあるし、又他の人々が賛成するからして、早速七高山岳會の第三回遠足は高隈山と定めて高等農林、垂水村役場、鹿屋農學校に照會狀を出した、そしてその揚句次の豫定を發表した。

大正五年四月一日。午後一時半發、大隅行の瀛船により垂水まで、其他郵便局に留置したる郵便物次第にて、内野温泉場又は垂水に一泊、瀛船賃一人金貳拾五錢也、航海二時間半、もし内野に宿泊するならば歩行二里半。

四月二日。垂水又は内野出發、本城川の谷を登り大窰柄岳おののけに登り、南走して御岳みけに至り、東降して鹿屋村に着、山路六里、平路二里、内野又は垂水宿泊料約六拾錢也、他に案内者雇賃分擔のこと。

四月三日。鹿屋にて解散。歸鹿兒せらるゝ向は

輕便鐵道にて高須まで、高須より汽船に乗らるべし。鹿屋宿泊料約七拾錢也。輕鐵汽船連絡切符四拾九錢なり。以上

實際二日目に高隈の峯々を片端から踏み越えるのは高等農林の方から不可能だらうと云つて來たし、鹿屋農學校からは未だ試みたことはない返答が來た位で、何だか心配でならなかつた。一番はじめに云ひ出した私が、先づへこたれはしまいかと思はぬこともなかつた。もどく我々の會には雨がつきものになつて居る。歸省毎に雨にふられぬことはない誰々、白馬で越中の風と雨とに襲はれたが毫も恐れなかつたと自稱する誰々、年に二度、七夕のやうに涙雨である人と別れねばならぬ誰々などが御大將株であるこの會は、當然雨がつきものである。いつか櫻島では大風大雨でぬれ鼠になつた上、歸りの船は大浪にゆられて、大抵眞蒼に顔色が變り、震へ上り、嘔吐し、氣の毒にも學友會長たる館長は、歸宅せられてから嘔吐したといふ事實もあれば、三里の道を大雨にふられ、二日間學校を棒にふつた人が出來たこともあつ

た。揭示を見る人は皆、雨を心配して呉れる。生憎試験半ばごろから東風が吹き出して、高隈の峯に笠雲がかゝりはじめた。つゞいて櫻島も同じやうになる。試験の濟んだ日などは今にも降り出しさうになつたので、人々は腹を立てた。そして五六人の人々と足ならしのため三里足らず散歩したのは宜かつたが、いづれも又ぬれ鼠になつて、明日までに制服が乾き上つて呉れぬ時は、夏服を着なければならぬと、こぼす人が出來た。明日の天氣が非常に氣にかゝる。

四月一日。朝起きて見ると雨は歇んでうす日が射して居る、しかし櫻島にはまた雨雲がかゝつて、東風は相變らず吹いてゐる。どうなることかと思ひながらも、脊負袋の中へ何とはなしに詰め込み、雨合羽を外側にくゞりつけて見ると案外重い。構ふものかと觀念して、昨日釘をうちかへた靴をはき込み、白い脚絆をぐるぐゞ巻きつけ、十二時すぎに家を出て、電車で石燈籠通の下の灣内汽船の乗船場へ出懸けた。電車の中では、乗合は皆私の異様な風態を變な服付で見た。集るもの十四人、

殊に名物男のKさんがやつて来たので、人々は大變よろこんだ。歴史の試験の時 Cole Napoleon について「ナポレオンの子にもあらず、妻にもあらず、蓋し捨兒ならん」と答案して、人の好いK先生をあつと云はせたど傳へられて居る人である。今日は柔道の稽古着をかついでゐる。どうするんですかと尋ねると、「鹿屋から北の方へ行つて中學校の道場破りをして、無銭旅行をするつもりです」と答へたので、又もやあつと云はせられた。船賃の割引のことで事務員と一論争やつた揚句、警察へ行つたり、港務官をひつぱり出したりして、ともかく船賃を値切つた。値切つた爲かどうか知らないが船の汚ないことゝ云つたら、實にひどい。大きさは百噸たらずあるが、水夫は皆船頭のやうに和服を着て、上層甲板と云はず船室と云はず、無理に人をおしこめるのである。試みに上等室をのぞいて見るとこの方はなほひどく人がつまつて居る。私は前の方の甲板の三角形になつた所に腰

をかけた。やつと二時になつて、生ぬるい汽笛をあげたと思ふと、棧橋をはなれた。防波堤の間を

通りぬけて、東風のおかげでやゝピツチしながら港外に出た。櫻島の雨雲はどうやらとれた。船首では向ひ波がザワザワ鳴つてゐる。神瀬まで來ると櫻島がすぐ頭の上になる。

沖小島の北側を通りすぎると湯之の村が見え出して、櫻島の南側の斜面がまつしぐらに海へのめり込んで、所々しよぼ／＼と灌木が生えてゐるのが、いかにも汚らしい。空はいつのまにか晴れ上つて、紺青色に輝き渡り、頂上の御鉢から吹き出す白い烟が、ぼう／＼と立上つては又東風に吹き消されてしまふ。開聞岳もこゝから見ると、大變格構が悪く、左肩を怒らせてゐるのが、鹿兒島の兵兒二才のやうである。沖小島は後に小さくなり、早崎の坊主山の緑がてら／＼と光るやうになると、船はもう大隅近くになつて、櫻島の鍋山の爆裂口を左に見て、船はなほ進んで行く。熔岩の間からは水蒸氣がなほ執念ぶかく立ち上つて何やら硫黄くさい。有村であつたと思はれる所に、海岸に低い石垣が残つてゐる。灰で掩はれてしまつたこのあたりは實に哀れなものである。春になつて

も花はさかぬ。崖になつた兩岸にはさまれて、淺い灣に入ると、汽笛が鳴つて、垂水が近づいた。外よりも却つて灣の中で船がゆれる。岸からは十人ほどの客や、荷物を載せた舢舨船が來た。身仕度をして舷に出ると降りる人が集つたので船は傾いてゐる。私等は先を争つて舢舨船にとびこんだ。ふと見ると、帆杭の先に郵便船の印がひら／＼してゐる。こんな小さな癖に郵便船とは滑稽だと思つたけれど、櫻島へは小さな和船が、郵便の旗をあげて通つてゐることを思ひ出してあまりおかしくなくなつた。汽船は我々が降りてしまふと、ゆらりゆらりとゆれながら、古江をさして出で去つた。舢舨船はびつたり岸へつかない。三四間手前から船頭が一人一人おぶつて岸にあげて呉れる。そして舢舨船を參錢とられる。降り立つた人は一應はこちらを向いて、それから白い砂濱をザク／＼歩いて向ふの小さな人家の中へ消えてしまふ。勢揃へをした私等は、漁師の家の間を通りぬけて、郵便局の前に立つて、私の受け取つて來た葉書を見た。十人位の蒲團はあるとあつたので、それち

や内野へ行けど云つて、背負袋をゆすり上げたり、脚絆を巻きなほしたり、店へかけこんで烟草を買つたりした。子供達が知らぬ間に私等をとりかこんでしまつた。

村道を少し北へ行つて東に折れると長い屋敷町になる。三四町行くと本城川の兩側のからりと晴れた平地に出る。高隈山は鹿兒島で見るよりは遙かに高く、五時の夕日は露出した白い石をあかあかと照してゐる。あの石の下が今宵の宿り場所である。美しい湯がわき、粗末ながらもうまい晩飯が食へるかと思ふと足がひどりで急ぐ。よく解るはずの道がどうも變だと思つて、行き合つた馬子にきくと、高隈へ行くなら此方ぢやないと云ふ。皆不思議がつたが、彼等馬子は高隈と云ふ村を指してゐるのであると云ふことがわかつた。今度あつた人に内野の温泉はと訊ねる。内野と云ふのは知らぬが、湯場湯場ならこの先に新道があるから、それを行けど教へて呉れる。井河の村の北はづれから新道にかゝつた。山はそろ／＼兩方から迫り出して來る。砂利を敷いたまゝの道は實に歩きにく

かつた。そのうち愈々山にかゝる。川の水は實に綺麗である。久しぶりに花崗岩（これはなつかしい神戸の後ろの山をつくる岩である）の白い輝きと、その間を流れて行く滑らかな水を見た。山の鼻をぐるりと回ると向岸に美しい山櫻が、今丁度盛りである。人々は皆驚いて、道から河につき出した大きな岩の上に坐つて思ひ／＼に眺めた。實に静かである。時々鶯の聲がきこえる。夕日の名残りは空気をうす黄色く染めて居る、その中に山櫻一もただけ白い花を浮き出させてゐた。あまりおそくなること不可ないと云つて、皆は又腰を上げた。小さな峠をこえた時、向ふに白い烟が見える。人聲がする。先になつた人は皆驅け出した。もうすぐたぞと叫びながら。

温泉場についた時はもう暗かつた。そして足許が一寸危ない位であつた。一棟の寄宿舎のやうな建物が客室で、その隣りが浴場である。その下の二棟は主人の住家であらう。小二疊ほどのすゝけた、疊が赤くなつた室に吾々は通された。そして吾一にと浴場へ行つた。私はこの湯が温泉でなか

つたので失望した。そして湯加減も全くぬるかつた。小さならむぶが一つ、廣い浴場をてらしてゐる。十四人のたくましい裸體で湯槽は一ぱいになつてしまつた。うすい湯氣があたりをこめて、人の顔は見わけがたい。しかし遠慮のない話聲で誰であるかは直ぐに知れる。部屋へ歸らうとすると、湯上りの肌に山風がうすら寒い。前の白い石の輝きは最早消えて、水音ばかりがきこえて来る。誰が歌ふのか、グウノオの織麗なセレナードがひいて来る。突然薩摩琵琶歌がはじまる。又ハモニカが軽い四分の二の調律を鳴らす。部屋へ歸ると圍爐裏には火があか／＼と燃えてゐる。誰やら、焼酎を飲んでゐると見えて、きつい香が漂ふてゐる。山の宿の親しみが快く心にしみ渡つた。飯が出来たのは九時前であつた。鶏の薩摩汁と、何か貝類の鐘詰と漬物であつたが、飯も汁も暖かなので大變うまかつた。亭主に案内者のことを話しておいて、寝たのが十一時前であつた。

二日。朝三時ごろ眼が醒めた。寝た時から寝苦しかつたので早速起き上つた。そして又浴湯へ行

く、もう二三人はいつて居る。仲間のものかと思つて聲をかけて見ると普通の湯治の客人であつた。大方夜通し湯につかつてゐるのであらう。かかる長時間の入浴に適するやうに湯が大變ぬくしてあることを聞き知つた。冷い水をかぶると眠氣がさらりと脱け出して行つた。そのうちに仲間の人達が来る。それで浴場は大變賑やかになつた。下の主人の住家はもう起きてゐるらしく、らむぶが耀いてゐる。朝寒の風がぞく／＼身に滲みわたる。五時に朝飯を食ふ、案内者がやつて來た。握飯を一人前づゝ持つて、六時少し前に出發した。温泉の上から道は伐材を運ぶための木馬道うまみちになつてゐる。温泉を取りかこんでゐる森の下蔭は未だ眞暗ではあるが、森をはなれると明るくなつて、急勾配の道が本城川の右岸の山腹を縫ふやうに近づいて行く、目指す高隈の大笹柄岳は、山と山とが裾を合せてゐる、蔭になつて此處からは見えな。道の邊に小さなすみれや、こゝらに多い白いたんぽぽが咲いてゐる。河ははるか下の方をがうがう音を立てゝ流れて行く。山から落ちる小川を

越すには、木馬道は單に木が並べてあるばかりである。用心深い人々はおづ／＼と渡つた。

東に高い山があるので日は中々射しさうにな。向ふの森の中からは、それでも霧がもや／＼と立上つては消えて行く。しばらく草地を歩いたと思ふと、道は又森林の中に走りこんでゐる。河は足許近くなつて、石が多く、水音も森の葉叢に反響して一際高い。河は愈々近くなつて來る、木馬道は或所では河の中に柱を立て、片側だけが山に倚り懸つてゐるやうな危い所があるかと思ふと、或所では全部石垣を積み上げた場所もあつた。山の出張つた所をいまはりすると、水音は急にさわがしくなる。そして道は急に右に折れて割合に長い橋に出た。こゝが向つて左の方から來る猿城川さるぎがわと、右手の本城川ほんじょうがわのかけあひである。橋の上はからりと明るい。大方二時間あまりも歩いたので、私等は休憩した。その間にYさんは甲斐甲斐しく河原へ降りて寫眞をとりにかゝつた。橋の上にてはうつらないと云ふので、皆橋脚をつたつて下へおりた。そしてかたまつて寫眞をうつし

でもらつた（これは失敗であつたことがわかつた）  
 これから向ふ峯の伐木したあとを横さまに歩  
 く。春とは云ひながら冬服を着てゐる私等は、大  
 分暑くなつたので上衣を脱いだ。Kさんは柔道の  
 稽古衣を案内者にもたせてしまひ、終には雑囊も  
 水筒も渡して、それでも大汗になつて歩いてゐる。  
 道は頗る危くなくなつて、全くの棧道である。其  
 上横木がうちつけてないので、次へ渡らうとして  
 飛ぶと、彼方のものが動いてひやりとさせる。か  
 うなると木強漢（鹿兒島語）はどんく行つてし  
 まふが、用心深い連中は非常におくられる。急な道  
 は山の端にある小さな小屋につくとぼつたり止つ  
 てしまふ。又腰ををろした。見下すと、下の方の  
 二つにわかれた谷には、いづれも棧道があふなつ  
 かしくはひ上つてゐて、氣のせむか知らぬが、伐  
 木の音が聞えるやうだ。小屋の中には何にもない  
 が、それでも夜になると人夫達が寝るのか、むし  
 ろが重ねてあつたり、大きな焚火の跡が残つてゐ  
 たりしてゐる。

やがて案内者が追ひつくと、休んでゐた連中は、

腰を上げたが、あとから来た連中が不平を云ふの  
 で、又一緒に腰ををろして、烟草をふかしたり、

歌をうたつたりする。これから先きは道は全く跡  
 ばかりになつてゐて、なだらかにおし出してゐる  
 尾根のはしから真東にむいて、仰いで見る大篋柄  
 岳の頂上へ續いてゐるが、歩いて見ると思つたよ  
 り遠かつた。茅の茂つた平たい所を過ぎると、又  
 密林になつて、右左から木々が刺股などのやうに  
 小枝を突き出して、びし／＼人をなぐりつける。し  
 かし道は案外平らかで、動もすれば下り氣味であ  
 る。針葉樹と潤葉樹とが入り亂れて、下蔭は日光  
 が洩れないので薄暗い。霧島の官林より好いなあ  
 と誰かがいつた。人のあしあとの側方には、蕨苔  
 類がふはふは生えてゐて、時々たうげしばやその  
 種類のものが目に入る。しつぽごげが一面に生え  
 てゐる所があつて、その上に轉がつてゐたいやう  
 な心持になる。小さな水溜の所に出た、人々は大  
 いに飲み、水筒につめなごした。しばらく行つた  
 かと思ふと、道は急にけはしくなるが、無二無三  
 に登る。森の有様が少しづつ變つて来て、しばらく

くすると木が小さくなり、禾本科の植物が藓苔に代つて来る。頂上は眞上に見えて來たので人々は新しく元氣が出て、案内者の後に跟いて行くのだが、案外早いのでこちらは骨が折れる。土をかぶつた大きな岩の上に出て一休みする。下の方はすぐ見えないが、大篋柄から平岳、横岳へ連なる木を一ぱいに鎧つた連山がすらりとその横つ腹を見せてゐる。頂上はさつき見たほど近くはない。こ

こから道は殆んどなく、頂上目がけてまつしぐらに、息もつかず匍ひあがる。手袋の中の手は汗だらけになつて、ゲートルは知らぬ間に泥まみれになつてゐた。頂上近く上り氣味に北へまがる。大篋柄の北側の浅い鞍部に出た。立枯れになつた木の下をくゞり、かやのやうな草をふみにじつて喘ぎくゞり上りつめると頂上である。おゝいと聲をかける。下の方から返事が來て、ふうくゝ息を吐く顔が一つ一つ上つて來る。かうして十四人は大篋柄の頂上についた。丁度晝なので飯を食ふことにする。木の間から見渡すと、櫻島の禿げ頭からは湯氣がもくくゞり立上つてゐて、その色が馬鹿に

赤い。先刻登つて來た湯谷は、兩方からうまく山にはさまれて、びつたり押し合つてゐる葉叢は地面も川も見せやうどはしない。どうしたのか鳥一匹鳴かない淋しさである。こゝまで來て見ると、山の頭は存外圓くて、鹿兒島から見るのとは大變異つてゐる。ものゝ三十分も休んだ後、南の方御岳へ向つて下りはじめた。

大篋柄は、案内者によると一の名所だめいしょと云つた。道は殆んど無い、唯だ木の間を山の脊梁線に沿うて無茶苦茶に進むのである。枝が邪魔なので絶えずうつむきながら、まだ残つてゐる櫻島の灰を蹴散らして歩いて行く。どうかすると一方の谷へ下りさうになるので、注意しながらなるべく高い所を選んで行くか、急な崖に出遇つて横へ回つたりなどする。二の名所といふ頂を乗りこすと御岳が向うの方に見える。しかしその間にまだ三の名所と云ふ凸起がこゝから見ると御岳より高い位に見えてゐる。やつと三の名所へかゝる所へ來た。この調子で行つたら鹿屋へ着くのは夜になつてしま

へまはつて垂水へおりやうと云ふ勸議が出たので、もし途中で道に迷つた時の用意に各自の食糧を調べて見るといづれも貧弱であつた。そして案内者にはこれから御岳までどの位あるかと訊ねて見ると、知らぬと云つた。人々は大變怒つて種々詰問して見ると、彼は一の名所までしか来たことが無いことが判明した。しかしこゝまで来ればもう仕方がない、なるべく急げといふので、地圖を唯一の頼りとして、御岳を指して歩きはじめた。

三の名所の東側は案外勾配が急で、木から木へわたるやうにして横を搦まなければならぬ爲に、可なりの時間を要した。下り切つて御岳へは登りばかりと云ふ段になつて、また一休み、水がほしいが水筒は大抵空になつてしまつてゐる。案内者に水を探させやうとしたが、骨惜みをして動かないので、皆は尙更激昂して、勝手にしろと云つた調子で、谷へ相嘗降りて見たが、この高い所では水は全くなかつた。

御岳へ着いた頃は先登と後陣とは可なり離れてゐた。かく云ふ私は空腹の上に少し荷物重かつたので、殆んど最後に頂上の草地へ這ひ上がった。一息つくところれほど弱つてもゐない。とつておきの握飯を水なしで食つて、氣持よく枯草の上に體を横へて空に見入る。よく晴れたものだ。たゞ一片れの銀色の雲が淋しさうに東へ馳けてゆく。體が空の中へとけ入りさうな氣持になつて眠くなつてしまつた。他の人々も同じ様に黙りこんでゐる。起き上つて北の方を見ると霧の中に霧島の二三の峯が黒く浮んでゐる。海軍の水路測量部の標識旗がひどい風にぼろぼろになつて四方から針金や木で支へられてゐる下に集つて記念の撮影をした。其中に誰かめざしを焼くつもりで枯草に火をつけたから耐かぬ。可なりの風に煽られてばつと一坪あまり燃え上がった。驚いて漸く消し止める。

午後の日は暖くさしてはゐるが、この國の春風のつねとして、中々冷たい。暫く休んだ後一直線にひきおろした急な山梁を下りにかゝる。木がまばらに生えてゐて、かすかながら人のふみつけた趾がある。三十分あまり下つた道のそばの岩蔭にわづかな水が滴つてゐるのを皆飲んだ。先登はど

んくおりてしまつて殿後は誠に心細い。道が一  
寸登り氣味になつたと思ふと、足跡がなくなつて、  
先は可なりな崖になつてゐる。そこで先登がまち  
あはせて呉れたのでやつと追ひついた。道らしい  
ものは見つからないので構はずその崖を降りる、  
又道があつた。それが水のために深く凹んでゐる  
ので腹の空いた足許の覺束ない人には却つて困難  
である。木の間を透して見ると東の方の笠野原に  
は菜の花の黄色がひつたりと掩ひかぶさつて、間  
間に黒い土が見えるだけである。下りが二十分ば  
かり續くと森林に入つた。腐葉土の足ざはりが馬  
鹿に氣持が宜い。道は急に高い崖にぶつかつた。  
先登はどう行つたらうと考へると足跡もよくわか  
らない。おゝいと呼ぶと大分左の下の谷間で返事  
が聞える。どうもおかしい、道がまちがつてはゐ  
まいかと地圖をひろげて見ると、小手崎こてざきへ降りる  
自分等か通るべき道は、七七八と云ふ標高點のあ  
る山を越して其先きの山の手前から左へ行くはず  
になつてゐる。先入主となつてゐる頭は、さつき  
の崖のあつた山か七七八の山だと思つてゐたの

だ、これが道だと思ひこんで、聲のする方へ、丁  
度林斑五九、六一の境界標のある所から横へ降り  
はじめた。これがそもその間違ひであつた。先  
登に待つて呉れど頼んでも、中々待つて呉れない。  
氣の短い連中は、腹を立て、「木強漢ぼつけん」は仕方が  
ないと云ひながら、下の方の聲をたよりに、たよ  
りない足をふみしめふみしめ急な道のない谷へ下  
りて行く。何だか心細い。道がまちがつてゐやし  
ないかと思ふが先登は中々止つて呉れさうにな  
い。やつと小さな山梁の上で先登のやすんでゐる  
のに追ひ付いた。これまでに大方四十分位はかゝ  
つたらうと思はれる。自分等が通るべき山梁は相  
當に大きなものでこんな急な筈ではない。全く  
道をまちがつたに違ひないと云ふことがわかつ  
た。しかし今更引返すのも馬鹿げてゐるから、こ  
の山梁をおりられるだけおりて、東へ東へと行け  
ば、この山の麓の縣道筋へ出るにきまつてゐるか  
らと云ふので、引返すことを止めて、今度は離れ  
離れにならぬやうにして下りはじめた。小さな山  
梁はすぐに盡きて水のない谷筋へ下りてきた。石

の堆積は非常に歩きにくいが仕方がない。水が見つかつたので、皆大に飲む。尙ほも下つてゆくと勾配がゆるくなつて來た。どうやら麓に近いなと思ふと人々は又暢氣になつてしまふ。この下りは随分長い時間がかかつた。しかし遂にかすかな道に出會つてこれを辿つて行くと、木の切株と、薪の散亂してある平地へ出た。もう大丈夫だと思つたら、後ろの方で口風琴モカの音がする。河の水は豊かになつて底には砂さへ認められる。道も次第に太くなつて、とう／＼田が出て來た。人々は全く安心して進んで行くと可成り太い道に出會つた。腰ををろしてやすむ。菓子が出る、烟草をふかす。川の中へ入つて河鹿をつかまへて來た人もある。今下りて來た山の方を見ると全く恐ろしい氣持になる。夕日はその山のうしろにかくれて、東側はたゞどす黒い。するぶん急なものだ。氣を取りなほして歩き出すと十分ほどで縣道筋みんどうの宮園みやのに出る。鹿屋までは二里たらずの道である。七時ごろやつと鹿屋の町に着いた。

鹿屋で一泊のはずであつたが、夜十時に高須か

ら鹿兒島行の船があると聞いたので、暗い町をぬけて輕鐵の停車場へ來た。そして高須で船を待つ間、寒くてふる／＼慄えてゐた、夜二時ごろ鹿兒島の波止場についた。

温谷の内野温泉場より大窠柄頂上（一二三六米）まで約四時間を要す。但し一時間について十分の休憩時間を含む。

大窠柄頂上より御岳（一一八一米）までは山梁のみにして約三時間を要す。

御岳より鹿屋町まで急行約五時間を要す。

前述の如く余等が道を誤りたる七七八〇の峯は、後に調査の結果、余等が行き當りたる崖を上り、更に南行して達す可きものなりしことを知れり。その崖は五萬分一の地形圖に表はれざるほどの程度のものにて、且つその所に該當する地圖の等高線が村界線と綜錯せるため、分明ならざりき。今少しく注意したらむには、眞の道を發見し得たるならむ。

案内者として余等は垂水村の木伐小園寅吉を雇ひたり。然れども前述の如く途中より道を知らざれば、案内者としての資格なし。地圖を見慣れたる人は、大窠柄頂上まで案内者を雇ひ、その後は地圖に依りて道を求むるを得可し。案内賃は一日七十錢を與へたり。

陸地測量部五萬分一地圖、垂水及鹿屋參照。（辻莊一）

黒姫山傳説

内地で最も普通な型、即ち、山——湖——蛇を結び付けた傳説として、黒姫の傳説は面白いもの一つであらう。今杉野澤で聞いた話と、黒姫の出生地なる信州下高井郡中野村からの報告とを斟酌して見ると次の如くである。

一

信州下高井郡中野町（五萬分ノ一飯山圖幅）の前身は其の東方、小館の丘の上に在つた。此の小館の城は、今を距る七百餘年、後鳥羽天皇の御代、高梨盛光が一枝城で、（後天文中武田氏の有に歸す）彼が數世の孫、攝津守政頼に至つて、一女があつた。名を黒姫といふ。花顔月眉、實に三千の後宮も顔色なかつたといふ。（一説には色黒く頗る不嫽致で長く生家に在つたともいふ）或る年の春、攝津守は部下の將士を召し具して、郊外に觀櫻の宴を催された事があつた。此日姫も宴に臨み、酒興將に酣ならんとする時、櫻樹から、ふと一小蛇が落ちた。此の蛇こそは大沼池（上高井郡）の主

の化身であつて、黒姫が色香に心迷ひ、今日しも遙かに此處に來たのであつた。池の主の懸想は深く其の貫徹を期して、高梨の不幸は此の時より始まる。或る日小館の城に來つて城主に面會を求め一武士があつた。

『我今度殿に一つの願ありて候。此の城中に黒姫と申す姫の在すと聞けり。我願はくは姫を申し受け度く、斯くは推來仕り候』と申すので、殿の云ふやう、『そは我が姫にとりて、無上の仕合せには候へども、姫は我が一女、他へ遣はすべきにあらざれば、御希望無下に斷り申し御氣毒には候へども、左様の次第なれば詮方もなし』ときつぱり答へるので、件の武士も己むを得ず引き取つたが執念深き蛇の事とて一度の拒絶に希望を擲たす再び城主を訪れて、身の素性を打ち明け、『我は今かゝる姿にありつれど、こは人目を忍ぶ假の身、我は大沼池の主ぞ。池の主の斯る姿になりて來る心根を察し、我願叶へてよ』と言葉を盡して逼つた。殿の答へるやう、『御身の望も理なれど、我は今一女姫の遺すべきにあらざれば、我が鑑識に叶はで

やあるべき。御身我が命に違ふなれば我姫を遣はさん』と。池の主『黒姫を我が妻となすを得ば、如何なる事かを厭ふべき。命とは』殿『御身の固き心、斯程となれば申すべし。御身は池の主なれば我が城を三七二十一回廻るべし』。池の主の答ふるやう、『いと易き命哉。我はこれより立歸り其仕度をばなさん。』とて大沼池に去る。偕て城主の考ふるやう、昔から長物は黒金に觸れると、其身腐ると聞くからとて、部下の將士に命じて、城壕の圍りに鐵柵を結び、且つ之に刀を結ばせて置いた。斯くて夜に入ると大風を起して池の主は來り、城の周圍を廻り初めたが、淺間しや刀の刃に係つて其の腹を斷たれ、體は血に染つて、口は火炎の息を吐き、山を崩さん鳴動物凄く漸くにして第二十一回目を廻り終つた時は、既に死せるものゝ如くであつた。しかし蛇は蘇つた。けれども城主は未だ蛇の望を遂げさせない。

## 二

蛇は怒つて大沼池に歸り、親族會議を召集し、高梨より受けた己が恥辱の數々を打明け、『さらば

皆は我ために蟲螻蛙の末に至るまで水一升を出してよ』と命を下す。茲に於て、山中四十八池の主は各準備をなし、一時に水を拂ひ出し、一擧して小館の城を水攻にした。濁流奔騰して城に迫つたが、城は今尙ほ抜けず。池の主は更に城東の一山を抜かうとしたが、全山岩石にて七日七夜の勞苦も其甲斐無く力盡きた。斯くて小館の城は流失を免れたけれども、人々の溺死する者多く、城主は己が娘一人の可愛いさに斯く庶民に迷惑をかけるを遺憾とし、黒姫を膝下に招いて、因果應報の理を諭し、何處なりと住み易き地を求めて、身を投げよと云つた。姫も今は覺悟して、戸外に出れば、月光を浴びて高く高く峙つ雄鷹山（黒姫山）の雄姿。頂に立てば四方の眺めも一際であらう。あの頂こそは我が永久の住家であると、父君に暇を告げ、オタネ、オビ女、コビ女、三人の侍女を具して生家を捨てた。

## 三

途中、野尻湖畔古間在の落影に一泊して、携へ來つた鍋を投げた處、忽ち山を生じ、今の鍋山（戸

隱圖幅)となつたといふ。姫は更に道を急いで、杉野澤(妙高山圖幅)方面より登りしものゝ如く、同地から眞上に仰ぐオビ女山に至つて、姫は侍女のオビ女を國元へ歸し、小ビ女山に至つて、小ビ女を歸し、身はオタネ一人を連れて、心岳(中央火口丘)とグルツ岳(外輪山)との間に進み、頻りに渴を覺えるので、一小池に至つて水を飲まうと差し窺けば、其の顔は已に蛇體であつた。姫は已に斯く成り果てた上は娘の道具も不用になつたとして、鏡、櫛等七つの道具を投げ捨てるに皆その型の池となつて、今に、鏡池、櫛池等と七つの池を數へてゐる。姫は更に火口原を溯つて、綠樹紺碧の影をしたす小池に至つて、丸い波紋を眠れる水の面に亂して、遂に湖心の住家に入つた。芳紀十八。之が頂上の大池である。姫は、人の世を捨てるに當つて、オタネを呼び、『之より三里南に下れば、人里に出づべし。とく歸れよ』と言ひ捨てた。オタネは泣く泣く山を南に下つたところ果して人里を見なければ、主人を失つて、國に歸るも何の面目あらうぞとて、試みに池に至つて顔を映

すに、身も又蛇體なるより覺悟して姫の後を慕つて逝つた。黒姫山の南麓種池は之れである。

四

ところが種池の蛇は屢々人里に出て、人畜を害したが、偶々親鸞上人諸國濟度に來り會し、蛇體の身を以つて、人を取り喰ふは不都合なりとし、躬ら登山して、檜の笠を掲げて湖畔に眠られたが、やがて血腥い風が起つて、上人を飲まうとした。上人は、言葉をやを和げ、汝を濟度に來つた旨を傳へ、經文を投げて、其の發心を催した。此れより、種池、大池を始め七つの池は淺せて、今の姿となつてしまつた。村民は山の頂に、黒姫辨財天を祀つたので、高梨攝津は、姫の投身の日、舊曆六月十七日を以つて、山麓赤蓋村に雲龍寺を建立し、杉一萬本を寄贈して、黒姫の祭祀費に當て、聊か村民に對して謝意を表したと傳へる。今尙ほ、毎年七月十九、二十日には中野町に祇園祭があつて、此の日は黒姫も招かれて來り、必ず雨の降らすのを不思議の一つとしてゐる相である。野尻湖畔にも同様の傳説があつて、毎年祇園祭の歸りには湖

の主（龍三匹）の許に一泊すとしてゐる。此の時は湖上如何に静謐でも、必ず雨降るといふ。

尙ほ、右の傳説の骨子となる事實は左の諸項であらう。

一、高梨氏敗後は越後に走つた。

二、政頼に清姫といふがあつて、深く魚賣ぎよやうり觀音を信じた。終に、野尻湖畔程遠からぬ相原在（赤葦？）に一字を建て、茲に没した。時十八歳。寺は黒姫山雲龍寺といひ、往時、黒姫登山者は、必ず詣でたといふ。

三、舊記に依れば、天保六年、並に永延八年八月、寛保二年八月、横湯川汎濫して、大洪水があり、中野附近河原となる。

### 五

右に就き、日本傳説叢書刊行會發行、藤澤術彦氏編著の日本傳説叢書の信濃の巻第一三二頁に岩倉池（大沼池？）として前記の傳説の前半に酷似した話が掲げてある。其の他郷土研究社發行高木敏雄氏著日本傳説集には第一二二頁に佐藤ヶ池として野尻湖に關する龍蛇傳説が見える。（田中薫）

## 科學と詩

○詩は一切の科學を含有し、一切の科學之に憑依すとはセレイの言である。余輩も斯くあらねばならぬものと信ずる。吾人が彼の晩翠の「雲の歌」を讀むに當り、雲の行動の如何にも豪壯雄大なるのに驚くと同時に詩人は偶然のみを語るものにあらずして必然を語り、精密と詩歌とは必ずしも兩立せざるものでない云ふ事が痛切に感ぜられ、精細なる事科學に類する如きものあるを思はざるを得ない。十九世紀は科學の進歩發達前代未聞であつた。此時代に出來た詩であるから云ふ譯でもあるまいが、彼の「雲の歌」の如きは必然の述言に充され、理屈を抜きにした氣象學の一章の様に思はれる所もある。余は韻脚とか詩句とか字句の出所に就て何等知る所がないから「雲の歌」を解釋をする事は出來ない、然し日常吾人の氣象的觀察に照して、物質を透觀する詩人の眼も、物質を自存として説く科學者の眼も左程に懸隔のあるものでないと云ふ事を感じられる。

○ゆふべは崑崙の谷の底、けさは芙蓉の峯の上、と言ふのも單なる對句とのみ思ふ事は出来ない。雲は空中に含有する水蒸氣の凝結した微粒の水滴である。水蒸氣は無形にして眼に見えないが雲は有形にして眼に見える。有形の雲と言ひ無形の水蒸氣と言ひ、水の分子が物理的に變體したまゝである。雲は水滴のみでなく、最高雲の卷雲の如き雪片が氷片より成るものもあるが、これとても其分子は矢張水である。崑崙山の谷底から芙蓉の峯の上まで有形の雲のまゝで飛來すると云ふ事は稀であらう。途中に於て乾燥せる空中を通過するか温暖なる空氣に遭遇すれば蒸發して有形の雲も無形の水蒸氣となり空氣に吸收せられ、多濕なる空中を飛行するか、寒冷なる空氣に遭遇すれば再び有形の雲となるのであるから終始雲として長い旅路を連行する事は容易でない。雨雪となりて途中に降下する事もある。故に崑崙山に在つた雲が始終有形の雲として富士山まで來る事が稀であるが絶對に有り得べからざる事とも言ひない。尙雲として考ふるよりも水の分子として考ふる時は、有

形の雲が一旦無形の水蒸氣になり再び雲となり、水蒸氣となり其間幾回の物理的變化があるにしても、崑崙山の谷底にあつた或る水の分子が、雲となつて飛行の途中降水とならずに富士山に達して雲となつたとすれば、矢張崑崙の雲は芙蓉に來たと言へると思ふ。

ゆふべは……… けさは……… のゆふべとけさを昨夕今朝と解釋する時は、崑崙山と芙蓉峯との距離と風速に依る雲の飛行速度から計算して不合理であるかも知れないが此場合必ずしも昨夕今朝と解釋する要もあるまい。ゆふべと云ふのは單に夕方晩方の意味で昨夕に限らず何日前の夕方でもよいとし、けさも單に朝と解してもよいと思ふ。さうすれば、………谷の底、………峯の上と云ふ句は對句として面白いのみならず氣象學から見ても、さもあるべき事の様に思はれる。

天候不穩な時は兎も角一般に云ふ時は、一日中の雲量は朝に多く日中少く夕方に至れば多少増加するものである。曉は最も空氣の冷える時で水蒸氣の飽和量少く露點に達し易いから空中水蒸氣の

凝結が速かである。即ち朝は雲量が多い。これが昇る朝日に照されて漸次に消散するものであるが夜間下空の谷底にあつた雲も朝日の昇ると共に下層の空氣も温められて昇騰作用を起すから、それに連れられて次第に上空か峯の上に昇る様になる。故に朝の山地の雲は一旦峯の上に昇る。夕になれば山地に山風即ち山下ろし(下降氣流)を生じ夕方から夜間にかけて雲は谷底におさまる。此意味に於て雲の動作を夕には谷の底朝には峯の上と言ふのも、偶然の現象にあらずして氣象的必然の現象を述言する様に感ぜられる。

○萬里の鵬の行末も 馳けり窮めむ路遠み無限のあらしわが翼 空の大うみわが旅路雲の道中を萬里の鵬程と云ふのも餘り大袈裟に聞えるかも知れないが、赤道に於ける地球の周圍が四〇、〇七〇、三六八米約一萬里、然るに雲は地球の海面を距ること遠く最高の卷雲の如き九千米即ち二里九町の天空にあるから、其道中は赤道の周圍より大なる事明で、萬里の鵬を馳けり窮めむと言ふても單なる形容詞とのみ見られない。あら

しと言ふも空氣の流動に違ひないから、空氣のあれる限り空氣に密度の相違を生ずる限り、空間の何れかに必ず流動を生じ、あらしの止む時は無い。無限のあらしとは斯る意味にもとれる。

○空の 大海星のさと 線をこらすたゞなかに懸かる微塵の影ひとつ 見る／＼湧きて幾千里あらしを孕み風を帯び 光を掩ふてかけり行く天が雲を以て掩はるゝ場合に満天同時に淡雲を生じて青空が次第に白くなり灰色なる事もあるが、夏の夕立雲の如きは雲か塵か判らない班點が青空に現はれたかと思ふと其周圍に見る／＼雲が増えて来て、濃密な雲團を形成する事が多い。夏季炎暑の候所謂熱雷雨を生ずる積亂雲は、下層の空氣が急激に熱せられ、局部低氣壓を生じ、俄かに空氣の昇騰作用を起すに依りて生成せらるゝものである。空氣の盛に昇騰する時は露點に達すべき場合でも、過飽和の儘で上昇する事がある。斯る状態にある場合に、空中の塵埃とか陰イオンとか其他何かの動機で、水蒸氣の一部が凝結を開始して、青空に微塵の影が一つ出來たとする、それがまた

附近の過飽和の空氣に凝結の好機會を與へ、見る見る濃厚な雲團を形成することは往々吾人の實見するところである。斯る雲團が雨を降らす様になると、雲團の附近冷涼を帯びて來るから、空氣が收縮して密になり、疎なる空氣の方に流動せんとする。そこで一陣の冷風を生じ、雲は風に任せて太陽の光線を遮ぎりつゝ漸次他に移動する。斯様な觀察眼は科學者に限る様に思はれるが、詩人も亦實在界の印象を精細に腦裏に納むるものと見える。

○いかづち怒り風狂ひ 山河もよごみ震ふとき  
天濤高く傾けて 下界に注ぐ雨の脚  
やめば名残の空遠く 泛ぶ七いろ虹のはし  
之等は雄大な雷雨の光景を叙したものであらう。  
其次の

曙の紫こむらさき 澄みてきらめく明星の  
光微かに眠るとき 覺むる朝日を待ちわびつ  
やがて焔の羽添へて 中ぞら高くのぼし行く  
は餘程氣象的意味を含むで居る様である。

曙は上空に雲が少ない。雨天の翌朝などは殊に

好く晴れ居る。明けの明星も澄んでキラ／＼して居る。然し夜が明け初めて東の空が白むに従ひ太陽光線に消されて明星の光も微かになり眠つた様になる。朝日の昇るに従ひ下空の雲は焔の如き色彩を帯び、空氣の上昇と共に中空に上る。此作用は太陽が地面に熱を與へ地面の熱は下層の空氣を温め、下層空氣は膨張して軽くなつて上昇するからである。朝日待つて初めて起る現象である。光線の關係で明星と朝日とを交代し、それが雲の動作に影響して來る事を意味するものであらう。

○「しづけき夜半の大空に」以下は優美なる感情と、廣大な想像力を有する詩人最美の靈感を傳へ、太陽光線と雲の物理性との關係による色彩の變化を歌ふたものであり、天上御遊の御駕云々のあたりは最も吾人に雄壯の感を起さしむるものである。

○詩には理屈や科學をさしはさむものでないかも知れぬ。詩人は忽焉として一種の神興の起り來れる時之が衰び去らぬ中に述言すればよからう。然し之を讀むものは科學的觀念を附加して味ふ時

は、物質の自存と之を透観する靈感との融合が出來て一層吾人に萬有の神秘を啓示せんとするもの如く感ぜられる。之れ詩も知らず科學も深く究めない私の詩論であつて、甚だ淺薄なるを免れない。或る時私が高山に登り、雲霧の生成と其色彩形状の變化を目撃し、晚翠の「雲の歌」を想起し「輕羅の袖と身を替て」「照りて萬朶の花霞、花にも勝る身の粧」織ればわが文春の波、染むれば巧み秋の野邊「天女羅綾の舞ごろも」等の決して誇大の形容でなく空想でもない事を知ると共に、詩人が萬有自然から受けた極めて微にしてかすかなる印象を捕へ、雲の行動を順序よく、言語に現はした手際に感心した事がある。山岳に登りて雲を觀る人々の中に或は同感の士もと思ふて、こんな事を書いて見た。或は自分勝手の見方で他には通用せぬかも知れぬ。(山本徳三郎)

## 山岳氣分

山を紀すれば必ず曰く秀靈、水を狀すれば必ず

◎雜

錄

山岳氣分

曰く清澄、風景を叙すれば必ず曰く明媚、其形容の巧に加ふるに誇張の甚しいものがあるから、平凡な景色も忽ち無上の風光となる。こは漢學者流の山水紀文で、支那文人の摸倣に過ぎず。文字の形式に囚はるゝのみであるから吾人に何等の感興を起らぬ事が多い。本家本元の支那文人になると、周圍の狀況を記し來りて、讀者をして如何にも秀靈なら秀靈、清澄なら清澄の感を起さしむる様にして、然る後に適當な字句を持つてくるから、吾吾が讀んでも其實際を想像し得る様になる。然し本元の支那文人中にも形式的字句を弄したものがないでもない。支那の山水紀行文家の内で最も形式に囚はれずに、山水に對する感想其儘を文字に表はし、吾人に快感を與ふるものは、柳宗元である。實際にふさはしい字句を適當の處に使用してゐる。昔の支那文人中彼程山岳趣味を解した者も他にあるまい。彼れが永州に居つた時に、暇あるや同輩と共に高山に上り深林に入り、廻溪を窮め、幽泉怪石、遠く到らざる無く、到れば則ち草を披いて坐し云々と述べ、「凡是州之山水有異態」者皆

我有也。』との感想を抱いた事を記し、「窮<sup>二</sup>山之高<sup>一</sup>而止」とか西山と云ふ高い山岳に登り是山之特出は小山の類でない事を精しく迷べて、『洋洋乎與<sup>二</sup>造物者遊。而不知其所窮』と言ふて居る。

天然自然の雄大宏壯な風景に接すると吾々でも斯様な感想が起る様である。皆我有也と言ふても、利己的に自己の専有物にして、他人に見せたくないと言ふ狭心に出づるものでない。斯様な壯美を感ずるものは自分より外にあるまいと云ふ一時の自惚心と、美を愛する熱情の溢るゝ所遂ひに我有也としなければ氣が濟まぬ様になるのと、天が美を愛するものに附與する特權の様に思ふのとで前述の如き感想を抱く様になるらしい。普通民法上の土地所有權占有權を得やふとするのは全く趣が違ふ。自分が最も眞に其美を解し得るものゝ如く思はれ、此自然が我が爲に造られたかの様に感ぜらるるのが主因で斯様な感じが起るであらう。超越的氣分の爲に自分が天帝の側に在りて靜かに下界を口下して居る様な感じも起つてくる。何人も之を獨占し得ないものであるのに、各人皆我有也

と感ずるとせば、不可分共有物となる譯である。それはさて措き、吾人が山岳旅行をなすに當り前記柳宗元と同様の感を抱くことあるは確かなる事實である。エマルソンの詩人論に、理想は爾に取りて實なるべく、實在界の印象雨の如く、爾が魂に下るべく、山河海陸悉く汝の有なるべし。又曰く詩人は自己の權に於て帝王なりと言ふてある。斯様な氣分は詩神を知つた酬いとして附與せらるる山河海陸の嘆美權であるかも知れぬ。何れにしても吾人が山水明媚の地、殊に人跡稀なる深山に到れば、此等の山水は皆我有也との感じの起すものである。

○山に登る目的は其人に依りて種々様々であらう。或は科學的研究の爲、或は嘆美の爲、或は單に高い處を窮めねば氣が濟まぬと云ふ一種の向上心に依り、或は趣味のため、或は前述の如き、詩人に與へられたる帝王權を味ひ爲に登山するものもあるであらう。私は尙此外に現代を超越せんが爲に山に登るべしと言ひたい。餘りに超越し過ぎて現代と没交渉となつても困るが、世上の煩累、

時事の擾々たるに遭遇し、一面超越的修養がないと、落付いて事に當る事が出来ない。艱難ありて衷心煩悶するの時、困厄禍害の裏にも、微笑を浮べて一の理想に向つて進み得るのも、一面に於て現代を達観超越する精神があるからであらう。非凡の人才は書齋の中に立籠つて居つても修養に依りて、現代を超越する事も出来るであらう、然し吾々凡人は讀書修養のみに依りて超越心を起す事が容易でない精神上に於てのみならず、肉體までも超越地點に持ち運び、眼光を超越的俯角に發射せしめねば、眞に超越心が起つてこない。斯様な肉體諸共超越地に持ち行ふと云ふ意味に於ても私は山に登りたいと思ふ。「我」は宇宙間の一微分子に過ぎざるも悟り易い。

清淨無垢の處女達が、急激に浮世の荒波に巻き込まれるとか、他人の家庭にでも入る様な事があると、之れまで夢にだも思はなかつた心配苦勞が數重なり、小心翼翼、悶死せんとする様になる事が多い。此時に當つて腦裏の半面に、世事を達観する超越心があれば、悶々の情を抑へて、悲哀

の裏にも落付いて事に當る事が出来る。女學生の登山は此の意味に於て最も有効である。大阪某女學校の六甲山登山を以て何か奇を好むものゝ仕業の様に批評する教育家もあるらしいが、百回の倫理の講釋よりも、一回の登山が如何に人心を新たにし、如何に人心を緊張せしめ、如何に「我」なる觀念を明確ならしむるかに想到せば、將に世上の瑣事に與はらんとする處女達に登山せしむるの如何に有意義なるかを了解するであらう。山岳は實に自然の一大教會である。靜寂の裏に無言の教を聽取する事が出来る。

○關東平野の茨城縣の或る地方に四方八方地平線に至るまで高地を見ない所があるさうだ。其處の小學校の教師が生徒に山を説明しても一人として理解するものがないので困つたと云ふ話がある。山は土地の高まつたもので、當り前の土地より高いものであると言ふてもどうしても承知しない。土地がさう高まつてどうするものですかと云つた調子でどうしても山と云ふものを想像して呉れなかつたさうだ。

○吾等も我國の地勢は山岳重々、平地は山地の三割に過ぎずと地理書に書いてあるのを見ても、まさか嘘とは思はないが、判つきりと之を意識する

の自覺はなかつた。丁度人は皆何時かは死すべきものとは知りながら、自己の身内の人々や知友の間には當分そんな不幸はないものと信じて居る様に。然し一旦自分の親友とか、親族の人々に急に不幸があると、まさか今日明日にこんな事があると思はなかつたのに、さても人の運命と云ふものは一日半日を争はれぬものと言ふ様な事を初めて痛切に感ずるが如く、地理書に日本國は山國だと書いてあつても自分の動作する區域が平地に多い場合は、日本國もさう山ばかりであるまいと云ふ考が頭の何處かにや嘯いて居るが、一度登山して、眼下に將棋のこまか、ピラミットの出來そこないを亂雜に立ち並べた様に幾多の大山小山が錯綜して柳宗元の所謂高下之勢。岬然洼然。若垤若穴。尺寸千里。攢蹙累積。莫得遯隱。と言ふ様な光景を見るところで、こんな山ばかり多いかと思ふ様になり初めて山國の山國たる所以を痛切に感ず

る。斯様に登山は地文地理的觀念を明瞭ならしむるものである。

○再び前に戻る様であるが「吾人は須く現代を超越せざるべからず」と叫んだ、彼の樗牛高山林次郎の如き、山に登らないでも思想の上で充分超越の出來た人と思はれる。然し彼れが羽後富士鳥海山に登つた紀文に「彼の纖小の筆を握て寸天尺地の中に醒醒し我は天地の美妙を發揮せりと呼ぶ者の如き抑も亦何等の白痴ぞや、爾の眼を側て宇宙の外に聽け蟬蛸旦々の智安ぞ天地永遠の活氣を呼吸するを得ん」。嗚呼萬頃の蒼茫を瞰下し千古の氷に坐して青天に嘘嘘するの快味安ぞ彼の紅樓朱門に奔走し庭前盆尺の地に踞蹙すると共に語るを得べけんや。」と言ふて居るから山嶺に於て益々超越心を深からしめたものと見える。

○信仰と修養と讀書とに依り俗界を極度に超越し、日本に於けるカーライルの稱ある内村鑑三氏も、「彼の西山に登り廣原沃野を眼下に望み、俗界の上に立つ事千仞、獨り無限と交通するとき、軟風背後の松樹に讚美を弾じ、頭上の鷲鷹比翼を伸

して天上の祝福を垂るゝあり、夕陽已に没せんとし東山の紫西雲の紅、共に流水鏡面に映する時、獨り堤上に歩みながら失せにし聖者と靈交を結ぶに際し、ベサイダの岩頭、サンマルコの高壇、余に無聲の説教を聴かしむるあり」と言ふて居る。非常に精神力の勝つた人でも、肉體も共に超越地點に持ち運ばば、精神力が一層強くなる様に思はれる。余の如き俗界に居つて超越の出來ぬ者でも、折り／＼山岳氣分に觸るゝに依つて精神を高きに置くことが出来る。自然界の觀察などと云ふ事を控除しても斯る意味に於て登山の必要を感ずる。妙齡の女學生が登山旅行をやるのも決して奇を好む者の仕業でない。日本に在留する歐米人は無暗と山岳旅行をやる。夏季海濱に避暑するものより山地に行く外人が多い。外國の大使公使の別荘は、日光鹽原邊に集つて居る。外國人が何うしてあんなに山を好くだらうと不思議さうに、言ふ人もあるが、一度山岳氣分を味つた以上、時と金を得れば山へ山へと進むのは無理もない事である。夏季外國人がこれと云ふ目的もなく、譯なく高きへ

高きへ行かふとする態度には敬服せざるを得ない。趣味性から言ふても實に高潔なものである。其心根がしのばれる。何處かに大きい處がある様である。自己の國家民族を愛すると同時に一面又現代を超越し、世界的宇宙的思想を抱懷して氣宇の廣大溢るゝばかりなるを思はしむるものがある。此等は信仰と修養とに依りて得られた氣品であらうが、山岳氣分が此等精神の向上に助力を與へた事は僅少でないと思ふ。登山に際し山岳に關する知識を有すれば一層趣味が加はるに相違ないが、山岳氣分を味はふためには知識は入らない。全然一般的である。日本山岳會が種々なる職業の人々に依りて成立して居るのも前述の如き山岳氣分に於て共通點を有し共鳴器を抱容するからであらう。(山本徳三郎)

## 立山詠草

おのれ年頃越中國立山の雄山に鎮まっています手力雄命を信仰しけるは或夜夢の枕にたち給ひて種

種の事ども宣り給ふ今御心のほとをかしこみく  
て歌もて述るになむ。(澁柿帶磨)

其方の命數今はきはまれり

やま登りせはなからへもせむ

山登り思ひたつ日は家人の

ごむるもきくな金も惜むな

諸の遊の中に山行は

百益ありて一害もなし

くさくさの會は有れ共日の本の

山岳會にます會はなし

人として山岳會に入らさらは

ひとゝ生れし甲斐なかるらむ

山行きに戒むへきは冒険と

酒とやまひと天候にこそ

香水をぬれるハイカラ見からに

一の越しにてこしぬかすらむ

我山に登れる人をよく見れば

蒲はゝきはく者そすくなき

蒲脛衣なつは涼く雪によし

かち渉りには云ふに及はず

◎雜 錄 嘉門治を憶ふ

一五六

孔夫子大聖人も泰山に

のほりて常に國見なしけり

釋迦牟尼も靈鷲山にて佛眼を

ひらきたりけり山の功德よ

達磨さむ梁の武帝の氣に入らて

少林山にしりをすゑけり

心ある支那人達も山に入る

其あかしには次の句を見よ

文章不療山水癖 身心每被溪山縛

### 嘉門治を憶ふ

會つて醜惡な人間の手にかゝつて、その美しい  
森林を失つた神河内は、ガイドとして私達が尊敬  
しつゝある、嘉門治翁をも失つてしまつた。私は  
溪のなつかしさにひかされて、幾度もそこに遊ば  
うと思ひながら、あの最後に見た森の殘骸、私に  
は、あゝまでしなくては生きてゆかれないものか  
と、つくづく情なく感ぜられた、亂伐の跡を想ふ  
と行けば行かれる機會をもことさらに取りはづし

て、もうすでに五年を経過してしまつた、嘉門治に別れてからも五年はすぎ去つたのだ。

嘉門治死去の通知が、會の事務所から來た時、ふと頭に畫かれたのは、彼と一緒に飛驒山脈を旅行した間の、幾日かの出來ごとでもなく、又初めて逢つて登つた、穗高や焼岳のことでもない。私が永く身體をこはして、轉地ながら山の麓をうろついて、ぶら／＼徳合峠にさしかゝつた、ある初夏の日であつた。島々から一里ばかり澤を溯ると、それまではずい氣にも留めなかつた、小さな桑畑がある、病氣あがりなり、わきからは餘程不思議に見えたのであらう、畑の中からだしぬけに、何とか聲をかけられて、びつくりしたが、ふり返ると桑の葉の上に、變な顔をして見下ろしてゐる彼を見出した。「やあ兄つ子か、今時分、なんしに來さしたい、それやどうも」と云ひながら、細道へ下りて來て、「面喰つて棒のやうに立つてる私の肩にたかつた毛蟲を拂ひ落してくれた、その折のことである。彼はいつも私を兄つ子と呼ぶ、名前を忘れるのか、面倒くさいのか、いつでもきつと

兄つ子と呼ぶ。そしてそれが三人稱となると、形容詞をつけ加へて、「丈の高い兄つ子」となるのだ。

彼はこの後、森の桂が青葉になると、「もう丈の高い兄つ子が來るづら」と、待ちうけたさうだ。私は斷言する、彼ぐらゐ約束をよく守る男は少いと、山に行く度に、清水屋なり誰なり人をやつて、案内を頼んでも、もう山登りはいやだと云つて承知したことがないが、逢へばこつちから云はない先に、どこへ行きますと向うから山の名を聞く、私も彼の老體は承知しながら、釣り込まれていゝ氣になつて山から山を渡つて歩いた。

後には私は決して人傳てに頼まないで、宮川の池の畔に、梅の黒木に取り圍まれた小屋に出かけて、「また兄つ子が來さした」を聞きにゆくやうになつた。三度目に飛驒山脈に入つた時には、前の年から話して置いたのにと思つて、人傳ての御斷りを甚だ不平に思つたが、逢へば二つ返事で同行すると云ふのが、山登りの厭なのは初對面の人への云ひ譯であつたと見える。

嘉門治に初めて逢つたのは、丁度十年前の夏、

穂高に登つた折のことで、その後神河内に行く度に、彼に逢はなかつたのはたつた一度、四月、雪の中に小屋を訪ねた折だけであつた。

彼に、一般の人夫に通有な、不快な感じがないのも、又、人は人、己は己と云つた、さつぱりした氣持ちなのも、私が共にする旅行を非常に愉快にしたばかりでなく、他の人夫の間にも、彼は不言の間に自然の重みが感ぜられて、我々の前にうわついた態度がとれないやうになるのであつたらう、私達の旅は風雨にあつても、天幕を持たないでも、いつも非常に愉快であつた。

私自身は、他人の身の上話しに興味を有たないから、幾度も逢ひながら、ついぞ昔話を聞いたことがない、随つて彼の傳記としては、殆んど何ものをも知らず、又知らうとも思はなかつた、然しその折り／＼に、普通の人と違ふやうなうれしさを見出すことは少くなかつた。

或る人は岩魚を買ひに、彼の小屋を訪ねたところ、秤がないから賣れないと斷られた、「目分量で賣つて少けれや旦那衆の損だ、多けれやわしが

損するで」と云つたさうだ。六年前岩村透氏と逢つた時であつた、いろ／＼山の話聞いてこんな寥しい山の中にゐて神様か佛様のことでも考へやしないかと聞くと、彼は例によつてから／＼と笑つて、「わしや信心のしやう知らねえで」と答へた。一生に一番怖ろしかつたのは、いつの冬だか真夜中、小屋の裏手にネマガリザ、に降り積つた雪を掻き分けて、何かすり落ちる響を聞いた時だと言ふ、「よる夜中でも森の中は歩きますが、そんなやぞつとして、御日様ア出さつしやるまで小屋の中さすくんだが」、附言するが彼はあんなで蛇が非常に厭ひものだ、足もごにのたくり出るさいつも大聲をあげて逃げた、その晩は、大きな蛇と思つたのであらう、冬の最中ではあつたんだが。

霞岳に登つた時、麓の密林の暴らされるのを見て、私達、中には三枝や中村もゐたが、非常に憤慨したものだ、彼はその時、例の如くから／＼笑つた、「わしいら子供の時分すつかり切つたがもうこんなな茂つたで、今にすぐ大くならず」彼の目には、私達の氣の短いのが不思議に見えたので

あらう。彼はどこまでもわだかまりの無い自然の男であつた。彼の笑ひ聲を聞くと、どんな暴風雨の時でも、霧がはれたやうな氣持ちになつた。

私が好きな理由はどこ云つて捕へごこはないが、初對面の時賃金の約束を聞くと、「魚釣つて、二圓ぐらゐはとれるで荷さへ無ければ二圓五十錢で行きませう、荷があつちやできないで」とよく人夫にあるやうな態度ではなく、さつぱり打ちあけてくれた、その當時、普通の人夫は六十錢から八十錢ぐらゐ、彼一人の賃金は他にかげかまいもなく、四倍近くの高價であつたが、山にかゝると、それも實際に相應してゐた。又雨で滞在しても餘分の賃金は取らなかつた。穂高の歸りに石が落ちて、先に下りてゆく彼に當りさうだし、見たところ彼の歩き方では、石も餘り落さないから、僕が先に下りようと申し出したら、例の如くからくと笑つて、いくらでも落さつしやるが、除けやうがあるので、餘り加減すると歩きづらいでな、わっはっは……と答へた。

霞ヶ岳で瀧を下りる時も、彼はどうにか先を下

りて、彼の肩と、石につかまつた手先に乗つて、樂に下りたこともある。然し彼の足はいくらかびつこであつた。いつだかカミグチノッコシ（高瀬

川水股から二ノ股の谷に出づる）で、命拾ひをした時、凍傷にかゝつてからだごと云ふ、然し山登りにかけては、足もどのしつかりしてゐるのは、壯者をしのぐと云ふよりむしろ、今時の壯者には見出し難いくらゐ確かであつた。岩登りの折も、彼の後からなら安心していつも登ることが出来た。

彼はめつたに口をきかない、烟草は喫はない、他の人夫のやうに立ち休みをしない、早足ではないが無駄な歩き方をしないから行程は非常にはかざる。「できないから荷はもちましねえ」と云ひながら、三四貫の荷はいつも脊負つて呉れた。

神河内から焼岳、霞岳あたりに登つたり、寫真機一つ脊負つてあの邊を歩いた時は、賃金をやつても決して受け取らない。温泉に来てから酒を飲ませると、あとでぶらりと出かけては岩魚を釣つて持つて来てくれたりした。家に相當の資産もあり、子息はあゝしてやつて居るが、彼自身は生活

などの爲めでなく、たい山が好きで、夏も冬も、穂高山の直下、黒木の間に隠者のやうな生活をしてゐたのだ。「わしや荷が持てましねえで本當の御供だ」など云ひながら、それでも達者に、老年まで山登りをつゞけてゐた。穂高、槍、霞ヶ岳あたりで、取つ付けさうだと思ふ岩角へは、大低二つ返事で同行する。大天井と槍ヶ岳をつなぐ東鎌尾根にも行くつもりで、その折は焼岳の中尾峠から、尾根づたひに奥穂高から槍へぬけて、大天井へ行く約束であつたが、天氣が悪るいのに、毎日毎日小屋から温泉まで三四日無駄足を運んでくれたが、その内に大雨で温泉の浴槽に河水がつくやうになつたので、御互に斷念してしまつたが、最後に彼に別れる時、來年は必ずやらうと云つたなりで、どうも機會は過ぎ去つてしまつた。

彼は殆んど自分の思ふまゝに生きて來たのだ。ガイドの後繼者のことなども話したことがあるが、此の頃の若い衆は山が厭でと云つたきり、氣にもとめない様子であつた、適任でもない奴が先に立つて、やいゝ引つ掻き廻して見たがる世の

中には、彼は確かに異常であつた、又考へて見ても、養成しやうと云つて出来る仕事ではないとも言へる、彼自身の説の如く、「且郡衆のあとについて黙つて歩く」人夫が得られれば、私達は絶對の満足をして宜しからう。

神河内の美しい森林はすでに失はれ、そこに住んだなつかしい心も、もう求められない。こゝに、嘉門治の死を聞くと同時に、何等か追憶の外に、私の心をひきつける何物か、尙ほあの溪谷に存し得るかを疑ふ。

私は溪を見まい、すでに得て胸に畫いた印象を打ち破るに忍びない。私はもうその人達と語るまい、彼によつて得たなつかしい思ひ出を失ふに忍びない。(辻村)

### 大町登山案内者組合の設立

信州大町が近來登山の中心點となり、案内者の需要頗る多く、爲めに此れが配給の當路たる大町對山館百瀬瀨太郎氏は、大に見る所ありて、登山

案内者組合を設立せり、氏は本會々員にして、年  
年同地を通過する登山者の爲め少なからぬ厚意と  
便宜とを與へられつゝあり、同氏の主張の元に左  
記の如き規約に由りて今夏より其設立を見たり、  
日本に於て唯一にして最初なる登山案内者組合  
は、斯くて生れたり、吾人は百瀬氏の此舉を滿腔  
の喜びと同情を以て迎ふるものなり。(た、た、)

## 規約

- 一、組合は大町を出發點としての各方面登山の案内者及強力を以て組織す。
- 二、組合は善良にして敏捷なる理想的案内者の養成を目的とす。
- 三、加入者は登山者の案内、荷物の負擔を爲し登山者の爲に一切の勞務をなす。
- 四、組合には主任壹名、相談役四名を置き總ての事務を處理す。
- 五、組合事務所を便宜上大町對山館に置く。
- 六、組合總會、集會は主任の適宜に依りて隨時是を催す。
- 七、組合規約の改正の必要及組合共同の事業の計

畫等起りたる場合は主任、相談役、豫め之を協議し廻章若くは他の方法を以て加入者一般に報告し賛否を求めたる上多數決を採ること。

八、組合加入者は他の登山地よりの登山者の招致に應せず。

九、登山者より案内者強力の雇傭の需めあるときは主任之を臨機選擇指名するものとす。

十、加入者は一ケ年一人金拾錢宛を組合基本金として積立する事。

納期は毎年七月三十日迄とす。

十一、案内者強力(加入者)の中に若し不慮の災難を蒙りたる者あるときは主任、相談役協議の上相當の見舞金を基本金の中より支出す。

十二、加入者は入山時に應じ一日金五錢宛の割合を貯金すべき事。

貯金帳は主任是を保管し相當の理由ありと認めたる場合に其拂戻に應ず。

十三、案内者強力の荷物負擔重量は八貫目以内とす。

十四、登山者案内の任を受けたる者は其組の先達と

して他の強力は是に追従し先達の行動に對して異議を差挟まざる事。

五、賃金

先達 一日 金壹圓拾錢 (二行に一人)

強力 一日 金九拾錢

外に山中生活一切の資料は總て登山者の負擔とす。

(1) 室堂、五色ヶ原、立山温泉、よりの

歸路は二日の賃金を要求す

(2) 上高地よりの歸路は二日分を要求す

其他は其歸路日程により相當と認めたる日償を要求す。

六、加入者は出發の日、歸宅の日は必ず事務所に立寄り在否を明かにすべき事。

七、山中の出來事行程等は成可く詳しく事務所に報告し次回登山者の爲に便ならしむる事。

八、加入者にして以上の條項に違反あるときは組合協議の上相當の制裁を加へ退會を命ずる事あるべし。

大正六年六月

大町登山案内者組合

机上談山

○先き頃或る驛の待合室で、汽車の來るのを待つて居る間、手ずれた月刊新聞を初め、一週間も前の地方新聞も見倦きて、欠伸を嚙込みながらフト傍を見ると、大正六年七月發行の『Tourist』第二十號が目についたので、何か參考にでもなることでも載つて居るかこ、頁を繰つて見ると、あるぞあるぞ、かねて「山岳」や「高山深谷」で御目にかゝつた寫眞等を挿んで、「登山に就て心得可き事ども」といふ題で、山岳會の有名な先生方が、大分初心者や後進者に有益な講話(?)を掲げて居られる。

○其の一番終りに、「登山の準備と遭難に際しての心得」といふ銘を打つて、無慮五頁の長文がある。準備中に笛やミルクキャラメルを携帯しろと勧めてあるが、これはどうであらうか、渴を醫するに決してよいものではあるまいと思はれる。それから「アンモニヤ」水といふ藥品をも持つて行けどしてあるが、其の御丁寧な音讀には聊ならず恐

縮せざるを得ないのでした。

○段々讀んで行くと、食糧に窮乏を告げたる場合には、靴の革其の他の革類を削つて舐ると教へてあるが、これはさぞまずいだらう、私なら寧ろ餓死した方がよい。それからまた、鳥獸、魚類の外左記の草木は之を採取して食料となすを得べしとして、目録が掲げてあるから、何かの爲になるだらうと、手帖の端に書き寫して置いたが、應用植物學の知識のない私には、早呑込みでこれを應用するのは、一寸躊躇せざるを得ませんから、念には念を入れて、これを先づ本誌上に御紹介すると同時に、先覺諸大家の示教を願ふことにします。

○「杉、松の亞皮」。ハヒマツ、テウセンマツ、ヒメコマツなどは高山深山にもあるが、杉のはへて居る所ならどうせ人里に近いのだらうから、それこそ帶で腹をきつくしめて、人家へ辿りついてから米の飯でも貰つた方がよささうですが。

○「ウルシの嫩芽、タラの芽」。これ等も人家近いか、さなくとも夏期の役には立つまいかと思ひますが如何でせう。

○「クマイチゴの實(蔓イチゴは有毒なり)、キイチゴの實」。尙ナハシロイチゴ、エビガライチゴ、ニガイイチゴ、サナギイチゴ、ヒメゴエフイチゴ……それからまだ大分あるやうですが皆んな列舉したらどうでせう。蔓イチゴとは何のことでしょうか、富士山などに多いシロバナノヘイチゴの實なら、毒どころか、私は大好物、只のヘイチゴ(黄花の)なら高山上にはありさうにも覺えませぬ。

○「ヤマガキ、シヒ、クリ、クルミの果實」。先づ人里に近いところにしかありさうにも思はれませぬが。

○「ブナ、ナラの實」。これは少しは高いところにもありませうか。

○「ヤマナシ、ズミの實」。よく熟して居たら結構でせう。

○「ヤマモ、の實」。食料が缺乏して居ないでも、一寸失敬したくなりませう。但し高山上にはありさうもない。

○「ガンカウランの實」。これは本當の高山上で、

八月末頃には役に立ちませう。蓋し此の目錄中の白眉かと存じます。

○「笹の若根、筍」。殊に後者は七月頃ワザ／＼採取の爲め山に登つてもよい位でせう。

○以上が木竹類で、次に草類として、「山ブダウ、アケビ、シラクチヅル」等の纏繞木本を初め、「山の芋の根、ムカゴ、スカンボ、イラクサ、ウルイ、アザミ、ミヅ、山ウド、フキ、百合、シホデ」等、大抵は山家近くにのみありさうなものゝ名が見えます。

○それから「カタクリの根」も入れてありますが、夏になると葉が枯れて、ありかをよく知つて居る人でないと到底見つかりさうにもないし、加之深山や高山にはなさうな此の植物を、捜せと言はれたら、まづ私などは御免を蒙ります。

○それよりも、クロミノウグヒスカグラの果實、コケモ、の果實、スノキ、ウスノキの類、クロウスゴ、シラタマノキ、アカモノ、オホマメザクラの實を初め、タケワラビ、イハブスマ、ハナゴケなどを記した方が、人助けとなるでせうが。

○それから此の「心得」の最後を見たら、「農商務省山林局編『登山の心得』より」と、その出所を明にしてありましたので、登山専門の御役人様、換言すれば、常々経験の多い、そして何となく權威のありさうな方々の御作りになつたものだから、斯様な位置の方々が登場する場合には、何もしやうといふ好意から編纂される場合には、何も知らない人民は得て實價以上に信用するもの故、特に慎重な態度を取つて、御職掌相應なものを著はして戴いたならば、吾々は尙更利益を得るだらうと思ふので、一寸其の事を附記して筆を擱くことにします。(駝鳥生)

○近頃「山岳」が面白く無くなつたといふ評判を聞くもし評の出所が會員外ならばそれに對して何等辯明理解の必要を認めない。門外漢の批評などに耳を借すほど我々には不幸にして暇もなければ餘猶も無い。然し萬一會員内に少數なりともかゝる説をなすものがあるなら、我々は注意と熟慮をもつて、評が正當ならば編輯者に計つて雑誌の面目を一新し、然らざる可なりと信する「山岳」の

内容の取捨に關して辯明したいと思ふ。我輩自身はこゝ數號の内容は大いに我が意を得てゐると編輯者に感謝しつゝある次第であるから。

○扱てその評判だが、内容のつまらなさにも種々の理由が指摘されやう、愚劣だと云ふのか知れ切つたことを書くど云ふのか、難かしくつておれには分らないど云ふのか、たゞつまらないでは、我輩も辯明のしようもないから、大凡の見當にさぐりを入れて見るとしよう。

○本誌の初年頃に見えたやうな探險、冒險と並べたてた、悪く云へば冒險世界調の文字は近年漸く減少したので、一部讀者の好奇心を満足できなくなつたとも考へられる。これは何分人々の好き不好で、それがいと云ふのなら立派に筆をとつて思ふ存分書きのめすがよからう、事實を傳へるものならば編者も必ず誌上に發表されると思ふ。「山岳」は會員の雜誌であつて、一部の人の占有すべきではない。

○次に興をそゝる紀行が減つたとも思はれる。然しこれは、山のありかまろく／＼分らず、登路は

おろか登れるやら登れぬやら見當もつかなかつた當時と、掌をさすやうに分りきつた今とは比較も殆んど問題になるまい。こう云ふ意味のつまらなさは、標高低く山淺くしかも高山の數少き日本帝國の罪であつて、それが不服なら、他に望むより先に、評をなすもの自ら、人跡未踏のヒマラヤへ行くなり、アンデスに登るなり、ルーヴェンゾリヤやアトラスなどは記事も比較的乏しいから、日本のためばかりでなく、世界の登山史に氣焔をあげて宜しからう。狭い國の中でぐゞ／＼文句を並べる暇に、唇のかわりに足でも動かした方が樂でもあり面白くもありさうに察せられる。

○然し一言して置きますが、山の數の多い歐洲アルプスやピレネー等でも目星しいところは前世紀中に片づけられて、今では登れさうな新登路も大抵足跡がついてしまつた、各國の山岳會報を見れば分るが、近頃ではアルプ、マリタイムの岩登りか、さもなくばヒマラヤとかアンデスとか云つた遠いところをぬらふやうになつてゐる。山登りのレコードに見切りをつけた連中は、高度のかは

りに緯度で争ふつもりで、南極北極の探險を企てはじめた、マーティン、コンウェイがそれである、ハーバート、ポンティングがそれである。

○さあ、そこまで出かけて張り合ふ元氣があればよし、己は厭だが誰か出かけて一つあつと云はせてくれなどは少々づうづし過ぎる。それとも本氣にやるつもりなら、本會はその方面に多少の経験ある外國山岳會員から直接適當の助力を得るのは容易であらうし、會としても應分の援助は辭せないであらう。

○但し己には行けないが、記事だけ見たいと云ふ方は、事務所へ行ってそれらの記事を熟讀せらるべし、山岳會報には英、佛、獨、伊、瑞、阿、西、かなり多種類の國語だからいづれかは御用に立つことと思ふ、これ等の雜誌は外でおいそれと手に入るものではない。然しそれもいやだあれも厭だ、何でもつと面白い記事が見たい但し己にや書けないんだと云ふ御仁は天探女の影辨慶、そんな奴は會員の中には無しと信じたし。

○所で、日本に山の數は少し、その少い山も大抵

登られてしまつたし、と云つて同じ記事ばかりも載せられず、さればと申して外國へも出むけないとなると、餘程考へて貰はねばなるまい。先づ仕方がないから部分的に部門的に山を研究するより他に途はあるまい。地質でも岩石でも動植物でも文學でも美術でも、要するに山岳會の規則書通りを、奥深く研究して欲しい、この點に於て近頃の號が我輩には有り難いと云ふのだ、少くともオリヂナルの記事がより多く發表せられる傾向を喜ぶ。

○専門ちがひだから御免だと云ふなら、御自分の御専門から存分に研究して發表して頂きたい、「山岳」は一部の人に專屬してはゐない。己れには別に専門が無いと云ふのなら、専門の無い人の山岳研究などこそ大いに刮目に價するさういふ話を聞くだけでも次號が待ち遠になつて來る。

○要するに雜誌がつまらないと憤慨して見たり、或はかりそめにも思ひ得る要素を具へた人は、口を動かすよりも先づ手足を働かせて、前人のこねまはした屑でないところを取り集めたら宜しからう。我輩自身は、「山岳」はどこまでも専門的の研

究に進まなければ、いつか行き止つてしまふと考へる、今年のスウィス山岳會年報に、地形や植物の記事が多いのも、戦争で外國へ出られず、内地の山で我慢する會員の心がよく窺れると思ふ。

○前の號の記事を知つてか知らずにか、同じやうな登路から同じ山に登る紀行文には飽き々々した。そんな記事なら會員登山報で充分である、少くも人真似でないところを見せて、己れはかうだと云ふ奴を見せて欲しい。

○どうかすると山岳會の連中は口が悪るいと云ふ。我輩は會員の一人として、さう云ふ評判に憤慨せざるを得ない。雑誌を見ると、本欄雜錄新刊圖書の紹介でも悪口を平氣で並べてゐるのは宜しくないと云ふものもある。

○然し責任のない記事を載せない以上、出鱈目の悪口雜言でない以上、悪るいと書くにはそれ丈の理由があるからだとも考へられる。悪いと思ひながら賞めるのは我々には出来ない藝當だ。

○考へて見ると良薬は口に苦し、賞められてばかりゐる大家の子息はのら子息、好人物とはおひと

よしで、平つたく云へば薄のろのこと、悪いから悪いと大びらに云ふのは正直一途間違ひのないところで、善いことを善いと云ふのと何等の差を認めない。それで口が悪るいんなら、善いことを賞めたら頭が悪るいと云はれさうだ。

○つらく世間を觀するに、文句を云ひたがる輩にかぎつて文句を云ふ資格もない奴、本氣にかうと思ひ定めたら、男らしく堂々と打つて出るが宜しい、自分では筆もとらずにぐづぐづ並べたり、下らない書物をゑらさうに出版して、批難されて腹を立てたりする輩が、萬一會員中に只の一人でもありとすれば、本會の前途は極めて暗澹たるものであらう、それとも暗澹でも差し支へござらぬと云ふ奴が出て来るなら、本會のために除名處分が必要であらう。(あづさ)

# 各地山岳會彙報 (六)

## 慶應義塾山岳會

私共の會の大正六年最初の事業は田口で行ひましたスキーの練習で御座います。梅澤先生初め多くの方の御指導を得て多少はものになつた様ですが勿論未だく上手の域にはいらぬ様に推察します(斯く申すも随分憤慨する人は澤山ありますが)然して同人は中々の氣焔で御座いました。

次は五月廿六日に塾の大講堂で開催致しました第三大會で御座います。木暮先生の「登山の危険と其注意」を劈頭に、河口慧海師のヒマラヤ跋渉談、鹿子木先生の「山岳と人格」などの講演と、武田先生の高山植物の幻燈講演がありました。聴衆も比較的多く私共の會としては全く成功で御座いました。

次には私共には少し僭越で御座いましたが、塾圖書館の月次展覽會として山岳に関する書籍を主にし繪や寫真其他参考品を從にした陳列會を行ひました。到底金銭で購ひ得られない貴重な書物まで諸先輩より拜借するを得て私共は何れ位喜んだか解りませんでした。會員は素より會員以外の塾生も會期十日間全く山岳の書物に没頭して仕舞つて山岳思想を修養した事には實に偉大の効果がある様に覺えます。

次は登山で御座いますが、今年は計畫などを全會員に相談いたしました結果隊列が意外に多くなりましたが幸に各隊とも無事終了しました。

第一隊 木曾駒及御嶽方面、七月十八日に伊那に宿泊し習日駒の頂上、次に黒澤迄、其翌日御嶽に登り廿日福島にて解散致しました。

第二隊 常念山脈縦走と槍登攀、この隊は非常に人員多くために三つに別け第一班は七月十四日、第二班は十八日、第三班は廿一日夫々東京を出發して行きました。

第三隊 白馬大黒縦走、十五日飯田町を出て四屋、白馬頂上小屋大黒嶺山等に宿泊して面白く歸りました。

第四隊は 針木峠を越て劔へ、一行元氣者揃でしたから中々騒いで歩いたらしいです、五色ヶザラを通らず真直に行ける谷を見つけたなど大感張です(但やまご新聞へ出たのは長き紀行を無智な記者が短縮した爲全々誤なりと言ふも可なり)劔も平藏を登り長次郎を降つた由少し出かすきで心配な位で御座います。

第五隊 烏帽子から上高地まで、二人して飽迄靜かな氣持で歩いた様子です後に槍から穂高へ縦走して上高地へ降りました。

第六隊 穂高槍縦走、嘉門次翁の案内で今年の雪の多い處を第一に入つたので例年とは少し異つた氣分がしたこの翁の話の聞き乍ら穂高槍の縦走が烏帽子まで延長されました。

第七隊 劔尾根縦走、鹿子木先生と幹事の松本君の行かれたときは案内の無責任な爲、先生が先達になつて頂上から別山尾根までの縦走しか出来なかつたさうでしたが後で齋藤君が別山尾根から小窓まで完全に縦走をいたしました。

第八隊第九隊 は案内の都合上合併して最初は白峯三山を経て更に仙丈から赤石まで縦走した可なり長い旅をして歸りました。

第十隊 籠川から入つて祖父岳鹿島槍八峯五龍岳を縦走しました、雪が多くて非常に愉快だったと申して居ります。(内田生)

## 七高山岳會

私等の會の主意書に書いてないやうに、私等は先づ鹿兒島の附近の山から先づ登ることを目的としてゐる。又中部地方に出懸けて行くことは地理上の關係から云つて、先づ不可能なことである。それでこんな西南の片隅に來てゐる間に、この附近の山で愛憎をばらまればならなくなつてゐる。そして私は又この會をして、一種の山岳學校と云ふやうな意味をもたせてゐるので、決して大々的の旅行と云つたものは未だ行はない。そのうちに時期を見て行くことにする。先づ今まで山岳會として行つたことを記してなう。

一、大正四年十一月五日、午後三時より學校講堂に於いて、發會式兼講演會を行ふ。

開會の辭

委 員

山岳美論

吉田 館長

登山の經驗及準備 附櫻島の近況

篠本地質學講師

閉會の辭

委 員

來會者凡そ百二十人、午後五時半散會。

二、大正四年十一月七日 第一回遠足、櫻島御岳登り、風雨のため散々の目にあひ、やつと頂上に達するを得たり、來會者四十九人、他に館長御自身同伴せられたり。生等感激に耐えず。

三、大正五年二月六日第二回遠足、花尾山、花尾神社、三重岳行、曇天、歸途三里大雨に降られ難儀す。來會者七名、郡山村立小學校訓導前田渡行氏及末永榮吉氏の案内を恭くす。又東秀舎員一同の好意をうくること大なり。こゝに謝意を表す。

四、大正五年四月一日二日 來會者十四人、第三回遠足、大隅高隈山登り。

五、大正五年十一月十二日 第四回遠足、櫻島行、來會者三十六名、途中にて日に暮れられ、二俣谷にて徹夜し、翌日七高よりの救助員及西櫻島村青年會員の救助をうけて歸營、別に病人等の發生なし。これは別に後報する所あるべし。

六、大正五年十一月二十九日 親睦會、來會者二十六名、各部特務委員を招待す。

以 上

極めて簡單なものである。これからよく考へて、三年間(高等學校在學中)にこゝの山を皆登りつくせるやうなプログラムを作つてなうと思ふ。

櫻島に迷つた時を思ふと、穴へでも這ひ込みたい様な氣になる。全く私が亂暴な徑路を豫定したからである。單にこればかりではないが、これが抑々間違ひのものである。このことは殆んど全國の新聞に載せられて、こゝに鹿兒島市の騒ぎは一通りでなかつたさうだ。私は山の中に居たので市中の騒ぎは十分知らないが、救助に櫻島の青年會員が全部出懸け下さつたこと友達が半分以上學校をやすんで援けに來て呉れたこと、生徒課の守師助教の御盡力までには西櫻島村長はじめ各役員、水上警察



山

右表によりて一ヶ年(四月を除く)十一回の登山に對して其半數六回以上登山せしものを摘出すれば左の如し。

- 十一回 登山せしもの……………一名
- 九回 登山せしもの……………四名
- 八回 登山せしもの……………七名
- 七回 登山せしもの……………八名
- 六回 登山せしもの……………九名

假に之が男子の學校ならば皆勤の生徒の多數あるは普通なれども女子は月經等の關係上自己の身體狀況の如何によりて左右さるゝものとして其出席率の良好なるものと認めて尙將來益々出席する事の奨励に努めつゝあり。

第八回卒業生在學中登山回数調査表(甲)

回数	組別	月組	雪組	花組	計
四二	在籍生徒數	四一	四二	一二五	
四〇	調査人員	三八	四〇	一一八	
九	一回も登山せざるもの	六	二	一七	
九	登山一回のもの	四	七	二〇	
五	同 二回のもの	七	二	一四	
四	同 三回のもの	三	四	一一	
一	同 四回のもの	六	八	一五	
三	同 五回のもの	三	二	八	
二	同 六回のもの	二	一	四	
二	同 七回のもの	一	一	二	
二	同 八回のもの	一	一	二	

◎雜 錄 各地山岳會彙報(六)

同 九回のもの	同 十回のもの	同 十一回のもの	同 十二回のもの	同 十三回のもの	同 十四回のもの	同 十五回のもの	同 十六回のもの	同 十七回のもの	同 十八回のもの	同 十九回のもの	同 二十回のもの	同 二十一回のもの	同 二十二回のもの	同 二十三回のもの	同 二十四回のもの	同 二十五回のもの	同 二十六回のもの	同 二十七回のもの	計	平均回数
二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一七九	四、二三
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一六九	四、四〇
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二六四	六、五八
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六一一	五、〇九

第八回卒業生在學中登山調査表(乙)

山名	所在標高	登山人員	一人が同一の山に登りし最多回数	回数延人員
富士山	駿河	一二四六七	二	二

第 十 二 年

◎雜 錄 各地山岳會覽報(六)

金剛山	河内	三九七三	二七	三	三二
身延山	甲斐	三七八八	一	一	一
葛城山	河内	三三三六	一	一	一
六甲山	攝津	三〇五九	九二	八	二二七
愛宕山	山城	三〇四三	一	五	三
高野山	紀伊	二八五八	六	二	七
箱根山	相模	二八七三	二	一	二
比叡山	山城	二七九九	三六	三	五二
摩耶山	攝津	二二九〇	二四	三	四八
勝尾寺山	攝津	二二五九	二	二	三
妙見山	攝津	二一三七	五	二	一〇
象頭山	讃岐	二一八一	一	一	一
生駒山	河内	二一一二	二九	九	五六
二上山	河内	一八九八	二	二	三
信貴山	大和	一七〇三	一八	四四	七四
鍋蓋山	攝津	一六〇一	二〇	一	二〇
中山	攝津	一五七八	一三	三	一六
再度山	攝津	一五三二	二一	二	二四
三上山	近江	一四一一	一	一	一
笠置山	山城	一二二八	八	一	八
鷹取山	攝津	一〇四〇	二	一	二
甲山	攝津	一〇一三	七	二	一一

卒業生中在學中十五回以上登山せし左記に對し六甲縦走記念寫眞一葉づゝを分與す。

一七二

十五回登山せしもの	卒	月	上月貞子
十六回登山せしもの	卒	雪	澤野千代子
十九回登山せしもの	卒	花	吉田美代
二十回登山せしもの	卒	雪	高見あさ
二十二回登山せしもの	卒	月	西村満子
二十三回登山せしもの	卒	花	森敏子
二十五回登山せしもの	卒	花	山縣幸子
二十六回登山せしもの	卒	花	豊浦繁子
四十七回登山せしもの	卒	月	森崎貞子

尙義に本誌第十二年第一號に記載せし如く昨年十月より登山杖を制定してより既に第三百七十四號まで製作携帶し其實施後毎回缺かさず登山して其烙印の押捺されしもの實に拾名の多きに及び制定の當初に於て一ケ年間缺かさず登山せしものには特に登山杖に一個の銀環を附與するこゝせしを以て今回先年御大典の當時京都紫宸殿の高御座の頂上に飾られたる鳳凰を彫せし金彫家伊藤様堂氏の好意によりて製作せられ天長祝日の嘉辰を下して各自之を與へ其名譽を表彰されしもの左の如し。

第四學年花組	宇治	治子
第三學年花組	中川	晴子
第三學年月組	木村	照子
第二學年月組	泉谷	博子
第二學年雪組	天野	トク
第二學年雪組	森脇	うめ
第二學年花組	中村	孝子

第二學年花組  
第二學年花組  
第二學年花組

吉田道子  
松井綾子  
西口勉子  
(朝輝記太留)

### 圖書紹介

#### △大正登見旅客一覽

日光警察署長編纂

三六版十六頁に附圖二葉を添ふ。主として登見旅客の統計表にして、一旅客狀況一覽表、二登見團體表、三登見外國人團體別、四投宿外國人團體別、五戸數人口表、六日光氣象表、七傳染病患者表を含み、地圖は日光町地形概略圖及日光市街略圖の二より成り、第一のものには日光橋より馬返し、中宮、祠等の至る里程を附記し、第二のものには日光停車場より神橋、東照宮等に至る里程を附しあり。一言にして之を評すれば、小形なる冊子なれど内容充實して一言一句として無駄なれば、贅長なる字句を以て綴られたる數十頁の冊子に勝れるは言を俟たず、此の種の印刷物は、かくあり度きものなりと思はる。

如聞此の冊子は本年初めての試なれど、引き續き毎年刊行する豫定にて、改版毎に内容を増加すべき計畫ありといへば、假令其の目的は一般旅客の統計にあるとはいへ、又以て登山家の參考に資するに足る可き。

本冊子を見て直に思ひ浮ぶは、大町さつ、上高地さつ、乃至は四ツ屋の如き登山の中心點となる地方にて、登山客の統計表なりと

製作せば、登山熱の趨勢を知るには、好個の材料たると共に、其他諸般の設備等に關して參考となること少なからざらんか、附記して諸賢の注意を呼ぶ事然り。(武田)

#### △芳野山 宮田青葉氏著 定價金四十五錢

大正六年五月 奈良縣上市町本迫書店

四六版紙表紙一四四頁、口繪網版三葉を附す、吉野山の概説に初り、地勢、吉野路、吉野川を説く、以下二十九項、何れも史實を基とせる多情多恨の著者の血涙を注げる吉野哀史と云ふべし。『義經と靜』に先づ英雄と美女の哀別を語り、元弘の亂、『吉野の行宮延元氣質』、南軍の殘黨、歌塚附近、峰の藥師附近。に著者の史眼を窺ふべし、『雲井坂以奥』、森林の芳野山、吉野河畔の寒風、川上郷、森林と川上村、森林と遺徳、川上郷の末路、各項に氏の森林觀、森林政策を説く、著者は吉野森林の經營に従事する、林學士にして、吉野は森林に由りて其存在の意義を明にし、吉野朝史は、吉野森林中に蓄れたる、人生の争闘史と云ふべし、森林ありて吉野あり、吉野を説くに、著者の如く森林に視線せる筆を以てせるもの稀なり、芳野山案内記と云ふべからずと雖も、吉野山史と云ふべき。(岳雄)

### 山岳彙報(一)

#### △鎗ヶ岳下の大旅館

(前畧)多分御承知か、さも存じ候へども、夫れは鎗ヶ岳の下赤澤小屋岩の上馬場之平に來るシーズンには、裕に四十人、或は夫以上の客

を泊せしむるに足る普通の木造旅館一軒を尙同地點に更らに一個の石室が出来る事に御座候、目下旅館の方は十數人の大工、石室の方は八九の土工を入れて何れも二の俣に於て木組其他夫々準備中、是れは九月廿五日小生登山之際の見聞に候、其時旅館建造出資者六人中の一人と申すが、小生に名刺を出して建設豫定設備其外くさんく語り申候も是れ廣告に候べし石室は南安曇郡教育會の建設する處、馬場之平に到り見候に下より登る時は河原に出る半町程の手前右側小林中に既に地を開きあり、業を起したるは夏期後の由、是が出来上り候へば島々よりする人は直路九里を歩すれば當所に達し鎗一峰の登山者が降雨に際會する時は此處に滞在して數時間の霽を利用して巖に攀ち手取早く其雄大なる展望を擅にする時は別紙記載の如き悔恨を嘗めずして至便の様に存せられ申候、然し山岳の有する特權が人間の利慾心之爲に侵害せらるゝ事はいたく痛事に思はれ切めては「ピラタス」の夫れの如くに不徳の行はれざるを暗に希望致居候。

大正六年十月廿一日

森 剛 馬

△本年の上高地並に其附近

本年八月上高地滞在中、同地並に其の附近に關し見聞せし事の二三の事を御知らせ致します。

- 一、上高地へ入るにも昨年から入林届を要する事に成りまして島々谷北澤に在る小林區の小屋場に帳簿が備へてありますから、それに住所姓名を記載することを要します。
- 一、島々谷北澤の小屋場から先へトロが行く様に成るこの事て

今頼りに石垣工事を急いで居りましたから従て途も次第によく成る事と思ひます。

- 一、徳本峠の登路は年々良くなつて來ます本年等は殊に立派に切分けられて草履で行かれた二三の人々も見受けた程でずから此後の上高地入りは益々便宜になる事と思ひます。

- 一、登山客は松本聯隊の入山と共に天候不良なりしたため却つて例年より遅く八月四、五日の方が多かつた様でした、入山客中昨年比して婦人客も増し殊に穂高登山の先鞭を付けた一行もあつた位で將來婦人入山者も増加する事と思ひます、外人も可成り見え、中には梓川河畔で編物をしたり親子で遊んで居つたのを見ました上高地も輕井澤の様に一の避暑地一の觀光地と化しはすまいかと思はれた程年々の上高地入に際し次第に俗化して行く様な氣持が致します萬古不變の秀嶺穂高の峯高きらめく殘んの雪を知ぐ度に恐る可き俗化の流を如何せんと思はずには居られません神秘的の境上高地もはや驪の掌中に捕へられたかと思へば何さなく悲しい様な不甲斐無い様な氣がして遠からず森林保護の爲めに叫ばれた先覺者は再びより力強きより恐る可き俗化の流を堰止めねばならぬ秋が來はすまいか心密に安じて居ります。

- 一、燒岳に就ては大正四年に現出した新噴火口からの噴烟は遠望徽に其の存在を認むる位で先年の面影は全く失せて今は頂上から盛に噴烟して居りました、其の勢は前年の比では無く尙ほ新噴火口の噴烟は大正五年末に過半消滅したとの

話でありました。

一、大正池は外見、先年と大した變りは無い様でありました。少ししく氾濫した爲め燒岳への登路は先年の途路よりは幾分大正池、池畔に於て迂廻する様になりました。

一、次に穂高への登路は大變長く切開かれて最早迷ふ事無き迄立派な切分が出来たこの事でした。

一、中房への途も着々改繕の歩を進め本年九月過には多分完成するであらうこの見込の由です。から、さなきだに樂な常念縦走は益々易々として行はれる様に成るのも近々の内であるを考へます。

一、最後に上高地から槍への登路は先年に比して餘程違ひました。一昨年参つた自分も本年二回目の登山に依つて少なからず驚きました。最早清麗梓川の渡渉も無く牛番小屋より約十町餘り(?)の處で徳本峠の途と別れて梓川右岸の森林中に造られた切分けを進み(トクサ澤との分れ途には立札がありません)殆んど森林帯で河原を歩くのは黒澤附近と槍澤丈でそれも、ほんの僅かな處、崖崩の箇所並に澤には丸木の渡しや丸木橋が架けて有ります。少しの水出には患ひ無く殊に常念澤と梓川本流とのドツには立派な丸木橋があります。斯くして槍澤迄は一本途です。から迷ふことは少しもありません。槍澤は先年と變り無く祖母平から祖母坂へは槍澤右岸の山腹に狭いながら之れも切分けられてあります。故、渡渉も一部分を除いては其必要がありません。斯様な次第で此後上高地より槍への登山者常

念越へ、槍より上高地入りなせらるゝ方々は最早案内無く

こも易々として遂行する事を得る様になりました。(佐伯)

### △劍岳登山者に希望

(前号 八月に至り立山より劍岳に出で伊折谷に下りて歸坂仕候途  
中風雨加ふるに時期後れしたため小窓の雪溪に大龜裂を生じ進退谷  
りて遂に非常なる危険を冒して池の平 鑛山事務所に出で申候。く  
て茲にて一泊いたし候が其の際當事務所主任は本年夏期の多忙な  
りし事や色々登山家に對する希望を述べられ申候に付此の件は一  
般登山家に對して御警告下さる方よろしく、存じ直に御通  
知申上ぐべき筈の處 登山期にも違き事故今日まで後れ候が若し今  
回の號にても次回にてもよろしく候に付是非一般登山家に御注意  
下され度候。

一、本年は七月に入りてより殆んど毎日の様に數名の團體登山  
家が此の劍岳の池の平鑛山事務所(小黒部鑛山事務所移轉)  
を過り且宿泊したる由に候其の際必ず米の分與を請求され  
し由(こは山岳紙上にて米摺の供求を受くべしとありした  
め、存候)事務所にては之が最大の苦痛なりし由に候、當  
山にては夏期三百餘名の鑛夫を役し居り日々の糧食な  
な、多量を要し候に一々之れを伊折方面より運搬せしめ居  
られ候が何しろ小窓の嶽を攀つること、漸く一人にて半  
俵しか運搬し能はざる由、従つて運賃もなかく、かゝる  
由、のみならず一旦天候險惡なる時は全く鑛道をたゞれ  
其の結果糧食の缺乏を來し屢危に遭したる由に候然る  
に本年はどうした事か、信州方面から來る登山家は必ず立ち

寄りて一斗二斗といふ米を請求されほしく閉口したる由しきりにこぼし居られ候併し主任もなぐよくわかつた人にて運賃も取らず悉く原價にて心よく分與されし由は小生の前に通過したる朝輝君よりも聞き居り候之に依り主任の話にては來年よりは非糧食は持參さるゝ糠池の平嶺山にてはさても米鹽の御供給は出來ざる旨一般に通知しくれよとの事に候ひき。

二、來年は登山家のために小屋を建築し一般登山家の宿泊に供したき旨話され居り候事務所及礦夫宿泊所はいつも満員にて到底他人を宿泊せしむる室無之由に候。(竹下英一)

△津島壹城氏の「信濃の山」に就いて

本誌第十一年第三號圖書紹介欄に於て岳雄氏に依つて紹介された「信濃の山」に就いて、少しく書くべき事實がある

岳雄氏は「包紙には「日本アルプスと信濃の山」とあれど表紙及び、題字は「信濃の山」(信州登山案内)とあり、日本アルプスの名に懂るゝ、發行書肆の戯れか、或は外に松本高等女學校教諭津島壹城氏著の「日本アルプスと信濃の山」なる刊行物のあるにや、まさか羊頭狗肉的には非らざるべし、真非共山に關する刊行物を蒐集さるゝ方々に御勤めする。」と書かれて居るが、此の本の初版とも云ふべきもの(大正五年七月九日發行)には、表紙の半分程を包む位な帯紙様の包紙に、高山植物五六種をあしらひ「信濃の山信州登山案内」と横書に表はし一寸體裁好く出來て居、日本アルプスと信濃の山と云ふ様な表示は何所にも見當らない、書肆が何故包紙と表紙との一致しないものを再版として今年發行し

たかば、次に述ぶる事實に依つて明瞭にならうと思ふ。

昨年七月、此の本の廣告を或新聞紙で見つて、早速知り合ひの本屋へ注文した處、まだ製本が出来ないとの事であつたが數日の後本屋から届けて呉れ、先づ第一に自分の郷里の山、八ヶ岳の項を見た、最初に八ヶ岳登山地圖が開いて、見るに西側の登山路だけが表はして無く、それも茅野驛より夏澤峠を越えて水澤温泉に到る道が記載して無い、甚だ不審に思つて本文を讀むと、驚くではないか、殆ど正しい所まで無いのである、其記事が餘りに無責任で實際的なので、萬一此本の爲めに思はぬ災害でも受けるものがあつてはと、夏の暑い日曜日一日を致して、批評を綴り、長野野市で發行する信濃毎日新聞へ投書した、其れは大正五年七月廿七、八日に同紙に載せられた、數日後其反響として友人其他未知の人々から數通の感想文を寄せられた、其中松本市同感生氏より寄せられたものは、津島氏の如何なる人々を知る一端ともなるから次に抄録しよう。

「——當今御承知通登山熱の高まるに伴ひ單に小使取の爲め印税を食らんとして無責任極まる登山案内陸續出る實に寒心に堪へざる次第にて此の點御同感に御座候小生著者とは一面識を得ず候へ共山に登ることは嫌の趣にて兼てより道樂に山岳其他の雜誌を資料として集め居る趣聞及申候——一回の登山もなますして出録目の記事を綴り(假令一部は震災豫防調査會山岳雜誌によるとして)如何しき書籍を出版し單に印税を食らんとする如き輩に向け御筆誅下され候事誠に斯界の爲め慶賀すべきこと小生大満足致す處に御座候」

此の同感生氏は目下在京の會員K氏で、八ヶ岳へは五六年引續き登山研究された人である事を後になつて知る事が出来た。

其後八月の中旬頃、信濃毎日新聞紙上に『杜撰「信濃の山」(近く一問題とならん)』と題して次の様な記事が掲載された。

「松本高等女學校教諭津島壹城氏の著したる『信濃の山』は机上の登山案内書にして杜撰極まる由其評判甚だ悪しく、松本女子師範學校長矢澤米三郎氏及び松本高等女學校長唐澤貞治郎氏も其原稿を精讀せず頼まるゝ儘に之れに序文を寄せたるが兩氏は今更の如く頗る迷惑し居る由なり、而して同書は其後更に賣れず購入したる者は本屋に返し、本屋は出版元たる東京淺草區の松陽堂へ荷物を返戻するより松陽堂にても大に驚き之れが原稿を周旋したる松本市の某書籍商に談判し原稿料の二百圓を返金するは勿論出版の損害も賠償され度しと申込み來り是亦非常に當惑し居る趣なるが近く一問題となるべしと云ふ」

此の問題は何う結末がついたか知らないが本の賣れなかつた事だけは確と見て差し支へ無いと思ふ、賣れない本を再版して發行するに云ふ事は多くの場合あり得ない事である、若しも津島氏が惡評に愧ぢて初版の序文に於て述べた通り「記事や研究などの足らない所は、重版の時を待つて十分補正を加へ」られたものとすれば、津島氏の人格は實に見上げたものである、併し私は未だ再版を手にしなから明言する事は出来ないが、邪推すれば、恐らく初版の化粧を仕直し、奥付を取り換へただけのものではあるまいか。(佐々木高美)

### △富士の烟に關する詩

◎雜 錄 山岳叢報(一)

林道春先生の丙辰紀行(元和二年)に富士の烟を睽じたる詩あり其頃は東海道筋より明に噴烟を認め得たることかき存じ武田博士に御尋れ致したるに其詩を記して送れとのこゝに依り左に之を録して御覽に入れます。

一山高出衆峰巔。炎裡雪氷雲上烟。大古昔同仁者樂。蓬萊何必覓神仙。(松田定久)

### △大黒嶺山第二新道に就て

大黒嶺山は近來著しく發達し現に二百八十餘人の坑夫を使役し動力として大水車をも新設中に御座候斯る勢なるを以て物質の需要益々加はると製品の搬出に追はるゝ有様なるに今や勢力の不足は信州の片田舎にも及びたるを以て運搬の一切を馬背に轉すべく計畫せられたるもの從て其傾斜を出来る丈け緩にする必要上嶺山事務所横手より松岳西南の尾根に付て上り南肩より大體舊道の位置に出で八方池北方より三角點の右を通り平川畔に出るものにて其曲折の夥しき想像の及ばざる程に有之從て坦道と云ふも差支なく登山家に取りては餘りに平々凡々たるの觀有之候も其沿道は高原的景觀に富み至る處天幕生活を試みるの地に乏しからず候將來白馬より南走する人は殺風景なる大黒嶺山に下らずして此道を取りて四ツ家或は飯森方面に出るに至便と考へ候。(大迫武吉)

### △嘉門治老爺の病

拜啓、秋も漸く深く相成り申し候處如何御消光遊ばされ候や定めし御健勝の御事と賀し奉り候。

陳ば私も九月以來望んで延引致しなり候、三浦地行も漸く出來得るやう相成り只今島々に迄登りたる處に御座候。

在京中、朝日新聞等に依り上條嘉門治の病危篤なりとの事を見聞致しなり候折からの事故、右の宅を訪れ見舞申し候、嘉興吉氏並びに嘉門治氏の妻君の話及び、會員井口真一氏、丸山尙氏の話御傳言申し上げ候。

お爺さんの病氣は、本年八月上旬、藤山愛一郎君、齋藤一郎君を案として穂高より烏帽子に縦走して大町に出てたる頃に發したるものらしく、その歸途、體具合悪しきて三日ばかり自宅に、ひきこもりて、後上高地に登りたる由にて、私がその頃参りし折も腹が痛むとて、いつもに似ず意氣消沈致したるを覺えたり候、その頃は丸山、井口の兩君の與ふる藥などを服しをりしも快くならず、八月十九日廿日頃自ら病の難きを感じて松本に出でたる由に候、松本にて三日ばかり醫師の診察を受けて歸宅し今に至る迄床に伏す身と相成り候。

その後井口、丸山兩君並びにその友人なる塚原氏の親切に依りその友人なる、醫學士の齋藤俊氏が兩度迄松本より島々迄來診し尙、當地の醫師の診察も有之て、一様に黃胆との診斷に御座候、只黃胆は、小生も一回、かり候經驗上、大分空腹を感じる様覺えたり候が、お爺さんは一向に食欲なく、口中常に、にがく、水以外は何物にても吐き出すとのことにて、此二十五日ばかりは、水のみにて支えたるを申し候、顔面など黃色を呈する爲め周圍の人も、無暗に驚き心配しなるものゝ如く、當人はもはや餘命の何程も無きを期し又、家族も、回復の見込なきものと悲しめらるらく候。

私が見舞たる時は恰度家族の人々もなられ、心配に集へるもの

の如く候き、お爺さんは非常に瘠せて、目をつむりなり、いかに衰弱甚だしく見受られ口を利くことも殆ど、かなはざる様に候も耳は確かにて、話の程は一々明瞭に意識致し候。

飲食物を吐く様相成りてより家族のものは服藥を絶ちをりし由にて、本日松本より、丸山氏より頼まれし、散藥を與へ申し候、尙食鹽水を注腸致すことは大切なる由にてその方の量定せるものも與へてその行はんことを強要致し候。

飲み物は冷却せるものならば、喉を通るこの事にて、氷をも亦松本より持参仕り候。

現在の病狀は右の如く候て、病勢は大分、つゝりなるものらしく、又衰弱も老年の事故一しは甚だしく候も、意識は依然として明瞭にて、小生の感じにては何さか衰弱を防ぎ得ば、死ぬ程の事無之らんかとも思はれ候。

尙丸山氏の意見にては、少しにても快方に向はゞ、直ちに松本の病院にて加療せさせんとの事に御座候が全く、何さかして再び元氣あるあの顔を見得るやう致したきものに候。

二 仲、

途上、鍋割附近より紅葉の美を増し、此邊の山々は誠に麗はしく彩られ、何さなく明るく感じ申し候、明日登るべき島々谷の美しさの程、楽しみに御座候、然し寒氣甚だしく、只今も、炬燵の中にもぐりたる次第にて、幸なれば、穂高の降雪の壯觀に接するを得るかとも思はれ候。

齋藤醫學士の打診によれば多年重荷を背負ふて山歩きしたる爲め肝臓が下垂せるに原因せるものならんか、この事に候。

先づは、お爺さんの病状御報告迄に御座候 敬具

十月廿一日夜、島々にて

楨 有 恒拜

### △神山寅吉の訃

山案内として神山寅吉の名を知る人は少い事と思ふ、今から十四五年も前迄、日本山岳會が未だ存在して居なかつた頃、日光の山々に登るのに自分は常に此の男を使用した。小柄な男で、其の名に似合はず温和で、山が好き植物が好きといふ點に於ては、賃金を第一の目的として山へ行く案内者とは大分選を異にして居た。客がなければ自分一人で山へ行く、そして何か珍らしい草でも見付ると大喜びで採つて歸つて、其の名を教はつては樂しみとして居た。明治三十五年の秋九月、志津から太郎山の方面へ一人草木を探しに入つて、針葉樹林の中で一種の奇植物を発見した、此の標品は直様故五百城文哉氏が寫生した上、牧野富太郎氏の検査を乞ふ事となつて、間もなくこれが日本に於て未発見の一蘭品であることが、発見者の名譽を彰表するが爲にトラキチランと命名されることとなつた。此の寫生圖は今春の大會に小石川植物園から出品された高山植物寫生帖に綴込まれて保存されてある。トラキチランは其の後秩父の雲取山に於て會員の石川光春氏が発見され、又信州本澤附近に於ても発見されたが、兎に角邦産稀品中の一であることは確である。

神山寅吉は十二三年來馬返しのかつた屋で雜用をつとめて居つたが、本年六月某日氣分が勝れないといふて、郷里上野(日光の稍下)に歸り、間もなく死去したとのことである、年は六十五か六であつたと思ふ。

◎雜 錄 山岳彙報(一)

天命を完うしての死ではあるが、山と植物とに關係の淺くない、そして自分さよく山中に苦樂を共にした事のある寅吉を失ふて、甚痛惜の情を禁することが出来ない。(武田)



雜

報

各地新聞の切抜き、其他の諸報道の御投與を希望す、蒐積して、後世日本山岳史の資料たらしめんとす。

會員鶴殿正雄氏よりは、常に多量の材料の寄與を受けつゝあり感謝の辭に耐へず。

東久邇宮殿下白馬岳御登山

松本御着 白馬嶽へ御登山相成る東久邇宮殿下には宮内事務官金井四郎宮内屬服部武夫兩氏を隨へさせられ十五日午後四時卅一分松本驛へ御着、鼠色背廣洋服の御輕裝にて御機嫌麗しく列車より御立出遊ばさるゝや松本地方重立たる官民聯隊の將校等多數御出迎へ申上ぐ殿下には是等に輕く御一禮ありつゝ俚に召されて御旅館たる松本ホテルへ御着相成りしが、直に聯隊長許斐大佐、小里市長、佐藤理事官、安藤東筑摩郡長、飯尾警察署長並に今回御案内役たる河野長野女學校長に謁を賜ひて後御入浴相なり夫より河野氏は御登山の順序に付申上左の如く決定せり尙最初は白馬嶽の峰に御一泊の御豫定の所御二泊遊ばさるゝ事なれり。

十六日 午前九時五十分北松本驛御出發北安大町へ午前十一時五十分御着、直に自動車にて木崎湖畔滄浪閣に御出で御晝飯、後

夏季大學へ御立寄り同庭へ記念の爲御手植ありて自動車にて北城村四屋御着白馬館へ御宿泊。

十七日 四屋より二股迄御乘馬白馬尻にて御晝飯、夫れより大雪溪を経て白馬山頂小屋に御泊り其日天候の模様は依り最絶預迄御登り夕陽の景色を御覽。

十八日 白馬山絶頂にて朝日の景色を御覽、其れより杓子嶽、鐘嶽へ御登山、同夜は白馬小屋迄御引返し御泊り。

十九日 御下山四屋に御泊り。

二十日 自動車にて大町へ御着信濃鐵道午前九時五分發の汽車にて御出發、松本へ午前十一時十分御着。(大正六、八、一六、信、每) 松本より山麓まで 日本アルプス白馬踏破の爲に御入信の東久邇宮殿下には十六日午前九時御旅館松本ホテルより腕車に召され松本小學校に向はせられたり飯尾警視の御先導、赤星知事、

佐藤學務課長、手塚保安課長、樞技師、小里松本市長、及び御案内役を承はりし河野長野高等女學校長等之に隨從したり殿下には三村校長の御案内にて記念館を御覽の後第一應接室に於て御少憩あり夫より講堂に成らせられて四圍の風光を眺めさせられしも此日生憎日本アルプスの連峰は白雲の鎖す處となりて雄姿を見るに由なかりしは隨員一同の遺憾させし處なりき斯くて殿下には曩に兩皇子殿下も手植ありし處より北方約三間の地にヒバの御手植あ

りて午後十時五分學校を御立出給ひ六區今町を経て信濃鐵道北松本驛に御着、曾根驛長の御案内にて鐵道院より差廻されし一二等がキ一車の一等室に御乗車豫定時間より二十五分遅延して十時三十分大町に向はせられたり。(松本電話)

木崎の風光を賞させ給ふ 東久邇宮殿下には午後十二時十分大町驛に御到着藤根北安曇郡長小宮山大町警察署長其他官民十數名の御出迎へを受けさせられ輕き御會釋を賜ひつゝ直に信濃鐵道會社の自動車に召され木崎湖畔に成らせられ明澄水晶の如き水な前に紅塵を絶てる滄浪閣に於て明媚なる風光と御肌に通る涼風を賞し給ひつゝ御晝餐を認めさせられ御少憩の後同一時半夏期大學に御立寄り相成り赤星知事の御説明に御耳を傾け次いで殿下には記念の爲め講堂の庭に羅漢楨を御手植遊ばされ夫れより再び自動車に召させ給ひ中綱青木の兩湖を左に眺められつゝ午後四時頃北城村四ツ谷の御旅館白馬館に御到着御一泊相成りたり尙十七日朝は御乗馬にて白馬尻迄御登山夫れよりは御徒歩にて絶頂を極めさせ給ふ御豫定なり。(四ツ谷特電)(大正六、八、一七、信、毎)

雨を衝いて御登攀 隨従の人々と共に北安曇郡北城村四ツ谷に御一泊の東久邇宮殿下には十七日朝、夜の白むを待ちて御起床白馬御登山の準備につき何くれとなく御用意遊ばされ御朝餐もそこゝに御宿白馬館を立出給ふ時に午前六時なり前夜來の雨は朝に至りて止みたれども濃霧天地を鎖して涼氣襲ひ來り薄肌寒さを覺えたりしが殿下御出發の頃より霧漸く薄らきたれば殿下は殊の外御機嫌麗しく先づ北城小學校へ御立寄遊ばされ白馬の研究材料を蒐集陳列せる高山館に成らせられて多大の興味を以て陳列品を

●雜

報

東久邇宮殿下白馬岳御登山

一々御巡覽あり御下問に對しては河野辭藏氏主として御説明申上げたり北城小學校御出發は午前七時、是より一里半の吉原まで馬にて御登り遊ばさる殿下に従ひ奉りて白馬に登山する一行は殿下御一行四名の外に御案内役の河野辭藏氏を始め縣廳より出張したる手塚保安課長、楯工場課技師、北安曇郡役所より藤根郡長、外二名、大町警察署より巡查部長二名、巡查一名、小田切大町小林區署長、夏期大學より一名、北城村より村長、收入役、小學校長、新聞記者及び本社寫眞班員にて五名、都合廿三名外に食料品防寒用具其他の荷物を背負ひたる人夫十數名にて頗る賑しく一同勇氣凛々たり馬に乗りたるは殿下御一行と藤根北安曇郡長にて河野氏も又乘馬にて先登に立ちて進む、殊に殿下は平素乘馬に御熟練遊ばさる事とて甞もかろく颯爽たる馬上の雄姿仰ぐだにいと畏し嗜れやかなる御面には堪へず頗笑を浮べさせられ御心地健かに渡らせらる、行手迄に白馬連峰を仰がせらるれど山は雲深くして麓だに見えわかつ殊に物凄き嵐は霧を伴ひて折々里にまで襲ひ來る有様に死もすれば今日の天候の氣遣はれしが御氣象僅れさせ給へる殿下には思ひ止ませ給ふ御景色も見えず山麓として馬を進めさせらる、午前八時に二俣橋を通過あらせらる、此處は既に人里離れし山中にて四邊の光景深山の趣あり道も只人馬の通ずること云ふだけなり道添ひに咲く草花には秋の色深く露に濡れて花重たげなり怪しまれたる天候は二俣橋を通過する頃より益々怪しく果は沛然として雨を來し殿下を始め一行濡れそぼらつゝ八時二十分白馬登山口なる吉原に着す吉原には北城村字細野區の青年會員出張し來りて御歡迎申上げ茶菓を奉り同行者にも之を接待す殿下を始め御一行

は此所にて馬を降り殿下は改めて各新聞記者に露を賜はり暫時御休息遊ばされたるが隨從の人々等が暗澹たる空模様を仰いで氣支はしげなるにも拘らず殿下は再び此所を御發足、御徒步にて御登攀遊ばさる、吉原にて手塚保安課長は馬に馴れざる事にて、ふさしたる機に馬に接近して蹴倒され負傷したるが幸ひにして輕傷にて濟みたるを殿下は高らかに笑はせられ折角持來りたる藥なれば少しは使ふも宜しからんなど仰られ隨從の人々も思はず打與じて笑ひ合ひ本人の手塚氏も顔しかめつ、打笑はざるを得ざりき、吉原を發したるは午前九時たりしが、之よりは森林帯の中を縫ひたる細道にして鬱蒼と覆ひ重なりたる幾抱への大樹の木下闇は空暗ければ一層暗くして恰も隧道内を行くが如く足に躓く岩石の凹凸、或は大樹の横さまに倒れたる、大蛇の臥したるかに凝りたる木の根など踏越え踏越え進めば身の丈を埋むる夏草の雨に露けくして衣服は袖より肩まで絞りも致す、森林帯を出抜ければ北俣川に添ひたる嶮しき路に出で又も森林帯に入る、雨は歇まず降れど殿下は少しも怯み給はず却て殊の外の御機嫌にて色々打與せさせ給ひ隨ひ奉るもの又元氣旺盛にて雨を冒して白馬尻にご向ふ。

(大正六、八、一八、信、每)

白馬絶頂去來する雲海に 十七日降しきる雨を衝いて白馬に御登山遊ばされたる東久邇宮殿下には午前十一時と云ふに白馬尻の小屋に御着相成りたり此頃雨は霽たれども雲深くして數間先の人影に既に見えわかざる程なれば四方の景色など無論眺むるに由なく只大雪溪の下を潜りて奔出する金山澤の原流のみ縹緲の音を立て、雲霧を吐くのみ殿下は小屋にて約一時間御休憩餐を

認めさせられたるが小屋にては頗る平民的に一同の者を御相手にいろ／＼の御物語りあり又河野餘藏氏は白馬山に關して種々の御説明を申上たり正午再び小屋を御出發愈々古の雲を埋たる大雪溪御登攀にかゝり給ふ大雪溪の途中氷河の踪跡有る岩石の處に迄迂廻されしが此處にて河野氏の説明ありたり時に午後一時、夫より又雪溪を只管に登りしが此時或は雨さなり又は晴さなり意の如く登る能はざりしが殿下には御健脚にて常に一行に先立ちて進み給ふ、雪溪に登り盡したるは午後二時なりき遠く飯綱戸隱の峰雲の暗間より其頂きを現したるを見たり、河野氏は殿下の爲に高山植物を採集しつゝ登り一同の御花畑に達したるは午後三時濃霧襲襲來して雨の如し、時に活動寫眞撮影の爲め東京より來れる一團ありて殿下御一行の御撮影を願ひ出でしも此時は御許しなく殿下には記者(牧特派員)が疲れて金剛杖に縋りつ攀登る態を指さし給ひて『斯う云ふ處を寫して東京へ持ち行きなば面白かるべし』など與せさせ給ひ一同大笑ひなりき斯て頂上の小屋に着き給ひたるは四時廿分にて豫定より早かりしも金井宮内省事務官、藤根郡長其他數名は之れに遅るゝ事一時間餘なりき、此の一事を以てするも殿下には如何に御健脚に亘らせらるゝかを御推察申上げ得べし、夕刻に至り濃霧霽れ杓子、鐘、朝日の峰々指願のうち、雄姿を現し越中立山の一部亦望み得る程さなれり殿下には此風景をカメラに收め給ひしが日暮頃より又々雨降出で風さへ加り翌日の天候聊か氣遣はれたり記者は殿下と同じ小屋の一隅を汚すの光榮に浴したるが殿下には御食料品を我々にも頒ち與へられ種々面白き談話を試みさせ給ひし後九時御就寢相成りたり小屋の外は寒氣激し

く攝氏六度の温度を示せり翌ければ十八日午前四時半小屋を御出發、白馬の大絶頂なる峰に登攀せられ四時十五分小屋に御歸着此時雲深くして眺望悪しかりしが立山其他の近き山々は白雲の搖曳に従つて隠露出沒せるを望み得たり、五時過ぎに至り雲少しく晴れしより日の出の光景を御覽あり此時河野氏の發聲にて兩陛下萬歳、東久邇宮殿下萬歳を三唱し其聲筋に響き渡りて壯快云ふべからず殿下には頂上なる信越國境の石に腰掛けさせられて記念の御撮影をなし五時半小屋に降りて朝餐を認めて後七時御出發日本アルプスの最北部を占めたる鐘、杓子の二峰踏破に向はせられたり御餐餐は鐘の峰の御豫定なり此行又雲深くして眺望悪く雨となりて晴雨定まらず（十八日午後一時五十五分北城特電）（大正六、八、一九、信、毎）

御草鞋の痕 東久邇宮殿下が十七日白馬山上の小屋へ御假宿になつた夜は雨が降つて寒氣はげしく小屋の外は攝氏六度と云ふ寒さ隙漏る風は肌を刺すが如く眠れぬ者が多かつた殿下の御寢間は白布を以て僅に疊二枚分に敷四谷から背負ひあげた蒲團の中へ山登りの御仕度でも入りになり安らかに御睡眠になつたが真夜中の一時頃に寒さが一層増したのと或る二三の人の鼾聲が雷の如くであつたのでさうしても眠られぬと起きた者が大勢あつた服部宮内屬も其一人で同氏はウイスキーを呑んで腰を取らうと場を取り出し皆で呑み廻すに元來呑み残しのものであつた處から忽ち不足したそこで御荷物の中か他のを取出さうとして行李の蓋を取る拍子に荷物の上にあつた殿下御使用の白木のお膳が大きな音をして殿下の枕元へ落た服部氏はお笑しくもあり恐縮もする之を見て居

た外の者も笑はれず困つて居るに殿下には「皆の者は何故寝ぬか」と仰られ乍らお起きになつたのでサア大變今迄堪えて居た笑ひを一時に吹き出した服部氏は風を引いた如だと言ひ乍ら「ホン／＼作り咳をして」「氷砂糖を取り出さうとして途……」と言譯するにもお笑しさに堪え切れずクス／＼笑つて居たのは大滑稽。

十八日鐘嶽に向ふべく白馬を下る時榎松の中から鳥が飛び出した河野氏は之を見て一羽の筈はないまだ居るであらうと云つて人夫に捜させるに果して五羽舞出したが何れも遠くへは逃げず其中の一羽は程よい處の枝へさまつたので殿下の御覽に入れ御説明申上るに殿下は之を寫眞におさりになつた河野氏がもう追つても宜しいと云ふ中に大茶目が居てそれでは殺しても好いかと言ひ乍ら石を投つける河野氏が禁鳥だからと云ふのも構はず面白がつて追ひ廻したが遂々一羽も獲れなかつたこれを御覽になつた殿下は「お前等に獲れる雷鳥は居らないよ」と仰せられた、杓子嶽から鐘嶽に登る處は非常の惡路で角張つた石があるので草鞋の切れる事夥しい殿下は常に御先登で其御健脚には人夫も魂落して居た隨行の金井事務官などは兎角遅れ勝ちなので誰やらが「落伍者は植物採集など言ひ」と云ふ狂言をやつて紙片に書くそれが渡り渡つて遂に殿下のお手へ遣入つた中途で休憩の時殿下は笑ひ乍ら「金井さうだ、よく適中して居るだらう」と仰られたので金井事務官頭を掻いてコレハ／＼、杓子嶽から白馬のお花鳥の裾へ出る處は非常に險路で時々岩石が落ちる處から萬一を慮り常に御先登にあらせられた殿下も河野氏の言を容れさせられて此時ばかりは殿にお着き遊ばされたそれでも危險の地を過ぎるに殿下は直ちに一同

を追越されて勢がよくお下りになったが途中一二度御轉びになった此時殿下は直後から續いた記者を省みて『之は内密々々』とお手を振らせられたので一同大笑ひ。

鐘嶽へ登る途中に戸隠の蟻の戸渡りの如な所がある兩側は何千丈の深谷道は馬の背筋のやうなので危険此上もないが殿下にはスラ／＼と足早にも渡りになりて普通の道をお歩きになると少しも異ならない態で絶頂にお着になつてから『ア、した處を見るこ飛び下りたくなるこ云ふ者が世間には多くあるがどう云ふ心理状態だらう』と仰せられそれから日光の華嚴の瀧や淺間山の噴火口へ投身する者の話が出たが殿下には頗る下情に通じた話が多かつた。

白馬の大雲谿を下る時は河野氏は櫻松で棧を作り之によつて下る乗る者も挽く者も大層工合がよいと申上げるこ殿下には雪谿の中程まで境でお下りになり『今度は横でなく下つて見やう』とて聽て歩ませられ御不安の御様子もなく人先にお下りになつたこんな次第で道をお急ぎになつた爲め白馬の小屋へは豫定より三時間も早く御着きになつたので御豫定を變更せられて一氣に四谷迄お歸りになつたのである。(松本電話)大正六、八、二〇、信、毎)

槍杓子兩絶頂極めさせらる 十八日午前七時鐘嶽、杓子嶽の絶頂を極めさせられ白馬頂上の小屋を御出發あらせられたる東久瀨宮殿下には非常の御健脚にて兎もすれば遅れ勝らなる隨行者を御笑ひ遊ばされつゝ同十時二十分鐘嶽の頂上に御着遊ばされたり濃霧深く垂れ籠めて眼界を遮り眺望自由ならずと雖も適來る一陣の風に密雲を吹き拂ひて此間僅に下界を眺め得殿下には杓子

嶽を眼前に日本アルプスの雄姿を賞でさせられつゝ御晝飯を認めさせられ再び杓子嶽の絶頂を極めさせられて大雲谿を中途迄櫻松にて作られたる様にて御下山午後二時十分白馬尻の小屋に御歸着遊ばされたり此處にて始めの御豫定御變更吉原にて馬に召させ雖然に四谷の白馬館へ御歸着相成りたり時に午後六時四十五分。

十八日夜白馬館に御宿泊遊ばされたる久瀨宮殿下には十九日未明御目覺河野齡藏氏に朝餐の御陪食を賜はり其他の隨員中重なる者には酒肴料を下賜されたり尙御登攀途中道路御乗馬の御用をなしたる北城村細野區青年會には河野氏を介し御言葉を賜はり午前八時自動車に召されて大町に向はせられたり沿道の人民は戸外に出て奉送迎申し上ぐれば殿下には炎暑をも厭はせられず自動車の幌を外して進ませられ又木崎湖の夏期大學生は縣道側に整列して奉送せり殿下には午前九時五十分大町着直に信鐵列車に召されて御出發同十一時半頃北松本驛御着松本縣隊將校其他官民有志の御出迎を受けさせられ腕車にて松本ホテルに入らせられ御晝餐を認めさせられた後午後一時十分松本驛發列車にて長野に向はせられたり。(松本電話)

記念品御寄贈 東久瀨宮殿下白馬御登山用の金剛杖、帽子、着菓産は之を北安曇郡御大典記念館へ御寄贈遊ばされたるが尙ほ松本市長よりの御願により水筒一個を同市小学校の記念館へ御寄贈相成りたり同市よりは美篤行李一個を献上したり。(大正六、八、二一、信、毎)

白馬絶頂の御假寝 十七日白馬御登山の途中白馬尻に於て御晝食を召させられたる東久瀨宮殿下には午後零時半御出發直に

白皚々たる大雪溪に、リ殿下を始め皆カンシキを用ひて進みたるが殿下には途上屢々莊嚴なる大雪溪の光景を御撮影あり漸く日本アルプスの高山植物の寶庫とも言ふべき御花畑に御着折柄東洋フィルム活動寫眞會社が乙種フィルム(兒童相手の教育資料)を撮影する爲め先日來御花畑附近に天幕を張りて露營中なりしが殿下の御登山を迎へ奉り技師が某屬官に後方より御許しあるやう願出でたるに殿下には御耳聴く「後からでなく前から撮せ」と仰出されたるに技師は無上の光榮とし將に撮影にかゝらんとしてレンズを向くや警衛の手塚保安課長は之を差し止めたるにぞ殿下は「日本の警察官はごうも喧しくて困る」と大笑ひ遊ばされたれば課長も大に恐縮し活動技師は面喰らひしは傑出せる愛嬌なりき午後四時無事絶頂八丁下の小屋へ御到着相成りたり。

絶頂の一夜 當日絶頂に上りて夕陽を御覽の御豫定なりしも山嶺は頗り濃霧徂徠せしかば御見合せとなりたり下の小屋は二間四尺に三間の板圍にて屋根は雨の漏るを以て油紙を敷ひ板扉には金巾を張り屋内には莫塵を敷きたり殿下には隨從者が屋外に佇むを御覽せられ「サアサア入り給へ入り給へ」と座を一同に勤め飾り給ふ人夫等は焚火をなし鍋にて飯と味噌汁を煮き殿下は隨從者を悉く小屋に入れ給ひ夜色逼りたれば屋内に蠟燭を點じ足弱の金井事務官が「殿下は何うして御健脚に在ますか」と御尋れ申上げしに殿下には「登つて行く先々が何んなに面白いと思ひ自ら足の進むを覺ゆ」と御微笑を洩らせられたり午後七時頃御夕食には牛羹の飯に牛の罐詰を開かれ河野校長の御給仕にて味噌汁は味い〜と召され一同には罐詰及び果物等を御下賜遊ばされたり

服部屬が携帶の福神漬を差上ぐるこ「オイ福神漬の外にピリケン漬もあるぢやアないか」と御詰遊ばされ一同を大いに吃驚させしめ給ひ小屋内には三箇所に木炭を焚きて暖を取り午後十時頃殿下は莫塵の上に一同の者と共にゴロ寝をなし夜更くるに従つて大驟雨あり寒氣霅々身に浸み氣温華氏十度を示し屢々夢破れたる程なりしも殿下には御安眠遊ばされたり。

杓子、鍵ヶ嶽を経て 夜明ければ十八日殿下には午前四時半さいふに御起床絶頂へ向け御出發一同扈從申上げ河野校長が絶頂は越中と飛騨と信濃三國の境界なるも確なる境界線は分らずと申上げしに殿下には之が外國との國境ならば大問題ならんと仰せられ富士根郡長を顧みさせられ境界線を知つてゐるだらうと御尋ねあり郡長は唯帽子を脱してヒョコ〜頭を下ぐるのみなりきやがて河野校長の音頭にて兩陛下の萬歳東久瀨宮殿下の萬歳を三唱し殿下も亦帽子を擧げて之に和し給ふ其れより御下山、小屋にて朝食を召され午前七時發杓子嶽、鍵ヶ嶽御登攀直に御下山同日夕刻北城村四谷山木旅館へ御着御一泊十九日は自動車にて大町御着午後松本へ御歸着の御豫定。(大正六、八、二〇、大毎)

大雪溪を蒔の「ソリ」にて 既報白馬山御登攀絶頂より八丁下の小屋にて朝食を取られたる東久瀨宮殿下には十八日午前六時同町御出發眼前に兀として聳え立つ杓子ヶ嶽に向はせられたるが此邊りの道は嶮岨を極むるにも拘らず常に隨從者に先じて進ませられ、鍵ヶ嶽の絶頂近く四十五度の傾斜面に差かゝるや隨從者と競走せんと仰出され御後に從ひ服部屬に「服部續いて來い」と仰せらるゝや一目散に平地を駛るが如く駈上らせ殿下は遂

◎雜 錄

燕嶽登山者斃る 上高地の害蟲 單身前穂高岳の嶮を攀づ

一八六

に先頭第一を占めて打ち興ぜられたり午前十時鐘ヶ嶽絶頂に御着約一時間の御休憩中御晝餐を召させられ十一時半下山の途に就かせられ再び白馬嶽の大雪溪にかゝらせ此處にて「ミヤマハンノキ」の枝をゴザに結び附けて縄を拵へ申上げたるも之を曳くべき綱無きにぞ御警衛の巡查の捕縄を引き綱させしに殿下は御機嫌よく之に乗らせ給ひ人夫に曳かしめて御下山相成りたる等其の御元氣には一同驚き合ひたりかくて午後二時白馬尻着御少憩の後四時御出發二股より御乗馬にて四谷に向はせられ午後七時四谷山木旅館に御安着遊ばせられたり。

長野市より御歸東 十九日東久瀧宮殿下には午前八時廿分自動車にて四谷を御出發十一時北松本驛に御着許斐縣隊長其他官民の迎送を受けさせられ松本ホテルにて御晝餐午後一時十四分松本驛御發車長野市に向はせられ甲越古戦場なる更科郡小島田村の八幡原御見學善光寺御參拜、午後十時半長野驛發にて御歸東遊ばせられたり。(大正六、八、二一、大、毎)

燕嶽登山者斃る

松本市師差町前澤榮一(二三)は去月廿一日中房温泉に行き同浴場にて懇意になれる學生五名と共に二日燕嶽に向つて出發し中腹に至れる頃俄に病氣に罹り登山する事能はざるを以て同行の學生は榮一を其の場に殘して登山し直に引かへして連れ戻さんご元の場所に至れるも榮一の姿が見えざりし故獨りにて下山したる者と思ひ温泉場に戻りて尋ねたるに朝出たる儒歸らざる事判明したる

より大騒ぎとなり榮一の實家に急報し翌三日親戚の者二名人夫數名を連れて登山し搜索したるも行衛不明四日有明消防組員廿名の照援を得て搜索したる處榮一が發病の際學生と別れたる處より二三町を隔てたる匂松の中に入り死亡し居るを發見死體は搜索隊に引渡し親戚之を携へ五日實家に歸りたるが死因は腦貧血を起したるものらし。(大正六、八、六、信、毎)

上高地の害蟲

日本アルプス中の一大美園たる上高地の梓川沿岸の潤葉樹に害蟲が發生し非常の被害なる由は露に報せしが此の害蟲はハンノキ毛蟲にして目下盛に蕃殖しつゝあり、來年は更らに下流上流にまで及ぼすべく其の驅除法は無きにあらず斯く劇甚と成りては手の着け様もなしと松本小林區署員は語れり。(大正六、八、三、信、毎)

單身前穂高岳の嶮を攀づ

松本市の青年洋畫家井口良一氏は本月十六日第一高等學校生徒並に第三高等學校生徒の山岳會員が穂高嶽に登るを中途まで送り、井口氏は穂高嶽の押出河原にて學生團體に分れ、同所より單身にて日本アルプス中峻嶮無比の前穂高嶽に登攀したり同山は如何なる山岳研究家と雖も是れまで登攀せし者無く、只僅かに陸地測量部の技師及び助手等三四名が曾て登りし事ありしのみなれ

ば、或は普通の登山者としては井口氏が其嚆矢なるやも知れず井口氏は記者に語りて曰く『押出河原からの傾斜は實に五十度以上で、道は踏めばカラ／＼と落ちる岩石ばかりです、杖も其の用を爲さず、四ツ道になつて登るので、峰に近い處に約一町程を渡らねばならぬ残雪がありました、其處の傾斜は寧ろ傾斜と云ふよりも、手の平を立てた様で非常なる大難場である、私は其處から歸らうと思つたが、折角此處まで来たからには何うかして登らうと勇氣を鼓して一足毎に雪に穴を穿ちつゝ足場を造つて、辛うじて其の雪田を登り切つたが、僅に一町ばかりの處を越すに三十分の餘もかかりました、夫れから漸くのこゝで前穂高の窓の頭へ出た、窓と云ふのは妥當でないかも知れんが、岩の形が妙に成つてゐる處でしたから私が窓と名づけたのです、絶頂では折悪く雲が掛つてゐたから、眺望はわるかつたが、夫でも飛騨の笠嶽、加賀の白山、木曾の御嶽、此外に乗鞍、六百、霞澤、奥穂高、明神の諸山を見るこゝが出来ました、登りは兎も角も掻き上るのであるから能いが、降る時の心持と言ふたら恰で生てゐる様な氣はしない一足踏み外したが最後、體が粉微塵です、屍骸さへも取りに行くこゝの出来ない深い谿に落ちて了ふ私が雪の處を下つて岩石の處まで降りると、今しがた通つた雪の一部が二間四方ばかり崩れて岩石と共に土煙を立て、落下するではありませんか、夫れが恰度私の居る方向に来るから岩の陰へ隠れて難は免れたが、イヤ實に危険々々、人夫も登れなくて下に心配して待つてゐました』云々。(大正六、七、二、信、毎)

## 白馬岳雜記

白馬研究高山館 北安曇郡北城村小學校長有賀榮一氏は部下教員の協力を得て本年より小學校内に高山館を新設したり館内の陳列品は全部白馬嶽に關する研究材料にして植物、動物、礦物、摺型、圖書等あり本年の新設なるにも拘はらず最早や蒐集品は七八百點にも達し今回東久邇宮殿下にも御立寄り相成り有賀校長も大いに面目を施したるが部下の教員某の如きは材料蒐集の爲めに本年七月上旬眞先に登山してより此頃までに既に七回登山したり云ふ之れが維持法は村費より幾分の補助ある由なるが有賀校長は尙ほ今後數年の繼續を以て材料を集め完全なる白馬嶽研究の機關を爲したしと語れり。(大正六、八、二、信、毎)

### 登山者千餘名

日本アルプス登山者は年々殖えて本年の如きは四ツ屋口、大町口、中房口、鳴々口とも何れ劣らぬ賑ひなりしが就中、北部の白馬嶽は信濃鐵道、自動車、林道などの便が登山口まであるを以て同山に登る者頗る多く、昨年は五百名位なりしが本年は未だ閉山期にもあらざるに既に約千餘名の多きに達し、其の内九百名位までは信濃口より登り他の約百名が越後口より登りたる割合なり、而して本年の登山者には此の頃の東久邇宮殿下あり、洋書家の正宗得三郎氏、日本書家の寺崎廣業氏等ありたり。(大正六、八、二、信、毎)

### 夏期大學の白馬登山

木崎湖畔夏期大學の第一部生有志三十餘名は講師矢澤米三郎氏に引率され八日白馬嶽に登攀し高山植物に就て實地教授を受け山頂の石室に一泊九日下山の筈なり、又

各部生並に委員は近日中に一大茶話會を催さん目下準備中にある、寄宿舎の内容も信濃鐵道會社々長今井五介氏の心盡しにて大に整頓し受講生一同は満足し居れり、水泳部は十四日を以て閉づる筈なり。(大正六、八、五、信、毎)

女も子供も樂に登れる 日本アルプスの中でも、一番登山に安全で勞力が少く、而も趣味の多いのは北部日本アルプスの白馬嶽である、其白馬が今度一層登山の諸設備が調つて、本月の二十日以後は婦人でも子供でも容易に登る事が出来る様になつた露營の設備としては、是れまでは白馬尻と頂上に石室が在つた丈けであるが、今年は四ツ谷の旅舎山木屋の主人松澤貞遠氏の經營で、頂上へ更に三間四尺に三間の石室を二つ増設して本月の十五日に落成した、今までは頂上の露營者が一寸でも多人數に成ると石室に這入り切れなくて困つたが、是からは百人位までは此石室に這入ることが出来る。尤も小屋料は一人一泊に就て金五錢宛を徴收する事になつてゐる、此の料金は石室の維持費及び今後の新設備費に充つるので、山木屋の主人が獨占するのではない、夫から慈平(慈平と云ふ處は文字は同じでも讀聲と場所が違ふ)以上の、急傾斜の雪田へは、信濃鐵道會社の篤志に依つて今度鐵索を架して登攀者に多大の便利を與ふる事になつた、之は廿日に竣成する豫定になつてゐる、之が出来れば最う、大難所と云はれた雪田を渡り越すにも、カンザキも要さればアルペンストックも不要である、全く婦人も子供も樂に登る事が能て、少しく健脚の者であれば四ツ谷を朝早く出發し、白馬の頂上を極めて其日の内に四ツ谷へ歸ることが出来る、現に此の間も大町小林區署の工藤主

事と山木屋の主人は其の日返り登山を實驗して見た、白馬へ登ることは斯の如く樂になつた上に、四ツ谷の宿泊料は五十錢、入夫は日當六十錢(食費は客の負擔)と云ふことに定められたから、大に登山者の爲めには都合が能くなつた、夫れから頂上の石室が増設された爲めに、白馬へ登る序に其の周圍の山を探究すると云ふ人の爲めにも大に都合が能く成つた譯である。(大正六、七、二、二、信、毎)

白馬山麓まで自動車が行く 信濃鐵道會社にては夏期大學の通學生並に登山者の爲めに大町驛より北城村字四ツ屋まで自動車を行く旅客の聯絡輸送をする事となり三日には試験の爲め大町より遠く南小谷村の字下り瀨まで運轉せしが成績頗る良好なり此の長距離の運轉は特に註文のありたる場合に限る事とし大町四ツ屋間は毎日二回往復大町木崎湖間は回數を限らず客のあるに隨つて運轉すると云ふ尙ほ貨錢は馬車及び人力車業者と競争を避くる爲め比較的高くし大町四ツ屋間は片道一圓二十錢なり。(大正六、八、五、信、毎)

### 御嶽山雜記

御嶽郵便増加 未曾御嶽山の郵便局に於ける本月十一日より三十日までの十日間の取扱昨年との對照左の如し。

引	受	交	付
通常	小包	計	通常
七三〇	七〇	七三〇	小包
五、三六	四二	五、四〇	計
		一四三	三
			一五

尙局前消印は二千三百二十五にして前年は一千八なり又此十日間の登山者は八千二十六人にして前年は六千六百六十人なり。(大正六、八、二六、信、每)

**御嶽登山六萬餘** 木曾御嶽登山客は近年年々共に増加し來れるが本年は殊に著しく七月開山以來今日迄の登山客は既に五萬に近く此向きにては九月廿日の閉山期迄には六萬人を超過する摸樣なるが七月二十一日以降卅日間の中央線乗降客を見るに福嶋驛のみにては四萬三千餘人にして前年の同期の三萬二千に比し一萬一千人を増したるが上松驛よりの乗降客も殆どこれに近き數を示し非常の盛況を呈しつゝあり。(大正六、八、二六、信、每)

**先着者を行衛不明と誤り** 松本市の御嶽教信者に依つて組織されたる唯一教會團二十八名の一行は三日木曾御嶽に登山したるが途次暴風に遭遇し頗る困難を極めし折柄頂上に近き王瀧道と三岳道との中間に在る覺明堂附近に於て一行中の柳町上兼真次(三五)が行衛不明となりしより一行の心配一方ならず急を三岳村駐在所に届出で受待巡查及び一行中の風強男五人を以て搜索を開始したり然るに真次は一行にはぐれたれど却て一行より先に下山して四日夜福嶋停車場へ辿り付たる事判明したれば直に搜索を中止一同無事下山せり。(大正六、八、二七、信、每)

**夜の御嶽紙衣揃** 北佐久青年團は此程御嶽登山會を催し同山頂に一泊したが何れも防寒の準備を缺いたが爲め寒くてくゝ眠る事がならぬ、スルト副團長たる邵視學の田中文治君偶と一計を案じテヨッキの下へ新聞紙を幾重も巻つけてゴロリと寝て見ると暖かい事夥しい、名案々々、皆も新聞紙を着ると勧めたので一同之

を着て見ると肌障こそ悪けれ暖を取るには充分だつた相な、青年一同の新聞紙衣揃ひは振つてゐる。(大正六、八、五、信、每)

**御嶽山の大荒れ** 大野郡高山町の青年會員松下慶太郎外十二名は三日御嶽山へ登山し字三ノ嶺まで到りし處折柄暴風雨起り四名は辛うじて下山せしも他は八名は行衛不明となりたるより附近の岩屋に避難したるが四日無事歸宅せり。(高山電話)

**女教員組は岩窟に避難** 大野郡高山町女教員數名は本月二日御嶽登山を爲したる處翌三日山上にて暴風雨に遭ひ止むを得ず山中の岩屋に避難したるが四日無事歸宅せり。(高山電話)(大正六、八、九、信、每)

### 東西婦人記者の穂高登り

十四日を以て信州松本に落合つた東京、大阪の新聞社の婦人記者達四名と他二名の婦人が日本アルプスの最難峰と稱せらるゝ穂高(海拔一萬九百尺)の嶺を踏破して十九日の夜無事に元の松本まで引返した、斯く多數の婦人が一團となつてコノ難關を究めたさいふ事は同山登攀のレコードである、そしてこの四十五度の急勾配をもつたゴロ／＼石の大雪溪を攀ぢた女はこれ以前にはタツタ三人よりないさ云はれてゐる、それも皆一人づゝ多勢の男に混つて引き上げられたに止つて居るが六人一團になつて穂高前峰の最頂上を究めた婦人記者の顔觸れば、(恩田和子、吉田清子、大本花代、彌江京子他に東京大阪の婦人二名)以上の六名に寫眞師を加へた一行は『日本アルプス巡禮』と書いた菅笠と蓑を井べて

松本から島々街道に、つたは十四日の午後梓川を南に沿ひ大野川、北白川、白骨温泉、上高地温泉を経て、いよく穂高上りとなつたのは十八日、案内役は本社橋詰記者、婦人記者達は、差子の山足登山脚絆金剛杖を石につき立て朝の四時過強力を最先に梓川から一里ばかりの灌木帯を離れ穂高名物のゴロ／＼石にかゝつちやうど柵を横に置いて下の隅から上の隅へ斜に掛け渡してある「柵かけ」の金を下から上つて行くやうな恐ろしい勾配が約二千尺と云はれてゐる、難所だけに上の人の踏み石は何うかすると轉んでアトの人の頭の上を越して落ちる、いよく、穂高難所の高さ五六十尺もあらうと思はれる大岩の背を針金に縋りつゝこの婦人の一隊はエツシ／＼と登る岩の間の洞潜り、足の危ない鬼橋渡りなどを非常の努力を以て一同前峰の最頂上に攀ち上つた時は彼は三時過ぎ「下を見るナ」「下を見ては駄目だヨ」と聲を覗らした甲斐もなく一行中の誰彼はト／＼上の悪場といふ大岩へ龜のやうにへぱりついたまゝ、雪溪を見おろして身顛ひしたが強力に強られて一同午後四時より下山、昇降八里の穂高登山を無事に終了して上高地へ同夜歸着したこの穂高に成功した婦人達は來年の夏槍ヶ嶽上りを断行するさうな。(大正六、八、二四、大、毎)

## 雷鳥の祟

京大生狩獵法違反で取調らる 京都醫科大學の職員學生等十餘名より成りし一團は高山植物を採集すべく今夏日本アルプス地帯を跋渉したるが、一行が白馬山を探検せる去る七月十六日保

護鳥たる雷鳥を捕獲し引揚げたるより狩獵法違反問題を生じ所轄地の信州大町署は一行中の右違反者取調方を京都の川端下鴨兩署及び奈良縣下津川署に依頼し來りたるも其の當時は恰も尙休暇中なりしかば京大の授業開始と共に關係大學生の登學を俟ちて一人々々召喚の上聽取書を調製の上二三日前全く取調終了し大町署へ移送したりと云ふ右につき下手人さ目指されたる醫科大學生杉若金一郎の辯明を聞くに、一行は山麓の宿屋白馬館に命じ七名の入夫を雇入れたるが其の中の一人が白馬山の山腹に於て雷鳥の親鳥を認め悪戯半分に小石を投げたるに狙ひ過たず命中し狂死に息の根を止めたり、杉若大學生等は研究の好資料を得たる事を喜び合ひたるが次で一行は白馬山頂に於て巢立をしたばかりの雷鳥の雛二羽を生きながら捕獲し携へ歸る途中雛鳥は二羽共死したれば更に酒精漬さなす苦なりしに親鳥も雛も腐爛せるより致方なく途中に放棄したる事實を述べたるが、一行に加はりたる京大醫化學教室の助手富田醫學士等はたゞ學術上の研究材料に供すべき目的なりしとはいへ、種族保護の鳥類を捕獲し狩獵法違反の問題となれる以上、學生等に其の責を負はず如き事ありては遺憾の上なしとの趣意により學界の爲に進んで富田氏自身處分を受くべき旨希望したりと。(大正六、九、二八、大、朝)

雷鳥問題の取調 今夏七月京都大學生徒が白馬登山をなしたる際捕へたりと云ふ雷鳥問題に關し大町警察署にては十二日當時一行の入夫を勤めたるもの全部を召喚して取調をなす由(大町電話)(大正六、十、十二、信、毎)

# 岳の雪

山

岳

上高地の秋色 日本アルプス中の最勝地たる上高地は獨り夏季の登山時期に於てのみ賞すべきに非ず其の秋景の佳絶なる實に筆紙の能く盡し難きものあり、流石に外國人は上高地の眞價を知悉するが故に雜鬧する暑中より九月に入りて來遊する者多く秋期探勝客の七八分通りは外國人なり、本年は九月末は暴風雨なりしが本月一日よりの好晴にて其の壯觀言はん方なく殊に穗高嶽を始め連峰の頂上は二日朝に至りて新雪を裝ひ、中腹は皆な紅葉を呈し麗は未だ色着かずして蒼黒の森林、正に重疊は三段の染め分けにて一大奇景を現出せり、秋晴天高くして馬肥ゆるのみならず岩魚も正に肥えたり、茸は已に上高地の高原に滿ち々々小梨平の小梨の實は紅にして春の花よりも美し、秋草は最早や老たりと雖も鳴々谷と徳本峠の紅葉は蓋し天下に其の比無かるべく、地の高低に依りて紅葉の濃淡に遲速あり、十月の上高地は何時來ても山川の獲物は絶えず、實に雲外の一仙境なり（上高地にて雨來居）（大正六、一〇、七、信、毎）

妙高山の初雪 下高井郡岳北地方より妙高山を望めば山腹より頂上まで白皚々として初雪降れるが右は九日夜半より曉のこもりなり。（大正六、一〇、一二、信、毎）

穗高岳降雪 十四日朝穗高嶽一帶に今秋第二回目の降雪あり今回は燒嶽にも雪降りたり十三日には徳本峠に霰降りたり田中東京大林區署長視察に來る。（大正六、一〇、一六、信、毎）



# 會 報

## 第十一回大會豫告

### ○山岳畫展覽會

自大正七年五月一日至五月十日日間、  
東京市日本橋區通一丁目白木屋吳服店樓  
上に於て

### ○山岳幻燈講演會

大正七年五月五日(日曜日)午後五時より  
東京市赤坂區溜池、三會堂に於て

近來山岳を題材とせる繪畫少なからず、殊に昨今  
其傾向多きを知る、茲に本會は見る所あり、第十  
一回本會大會を期して、山岳畫展覽會を開き、聊  
か同趣味諸君の鑑賞に資したく、敢て茲に開催す  
る事とせり。

出品畫は洋畫日本畫たるを問はず、等しく山岳  
に關聯せるものを陳列すべし。會員諸君には展覽  
會前特に日を期して觀覽を乞ふべし。

講演會は最近印度カシミヤ山地の旅を了へて歸  
朝せられたる會員石崎光瑤氏に乞ひ、氏撮影の寫  
眞を幻燈とし、ヒマラヤ山下、石楠の花咲き亂れ  
たる所、三十餘人の人夫を連れて旅せる登山談を  
乞ふべく、尙ほ某々専門家について科學的山岳觀  
を聞かんとす。

會員諸君には講演題目等追て詳報すべく、會員  
外諸君にして通達を希望せらるゝ諸士は豫め事務  
所迄申込れたし、展覽會及び講演會共に同趣味諸  
君の來會を喜ぶ所なり。

展覽會開會中を期し講演會當日なる五月五日、  
展覽會場白木屋吳服店內別席に於て會員有志の午  
餐會を開き、一日の山岳談を交さんとす、多くの

諸君の來會を望む、會員外同趣味諸君の來會も喜ぶ、來會希望の諸君は豫め事務所迄通せられたく、決定の上御通知すべし。

展覽會出品者諸君は左記會規諒承ありたし。

### 日本山岳會第十一回大會

#### 山岳畫展覽會々規

△會期 大正七年五月一日より十日迄

△會場 東京市日本橋區通一丁目白木屋吳服店樓上

△出品者 會員及び會員外の作家並びに所藏家

△種類 日本畫、洋畫、大小新舊、畫風の如何を問はず山岳及び山岳に關聯せる畫趣たる事

但し相當表裝又は額椽等に入れたるもの

△陳列 會場は限りある面積なるを以て陳列の都合に由り出品或は陳列を謝絶する事あるべし、陳列の方法順序等總て本會に一任せらるべき事

△出品 出品者は豫め繪の種類筆者畫題及び表

装又は額椽の大きさ賣品(價格も共に)又は非賣品の旨を明記して來る大正七年三月末日迄に本會事務所に申込まれ

△搬入 出品物は來る大正七年四月十日より廿

三日迄に相當荷造りの上東京市日本橋區通一丁目白木屋吳服店內山岳畫展覽會係宛搬入せられたき事

△賣約 本會は出品物の賣約に就ては何等關與せず總て陳列場白木屋吳服店の内規に従はるゝものとす。

#### 山岳畫展覽會に就て作家及び所藏家に

別項大會豫告の如く來る五月一日より十日間山岳畫展覽會開催の筈なるが、本會は特に會員及び同趣味諸君に、本會の此舉を賛し山岳畫の出品を乞んとす、山岳が繪畫の題材として取扱れたる事

は久しく、敢て新らしき傾向なりと云ふべからねど、特に近來の如く、山岳を主題として書れたるもの愈々多からんとする時に當り、本會は特に作家諸君及び所藏家諸君に乞ひて、其山岳畫の出現を乞ひ聊か同趣味諸君の鑑賞に資せんとす、茲に山岳畫と云ふは、山容其物のみを畫れたるものと云ふ意にあらず山岳に關聯せるもの、高山植物、森林、溪流、雲霧、雨雪、登山の姿等何れにても可なり、敢て山頂の現れたるものと云ふ意に非るなり、山に伴なふ森羅萬象なるを要するの意なり、本會は敢て一方の畫壇を占むるものに非ず即ち何等畫風及び畫の種類を限定せるものに非ず、敢て新作畫を欲するに非ず、舊作可なり新作可なり要するに吾人の欲する所は、山の眞を語り山岳の靈氣を傳ふる者たるを要するなり、此意味に於て作家及び所藏家に出品を乞ふ事頗る大なり、山岳に興味を有し、山岳に共鳴する作家諸君の進んで出品されん事を希望す、本會は畫壇の棟梁に非ざるを以て畫趣の如何を云ふべきに非ず、然れども限れる會場に無限の出品を陳列するを得ざるを以

て、時に陳列を謝絶し出品を謝絶する事あるべしと雖も、此等は本會として萬止むなき策なりと云ふべし。

出品物に就ては本會は相當注意を怠るものに非ず、其保管に就ては陳列場は全責任を負ふべし。

敢て作家及び所藏家の出品を懇願して止す、知友諸君にも本會の此舉を傳へ一人にても多くの出品者を得ん事を敢て會員及び同趣味諸君に乞ふて止ざる所なり、出品者諸君は別記展覽會々規諒承ありたし。(展覽會係り)

### 會員登山報

△秋も漸く老いて、もう山國の紅葉も見られなくなりました、私は三四日の暇を得て久しぶりで日光を見物に行つて來ました(十月二十二日)曾て清例に思つてゐた大谷川も雄大な氣がしてゐた劍ヶ峰の茶屋、中の茶屋の眺望も、より大いなる山川に親しんでゐる身には格別の興をそゝりませんでした、殊に大平附近の樹木が疎らになつて、がらりとしてしまつたのには少なからず失望しました、中禪寺湖畔の紅葉は今年は不出來だつたさうです、夏、蟲にやられた後此頃の長雨と暴風で随分葉が振り落され残つてゐるのも大分色褪せて紅葉が早かつたのか、後れてゐたのか分らなかつたの

です。

然し中禪寺から湯本の間、景色は中々好いものでした。湖水の反映する落照を浴びて湖畔の凋葉樹の中を落葉を踏んで行く氣持もよく菖蒲ヶ濱から養魚場附近の大楢林の紅葉の壯麗や荒涼たる戰場ヶ原の夕、そして悠大な男體山と豪壯な太郎山の間、連らなる大真名子小真名子の後から尖頂を露はした女峰の山の色の美しくさは寂寞たる湯の湖の幽遠と共に忘れることは出来ません。

湯本へ着いた翌日白根山へ登りました。まだ十月なのに白根澤の上が處々凍つて木下道なぞは落ち葉の下に二寸位いの霜柱が張りつめてうっかり足を下ろすとづる／＼とるので一寸さ歩き悪く思ひました。天狗の相撲場から前白根へかけて到る處に蔓ひこつてゐる苔桃の真紅の實がすまみりになつて熟し切つてゐるので丁度渴いてゐた私は手當り次第に捲つてはむさぼりました。湯本を出た時にはどんよりしてゐた天氣が幸に快晴になつて奥白根の絶點へ着いた時分には長閑な小春日和まなつて高原山那須火山や鬼怒沼山一帯の山脈會津駒ヶ嶽なぞよく見えました。燧ヶ嶽と武尊山の間、折れ重なつてゐる奥上州の山々苗場山岩菅山から淺間火山脈さては八ヶ嶽の一脈秩父山塊その左に頭を煙霞の内に没してゐる富士山のコバルト色なぞ可なり壯大な眺望を恣にすることが出来ましたが遠方は藤鼠色の霞の幕に閉されて見えす脚下の雲海が非常に高く波立つてゐた爲赤城や榛名なぞは全くその中に没されて見えすにしまひました。

翌日は午前六時に宿を發つて太郎山へ登り志津の小屋へ出て男體山を極めて夕闇を中禪寺へ降りました。西澤金山の索道が男體

山の裾を辿つて志津の窪の上から荒澤の方へ降りて行くので梵字瀧手前に事務所が出来そこ迄は御澤へ降りずに立派な道が出来大變に歩きよくなりました。この間の男體山麓の落葉松の森林は實に立派なもので其黄葉に結んだ霜が解けて笹原の上に絶え間なくばさ／＼と落ちる雫の音が何とも云えない幽寂な感じがしました。梵字瀧の處から御澤へ降りて行くと兩岸に連らなる一面の立壁岩の中の空澤の岩や砂の上に楓や樺や檜なぞの落葉が真紅に黄樺に美しくい摸樣を描き出してその中を踏みながら行く私等は藪中へ行く趣きがありました。温泉から一時間半で太郎山から来る澤の合に着いて笹原を分けて太郎山へ登りました。梅の森林の中を行くさな、カマドの紅葉が燃える様に美しくゴセンタチバナの赤い實が珊瑚玉の様な色をして森の下道を飾つてゐました。四合目の處で富士見峠へ行く道が右へ切れてその先には御料局の境界の標杭を立て字太郎山と云ふ石標が植ゑられてありました。御花畑は枯原の様になつて夏の美しくさは全く失せただれども頂上の眺望は可なりでした。高嶽山温泉ヶ嶽金精山から昨日登つた白根山が高く群を抜いてその右の燧ヶ嶽の形が大分丸くなつて見えました。太郎男體大真名子に圍まれた高原は中々深遠で笛吹川の奥へでも行つた様な氣がしました。志津の小屋へ出たのはもう一時でそれから男體山の登りにかゝつたが、この裏山道は随分樂で峠道を歩く位にしか思はれませんでした。志津の鞍部から霧が續々入つて來るので八合目邊までは何にも見えすに遙か下の方で鳴く鹿の聲を二三度聞いた丈でした。頂上へ着いたら寒くて／＼兎ても長く居たゝまれないので風の當らない處で中食の残を食ひそれから愈

峻な一筋道を中禪寺へ向ひましたが、三合目邊から日が暮れて旅路へ着いたのは五時半になりました。

豫定では志津の小屋で夜營をして大真名から女峰を越えて日光へ出る積りでしたが案内が一日では無理なき云ふので止めにした爲翌日の風雨に苦しみられずに歸京することが出来ました。

(冠 松次郎)

△小生等三人は去る七月十八日鷹崎より佐伯春藏を案内に連れ劍と薬師に登り申候立山室堂に一泊翌日別山乗越を越え長次郎谷より登り熊ヶ岩の下にて會員冠氏の下山し來らるゝに會しそれより右雪溪を登りて三窓の頭に續ける尾根に出て巖岩をへつりて十二時五十分劍の頂上を極め申候歸路は再び長次郎谷を下りて別山下に幕營仕候翌廿二日は別山より尾根を雄山に參り鬼にて露營次日はザラ峠五色を経て越中澤嶽の下に泊り申候此日より春藏は足痛を起し豫定を遅れ候翌日は越中澤の尾根續きより澤につきて數合乗越に出て、間の山△點の下にてテントを張り其翌日なる二十五日午前八時二十分漸く薬師の頂を極め申候處が、小生等には二十八日には是非歸宅を必要とする用事出來候爲本年は残念ながら之より南への縦走を打切り豫定の赤嶽行きを變更して最も近き鳶谷を下りて再び富山へ出る事と致し候タル多き鳶谷を下りしに雪溪にかゝりて熊に出合ひ候それより岩井谷に合し眞川の落合なる木材小舎にて一夜厄介に相成り候翌二十六日は九十九折を経て湯川に合し温泉道をひた走りに走りて富山に出て今夏の登山の終を告げ申候當年は晴天續きにて雪多く非常に愉快なる旅を致し候。若林祐次郎、三上捨三、松代鍋種。

▷大正六年八月六日大町を發して大澤小屋泊り(新しく建たもので非常によし)七日針の木峠を経て平の小屋泊り籠の渡しは破損して用ゐられず平の小屋も、大きい方は獵師が獸の骨を棄て、置くので汚くて駄目、八日刈安峠を経て雄山澤を上り淨土に上り一越にて野營。

九日雄山大汝山別山を越へ劍澤を下りて長次郎谷の側にて野營十日長次郎谷の大雪溪を上りて午前九時劍の絶頂に達し(劍の絶頂の岩には三菱の連中が白ペンキで盛に樂書をしてある)小黒部嶺山泊、十一日小黒部谷より黒部の溪谷に出て祖母谷温泉泊、十二日雨中歩るき大黒嶺山泊り十三日大黒岩の前より下りて神城に出て野山館支店に休憩それより步行して大町野山館に八時半歸着、案内者玉作、人足由造、富吉、正國(梶原覺三、松宮三郎)

△廿一日(大正六年八月)より當地滞在最早一週間餘りになり候體の工合悪く碌な活動も出來ず地獄谷や瀧や暮岩の見物など普通の行事の外は僅に高社山に登りしだけに御座候只だ當地より快晴の日に妙高、黒姫、戸隠、飯綱は勿論遠く不歸(?)大黒、五龍、鹿島槍、立山(雄山)祖父、赤澤、スバリ、針の木、蓮華の連峰を望むは誠に愉快にて特に夕日を背にせる景色は美事に御座候(信州安代温泉にて、辻本滿丸)

△小生昨日發補より岩菅山及裏岩菅に登山仕候當日はかなりの晴天にて北方は苗場山や其他越後の連嶽より南は八岳、富士山迄を眺められ紅葉は今が盛りにて此の附近の山はまだ降雪なき様にて只日本アルプスには、白き縞を認め申候(十月三十日、草津にて、伴野濤)

△過日は大町より上高地に抜け、槍より東穂高、上高地迄一日縦走（大正六年、七月卅一日）は甚愉快に候ひき、案内は玉作、同行は日置繁雄君に御座候、松本日本銀行、伊藤英太郎）

△小生今夏は少々都合有之候故山登りは致さざるつもり候ひし處流石シューズに入り候ては、たまり兼ねて白馬に再遊致候、第二日は尾根傳ひにて大池に遊び第三日鍾に登りて下山歸郷仕候。（長谷川敏郎）

△今村氏來桑を記念として「タマルバイ山」に登る途に貴兄の健康を祈る。（桑港今村幸男、國府精一、東義一）

△小生等今夏登山する機會無かりし腹癢せに去る十九日信州大日向より四阿山に登らんぞ致せしも豪雨の爲め引き返へし、鳥居峠の麓なる澁澤に閉ぢ込められ、翌日も引き續き雨天にて、已むなく四阿登山を中止し、秋色深き鳥居峠頂上より上信國境の山稜を傳ひて小在池山に登り、鹿澤温泉に一泊。

二十一日鹿澤より、湯の丸、烏帽子、籠の塔の三峰を極め、田代に宿泊。

二十二日、今度こそは待ち設け候ひし甲斐あつて、日本晴れの好天氣と相成りしに依り、久戀の四阿山に登り、心行く許り、眺望を擅まに致し、信州側の澁澤に下りて更に鳥居峠を越え、當地に参り申候。

明日は小瀬瀧泉に泊り明後日は鼻曲山を越えて、霧積温泉の紅葉を探る豫定に御座候、田代は最早霜深く、吾妻川上流の秋色今將に酣はに候。

寒き烈しき故宿にては炬燵が御馳走に候へ上毛の奥田代にて瀧

川茂三郎、三輪正雄）

△益々御清榮奉賀候小生本月六日、午前八時林蔵を先達とし外三名の夫婦と共に大町發籠川を上りて蕨華より縦走を始め申候處天候快晴至極愉快なる天幕旅行を續け昨夜大黒迄参り候然るに朝來天候一變仕候に付唐松嶽より豫定を變更して銅山新道を飯田に下り申候、大黒——飯田間小生のヒドメーターは二九キロ三三七メートルを指示致候。（八月十二日、大迫武吉）

△今年には變つた所は歩きませんでした、七月上旬尾瀬、日光方面同下旬常念山脈、鎗、霞澤嶽等同じく西駒ヶ嶽等で、その内尾瀬では尾瀬平から鳩待峠を越えて見ました、今年は何處へ行つても天氣がよくて愉快でした、中房上高地附近の山はずむ分變つてしまひました、九月中には藏王山の南北兩方面を二回見に行きました、其内に南藏王群の紀行を御送り致します、又其後も何處か知られない新しい山地を御紹介申上げるつもりです、先は御一報まで。（沼井鉄太郎）

△七月の終東京を去つて九州に冷を求めました、國見山の北方の深林、市房山の西の麓から、霧島の東の面をながめて今宮崎に着ましたもうあきて來ましたから歸京します。（八月十七日矢野生）

△生等上洛の途四日上高地に入り天候思はしからざりし爲め鎗及燒に登り八日下山仕り候。（九月八日、原田保之助、原田覺一耶）

△去る四日出發、中房温泉にて人夫不足の爲二日無爲に過し七日鳥山菊一を案内に燕、大天井、常念、槍を経て上高地に着、只今佐伯君と養老館樓上に談笑罷る候明日は燒に明後日歸濱の途に就き申すべく候。（八月十日、村岡齊）

△一昨日夜行にて沓掛に下車、昨朝思ひ懸けなき好天氣に勇氣百倍し、午前六時出發。朝霜を踏みつゝ坂路二里小淺間の茶屋に至り、小憩後全く富士的の火山灰に氣を掃られつゝ、十時半淺間頂上火口に達し申候。前夜の初雪此方彼方に名許りの通路を埋め居り申候、寒氣從つて強く、外套の儘にて汗を催すこゝ殆んど無之候。噴煙はさまざま猛烈ならず、先づく平穩の方なる可きか。幸にも恰好の秋晴にて日光火山群を除き、殆んど見得可き山々は、東西を問はず南北を論ぜず悉く眼中に映じ申候。殊に西方日本北アルプスの雄峰の白雪の朝を戴けるは最も優なるもの。白馬方面の諸山が霞の中に不明瞭なりしは遺憾に有之候ひき。小諸口に下り昨夜十二時歸京仕候。(大正六年十月十五日。鈴木益三)

△拜啓一昨夜上野發、鴨井澤から六里ヶ原の秋色を車上に賞して菅妻驛着。應桑、長野原を經、須川谷を上りて溪谷の紅葉を眺め眺め午後七時花敷着。今日は人夫なき爲一日休養して野反池へ下檢分に出懸け申候。野反は素的に優雅なところだ。只今案内編輯に計畫を話したところだ。其話に白砂登りは猛烈に大變な由、痛快に存じ居り候。(森)

一昨日は御留守に參上、テント等無斷借用仕候。昨日は荷物にいとゞか憊まされ氣味にて遂に日を暮らし候。今日は野反へ參り白根横手より八十三山邊までの山を見て感心いたし候。野反は明るき池、清水到る處に湧き、大に氣に入り申候。同夜は大分山話した聞き、明日野反よりハンノキ澤(八間山より出づるもの)へのぼり八十三山(ハチツフサンと讀む由に候)に登り、夫より白砂(シラスナ)に至り、歸途は川浦より白砂川を下るつもり。途

中二泊を要す申候。時日不足の爲其他は割愛仕候。(大正六年十月十四日、日高信六郎)

△風の吹きまはしにて昨日日光湯本にまゐり、今日白根山へ登り候。快晴なりしも著しく霞かゝり、遠望はよくきかず候。躰、武尊、至佛、笠科方面はよく見え、それから淺間迄は先づ可なりに見え候。明日は晴天ならば男體、太郎へ登る積りに致し居り候。志津より大真名子小真名子女親を經て日光へは、秋の一日ではむづかしく候由。(大正六年十月二十三日、湯本にて冠松次郎)

△一人で東京を飛び出し、二十九日發咄から岩菅山及裏岩菅山に登りました。秋の割には寒くなく曇つては居ましたが、苗場の方から白砂、尾瀬、日光、武尊、赤城、秩父などよく見え、富士の姿も秩父の山の上に見受けました。北アルプス方面は雲の中で見えません。本日草津峠を越した時も上天氣で非常に愉快でした。歸京しましたら下手なスケッチでも御目に懸けませう。(大正六年十月三十日、草津にて伴野濤)

### 第十八回有志晚餐會記事

大正六年十月十日東京市山下町の帝國ホテルで第十八回の晚餐會を開く、丁度神戸の今村幸男君が近日渡米せらるゝのと兼て印度の山岳地を旅行せられて歸朝なすつた石崎光瑤君及び親しく南洋

の風物に接して來られた中村清太郎君加賀正太郎君（加賀君は御都合悪しき爲缺席せられた）の送別や歓迎やらを兼ねることにしました。

この會合には特に近藤茂吉君の膽入りでホテルの林愛作君の御配慮を煩はし純日本風の洋食を來會諸君に供しました、珍珠佳肴恐らくは今迄の晚餐會中の白眉だと存じました、加ふるに卓上には松檜杉楓等の實生が盆景風に飾られ居ながらにして森林の匂を嗅ぎ白雪ならぬアイスクリームを嘗めた感じは中々悪くないものでした。

晚餐後志賀先生の朝鮮の金剛山の御話や石崎氏の印度の旅行談などをお伺ひして盡きない興趣を残して散會したの丁度十一時を少し過ぎる頃でした。

來會者氏名

（會員）今村幸男氏、石崎光瑤氏、中村清太郎氏、岡埜徳之助氏、松宮三郎氏、服部正氏、山東隆氏、何英吉氏、辻村伊助氏、高野鷹藏氏、志賀重昂氏、松本善次氏、梅澤親光氏、飯田光太郎氏、横江長次郎氏、木村廣吉氏、飯塚篤之

助氏、濱名増雄氏、鈴木増雄氏、木暮理太郎氏、G. Allook氏、山本宣治氏。

（會員外）林愛作氏、山田巳之吉氏。

（當番幹事）冠松次郎氏、鳥山悌成氏、近藤茂吉氏。

尙ほ次回の幹事を左の御三名に御願致しました。

何英吉氏、松宮三郎氏、山東隆氏。（當番幹事記）

### 第一回在濱會員有志晚餐會

過般支部大會の節、少なからぬ御盡力に預つた、高野、加山、兩氏を御招待して秋の夜も清々しい、南や、北の、雪の諸王座迄が浮出して來る十一月十七日午後六時から、横濱市馬車道、「ワカナ」で第一回晚餐會を催す事とした、來り會せられた諸兄十一名。

高野鷹藏氏 加山龍之助氏 關戸一平氏  
高島和雄氏 大島敬治氏 梶原覺三氏  
村岡 齊氏 村上元次郎氏 北澤基幸氏  
忽滑谷安美氏 佐伯藤之助氏

數丈け見ては少ない様だが、僅の會員を有する横濱としては誠に盛會であつた。

關戸君を先頭に高島君が見える、當夜の御客様高野氏と加山氏が見える、定刻には未だ間がある、三氏の間に浮世繪の話が大分弾む。全部揃つたのが定刻より遅れる事三十分、北澤君の辭で開かれ、高野氏の御挨拶、名刺の交換も済んで、盃は次第に廻る、話に興が添つて来る、彼方でも此方でも山の話で持ち切つて居る、梶原君が立山の寫眞を持つて來られて劍の話に移る、宴將に酣京都の小島君から祝電が来る、横濱に居て今は遠くに在る會員小島、村川兩氏へ合作の葉書を飛ばす、高野氏が「イハブスマ」を取寄せられて振舞つて下さつたのは當夜第一の馳走、一同は思ひ掛けぬ塵の都に、七千尺の氣分を味ひ、話題は再び懐しい山懐へと入つて何時盡き様とも見えなんだが、急の思ひ立ちで、上高地寫眞展覽會を開催中の玉村寫眞館へ、一同繰込む事に成つた爲め、楽しい此集も早く切上げられて解散したのは八時半であつた。

尙ほ加山氏の發議で以後繼續して、年二回の會

合を催す事に決した。

次回の當番幹事は左記の三氏に御願ひした。

村岡 齊氏 村上元次郎氏 梶原覺三氏

(佐伯、記す)

### 秋田縣小坂町に於ける

### 山岳講演會

會員加藤榮氏の懇憑に由り秋田縣小坂町教育會及び小坂鑛山スキー俱樂部の招聘に従ひ、去る八月廿六日及び廿七日夜山岳講演會を開きたり。

本會幹事近藤茂吉、武田久吉、梅澤親光、高野鷹藏夫々幻燈講演をなせり。

本講演會開催に際し小坂町長小笠原勇太郎氏、小坂鑛山所長齋藤精一氏及び其他鑛山關係諸氏の多大の厚意に感謝の意を表す。

### 學習院輔仁會山岳幻燈會

十月十三日夜目白學習院に開かる、本會は同會

よりの囑により、木暮幹事、梅澤幹事講演をなし高野幹事幻燈器械を携帶したり。

同會は學習院在學生の集りなれど、何れも山岳趣味の豊富なるを以て多大の感興を以て迎へられたるも、に如し。

### 外人會員交歡會

大自然の殿堂に參拜する巡禮者なる吾々、只國の異なるのみにて相親しまざる外人會員と永く交歡を期し、相共に山を語り山を樂んが爲めに、近藤、高野幹事の發起にて、大正六年、十月廿四日夜八時より高野氏邸に在京濱外國人會員の來集を乞ひ、スウイス及び日本の幻燈を映寫し、相共に山を談じ、雪を語りて復なき面白き會合を開きたり、會するもの。

Mr. and Mrs. Mendelson, Mr. Moilhet, Mr. Mollock,  
Mr. Tomlinson, Mr. and Mrs. Szel, Mr. Allcock,  
Mr. Dinsdale, Dr. Smith, Dr. Paravicini,  
Mr. Schellenberg.

幹事武田久吉、梅澤親光、近藤藤吉、辻村伊助、高野鷹藏諸氏及び來り會したる會員茨木猪之吉氏、並に近藤茂吉氏令夫人。

辻村伊助氏は瑞西グロックスシュレックホルン登山談を、武田久吉氏は高山植物の話フライングを幻燈を以て説明せられたり、本會は斯く私的會合なれど、本會として内外人の交歡に益すること極めて大なりき。(岳雄)

### 上條嘉門治の死

ウエストン氏以來、吾々登山家に親炙したる、上高地の嘉門治は、遂に多年の山旅びの爲め發したる黃疸病の爲めに、岳の紅葉も色づける十月廿六日午後四時島々の家に死す、年七十三。山に親しむ吾等亦憶しからずや、彼年少十幾歳にして山に入り、終焉の此年に至る迄始終山に入り、又平原に歸りたる事稀なり、吾人は敢て嘉門治を以て山岳界の偉人と推賞するものならねど、親しき山友達の一人を失ひし悲みに耐ず、七十年の夢醒め

て一切空に歸せる彼。何處の峯を馳るか彼が精靈、一掬の涙なき能ず。本會は山岳と始終したる一山人の死を悲しみ、彼れが靈前に香花を手向け、弔詞を贈り永き哀別の意を表したり。

上高地の水の通ふ梓川畔の山村、島々に彼れは永き眠の床につけり、梓川瀬の淙々の聲は彼れが爲めに上高地の四時を語り傳ふるか。

### 會員名簿

本號には會員名簿を附し、會員に配附せり、右名簿編輯前新に入會せられたる諸氏は重複なるを以て敢て新入會者として別に報告せず、諒せられたし。

### 大正六年寄贈及交換圖書

みづる  
郷土研究

春 鳥 會  
郷土研究會

史蹟名勝天然紀念物保存協會  
第五回報告、第六回報告

同 協 會

地學雜誌

東京地學教會

地質學雜誌

日本歷史地理學會

歷史地理

東京高地質學校

ツリーリスト

ジャバン、ツリーリスト、ピュロ

史蹟名勝天然紀念物

史蹟名勝天然紀念物保存協會

吉野群峯報

木本光三郎氏

水源地としての富士山

神原信一郎氏

戰鬪的人生觀

鹿子木員信氏

京都帝國大學一覽

京都帝國大學

飛驒史壇

飛驒史談會

ジャバンツリーリスト大正五年度事業報告

ジャバン、ツリーリスト、ピュロ

地質調査所報告

地質調査所

三交會誌

陸地測量部内三交會

破不之夜嵐

小澤義正氏

鐵道旅行案内

鐵道院運輸局

赤倉温泉案内記

八木道三氏

飛驒國中案内

東京教育博物館一覽

十和田案内畧記

旅客指南

三角水準測量成果摘要第一卷

Bulletin del Centre Excursionista de Catalunya.

The Scottish Mountaineering Club Journal.

The alpine club of Canada, construction and list of

Members.

Sierra club Bulletin

Alpine Journal

Canadian Alpine Journal

La Montagne

Svenska Tourist Foreningen

Jahrbuch des Schweizer alpenclub

The annual of the Mountain club of South Africa.

住 廣造氏

東京教育博物館

十和田保勝會

鐵道院運輸局

陸地測量部

朝の雪溪を仰ぐ。大正四年八月作。原書油繪二十號大。

△峡谷の底。黒部川鐘釣温泉の少しく上流なる本流の一部。大正四年八月作。原書油繪二十五號大  
△峡谷に臨む山。鐘釣附近より仰げる百貫山。大正四年九月——十月作。原書油繪八十號大。

## 投稿規定

△本誌の爲め原稿を賜る諸君は左記各項御承知ありたく候

○記事は山岳及び山岳に關聯せる一切の事實に限る事○原稿用紙は特定のものに限らず、但し字數を計算し得る様一行の字數と一枚の行數とは一定せられたき事、一枚の紙に表裏に認めらるゝ事は避けられたき事○圖版挿繪等に就ては一應相談ありたし、適當なる方法を以て善美に印刷したき希望あればなり○掲載の遲速記事の選擇訂正加筆等は總て編輯者の自由に任せらるべき事○原稿は返戻致さざる事。

## 本號圖版解説

△雪溪仰望。小黒部上流大窓の直下より晴れたる

會 告  
會 告 山岳畫展覽會に就て 高山深谷第九輯に就て

二〇四

## ○山岳畫展覽會に就て

日本の畫壇に培ふ畫家諸君、其收穫を喜ぶ所藏家諸君、日本の山岳畫の發達に貢獻せんとする此計畫に賛成あらん事を希ふ、詳細本誌會報欄を見られたし。

## ○高山深谷第九輯に就て

本輯尙ほ若干豫約殘部あり、速に申込を乞ふ本誌前號廣告欄を見られたし。

校 正 者  
梅 高  
澤 野  
視 鷹  
光 藏

大正七年二月四日印刷  
大正七年二月七日發行



發行兼編輯者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

印刷者

橫濱市太田町五丁目八十七番地

村岡平吉

印刷所

橫濱市山下町百〇四番地

福音印刷合資會社

橫濱市本町四丁目六十七番地

高野鷹藏方

發行所

日本山岳會事務所

(振替貯金口座東京四八二九番)  
電話特長百七十一番

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂

\*\*\*  
定價金七拾五錢  
\*\*\*

## 「山岳」需供欄

○日本（のとも限りませんが）湖沼殊に山地の池沼の寫眞を築めたいと思つて居ります、若し御不用な寫眞なり、場合によりては繪葉書なりを恵んで下さる方があらば幸です、謹んで一般の讀者諸賢に御願ひ致します。

（東京市麴町區富士見町四丁目 武田久吉）

○山岳第一年第三號讓受けたし

（長岡市柳原町 西澤平治）

○雪具を蒐集して居ります、御援助を願ひます。

（日本山岳會事務所にて 高野鷹藏）

○美滿洋商店は會員の爲め登山用具の割引を致します、會員證明書は事務所へ御申込下さい。

（事務所）



